

# 平田遺跡（第19・22次）

—平田送水場改築に伴う発掘調査報告書—

2013年3月

鈴鹿市考古博物館

# 平田遺跡（第 19・22 次）

～ 平田送水場改築に伴う発掘調査報告書 ～

## 例 言

- 1 本書は、三重県鈴鹿市平田町一丁目地内に所在する平田遺跡（第19次・22次）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、鈴鹿市水道局の「第5期拡張事業計画」にかかる平田送水場の改築工事に伴う事前の埋蔵文化財の記録保存として実施したものである。
- 3 調査は、平成20年9月8日～平成20年9月20日に範囲確認調査を行い、その結果に基づいて本発掘調査を実施した。第19次調査は平成22年2月2日～平成22年7月7日、第22次調査は平成22年11月18日～平成23年2月25日に行った。
- 4 発掘調査は鈴鹿市が主体となって実施した。なお、発掘調査にかかる土工及び調査補助は株式会社二友組に委託した。

### 【平成21年度 発掘調査体制】

調査担当	鈴鹿市文化振興部 考古博物館	
組織及び構成	館長	東口 元
	主幹兼埋蔵文化財グループリーダー	新田 剛
	埋蔵文化財グループ副主幹	村木 修・服部真佳
	事務職員	田部剛士・吉田隆史
	嘱託職員	吉田真由美・伊藤 洋
調査補助	株式会社 二友組	
	現場代理人	下島健弘
	調査補助員	山本雅徳・鈴木淳子

### 【平成22年度 発掘調査体制】

調査担当	鈴鹿市文化振興部 考古博物館	
組織及び構成	館長	東口 元
	主幹兼埋蔵文化財グループリーダー	新田 剛
	埋蔵文化財グループ副主幹	服部真佳
	事務職員	田部剛士・吉田隆史・米川梨香
	嘱託職員	吉田真由美・打田知之
調査補助	株式会社 二友組	
	現場代理人	作田一耕
	調査補助員	荒井英樹・中北敦子・鈴木淳子・石橋忠治

### 【平成23・24年度 屋内整理体制】

組織及び構成	館長	東口 元
	主幹兼埋蔵文化財グループリーダー	新田 剛
	埋蔵文化財グループ副主幹	服部真佳
	事務職員	田部剛士・吉田隆史・米川梨香
	嘱託職員	吉田真由美・小川陽子（平成24年度～）

- 5 発掘調査及び本書の作成のための整理作業の参加者は、以下のとおりである。

〔現地調査〕川崎雅則、嶋倉浩一、黒田和英、野元克己、久富正登、松岡洋二、藪野勝久、石川初治、笹井喜次、岩田充広、戎井由光、大塚由己、岡本一夫、柿村嘉晴、上 正彦、川井祐司、川上正博、北口洋、坂口金太郎、佐渡高重、佐藤 勝、島 哲司、田居正勝、瀧岡佳司、寺田幸夫、時任義明、中内和夫、長尾 潤、中上登志夫、中迫 勲、中島秋雄、中島利男、野田米蔵、服部 浩、林 信幸、福井 亨、藤田安夫、堀口晃二、前川 博、松尾清嗣、松下忠幸、丸井和雄、南川美明、山崎幸博、湯田克己、吉田正春、渡辺初男、飯田みさを、橋本 守、大井康雄、加藤忠昭、諸岡日出土、山中洋子、内山 至、別所 稔

（順不同・敬称略）

〔屋内整理〕永戸久美子、加藤利恵、横内江里、前出みさ子、市橋明子

- 6 現地調査にかかる全ての費用及び本書の製本費は、鈴鹿市水道局が負担した。
- 7 現地調査は吉田隆が担当した。また、調査にかかる庶務を服部が担当した。

- 8 航空写真撮影については、吉田隆の計画・監修の下に株式会社二友組が実施した。
- 9 遺物実測、トレース、採拓、写真撮影は、新田・吉田隆・吉田真・永戸・加藤・横内・前出が実施した。
- 10 発掘調査にかかる出土遺物及び遺構図面、写真資料等の調査記録は、全て鈴鹿市考古博物館において保管している。
- 11 本書の執筆及び全体の編集は、吉田隆が行った。
- 12 概要については他にも公にされているが、本書を以って正式な報告書とする。
- 13 調査地点は、三重県鈴鹿市平田本町一丁目 57-2・58-2・59-2の一部、60、62-2の一部、63-1、63-2、63-3、64、65、66、67、68、69、70、71、72、73、74-1、74-2、74-3、75・76-1・76-2・77の一部、78、80-2、81-1、81-2、82-1、82-2、83、84、85、86、87-1、87-3、88-1・88-2・88-3・90-1・91-2の一部、96-1・97・99の一部、100、101、102、103、104・105-1・105-2・107-2・108-3の一部で、全て周知の埋蔵文化財包蔵地である平田遺跡の範囲内である。
- 14 調査及び報告書刊行にあたっては地元各位を始め、下記の方々のお世話になった。記して感謝申し上げます。  
三重県教育委員会文化財保護室、三重県埋蔵文化財センター、株式会社二友組、牧田地区平田町自治会・水谷正治、  
牧田地区弓削町自治会・沢田 学、愛知県埋蔵文化財センター・永井邦仁 (順不同・敬称略)

## 本文目次

I 前言	1	4 中世の遺構	107
II 位置と周辺環境	2	5 その他の遺構と遺物	134
III 調査の方法	6	(1) 時期不明遺構	134
1 調査区の設定	6	(2) その他の出土遺物	140
2 試掘調査(第19次)	6	(3) SX22031について	144
3 解体工事(第22次)	6	VI 結語	167
4 遺構の名称と記号	13	1 縄文時代晩期前半の建物について	167
5 基本層序	13	2 弥生時代後期～古墳時代初頭の集落と墓域について	170
IV 調査の経過	14	3 古代の道路遺構について	171
V 遺構と遺物	23	4 川俣氏と古代の遺構について	175
1 縄文時代の遺構	23	5 中世の屋敷地について	176
2 弥生・古墳時代の遺構	35	参考文献	181
3 古代の遺構	73		

## 図版目次

Fig.1 平田遺跡範囲図 (S=1/5,000)	1	Fig.27 SK22030 土層断面 (S=1/50)	30
Fig.2 位置と周辺の遺跡 (S=1/50,000)	3	Fig.28 SD22028 平面 (S=1/50)	30
Fig.3 調査区配置図 (S=1/2,500)	5	Fig.29 SK22009・30・SD22028・SX22014 出土遺物 (S=1/4)	30
Fig.4 調査前現況図 (S=1/500)	7	Fig.30 SX22014・P'57・94 平面 (S=1/50)	31
Fig.5 調査区設定図 (S=1/600)	8	Fig.31 P'57 遺物出土状況 (S=1/20)	
Fig.6 19次遺構配置図 (S=1/300)	9	遺物: S=1/6)	31
Fig.7 22次遺構配置図 (S=1/400)	11	Fig.32 P'57・94 出土遺物 (S=1/4 石器: S=2/3)	32
Fig.8 19次西壁①・②土層断面 (S=1/20)	13	Fig.33 縄文時代の遺構出土遺物1 (S=1/4 石器: S=2/3)	34
Fig.9 遺構配置図 (S=1/400)	21	Fig.34 縄文時代の遺構出土遺物2 (S=1/4 石器: S=2/3)	35
Fig.10 縄文時代の主要遺構配置図 (S=1/500)	24	Fig.35 弥生・古墳時代の主要遺構配置図 (S=1/500)	36
Fig.11 SA19091・99 平面 (S=1/50)	25	Fig.36 SH19001 平面 (S=1/100)	37
Fig.12 SA19091 土層断面 (S=1/50)	25	Fig.37 SH19001 土層断面 (S=1/50)	37
Fig.13 SA19091・99 断面 (S=1/50)	25	Fig.38 SH19001 出土遺物 (S=1/4)	38
Fig.14 SB19086 平面 (S=1/50)	26	Fig.39 SH19012・57 平面 (S=1/100)	38
Fig.15 SB19086 土層断面 (S=1/50)	26	Fig.40 SH19012・57 土層断面 (S=1/50)	39
Fig.16 SB19086 断面 (S=1/50)	26	Fig.41 SH19057 出土遺物 (S=1/4)	39
Fig.17 SA19091・SB19086・90・94 出土遺物 (S=1/4)	27	Fig.42 SH19014・53 平面 (S=1/100)	41
Fig.18 SB19090 平面 (S=1/50)	27	Fig.43 SH19014 土層断面 (S=1/50)	41
Fig.19 SB19090 土層断面 (S=1/50)	27	Fig.44 SH19053 土層断面 (S=1/50)	42
Fig.20 SB19094 平面 (S=1/50)	28	Fig.45 SH19014 遺物出土状況 (S=1/20)	
Fig.21 SB19094 土層断面 (S=1/50)	28	遺物: S=1/6)	43
Fig.22 SB19094 断面 (S=1/50)	28	Fig.46 SH19014・53 出土遺物 (S=1/4)	43
Fig.23 SB22033 平面 (S=1/50)	29	Fig.47 SH19053 遺物出土状況 (S=1/20)	
Fig.24 SB22033 断面 (S=1/50)	29	遺物: S=1/6)	44
Fig.25 SK22009 平面 (S=1/50)	30		
Fig.26 SK22030 平面 (S=1/50)	30		

Fig.48	SH19015 平面 (S=1/100)	44	Fig. 88	SD19004 平面 (S=1/100)	70
Fig.49	SH19015 遺物出土状況 (S=1/20 遺物: S=1/6)	44	Fig. 89	SD19004 土層断面 (S=1/50)	71
Fig.50	SH19015 土層断面 (S=1/50)	45	Fig. 90	SD19004 出土遺物 (S=1/4)	72
Fig.51	SH19015 出土遺物 (S=1/4)	45	Fig. 91	SK19066 平面 (S=1/50)	72
Fig.52	SH19018 平面 (S=1/100)	47	Fig. 92	SK19066 土層断面 (S=1/50)	72
Fig.53	SH19018 土層断面 1 (S=1/50)	47	Fig. 93	SK19066 出土遺物 (S=1/4)	72
Fig.54	SH19018 土層断面 2 (S=1/50)	48	Fig. 94	弥生・古墳時代の遺構出土遺物 (S=1/4)	73
Fig.55	SH19018 出土遺物 (S=1/4)	48	Fig. 95	古代の主要遺構配置図 (S=1/500)	74
Fig.56	SH19034・SK19033・SD19010 平面 (S=100)	49	Fig. 96	SA19044 平面 (S=1/100)	75
Fig.57	SH19034 断面 (S=1/50)	50	Fig. 97	SA19044 土層断面 (S=1/50)	75
Fig.58	SD19010 土層断面 (S=1/50)	50	Fig. 98	SA19044・SB19095・22032 出土遺物 (S=1/4)	75
Fig.59	SH19034 出土遺物 (S=1/4)	50	Fig. 99	SB19095 平面 (S=1/50)	76
Fig.60	SH19058・59 平面 (S=1/100)	50	Fig.100	SB19095 土層断面 (S=1/50)	77
Fig.61	SH19058・59 土層断面 (S=1/50)	51	Fig.101	SB19095 断面 (S=1/50)	77
Fig.62	SH19058・59 出土遺物 (S=1/4)	51	Fig.102	SB22032 平面 (S=1/50)	78
Fig.63	SH19060・61 平面 (S=1/100)	53	Fig.103	SB22032 断面 (S=1/50)	78
Fig.64	SH19060・61 土層断面 (S=1/50)	53	Fig.104	SD19020 平面 (S=1/100)	79
Fig.65	SH19060 遺物出土状況 (S=1/20 遺物: S=1/6)	54	Fig.105	SD19020 土層断面 (S=1/50)	79
Fig.66	SH19060・P516 出土遺物 (S=1/4)	55	Fig.106	SD22021・22 平面 (S=1/100)	80
Fig.67	SB19089 平面 (S=1/50)	56	Fig.107	SD22021・22 土層断面 (S=1/50)	80
Fig.68	SB19089 土層断面 (S=1/50)	56	Fig.108	SX22005 平面 (S=1/100)	80
Fig.69	SB19093 平面 (S=1/50)	58	Fig.109	SX22005 土層断面 (S=1/50)	80
Fig.70	SB19093 土層断面 (S=1/50)	58	Fig.110	SD22021・SX22005 出土遺物 (S=1/4)	80
Fig.71	SB19093 断面 (S=1/50)	58	Fig.111	SK19073・SX19074 平面 (S=1/50)	81
Fig.72	SB19093 出土遺物 (S=1/4)	58	Fig.112	SK19073・SX19074 土層断面 (S=1/50)	81
Fig.73	SB19087・SX19002・38 平面 (S=1/100)	59	Fig.113	SK19073・SX19074 遺物出土状況 (S=1/20 遺物: S=1/6)	82
Fig.74	SB19087 土層断面 (S=1/50)	59	Fig.114	SK19073・SX19074 出土遺物 (S=1/4)	83
Fig.75	SB19087 断面 (S=1/50)	60	Fig.115	SX19017 平面 (S=1/100)	84
Fig.76	SX19038 土層断面 (S=1/50)	60	Fig.116	SX19017 土層断面 (S=1/50)	84
Fig.77	SX19002 土層断面 (S=1/50)	60	Fig.117	SX19017 遺物出土状況 (S=1/20 遺物: S=1/6)	85
Fig.78	SX19002・13 出土遺物 (S=1/4)	60	Fig.118	SX19017 出土遺物 (S=1/4)	86
Fig.79	SX19013 平面 (S=1/50)	61	Fig.119	SX19035・SK19129・P142 平面 (S=1/50)	88
Fig.80	SX19013 土層断面 (S=1/50)	61	Fig.120	SX19035 遺物出土状況 (S=1/20 遺物: S=1/6)	88
Fig.81	SX22015・P124 平面 (S=1/50)	62	Fig.121	P142 遺物出土状況 (S=1/20 遺物: S=1/6)	88
Fig.82	SX22015・P124 遺物出土状況 (S=1/20 遺物: S=1/6)	63	Fig.122	SX19035・P142 出土遺物 (S=1/4)	89
Fig.83	SX22015・P124 出土遺物 (S=1/4)	64	Fig.123	SX19048・P266 平面 (S=1/50)	90
Fig.84	SD19115・116・22002 平面 (S=100)	66	Fig.124	P266 遺物出土状況 (S=1/20 遺物: S=1/6)	90
Fig.85	SD19115・116・22002・22 次 2 区東壁 ①土層断面 (S=1/50)	67	Fig.125	P266・315・342・461 出土遺物 (S=1/4)	91
Fig.86	SD22002 遺物出土状況 (S=1/20 遺物: S=1/6)	67	Fig.126	P342 平面 (S=1/50)	93
Fig.87	SD19115・116・22002 出土遺物 (S=1/4)	68	Fig.127	P342 遺物出土状況 (S=1/20 遺物: S=1/6)	93

Fig.128	P461 平面 (S=1/50)	93	Fig.165	SD19023 土層断面 (S=1/50)	119
Fig.129	P461 遺物出土状況 (S=1/20 遺物: S=1/6)	93	Fig.166	SD19023 出土遺物 (S=1/4)	119
Fig.130	P315 平面 (S=1/50)	94	Fig.167	SD19024 平面 (S=1/100)	119
Fig.131	SD19122 ~ 124・127・22001・ SK22010・P37 平面 (S=1/150)	95	Fig.168	SD19024 土層断面 (S=1/50)	119
Fig.132	SD19122 ~ 124・127・22001・ SK22010・22次2区東壁②土層断面 (S=1/150)	96	Fig.169	SD19024 遺物出土状況 (S=1/20 遺物: S=1/6)	120
Fig.133	SD19122・127・22001・SK22010 出土遺物 1 (S=1/4)	97	Fig.170	SD19024 出土遺物 (S=1/4)	120
Fig.134	SD19122・127・22001・SK22010 出土遺物 2 (S=1/4)	98	Fig.171	SE19025 平面 (S=1/50)	122
Fig.135	P37 遺物出土状況 (S=1/20 遺物: S=1/6)	98	Fig.172	SE19025 土層断面 (S=1/50)	122
Fig.136	P37 出土遺物 (S=1/4)	98	Fig.173	SE19112・SK19113 平面 (S=1/50)	122
Fig.137	SD19009・21・22・SC19011・ SB19036 平面 (S=1/100)	101	Fig.174	SE19112・SK19113 土層断面 (S=1/50)	122
Fig.138	SD19009・21・22 土層断面 (S=1/50)	102	Fig.175	SE19025・112・SK19113 出土遺物 (S=1/4)	123
Fig.139	SB19036 土層断面 (S=1/50)	102	Fig.176	SK19029・30 平面 (S=1/50)	124
Fig.140	SD19009 出土遺物 (S=1/4)	102	Fig.177	SK19031・32 平面 (S=1/50)	124
Fig.141	SF19016 平面 (S=1/50)	103	Fig.178	SK19031 土層断面 (S=1/50)	124
Fig.142	SF19016 土層断面 (S=1/50)	103	Fig.179	SK19032 土層断面 (S=1/50)	124
Fig.143	SF19016 出土状況 (S=1/20)	104	Fig.180	SK19029 ~ 32 出土遺物 (S=1/4)	125
Fig.144	P353 平面 (S=1/50)	104	Fig.181	SA19098 平面 (S=1/50)	126
Fig.145	P353 出土遺物 (S=1/4)	104	Fig.182	SA19098 土層断面 (S=1/50)	127
Fig.146	古代の遺構出土遺物 1 (S=1/4)	106	Fig.183	SA19098・SB19084 出土遺物 (S=1/4)	127
Fig.147	古代の遺構出土遺物 2 (S=1/4)	107	Fig.184	SB19084 平面 (S=1/50)	128
Fig.148	中世の主要遺構配置図 (S=1/500)	108	Fig.185	SB19084 土層断面 (S=1/50)	128
Fig.149	SD19007・8 平面 (S=1/150)	109	Fig.186	SB19084 断面 (S=1/50)	128
Fig.150	SD19007・8 土層断面 (S=1/50)	109	Fig.187	SB19104・SX19003 平面 (S=1/50)	129
Fig.151	SD19007・8 出土遺物 (S=1/4)	110	Fig.188	SB19104 断面 (S=1/50)	129
Fig.152	SD19005・6・SK19049・SX19100 (S=1/150)	111	Fig.189	SX19003 土層断面 (S=1/50)	130
Fig.153	SD19005・6 土層断面 (S=1/50)	112	Fig.190	SB19104・SX19003 出土遺物 1 (S=1/4)	131
Fig.154	SX19100 土層断面 (S=1/50)	112	Fig.191	SB19104・SX19003 出土遺物 2 (S=1/4)	132
Fig.155	SK19049 土層断面 (S=1/50)	112	Fig.192	中世の遺構出土遺物 (S=1/4)	134
Fig.156	SD19005 出土遺物 1 (S=1/4)	113	Fig.193	その他の遺構配置図 (S=1/500)	135
Fig.157	SD19005 出土遺物 2 (S=1/4)	114	Fig.194	SA19037 平面 (S=1/50)	136
Fig.158	SD19006 出土遺物 (S=1/4)	114	Fig.195	SA19037 断面 (S=1/50)	137
Fig.159	SK19049 出土遺物 (S=1/4)	114	Fig.196	SB19088 平面 (S=1/50)	137
Fig.160	SX19100 平面 (S=1/50)	115	Fig.197	SB19088 土層断面 (S=1/50)	137
Fig.161	SD22011・12 平面 (S=1/100)	117	Fig.198	SB19096 平面 (S=1/50)	138
Fig.162	SD22011・12 土層断面 (S=1/50)	118	Fig.199	SB19096 土層断面 (S=1/50)	138
Fig.163	SD22011 出土遺物 (S=1/4)	118	Fig.200	SB19106 平面 (S=1/50)	139
Fig.164	SD19023 平面 (S=1/100)	118	Fig.201	SB19106 土層断面 (S=1/50)	139
			Fig.202	その他の出土遺物 1 (S=1/4)	141
			Fig.203	その他の出土遺物 2 (S=1/4)	142
			Fig.204	その他の出土遺物 3 (S=1/4)	143
			Fig.205	SX22031 平面 (S=1/150)	145
			Fig.206	SX22031 断面 (S=1/100)	146
			Fig.207	諸戸水道貯水槽平面 (S=1/150)	147
			Fig.208	諸戸水道貯水槽断面 (S=1/150)	148

Fig.209 平地式住居 (S=1/100)	167	Fig.215 平田遺跡道路遺構の走行方向 (S=1/40,000)	174
Fig.210 掘立柱建物 (S=1/100)	168	Fig.216 平田遺跡屋敷地 (S=1/800)	175
Fig.211 弥生・古墳時代の集落と墓域 (S=1/400)	169	Fig.217 屋敷地と内部施設 (S=1/300)	176
Fig.212 南山遺跡第2次調査区 (S=1/200)	170	Fig.218 SX19003・100・SB19104 (S=1/100)	177
Fig.213 平田遺跡道路遺構 (S=1/1,000)	171	Fig.219 靴屋垣内遺跡屋敷地 (S=1/600)	179
Fig.214 SC19011と路面上の古代遺構 (S=1/200)	172	Fig.220 雲出島貫遺跡居館 (S=1/1,500)	180

## 表 目 次

Tab.1 遺構一覧 (1)	149	Tab.3 遺物一覧 (2)	166
Tab.2 遺構一覧 (2)	150	Tab.4 報告書抄録	巻末
Tab.3 遺物一覧 (1)	151		

## 写 真 図 版 目 次

PL.1 19次調査区全景 真上から		SX19017 下層遺物 北東から / SD19020・24 完掘 北東から / SD19024 遺物 南から / SE19025 全景 北から
PL.2 22次調査区全景 真上から		PL.10 SH19034 完掘 北から / SX19035 遺物 南から / SB19036 完掘 北から / SA19037 完掘 北から / SA19044 完掘 東から / SH19058 検出・59 完掘 東から / SH19058・59 完掘 北から / SH19060 完掘・61 検出 東から
PL.3 19次調査区全景 西から / 19次調査区遠景 北から		PL.11 SH19060・61 完掘 東から / SH19060 遺物 北から / SK19073 遺物 北から / SX19074 遺物 北から / SB19084 完掘 北東から / SB19086 完掘 北から / SB19090 完掘 南から
PL.4 22次調査区全景 西から / 22次調査1区全景 真上から		PL.12 SA19091 完掘 北西から / SA19099 完掘 北西から / SB19093 完掘 北から / SB19094 完掘 南東から / SB19095 完掘 南から / SA19098 完掘 北東から / SX19100 完掘 西から / SB19106 完掘 北から
PL.5 22次調査2区全景 真上から / 22次調査3区全景 真上から		PL.13 SE19112・SK19113 完掘 北から / SD19115・116 完掘 北西から / P142 遺物 南から / P142 下層遺物 南から / P266 遺物 南から / P342 遺物 南から / P461 遺物 南から / SD22001 完掘 西から
PL.6 SH19001 完掘 西から / SX19002 完掘 北東から / SX19003・SB19104 完掘 西から / SD19004 検出 北東から / SD19004 完掘 北東から / SD19005・6 完掘 北から / SD19005 東西完掘 北から		PL.14 SD22001 土層 南西から / SD22002 完掘 北から / SD22002 遺物 東から / SD22011・12 完掘 南から / SX22014 完掘 北か
PL.7 SD1907・8 完掘 東から / SD19009 検出 北東から / SR19011 完掘 北東から / SD19010 完掘 北東から / SH19012 検出・57 完掘 北東から / SH19012・57・SD19023 完掘 北西から		
PL.8 SX19013 完掘 北西から / SH1914 完掘・53 検出 南西から / SH19014・53 完掘 南から / SH19014 土坑遺物 南から / SH19053 土坑遺物 北から / SH19015 完掘 南から / SH19015 遺物 東から / SF19016 検出 南東から		
PL.9 SF19016 焼土・炭化物検出 北西から / SF19016 完掘 南東から / SX19017・SH19018 完掘 北西から / SX19017 遺物 北東から /		



	ら / SX22015 完掘 西から / SX22015 遺物 西から / SB22032 完掘 西から	PL.19	石器・縄文土器
PL.15	P'37 遺物 西から / P'57 遺物 東から / P'124 遺物 南から / SX22031 全景 東から / SX22031 全景 北東から / SX22031 全景 南西から / 19 次調査区通行路部分南～南東部 全景 西から / 19 次調査区通行路部分北～東部 全景 北から	PL.20	石器・縄文土器・弥生土器・土師器
		PL.21	弥生土器
		PL.22	弥生土器・須恵器・土製品
		PL.23	縄文土器・弥生土器・土師器
		PL.24	縄文土器・弥生土器・須恵器・土製品
		PL.25	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・山皿
PL.16	19 次調査区試掘トレンチ全景 西から / 22 次調査 1 区全景 西から / 22 次調査 1 区全景 東から / 22 次調査 1 区 TP1 全景 北から / 22 次調査 1 区 TP2 全景 北から / 22 次調査 1 区 TP3 全景 北から / 22 次調査 1 区 TP4 全景 北から	PL.26	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・灰軸陶器
		PL.27	弥生土器・土師器・須恵器・土製品
		PL.28	土師器・須恵器・黒色土器
		PL.29	土師器・須恵器・黒色土器・土製品
		PL.30	縄文土器・石器・弥生土器・土師器・須恵器
PL.17	22 次調査 1 区 TP5 全景 北から / 22 次調査 1 区トレンチ 1 南部全景 南東から / 22 次調査 1 区トレンチ 1 北部全景 北から / 22 次調査 1 区トレンチ 2 西部全景 南西から / 22 次調査 1 区トレンチ 2 東部全景 北西から / 22 次調査 2 区全景 北から / 22 次調査 3 区全景 南から / 19 次調査区作業風景(西から)	PL.31	石器・弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・灰軸陶器・製塩土器
		PL.32	弥生土器・土師器・灰軸陶器・緑釉陶器・山茶碗・青磁・白磁
		PL.33	土師器・山茶碗・山皿・青磁・瓦・土製品
PL.18	SX19003TP4 掘削 南から / SF19016 掘削 南西から / 19 次調査区現地説明会風景 南東から / 19 次調査区現地説明会風景 東から / 19 次調査区調査前 西から / 19 次調査区調査前 東から / 22 次調査 1 区調査前 北東から / 22 次調査 2 区調査前 南西から	PL.34	土師器・山茶碗・山皿・青磁・白磁 PL.35 土師器・灰軸陶器・山茶碗・山皿・青磁・白磁・瓦
		PL.36	土師器・山茶碗・山皿・青磁・白磁・土製品
		PL.37	弥生土器・土師器・須恵器・灰軸陶器・山茶碗・山皿・常滑焼
		PL.38	縄文土器・弥生土器・須恵器・山茶碗・山皿・瓦
		PL.39	土製品

## 凡 例

- ・遺構の平面規模は、遺構検出面で計測している。
- ・遺構の深さについては、特に断りがない限り、遺構検出面から底面までを計測したものとする。
- ・出土資料に対しては、それぞれに実測番号・報告番号を付与しており、当該報告書に掲載した資料については、報告番号に基づいて収蔵管理を行っている。
- ・弥生時代後期～古墳時代中期の土器については、財団法人愛知県埋蔵文化財センター・赤塚次郎氏のカテゴリによる「八王子古宮式」・「山中式」・「廻間式」・「松河戸式」に依拠している。
- ・「八王子古宮～廻間式期」の土器については、本来であれば「弥生土器」と「土師器」に区分する必要があるが、その線引きについては研究者によって議論があり、また帰属時期を明確に分けられない資料が存在するため、本書では一括して「弥生土器」との表記に統一するものとする。なお、これ以降の時期の資料については、「土師器」と表記している。

## I 前言

鈴鹿市水道局による「第5期拡張事業計画」は、水源水量の過不足及び配水池容量の不足、基幹施設の耐震化等、鈴鹿市の人口及び需要水量に適合するべく計画・実施されている。市民生活の維持に必要不可欠となるライフラインとしての水源及び水質を確保するため、配水施設の増補強化及び浄水施設の改良、送水施設の強化等を中心とする施設整備を図り、より一層の安全給水体制の確立を目指すものである。この事業計画の中において、老朽化の著しい平田送水場の改築事業が行われることが確定した。

計画箇所は周知の埋蔵文化財包蔵地（平田遺跡）の範囲内であった（Fig.1）。そのため、遺跡の範囲確認を目的とし、平成20年9月に範囲確認調査を実施した。範囲確認調査は事業対象地約9,000㎡に対し、長短9本のトレンチを設定して行った。その結果、殆どのトレンチで遺構及び遺物が検出され、事業対象地の大部分の範囲内に遺跡が広がっていることが確認された。平田送水場の改築に付随して実施される造成工事によって、現況の大幅な変更が避けられないことが判明したため、速やか

に設計変更の協議を行ったものの、変更は困難であるとの結論に至った。

平成21年12月、正式に平田送水場改築工事に伴う発掘通知書を受領し、遺跡の破壊に繋がる範囲を絞り込むことで本格的な発掘調査の対象とし、記録保存を行うこととなった。今回は平田送水場改築工事にかかる平田遺跡第19・22次調査の結果を報告するものであり、平田送水場改築工事に伴う調査はこれを以って完了することになる。総調査面積は5,040㎡に達する。

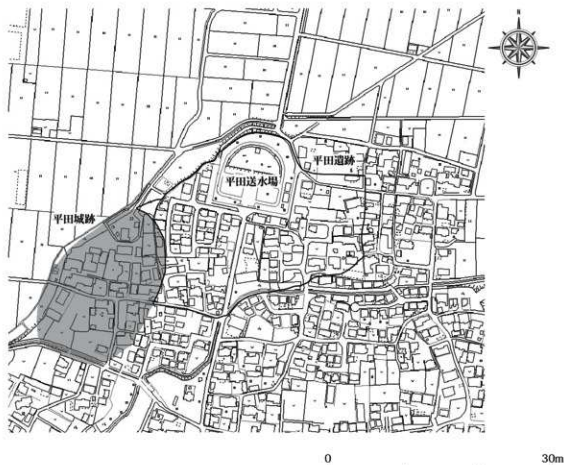


Fig.1 平田遺跡範囲図 (S=1/5,000)

## II 位置と周辺環境

平田遺跡は鈴鹿川右岸の河岸段丘上に位置し、約45,000 m<sup>2</sup>の範囲に広がる (Fig.2)。この段丘は標高約22 mを測り、北側の鈴鹿川へ向かって舌状に張り出す地形をなす。眼下の鈴鹿川によって形成された谷底平野との比高は4～5 m程度である。現在においても、当該河岸段丘上には閑静な住宅街が広がり、北側の谷底平野では主に水田が営まれている。

平田遺跡では、縄文時代晩期前半に本格的に遺跡が形成される。舌状台地の先端部である第19・22調査区を中心に集落が経営されたものと考えられる (Fig.3)。やや数を減らすものの、縄文時代晩期後半の凸帯文の頃の土器も比較的まとまる。鈴鹿市内においては、全体的に縄文時代の遺構・遺物は希薄であるが、平田遺跡から南西方向へ約4.7 km隔絶した保子里遺跡及び北一色遺跡において、大きな成果が得られている。保子里遺跡及び北一色遺跡は、鈴鹿川中流域の右岸段丘上に所在し、遺物の出土は縄文時代前期に遡る。縄文時代中期末～後期初頭頃になると竪穴住居が検出され、比較的多量の遺物が出土することから、本格的な集落経営が開始されたものと考えられている。保子里遺跡では、縄文時代後期中葉の緑帯文期の土器がよく出ており、晩期には竪穴住居も確認されている。平田遺跡と同様、縄文時代晩期の土器も比較的まとまりを見せ、鈴鹿川に向けて張り出す台地上の先端部に位置する立地条件も共通しており、非常に興味深い。その他、東庄内A・B遺跡、起A遺跡等で縄文時代中期後半、東庄内A遺跡で後期前半、長者屋敷遺跡等で晩期の遺構及び遺物が点在する様相を示す。

弥生時代の平田遺跡は、前～中期の明確な遺構は検出されておらず、暫く空白期間が生じる。その後、弥生時代後期～古墳時代初頭に入ると、竪穴住居及び方形周溝墓、掘立柱建物を中心とする生業を確認できる。第1次調査では弥生時代後期の方形周溝墓から、縄文時代晩期前半の石刀がほぼ完形で出土している。出土状況からは供献された可能性が考えられ、興味深い事例である。但し、過去の調査における該当時期の遺構は希薄であり、第19・22次調査区の成果が卓越する。竪穴住居が密集するような密度ではないが、この舌状台地の先端部を中心とし、特に古墳時代初頭に集落が隆盛したものと考えられる。鈴鹿市内における弥生時代後期～古墳時代初頭の集落遺跡を概観すると、鈴鹿川左岸段丘上には弥生時代後期を中心とする磐城山遺跡、南山遺跡、一反通遺跡、青谷遺跡等が存在する。この地域は、特に同時期の集落域を点的に乗せる台地である。中でも、磐城山遺跡は弥生時代後期前半の八王子宮式の段階から始まる大規模な集落遺跡で、後期後半の山中式の頃に隆盛を誇った後、

廻間式期に入って急速に衰退する。農地改良工事に先立つ本発掘調査が平成22年度から継続的に実施され、竪穴住居の累積棟数は既に100棟を超過する。検出棟数は調査の進展に従いながら、年々増加の一途を辿っているが、非常に濃密な遺構密度を誇る上に、竪穴住居が複雑に重複している特色がある。段丘上における集落の継続性や土地への固執を考えると、大いに刮目されるべき遺跡である。南山遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居及び方形周溝墓が検出され、集落域と墓域が近接して存在する例として興味深い。一反通遺跡は弥生時代前～後期に継続して営まれた遺跡で、突線組式銅鐸片の出土が著名であり、鈴鹿川流域における弥生時代の拠点集落として位置付けられている。鈴鹿川を挟んだ右岸の十宮古里遺跡 (旧称：神戸中学校遺跡) では、幅3 mを超える大溝に対し、意図的に破砕させたと見られる土器群が投棄されており、水に関わる祭祀の可能性が想定されている。特に廻間1式期の一括資料が出土し、重要な成果が得られている。また、伊勢湾を望む岸岡山丘陵付近においては、岸岡山遺跡及び天王遺跡が代表的な遺跡として挙げられる。岸岡山遺跡では、山中式～廻間1式を中心とする竪穴住居を80棟以上検出している。天王遺跡は、弥生時代後期には二重の環濠が巡る集落が検出されている。前述の一反通遺跡及び南山遺跡、磐城山遺跡も同時期の環濠集落である。なお、この時期においては、周辺の平野や沖積地の低地帯の集落が終焉し、岸岡山遺跡や磐城山遺跡のような比較的高地の丘陵上へと変遷する現象が確認できる。

古墳時代前期以降、平田遺跡では再び空白期間となる。この時期の遺構は未検出であり、出土遺物も少なく、具体的な生業が確認されるのは飛鳥時代になってからである。概ね7世紀後半～8世紀前半に竪穴住居群が分布し、8～9世紀代には掘立柱建物等へと変遷したことが分かっている。また、古代においては、道路遺構が遺跡内を縦貫する。道路面は削平されているものの、2条の側溝が等間隔の幅員を保って並行する。これが直線的に延伸する様相を呈しており、計画的に造られた官営道路であると考えられている。道路遺構と重複し、これを削平するのが第1次調査で確認された四面廂付掘立柱建物である。三重県内指の規模を誇り、国司や郡司クラスの居宅や官衙関連施設の可能性が想定されている。その他にも、片面視及び緑釉陶器、畿内系土器等が出土しており、単純な集落としては片づけられない成果が並ぶ。なお、平田遺跡周辺においては、『続日本後記』の記述から、平安時代前



期頃に川俣泉造の一族が居住していたとされている。鈴鹿郡の有力豪族である川俣氏についての詳細は明らかではないが、一般集落とは様相を異にする遺構及び遺物の数々は、その関係性が大きいと想定される。

平田遺跡は古代の鈴鹿郡に所在するが、河曲郡とのほぼ境にある。近辺においては、古代遺跡の本発掘調査の事例は少ないが、東方へ約4km離れた河曲郡の萱町遺跡では、平成19年に行われた第2次調査で大きな成果が得られている。個人住宅建築にかかる狭隘な調査区にも関わらず、8世紀後半～9世紀の一括資料が得られている。出土遺物には黒色土器及び緑釉陶器、輪の羽子、製塩土器、暗文が施された土師器等、官物的要素の強いものが並ぶ。平成17年の第1次調査においても、円面硯が出ていることから、地方豪族の居宅や郷クラスの施設の存在が想起されている。

平田遺跡では道路が廃絶し、そして9世紀代の遺構が衰退して以降、10～11世紀頃の遺構密度は希疎となる。再び人々の生活が活性化するのは、鎌倉時代に入ってからとなる。中世前期を中心に広範な敷地規模を誇る屋敷地が存在し、その内部には掘立柱建物及び井戸、土坑等が検出され、また青磁及び白磁等の出土から、一定以上の有力者が居住したものと想定される。屋敷地は二重の区画溝で区分けされる特徴を有しており、その性格は非常に興味深い。鈴鹿市内の中世の調査成果を鑑みると、平田遺跡から東方約2kmの位置に所在する竹野一丁目遺跡におけるものが卓越する。当該遺跡は鈴鹿川右岸の低位段丘上に存する鎌倉時代の遺跡であり、鈴鹿市初の事例となる中世の水田及び畦畔、用排水路、総柱掘立柱建物等が検出されている。総柱掘立柱建物からは貿易陶磁及び石硯等が出土し、在村領主の屋敷地と推定されている。また、人名の「よね」や「兎」の絵が描画された墨書山茶碗の出土も見られる。ほぼ正方位の溝による区画の中で、微高地に建物、その周囲には井戸を配置し、豊富な水脈を活用した水田や畑を営む13世紀代の村落風景の様相が確認されている。竹野一丁目遺跡の周辺には、同じく鎌倉時代の遺跡である竹野遺跡及び三日市東遺跡、三日市南遺跡が分布する。

平田遺跡における中世の様相は、13世紀中葉、降っても13世紀代を以ってほぼ収束するものと見られる。調査結果を鑑みると、それ以降の生活の痕跡を示すものは殆どない。しかし、埋蔵文化財包蔵地としては、平田遺跡の南西に隣接し、中世後期の城館である平田城跡が存在する。応仁元年(1467年)に平田氏が当地に城を築いたとされ、これが滅亡するまでの100年間余、勢力を誇っていたものと考えられている。現在においては、僅かに痕跡を留めるのみであり、過去の調査でも該当期

の遺物が散見される程度と乏しい結果しか得られていない。なお、本調査区から南西約100mに所在する高まりは、当初は前方後円墳の御門垣内古墳として周知されていたものの、第1次調査の結果、土塁であることが確認されている。平田城跡と何らかの形で関連するものであろうか。

平田遺跡では、近年に調査地南側を中心として開発事業が進み、平成16年以降、24次に及ぶ本発掘調査が行われている。宅地造成及び個人住宅建築等に先立つこれまでの調査結果では、前述したように縄文時代～中世に至る幅広い成果を得られている。長期間にわたって営々とこの地が利用されてきたのみならず、極めて重要な成果を内包する。平田遺跡周辺に目を向けると、本発掘調査の事例はあまり多くはないが、同じく鈴鹿川右岸において、点的に実施されている。本調査区から東へ約850mの弥生時代～中世の岡田南遺跡において、平成10年に調査が行われ、古墳時代の土坑墓及び古墳周溝、奈良～平安時代の掘立柱建物、中世の溝等が検出されている。土墳墓からは、勾玉2点及び管玉1点に加え、ガラス玉103点等が出土している。また、本調査区から南東約500mの岡太神社遺跡にて、6次にわたる調査の結果、平安時代の溝及び土坑、中世の区画溝及び井戸、道路状遺構等が検出されている。過去には区画溝を検出するに留まっていたが、平成24年に実施された第6次調査では、その内部に初めて掘立柱建物の確認に至っている。区画内には、井戸及び土坑等が造られており、鎌倉～室町時代を主とする集落の様相を考える上で、重要な知見が得られている。平田遺跡の東方には、縄文時代及び古代の天神遺跡、中世の岡田遺跡が広がる。鈴鹿川の中流域におけるこれらの遺跡は低～中位段丘上に立地し、鈴鹿川に程近い微高地という立地条件において、古来より複合的に人々の生業が営まれてきたことが分かる。

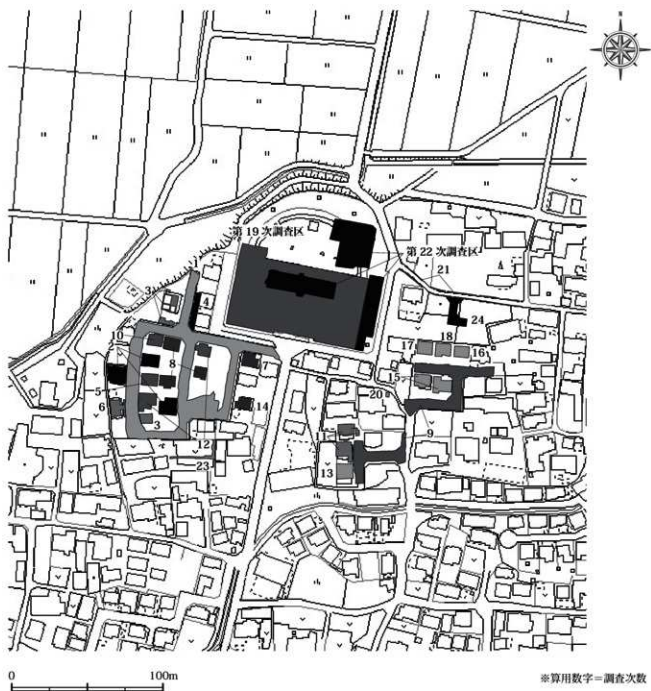


Fig. 3 調査区配置図 (1/2,500)

## III 調査の方法

### 1 調査区の設定

調査地内には直近まで稼動していた既存建物（平田送水場建物等）が存在する（Fig.4）。その解体時期の問題から、調査を2期に分けて実施することになった。第1期は既存建物部分を除く3,660㎡を対象とし、平成22年2月2日から平成22年7月7日にかけて、第19次調査として行った（Fig.6）。

第2期は第19次調査で確認できなかった範囲を対象とし、中央部及び東部の既存建物解体後の下面、北東部に新設される建物部分に対して実施した。調査次数は22回を数える。第22次調査は調査区が飛び地状に3箇所に分断されるため、混乱を避けるべく、中央部既存建物下面を1区、東部既存建物下面を2区、北東部新設建物部分を3区と設定し、計1,380㎡に対して調査を実施した（Fig.7）。なお、1区は既存建物の基礎梁によって分かれるため、TP1～6に細分した。

また、国土座標第VI系に基づき、3m四方のグリッドを設定した（Fig.5）。グリッドは調査区全体を網羅するように配置し、基点となる北西隅をA1と称した。グリッドに対しては西から東へA～ALの連続するアルファベットを、北から南に向へ連続する1～30の算用数字を付与し、これらのアルファベットと算用数字を組み合わせた2桁、若しくは3桁の記号を以て各グリッドの呼称とした。なお、国土座標第VI系の交点（X=-123780.000 m, Y=49230.000 m）がグリッドK2と符合する。

### 2 試掘調査（第19次）

平成22年3月12日、第19次調査と並行して試掘調査を実施した。当初は調査地北西部において、水槽升埋設箇所に対する埋蔵文化財の包蔵状況の確認を目的としていた。水槽升については、全てを高さ3.0m程度の土盛に覆われ、また過去の工作物であるために図面がなく、その規模や配置、深さ等の詳細が不明であるためである。しかし、鈴鹿市水道局の事業の中で、第19次調査後に行われる既存建物解体にかかる進入路敷設により、調査地外道路との高低差を解消すべく、調査地北西部が面的に削平される計画であることが判明する。遺構面に影響が及ぶことが確実であるため、併せて試掘調査の対象として設定した。

試掘調査は、長さ17m、幅0.7mの東西試掘溝（トレンチ）を1箇所設定し、重機（0.25m）を用いて東から行った（Fig.6）。

調査の結果、水槽升埋設箇所については、その西際を掘削したものの、水槽升底端の検出には至らなかった。

水槽升は地山面より更に掘り込んで埋設され、その設置箇所全面が削平されていることが確認された。加えて、水槽升埋設時の掘り方によって、水槽四方3m程度の範囲内が広く攪乱されていることが判明した。

しかし、水槽升の掘り方以西は削平を免れており、地山を明確に掘り込んだピットが複数検出された。遺物の出土はなかったが、確実に遺構が存在することから、当該進入路敷設にかかる事業で影響を受ける範囲である約119㎡を試掘拡張部とし、第19次調査の対象範囲に追加した。

### 3 解体工事（第22次）

第19次調査の終了後、調査区内に存する建物の解体工事が行われた。当該工事によって遺構面に影響が及ぶことを避けるべく、協議を行った結果、地上に露出する建物部分のみを対象として先行して解体し、建物の基礎部分については地中にそのまま残す形で行われた。

解体工事終了後、現地を確認したところ、1区について、想定した単純な布基礎構造ではなく、布基礎の内部がコンクリートの独立基礎等によって補強施工された重厚な造りであることが判明した。部分的に露出した基礎断面を確認すると、その掘削深度が予想以上であり、最悪の場合は1区全面の遺跡が失われていることも想定された。

しかし、遺構の遺存状況を確認するため、布基礎内部の空閑地を一部先行して調査（トレンチ1・2）を行った結果、基礎の下面には造成土（黄色砂質土）が入られ、その下層から包含層及び地山が遺存していることが確認された。建物の外周及び内部の基礎梁と各々の掘り方を中心とする範囲については攪乱されているものの、それ以外の範囲には遺構が残っていることを確認した。

結果として、1区全面に対する調査を予定通り実施する必要が生じた。調査の遂行にあたっては、既に遺構が破壊されている箇所の基礎については残すとしても、内部の基礎等の解体・撤去が避けられない。即決協議を行い、トレンチ1・2の遺構掘削及び測量等の調査を終えた段階で一度埋め、埋めた土を緩衝材とすることで遺構面を十分に保護しながら、別途で解体を行うことになった。

なお、1区中央部及び東部にて先行して行ったトレンチ調査の範囲については、遺構平面図等に対して、青色のラインを以て表現している（Fig.7）。

1区の解体工事と並行して2・3区の調査を行った結果、調査の進行は2区→3区→1区の順となった。

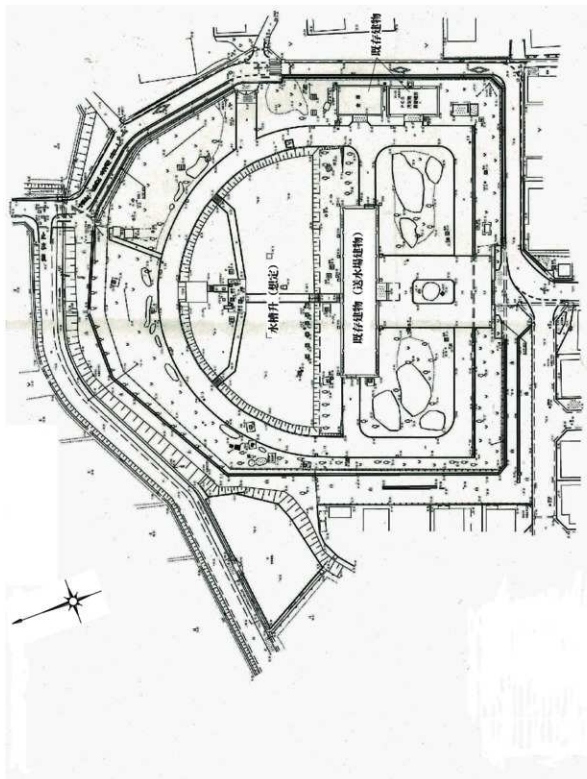


Fig.4 調査前現況図 (S=1/500)



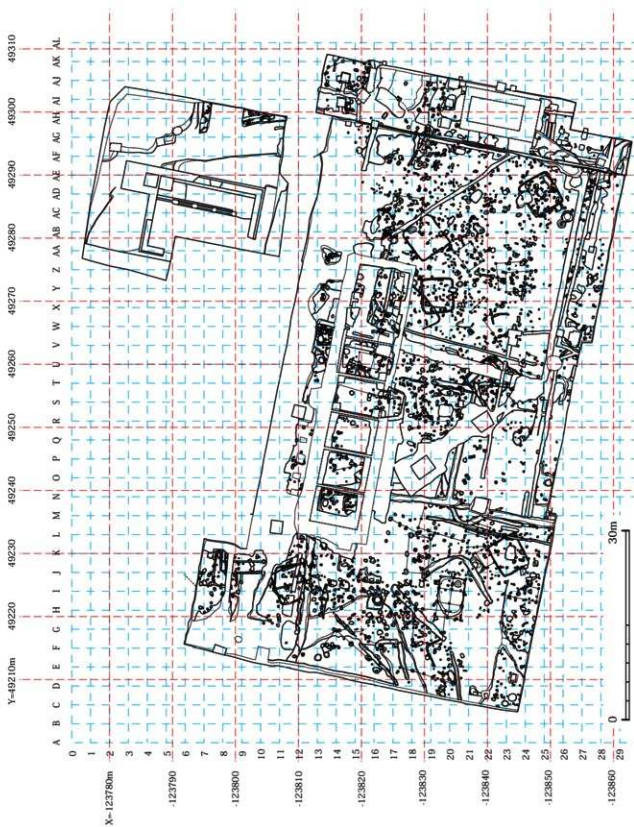


Fig.5 調査区設定図 (S-1/600)

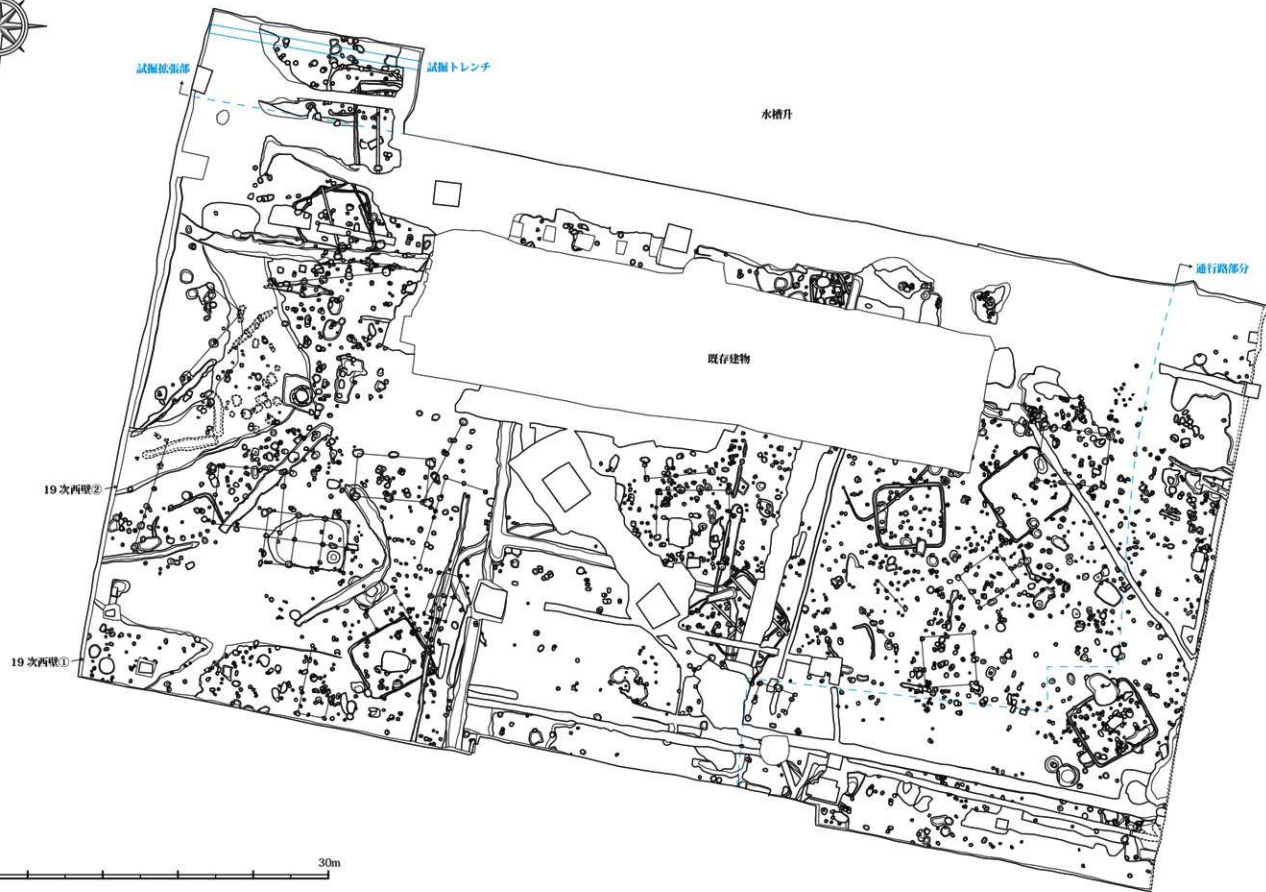


Fig.6 19次遺構配置図 (S-1/300)



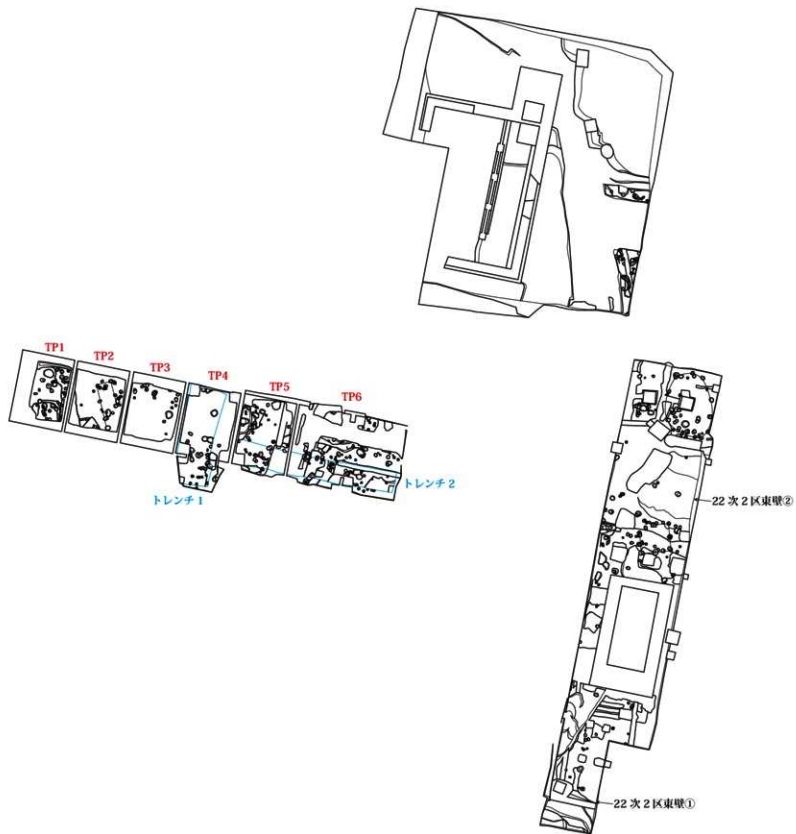


Fig.7 22次遺構配置図 (S=1/400)



#### 4 遺構の名称と記号

検出した遺構に対しては、調査時に認識した遺構の性格を考慮した上で、以下の遺構記号を先頭に配した。

##### 【遺構記号・性格】

SH…竪穴住居 SD…溝 SK…土坑 SA…棚列  
SB…掘立柱建物 SC…道路遺構 SE…井戸  
SF…土器焼成坑 P (pit) …ピット・柱穴  
SX…その他の遺構 (方形周溝墓・橋状遺構・性格不明の遺構等)・掘乱

遺構記号の後には、算用数字の001から順の通し番号で遺構番号を付与した。遺構番号は調査の進行に従って機械的に与えているため、遺構の時期等を示すものではない。本書においては、調査の段階で付した番号をそのまま使用している。また、遺構番号の先頭には調査次数を示す数字を付し、3桁の遺構番号と組み合わせた5桁の表記としている。

なお、ピットに限っては遺物が出土するもの、また棚列及び掘立柱建物、竪穴住居等の遺構を構成するものに対して遺構番号を付与しているが、調査次数を割愛して表しており、それ以外の遺構とは峻別して独自に1から順の通し番号を付している。そのため、第19・22次調査で同一名称のピットが存在することになるが、第22次調査で確認したピットに対しては、記号の末尾に'を付け加えることで混同を避けている。

##### 〈例〉

SD 22 001…遺構の性格を表す記号+調査次数+遺構番号

P1…第19次調査P1

P'1…第22次調査P1

#### 5 基本層序

基本層序は、第1層が表土、その直下にいわゆる黒ボク土が堆積する。場所によっては黒ボク土の上面に旧耕作土の堆積を確認できる。第19次調査区西壁及び第22次調査2区東壁において、それぞれ2箇所ずつ土層断面の確認を行っているが、その確認地点及び土層の堆積状況の詳細については図面の通りである (Fig.6～8)。22次調査2区東壁①・②については、後述するSD22001・2の項を参照されたい (Fig.85・132)。遺構面の検出は、表土を0.1～0.25 m、黒ボク土を0.2～0.3 m除去した基盤層 (地山) の上面である。

地山面は、粘質の強い明黄褐色シルト層 (10YR6/8) が主体であるが、場所によってはシルト層が薄く、また

は完全に失われ、その下位に堆積する砂礫層が露出するところも存在する。段岡調査区は鈴鹿川中流域右岸の河岸段丘の縁辺部に立地し、総じて水捌けが良い特徴がある。

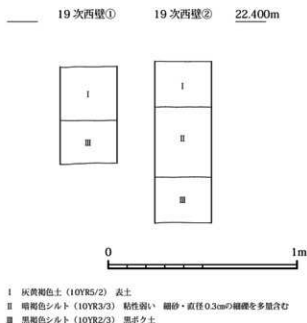


Fig.8 19次西壁①・②土層断面 (S=1/20)

#### IV 調査の経過

第19次調査は平成22年2月2日に着手し、平成22年7月7日に終了した。約5ヶ月間の調査において、発掘作業員延べ1,568人を要した。文化財保護法（昭和25年法律第214号、以下「法」と呼称）にかかる手続きは、法第99条に基づく報告を平成22年2月5日付け鈴考第1093号、法第108条に基づく発見届等の手続きを平成22年7月8日付け鈴考第384号にて行っている。

続く第22次調査は平成22年11月18日に着手し、平成23年2月25日に終了した。約3ヶ月間の調査において、発掘作業員延べ481人を要した。法第99条に基づく報告は平成22年11月18日付け鈴考第855号、法第108条に基づく発見届等の手続きを平成23年3月24日付け鈴考第1281号にて行っている。

以下に調査日誌を抄録することで、調査の経過に代える。

##### 【第19次調査日誌】

平成22年1月22日 重機（0.45m）を搬入する。

1月25日 仮設トイレを搬入する。

1月26日 監督員詰所及び作業基地を搬入する。

1月27日 発掘用具を搬入する。

2月1日 重機（0.25m）を搬入する。

2月2日 重機（0.45m）を使用し、調査区南西隅より表土掘削を開始する。ダンプトラック（4t）を搬入する。調査区北側を掘削排土置場とし、重機（0.25m）によって整地作業を行う。調査区内への基準点・水準点移設を開始する。

2月3日 基準点・水準点移設を完了する。調査補助のため、発掘作業員を若干名（2人/日程度）投入する。

2月4日 範囲確認調査の結果通り、遺構が面的に広がることを確認する。

2月5日 調査区西部に竪穴住居等、比較的大型の遺構が存在することを想定する。その埋土は土器片を多く包含する。

2月8日 送水場建物及びそれに付随する施設（小～中型水道升・管、水銀灯等）によって部分的に擾乱されているが、遺構は濃密に分布することを確認する。

2月9日 雨天につき、終日作業中止。ベルトコンベアを搬入する。

2月10日 ダンプトラック（2t）を搬入する。幅1m程度の東西溝（後のSD19007）と竪穴住居（後のSH19060・61）が重複することを確認する。

2月12日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。竪穴住居（後のSH19060・61）付近から弥生土器高坏

が出土し、廻間式期の時期を想定する。

2月15日 雨天につき、終日作業中止。

2月16日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。完形に近い山皿が出土し、中世遺構の広がり进行を想定する。

2月17日 中央部を擾乱された方形竪穴住居（後のSH19001）を確認。

2月18日 中世北溝2条（後のSD19005・6）が東西に並ぶことを確認する。鎌倉時代に比定され得る山茶碗が出土し、中世の区画範囲を想定する。

2月19日 北東-南西方向の溝状遺構を確認し、道路遺構側溝の可能性を考へるも、逆L字状に北西方向へ湾曲したため、方形周溝墓（後のSX19002）と判断する。

2月22日 中世南北溝2条（後のSD19005・6）の西側表土に山茶碗及び山皿がよく含まれ、当該溝の以西に中世遺構がまとまる可能性が高いと考へる。

2月23日 調査区東部において焼土を3箇所検出し、竪穴住居の存在（後のSH19014）を確認する。

2月24日 調査区南東隅において、竪穴住居とそれ以後出する土坑状遺構を確認する。土坑状遺構からは須臾器瓶類が出土する。調査区南東隅にて検出した遺構については、大部分が通行路部分に広がることと想定されるため、現状においては検出のみに留める。

2月25日 焼土及び炭化物を多く包含する土坑（後のSF19016）を確認する。

2月26日 雨天につき、終日作業中止。ダンプトラック（2t）を搬入する。

3月1日 調査区北西隅より、グリッド設定を開始する。

3月2日 発電機を搬入する。

3月3日 本日より発掘作業員を本格的に投入する。調査区南西隅より遺構検出を開始する。検出した遺構に対しては、順に遺構記号及び遺構番号を付す。遺構略測図の作成を開始する。周溝状の大溝SD19004を検出し、様々な可能性を考へる。試掘対象部の表土掘削を開始する。

3月4日 雨天につき、終日作業中止。

3月5日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。試掘対象部の表土掘削を終え、送水場建物北側の表土掘削を開始する。

3月8日 不定形的大型土坑状不明遺構SX19003を検出し、表面には青磁が露出している。送水場建物北側は、水槽升埋設に伴う掘り方によって面的に削平されているが、送水場建物に沿うように黒ボク土が堆積する状況である。

3月9日 雨天につき、終日作業中止。

3月10日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。当初竪穴住居の重複を一考していたSH19001が単独で

存在することを確認する。降雨により、午後1時間程度作業を中断する。

3月11日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SX19013がSD19005・6に先行することを確認する。調査区西部の遺構検出を4割程度終え、清掃作業を行った後、遺構検出写真撮影を実施する。

3月12日 調査区全面のグリッド設定を完了する。調査区中央部は遺構密度がやや薄いことを確認する。調査地北西部において試掘調査を実施する。

3月15日 試掘調査にかかる図面作成及び写真撮影等の記録作業を行う。送水場建物北側から廻間式期に帰属すると見られる弥生土器甕の完形品が出土する。降雨により、15時30分を以って作業中止。

3月16日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SH19012・57が重複するが、埋土からはその新旧関係は不明であり、攪乱とSD19023等の遺構も絡むため、大変茫漠としている。

3月17日 調査区中央～東部の遺構検出を終え、清掃作業を行った後、遺構検出写真撮影を実施する。過去調査との図面合成を行い、SD19009が道路遺構の東側側溝になると判断する。西側側溝については、SD19004と重複すると想定されるため、今後慎重に検出することとする。

3月18日 最新の中世遺構から順に遺構掘削を開始することとし、SD19007の掘削を開始する。遺存状態良好な山茶碗検点に加え、上層からは重複するSH19060・61の遺物が出土する。SD19004内の遺構を再検出する。

3月19日 調査区東～北東部の遺構検出を終え、清掃作業を行った後、遺構検出写真撮影を実施する。SD19008の掘削を開始する。SD19008は非常に浅く、部分的に残るのみである。

3月23～25日 雨天につき、終日作業中止。

3月26日 前日までの降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SD19005・6の掘削を開始する。SD19005は深く、しっかりと掘り込まれる溝である。

3月29日 送水場建物北側の表土掘削を終え、試掘拡張部の表土掘削を開始し、これを完了する。通行路部分を残し、表土掘削を終える。SD19006・7・8の掘削を完了する。SD19005は東西方向へも分岐するため、引き続きこれを掘削する。SD19004の上面において検出したSD19021・22に対し、道路遺構の西側側溝になると判断する。SD19020・21の掘削を開始する。SD19009・20・21の道路遺構を総称し、SC19011と呼称する。

3月30日 重機(0.25m)を搬出する。SD19004の掘削に向け、これに後出する遺構の記録作業を優先して行

うこととする。SD19004内に検出したピット群の掘削を開始し、追って遺構平面図作成、遺構測量作業を始める。SD19007・8付近の清掃作業後、遺構完掘写真撮影を実施する。SD19009・22・24の掘削を開始する。SD19005は東西方向への分岐のすぐ南側において部分的に浅くなる様相である。

3月31日 SD19024から山茶碗及び山皿、土師器鍋、白磁等が良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施し、遺物出土状況図作成を開始する。SX19003、SF19016の掘削を開始する。SD19005・9・20の掘削を完了する。SD19005・6付近の清掃作業後、遺構完掘写真撮影を実施する。SD19005は東西方向が埋没した後、新たに南北方向へ開掘されていることを確認する。

4月1日 SD19010、SH19014の掘削を開始する。SD19010は断面形状が箱形状に掘り込まれている。SF19016は中央～西部で特に焼土が集中する。SX19003から完形の山皿3個体に加えて、常滑焼及び青磁等が比較的多く出土しており、慎重に掘削を進める。

4月2日 雨天につき、終日作業中止。

4月5日 SH19015の掘削を開始する。SD19010・21・22の掘削を完了する。SD19024の遺物出土状況図作成を完了する。SH19015床面直上に弥生土器高坏の良好な資料を確認する。慎重に掘削を継続する。

4月6日 SH19001、SK19025、SD19026～28の掘削を開始する。SD19024の掘削を完了する。SD19009・21・22の遺構完掘写真撮影を実施する。SD19026～28は途切れているため、それぞれ別に遺構番号を付したが、走行方向及び幅、深さが近似しており、同一の溝と考える。

4月7日 SK19029・30の掘削を開始する。SD19026～28の掘削を完了する。SD19026～28は形状的に溝と捉えたが、遺物が全く出土せず、埋土の状況からも攪乱であると考え、SX19026～28に遺構記号を変更する。また、SK19025は予想以上に深く下がり、直立に掘り込まれ、井戸であると判断する。SE19025と遺構記号を変更する。遺物には山茶碗等が見られ、中世に帰属するものと考えられる。

4月8日 SK19031～33の掘削を開始する。SX19003の掘削を完了する。SH19014に付帯する土坑から弥生土器甕及び甗、高坏等が良好に出土したため、遺物出土状況写真撮影を実施し、遺物出土状況図作成を開始する。SF19016の焼土及び炭化物に対し、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施する。遺物出土状況図作成を開始し、これを完了する。

4月9日 SH19034、SX19041、SK19043の掘削を開



始し、掘削を完了する。SX19002・13・35の掘削を開始する。SE19025は安全面を考慮し、検出面から約1.25m掘り下げたところで掘削を中止する。清掃後、遺構完掘写真撮影を実施する。SB19036を認識する。

4月12日 雨天につき、終日作業中止。

4月13日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SB19036の遺構完掘写真撮影を実施する。SD19004, SX19038の掘削を開始する。SK19029・30・33, SX19035の掘削を完了する。

4月14日 SD19042, SX19048の掘削を開始する。SX19002・13, SK19031・32, SD19042の掘削を完了する。SA19037・44を認識する。SK19032からは青磁及び山茶碗、山茶碗鉢等の中世遺物がよく出ている。

4月15日 SK19045の掘削を開始する。SH19001, SX19038, SK19045の掘削を完了する。SB19084～87を認識する。SA19037・44の遺構完掘写真撮影を実施する。SH19034について、既に掘削済みのSK19033を土坑として付帯すると想定し、再検出したところ、周壁溝の南西コーナーを確認し、これを完掘する。

4月16日 降雨により、午前中を以って作業中止。SK19046・47の掘削を開始し、掘削を完了する。SB19088を認識する。

4月19日 SK19049・50の掘削を開始する。SK19049・50, SX19048の掘削を完了する。P142から土師器環及び黒色土器等が良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施し、遺物出土状況図作成を開始する。

4月20日 雨天につき、終日作業中止。ダンプトラック(4t)を搬出する。

4月21日 建設水道常任委員会の視察を受ける。前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SX19051, SK19052・54・55の掘削を開始し、掘削を完了する。試掘拡張部を含む調査区北西部の遺構検出を終え、清掃作業を行った後、遺構検出写真撮影を実施する。P266から土師器甕等、古代の遺物が良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施する。遺物出土状況図作成を開始する。P142・266の遺物出土状況図作成を完了する。SB19089・90を認識する。

4月22日 雨天につき、終日作業中止。

4月23日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。調査区北東部及び送水場建物北部の遺構検出を終え、清掃作業を行った後、遺構検出写真撮影を実施する。重複するSH19012・57, SD19023・SX19056の新旧関係を慎重に検討する。P315から円面硯の出土を確認する。4月26日 重複するSH19058・59, SH19060・61について、それぞれ新旧関係を慎重に検討する。SH19057

・59・60, SD19023, SX19056の掘削を開始し、SX19056の掘削を完了する。SA19091・SB19093・94を認識する。

4月27日 雨天につき、終日作業中止。

4月28日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SD19064, SK19065の掘削を開始し、SD19023・64, SK19065の掘削を完了する。良好な資料であるSH19015床面直上の弥生土器高環・甕, SH19015に後出するP342の黒色土器椀及び土師器環等に対し、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施し、遺物出土状況図作成を開始する。

4月30日 SK19066～68の掘削を開始し、掘削を完了する。SH19015の遺物出土状況図作成を完了する。SH19015床面を十分に精査するも、明確な支柱穴の確認には至らない。連体を控えるため、調査区全面のシート養生を充分に行う。

5月1～5日 連体により、終日作業中止。

5月6日 P342の遺物出土状況図作成を完了する。P461から土師器甕や須恵器壺等が良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施する。遺物出土状況図作成を開始し、これを完了する。SH19014・57の掘削を完了し、清掃作業後、遺構完掘写真撮影を実施する。SD19075・80, SK19071の掘削を開始し、SD19075の掘削を完了する。SB19095, SA19099を認識する。

5月7日 SH19053, SK19072の掘削を開始する。SX19074に土師器甕・壺等の良好な資料を確認する。降雨により、午前中を以って作業中止。

5月10日 SH19012, SK19076の掘削を開始し、SK19071・76の掘削を完了する。降雨により午前中を以って作業中止。

5月11日 SK19073・77の掘削を開始し、SH19015, SK19077の掘削を完了する。SK19073から土師器甕等が多量に出土したため、慎重に掘削を行う。断続的な降雨が強まり、14～15時に作業を一時中断する。

5月12日 SD19081, SK19078・79の掘削を開始し、SD19080・81, SK19078・79の掘削を完了する。SH19053に付帯する土坑から弥生土器甕の台部が3個体良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施する。

5月13日 航空写真撮影日を5月19日に決定し、それに向けた清掃作業を調査区南西隅から開始する。SH19059, SD19004の掘削を完了する。SH19058・59, SK19073の清掃作業を開始する。

5月14日 SH19060床面から弥生土器高環等が良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影及び

遺物出土状況図作成を開始する。SH19053の遺物出土状況図作成を完了する。SH19058, SD19070, SK19083の掘削を開始し, SH19012, SK19072・83の掘削を完了する。SH19058・59, SK19073の清掃作業を終え, SH19059の遺構完掘写真, SH19058の遺構検出写真, SK19073の遺物出土状況写真撮影を行う。SK19073の遺物出土状況図作成を開始する。SH19058は周壁溝が北辺で一部二重になり, 拡張の痕跡であると判断する。

5月17日 SK19101, SX19074・103の掘削を開始し, SH19053・58・60, SD19070, SK19073・101, SX19103の掘削を完了する。SH19060の遺物出土状況写真撮影及び遺物出土状況図作成, SK19073の遺物出土状況図作成を完了する。SH19060の遺構完掘写真撮影を実施する。

5月18日 調査区全面の清掃作業を完了する。SH19061の掘削を開始する。良好な資料であるSX19074の土師器裏に対し, 遺物出土状況写真撮影を実施する。遺物出土状況図作成を開始し, これを完了する。SX19074の掘削を完了する。

5月19日 航空写真撮影を実施する。SH19015・53の遺構完掘写真撮影を実施する。降雨により, 午前10時30分を以って作業中止。

5月20日 雨天につき, 終日作業中止。

5月21日 前日までの降雨に伴う雨水の排水作業を行う。明日に控える現地説明会の会場設営及び準備等を行う。SK19105の掘削を開始し, 掘削を完了する。SB19104, SX19100を認識する。SH19001・12, SX19002・3・13, SF19016の遺構完掘写真撮影を行う。遺構略測図作成を完了する。発電機を搬出する。

5月22日 現地説明会を実施する。100名の参加を得る。SH19061の掘削を完了し, 清掃作業後, SH19058・61, SD19004, SA19099, SB19084・86～91・93～95・104, SX19100の遺構完掘写真撮影を実施する。

5月24日 雨天につき, 終日作業中止。

5月25日 重複遺構プラン確認用のベルトの撤去を行う。補足調査として, SH19001・14・15・18・57に対し, その貼床を一部外して測量作業を行う。

5月26日 補足調査終了。

5月27日 遺構平面図作成及び遺構測量を完了する。本日を以って, 通路部分以外の部分の調査を終了する。整地, 掘削土の移動, 埋戻し作業を開始する。通路部分の調査に向け, 仮駐車場の設営を開始する。

5月28日 ブルドーザー (D3) を搬入し, ベルトコンベアを搬出する。整地及び仮駐車場の設営を完了する。

5月31日 調査区南西隅より, 通路部分の表土掘削

を開始する。遺構の性格について見直しを行う。P180は深く直立に掘り込まれ, 井戸であると判断してSE19108, P63は規模が大きいため, 土坑であると判断し, SK19109とそれぞれ遺構記号を変更する。それに伴い, P63・180は欠番とする。

6月1日 重機 (0.45m) 及びダンプトラック (4 t) を搬入し, ブルドーザー (D3) 及びベルトコンベアを搬出する。調査区南部には攪乱が多く, 遺構密度が予想以上に低いことを確認する。

6月2日 通路部分の表土掘削を完了する。遺構密度は調査区東部において高く, 堅穴住居が存在する可能性が考えられる。

6月4日 ダンプトラック (4 t) を搬入する。

6月7日 通路部分の遺構検出及び遺構掘削, 遺構略測図の作成を開始する。調査区南部の遺構検出を終え, 清掃作業を行った後, 遺構検出写真撮影を実施する。遺構検出写真撮影を実施する。SB19106を認識する。

6月8日 調査区南東部の遺構検出を終え, 清掃作業を行った後, 遺構検出写真撮影を実施する。降雨により, 午前に1時間程度作業中止。

6月9日 通路部分の遺構平面図の作成を開始する。調査区東部の遺構検出を終え, 清掃作業を行った後, 遺構検出写真撮影を実施する。SX19107の掘削を開始する。大型の土坑状の遺構であるが, その性格は不明である。株式会社友組による安全パトロールを受け, 問題点及び改善点等なとの結果を得る。

6月10日 通路部分の遺構測量を開始する。調査区北東部の遺構検出を終え, 清掃作業を行った後, 遺構検出写真撮影を実施する。SX19017・110, SK19111, SH19018の掘削を開始し, SX19110, SK19111の掘削を完了する。

6月11日 通路部分の遺構検出を完了する。SK19112・114の掘削を開始し, SX19107の掘削を完了する。SX19017から土師器裏等の古代遺物が良好に出土したため, 清掃作業後, 遺物出土状況写真撮影及び遺物出土状況図作成を開始し, これを完了する。

6月14日 雨天につき, 終日作業中止。ダンプトラック (4 t) 2台を搬出する。

6月15日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SD19115の掘削を開始する。SK19112は予想以上に深く下がり, 井戸の可能性を考える。降雨により, 13時30分を以って作業中止。

6月16日 通路部分の遺構略測図の作成を完了する。前日から朝までの降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SD19116, SX19117の掘削を開始し, SK19114の掘削を終える。SD19115・116は同一遺構になる可能性

があるが、攪乱によって南北で分断されるため、別遺構として取り扱うこととする。

6月17日 重機(0.45m)を搬出する。SK19113・120, SX19119の掘削を開始する。SK19113はSK19112に先行し、埋土や掘り方の状況が近似しているが、明らかに浅いことを確認する。

6月18日 SX19121の掘削を開始し、SD19116の掘削を完了する。SX19017から再度土師器裏等が良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影及び遺物出土状況図作成を開始する。遺物出土状況写真撮影を完了する。降雨により、9時20～40分に作業を一時中断。その後雨足が強まり、11時30分を以って作業中止。

6月21日 前日までの降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SD19122～124・127の掘削を開始し、SK19113, SX19017・117・119の掘削を終える。SX19017の遺物出土状況図作成を完了する。SK19112は深く掘り込まれ、井戸であると判断してSE19112と遺構記号を変更する。安全面を考慮し、検出前から約0.9m程度掘り下げたところで掘削を中止する。

6月22日 前日から早朝にかけての降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SK19125・126の掘削を開始し、SK19120, SX19121, SD19115・123・127の掘削を終える。SH19018は内部に多数のピットを確認し、また焼土範囲を複数検出する。

6月23日 雨天につき、終日作業中止。

6月24日 前日の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。SD19122・124, SK19125・126の掘削を完了する。

6月25日 SH19018の掘削を完了する。通行路部分全面の遺構掘削を完了する。清掃作業を行った後、遺構完掘写真撮影を行う。また、個別遺構としてSX19017, SH19018, SD19115・116, SD19122～124・127の遺構完掘写真撮影を実施する。

6月28日 遺構の重複する箇所や土層観察用に設定したベルトの撤去作業を実施する。

6月29日 遺構平面図作成、遺構測量を完了する。通行路部分の埋戻し及び調査区全面の整地作業を開始する。

6月30日 ダンプトラック(4t)を搬入する。

7月5日 ダンプトラック(4t)を搬出する。

7月7日 通行路部分の埋戻し及び調査区全面の整地作業を完了する。本日をもって、現地調査の全てを完了する。監督員詰所を撤去し、発掘用具を搬出する。

7月9日 重機(0.45m)を搬出する。

7月24日 作業基地及び仮設トイレを撤去する。

## 【第22次調査日誌】

平成22年10月29日 調査区(1～3区)設定。

11月11日 監督員詰所及び作業基地、発掘用具、仮設トイレを搬入する。調査区内への基準点・水準点移設を開始する。

11月12日 調査区内への基準点・水準点移設を終了する。

11月17日 重機(0.45m)を搬入する。

11月18日 重機(0.45m)を使用し、1区の表土掘削を開始する。既存建物基礎の空閑地に対してトレンチ1・2を設定し、表土掘削を行う。

11月19日 既存建物基礎に比較して検出面が深く、遺構面が部分的に削平されながらも、完全には滅失していないことが判明する。攪乱は布基礎及び基礎梁部分を中心とする範囲に留まるものと想定する。遺構面に十分な配慮をしながら基礎を撤去する必要性が生じたため、1区トレンチ1・2の表土掘削を終了して一時保留とし、今後の協議の進展を待って措置することとする。

11月22日 雨天につき、終日作業中止。ベルトコンベアを搬入する。

11月24日 2区の表土掘削を開始する。重厚なコンクリート塊である東部既存建物の基礎による攪乱が広範であることを確認する。基礎による掘削深度は、現況GL-2m程度まで及びぶ。第19次調査のSD19115・116の東統きの溝(後のSD22002)を検出する。

11月25日 調査補助のため、発掘作業員を若干名(5人/日程度)投入する。2区南部よりグリッド設定を開始する。既存建物や送水場に付随する施設(小～中型水道弁・管、水銀灯等)により、部分的に攪乱されているものの、遺構は比較的濃密に分布することを確認する。

11月26日 2区中央部付近において、幅約10mに及ぶ大型の溝状遺構(後のSD22001)の存在を確認する。その埋土は土器片を多く包含している。

11月29日 2区の表土掘削を完了する。2区北部は削平を免れ、遺構検出面が浅いことを確認する。

11月30日 2区南部より遺構検出を開始する。検出した遺構に対しては、順に遺構記号及び遺構番号を付す。1区建物基礎の解体工事に伴う協議を行い、今後の調査進行にかかる方針を策定する。

12月1日 本日より発掘作業員を本格的に投入する。1区の表土掘削を再開する。1区トレンチ1・2の遺構検出を開始する。2区のグリッド設定を完了し、南部から遺構略測図の作成を開始する。2区南部の遺構検出を完了し、清掃を行った後、2区南部及びSD22002の遺構検出写真を撮影する。

12月2日 1区トレンチ1及びトレンチ2西部の遺構

検出を完了し、清掃を行った後、遺構検出写真を撮影する。1区トレンチ1・2のグリッド設定を開始し、完了する。

12月3日 前日夜間～早朝の降雨に伴う雨水の排水作業を行う。1区西部には包含層が残存しており、遺構面が遺存する可能性が高いことを確認する。降雨により、14時を以て作業中止。

12月6日 1区トレンチ2中央～東部の遺構検出を完了し、清掃を行った後、遺構検出写真を撮影する。1区トレンチ1・2の遺構略測図作成を開始し、完了する。1区の表土掘削については、今後の解体工事に備えるべく、掘り切らずに中途で留める。

12月7日 2区の作業を一旦中断し、1区トレンチ1・2の調査に注力する。1区トレンチ2から遺構掘削を開始する。SX22003の遺構掘削を開始する。2区中央部の遺構検出を完了し、清掃を行った後、2区中央部及びSD22001の遺構検出写真を撮影する。

12月8日 SX22005の掘削を開始する。SX22005はやや大型となる方形土坑状の遺構である。下面には複数のピットを検出する。

12月9日 2区の遺構掘削を開始する。SD22002・6の掘削を開始する。SX22003・5について、SX22003は攪乱であり、SX22005は古代の竪穴住居の可能性を想定する。

12月10日 2区の遺構検出を完了する。3区の表土掘削を開始する。SX22003・5、SD22006の掘削を完了する。1区トレンチ1・2の遺構掘削を完了し、清掃作業の後、遺構完掘写真撮影を行う。2区北部の清掃を行い、遺構検出写真撮影を行う。SD22002は深く掘り込まれ、大型の周溝状遺構であると判断する。

12月11日 ダンプトラック(2t)を搬入する。

12月13日 雨天につき、終日作業中止。

12月14日 1区トレンチ1・2の遺構平面図作成を開始し、完了する。2区の遺構略測図作成を完了する。3区で大型の構造物(後のSX22031)の埋没を確認する。SD22007の掘削を開始し、完了する。SD22002から弥生土器のミニチュア高環が出土する。

12月15日 1区トレンチ1・2の遺構測量を開始し、完了する。SD22002は検出面から0.5m以上下がり、検出範囲も広大であるため、掘削に難航する。SD22002から弥生土器受け口甕が出土する。

12月16日 1区の建物基礎の解体工事を開始する。SD22001、SK22008の掘削を開始し、SK22008の掘削を完了する。P37から土師器環が良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施し、遺物出土状況図作成を開始する。

12月17日 P37の遺物出土状況図作成を完了する。SD22001から土師器甕・坏・皿、須恵器甕・坏・高环等が出土する。上層からの出土ではあるが、7～8世紀頃の年代層を考える。3区には構造物に加え、直径1mを超過する礎及びコンクリート塊等のガラが多量に埋設されており、表土掘削が非常に難航する。P35から緑釉陶器、P40から灰釉陶器が出土する。

12月20日 雨天につき、終日作業中止。

12月21日 SK22009の掘削を開始し、完了する。SD22001からの出土遺物は多量であるが、北部の上層からは弥生器蓋及びサカイト製石礫の混入を確認する。

12月22日 3区について、遺構面が面的に攪乱されていることを確認する。SD22002底面直上からへばり付くように弥生土器高環の良好な資料が出土する。遺物出土状況の記録をとるべく、清掃作業を開始する。

12月24日 SD22002から出土した弥生土器高環の清掃作業を終え、遺物出土状況写真撮影を実施する。遺物出土状況図作成を開始し、完了する。SD22002の掘削を完了する。SD22001は7世紀の埋没を想定する。

12月27日 1区の建物基礎の解体工事が完了する。SK22010の掘削を開始し、SD22001の掘削を完了する。P57から縄文土器深鉢が良好に出土したため、清掃作業後、遺物出土状況写真撮影を実施する。遺物出土状況図作成を開始し、完了する。

12月28日 中世溝の区画範囲を外れる2区においては、中世遺物の出土が殆ど無いことを確認する。年末年始の休暇に備えて調査区全面の養生を充分に行い、休暇中の警備体制を確立する。

12月29日～1月3日 連休により、終日作業中止。平成23年1月4日 1区について、中途に留めていた表土掘削を再開する。1区西部より遺構検出を開始する。P94から縄文時代晩期の深鉢及び石刀が出土する。

1月5日 2区の遺構掘削を完了する。1区西部の遺構検出を開始し、グリッド設定を開始する。第19次調査のSD190005・7の続きとなるSD22011・12を検出し、中世区画溝の北東コーナーを確認する。SX22014及びSB22032・33の存在を認識する。

1月6日 1区の遺構略測図作成及び遺構掘削、2区の遺構平面図作成を開始する。1区西部の清掃を行った後、遺構検出写真を撮影する。個別遺構として、SD22011・12の遺構検出写真撮影を行う。SD22013の掘削を開始する。

1月7日 1区の表土掘削を完了する。SD22011・12、SX22015・16の掘削を開始する。SD22011から山茶碗及び土師器鍋等が出土し、埋土色及び形状、位置関係

のみならず、出土遺物からも中世に帰属することが確実となる。SX22015から弥生土器壺、P124から弥生土器甕が良好に出土したため、清掃作業を開始する。

1月11日 1区のグリッド設定を完了する。SD22017の掘削を開始する。SX22016の掘削を完了する。P124から出土した弥生土器甕の清掃作業を終え、遺物出土状況写真撮影を実施し、遺物出土状況図作成を開始する。SX22015と共に、埋葬施設である可能性が高いものと考ええる。

1月12日 1区東部の遺構検出及び2区の遺構測量を開始する。SD22011の掘削を完了する。SX22015から出土した弥生土器壺の清掃作業を完了する。遺物出土状況写真撮影を実施し、遺物出土状況図作成を開始する。1区東部において、点的に攪乱されていることを確認する。

1月13日 1区東部の遺構検出を完了し、清掃作業の後、遺構検出写真撮影を行う。個別遺構として、SX22019の遺構検出写真を撮影する。3区の表土掘削を完了する。SX22015及びP124の遺物出土状況図作成を完了し、その掘削を完了する。3区については、遺構の遺存状態がかなり不良であることを確認する。

1月14日 1区の遺構略測図及び2区の遺構平面図作成を完了する。SX22018・19、SD22021・22、SK22020の掘削を開始し、SK22010・20、SD22011～13・17、SX22016の掘削を完了する。攪乱と目されるSX22018から山茶碗が出土する。

1月17日 前日～早朝の降雪に伴う雪の除去作業を行う。SX22024の掘削を開始し、SD22021の掘削を完了する。

1月18日 SX22024の掘削を完了する。SX22019・24は底面が不整であり、平面プランも茫漠としており、木根等による攪乱の可能性を考える。

1月19日 調査区全面の航空写真撮影日を1月25日に決定し、それに向けた清掃作業を1区西部から開始する。SK22023の掘削を開始する。

1月20日 3区の遺構検出及び遺構略測図作成、グリッド設定、遺構掘削を開始する。3区の遺構検出及びグリッド設定を完了し、清掃を終えた後、遺構検出写真を撮影する。SX22018、SD22022、SK22023の掘削を完了する。

1月21日 SX22019の掘削を終え、1区の遺構掘削を完了する。2区の遺構測量を完了する。1区の清掃作業を終え、2区の清掃作業を開始する。3区の遺構略測図作成を完了する。SD22026～28、SK22029・30の掘削を開始し、SD22028の掘削を完了する。

1月24日 2区の清掃作業を終え、3区の清掃作業を開始する。SD22026・27、SK22029・30の掘削を完了

し、3区の遺構掘削を終える。

1月25日 調査区全面の清掃作業を再度行い、完了する。航空写真撮影を実施する。1区全面及びSD22013、SX22015、P124の遺構完掘写真撮影を行う。

1月26日 2区全面及びSD22001・2・11・12・21・22・26、SX22014・16・31、SB22032・33、P57の遺構完掘写真撮影を行う。

1月27日 3区全面及びP37の遺構完掘写真撮影を行う。

1月28日 3区の遺構平面図作成を開始する。

2月2日 ダンプトラック(2t)及び発掘用具、ベルトコンベアを搬出する。

2月3日 3区の遺構平面図作成を完了し、1・3区の遺構測量を開始する。

2月14日 1・3区の遺構測量を完了する。遺構の重複する箇所や土層観察用に設定したベルトの撤去作業を実施する。調査区全面の埋戻しを開始する。

2月25日 調査区全面の埋戻しを完了する。本日を以って、現地調査の全てを完了する。

2月28日 重機(0.45m)を搬出する。

3月10日 監督員詰所及び作業基地、仮設トイレを搬出する。





## V 遺構と遺物

平田遺跡第19・22次調査の結果、縄文時代から中世に至るまでの長期間に跨る遺構及び遺物の確認に至り、これらの時代を複合する遺跡であることを再認識した。過去に平田城に関連する室町時代の埋蔵文化財包蔵地として周知されていた内容とは大きく異なり、よりパリエーションに富んだ充実したものとなった。

調査は第19・22次に跨り、更に第22次調査は1～3区に細分される。これは先に述べた通り、建物の解体・新設を起因とする便宜上の区分であり、全て平田送水場改築に伴う一連の事業を原因とする。

そこで、本章では遺構の時期毎に大まかに区分し、一括して報告することとする。遺構は縄文時代晩期の建物、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居及び方形周溝墓、奈良～平安時代の道路遺構及び土坑、溝、鎌倉時代の溝及び井戸等が中心となる。

出土した遺物量は、整理箱（コンテナバット：53×33×10cm）換算で第19次調査64箱、第22次調査21箱であった。調査面積及び遺構密度を勘案すると、やや寂しい結果となった。

### 1 縄文時代の遺構 (Fig.10)

縄文時代の遺物については、該当期の遺構以外にも、表土や他の遺構に比較的好く混入しており、後世に大きく削平されている状況が窺われる。縄文土器は比較的全体に万遍なく分布するが、第19次調査区東部～第22次調査2区において密度を増す傾向にある。縄文時代中期末の北白川C式期に遡る資料を数点検出したに留まり、遺跡の中心は滋賀里2～3式の縄文時代晩期前半代となる。以降、縄文時代晩期後半から弥生時代初頭頃の凸帯文期のものが散見される程度である。

#### 【欄列 SA19091 (Fig.11～13)】

構成 P292・294・343・345。

重複 P294→P344。

平面・規模 検出した規模は3間である。総長3.8mで、柱間は北から1.3m+1.0m+1.5mを測る。主軸方向はN-42°-Wを向く。構成するピットの規模は、直径0.2～0.5mの円形状を呈し、検出面からの深さは0.17～0.3mを測る。

遺物 P292から縄文土器深鉢(1・2)が出土した(Fig.17)。P294からも縄文土器片が出土しているが、図化で得る資料はなかった。

縄文土器深鉢(1・2) 共に外面に条痕が施され、胎土には金雲母を包含する。1は粘土紐の接合痕の観察が可能で、外傾接合である。2は下部が粘土紐の接合部分で剥落している。

時期・性格 1・2は縄文時代晩期前半の滋賀里式の所産である。

#### 【欄列 SA19099 (Fig.11・13)】

構成 P331・697(698?)・699・700。

重複 P699→P698。

平面・規模 検出した規模は3間で、総長3.2mを計測する。柱間は北から1.1m+1.0m+1.1mとほぼ均一である。主軸はN-45°-W方向である。構成するピットの規模は直径0.15～0.5mの円形状で、検出面からの深さは0.08～0.23mを測る。

遺物 P331から縄文土器片が出土したが、実測可能なものはなかった。他のピットからは一切遺物が出ていない。

時期・性格 破片資料のみの出土であるが、SA19091と主軸方向をほぼ同一にするため、同時期に属すると判断される。SA19091・99は約2.5mの間隔を保ちながら並行する。これらの内側にピットがもう1列ずつ同方向に並び、建て替え等の可能性が考えられるが、遺物の出土がないために判然としない。

#### 【掘立柱建物 SB19086 (Fig.14～16)】

構成 P226・232・233・237・696。

重複 P696→SX19002。P235→P254(SA19098)。

平面・規模 1間×2間の側柱建物である。梁間3.4m、桁行5.7mを測り、平面形は長方形を呈する。主軸方向はW-5°-Sを示す。構成するピットの規模は、直径0.65～0.8m、検出面からの深さ0.4～0.55mを測る。ピットは全て円形状を呈し、その掘り方は大振りである。

遺物 P226から縄文土器深鉢(3・4)、P233から縄文土器深鉢(5)、P237から縄文土器深鉢(6)が出土した(Fig.17)。なお、P226・696からも縄文土器片が出ているが、図化には至っていない。

縄文土器深鉢(3～6) 3は破片資料につき、天地を逆に誤認している可能性がある。4は体部下方の資料で、底部に向けてやや厚手となる。5は特に金雲母を多く含んでおり、粘土紐の接合痕の観察が容易で、外傾接合である。6は内外面を横位のケズリで調整される。

時期・性格 P696が古墳時代初頭のSX19002で埋没し、P235が中世のSA19098を構成するP254に後出する。5・6は縄文時代晩期前半に属すると考えられる。柱の掘り方が比較的大型で深いことに特徴がある。調査段階でP696はSK19045としていたが、整理作業において変更したため、遺構番号19045は欠番となった。

#### 【掘立柱建物 SB19090 (Fig.18・19)】

構成 P263・278・280・281・701(702?)・703。

重複 P281→P60。P703→SX19051。

平面・規模 側柱建物で、2間×3間の規模を検出した。





Fig.10 縄文時代の主要遺構配置図 (S=1/500)

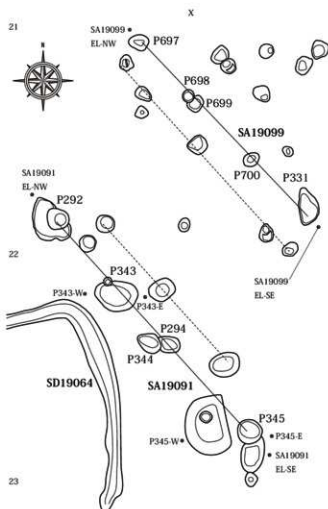
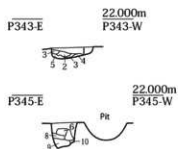


Fig.11 SA19091・99 平面 (S=1/50)



- 1 黒褐色細砂 (10YR2/3)
- 2 黒褐色シルト (10YR2/3) と褐色シルト (10YR4/6) が混在
- 3 褐色シルト (10YR4/6) 粘性強い
- 4 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い
- 5 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い
- 6 黒褐色細砂 (10YR2/2)
- 7 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロックを含む
- 8 褐色シルト (10YR4/6) 黒褐色土を含む
- 9 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを含む
- 10 褐色シルト (10YR4/6) 黒褐色土を少量包含する

Fig.12 SA19091 土層断面 (S=1/50)

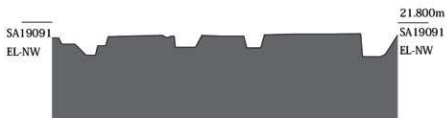


Fig.13 SA19091・99 断面 (S=1/50)

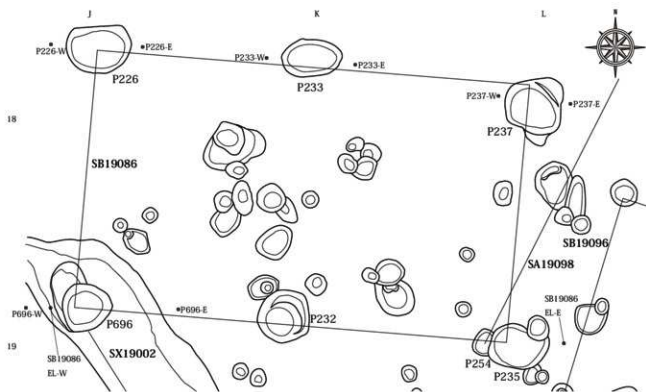


Fig.14 SB19086 平面 (S=1/50)

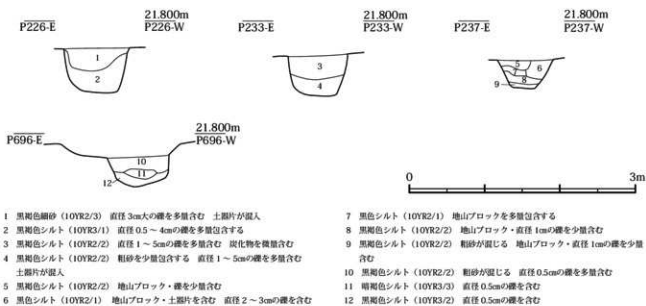


Fig.15 SB19086 土層断面 (S=1/50)

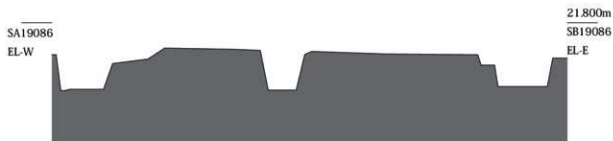


Fig.16 SB19086 断面 (S=1/50)

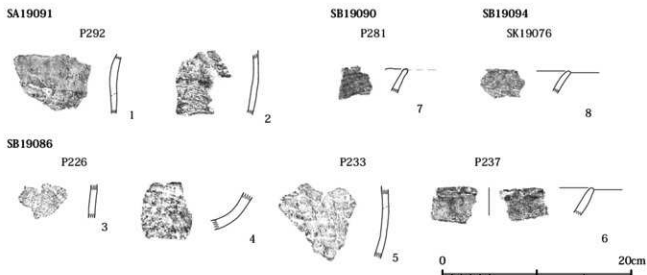


Fig.17 SA19091・SB19086・90・94 出土遺物 (S=1/4)

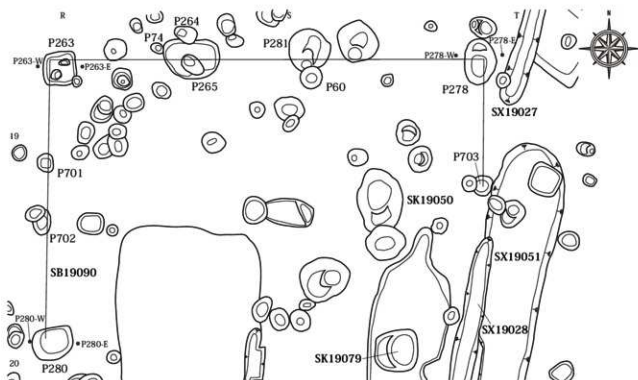


Fig.18 SB19090 平面 (S=1/50)



Fig.19 SB19090 土層断面 (S=1/50)

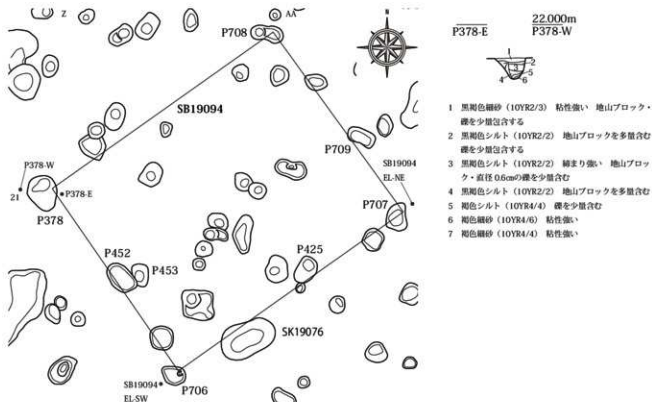


Fig.20 SB19094 平面 (S=1/50)

Fig.21 SB19094 土層断面 (S=1/50)

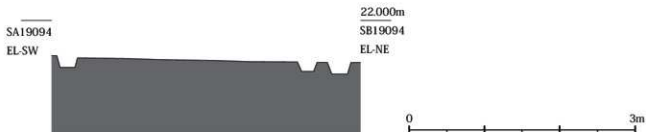


Fig.22 SB19094 断面 (S=1/50)

南北 5.7 m, 東西 3.7 m を測るが, 南北方向に更に広がる可能性を残す。しかし, SB19090 南側にはピットが多く, 加えて攪乱によって茫漠としているために不明である。主軸は N-1°-W とほぼ正方位を向く。構成するピットの規模は, 直径 0.4 ~ 0.7 m を測り, 検出面からの深さは 0.05 ~ 0.35 m とやや幅がある。

**遺物** P281 から縄文土器深鉢 (7) が出土した (Fig.17)。縄文土器深鉢 (7) 口縁部上端にキザミを有するが, 磨滅のために痕跡を留めるのみである。

**時期・性格** 7 は縄文時代晩期前半に帰属するものと考えられる。また, P281 に後出する P60 からは縄文土器が出土しているが, 破片資料につき, 詳細な時期判定は困難である。P703 に後出する SX19051 は後世の攪乱である。

**【掘立柱建物 SB19094 (Fig.20 ~ 22)】**

**構成** P378・425・452・706 ~ 709, SK19076 ?。

**重複** P453 → P452。

**平面・規模** 2 間 × 2 間の側柱建物になろう。検出範囲は南北 2.9 m, 東西 3.6 m を測る。主軸は W-35°-N 方向を向ける。構成するピットは, 直径 0.2 ~ 0.4 m の円形状を呈し, 検出面からの深さは 0.25 ~ 0.35 m を測る。**遺物** P425・452 から縄文土器片が出土したが, 図化できる資料はない。SK19076 から縄文土器深鉢 (8) が出土した (Fig.17)。

**縄文土器深鉢 (8)** 口縁部の破片資料で, 内外面にケズリ調整が施される。

**時期・性格** 2 × 2 間の側柱建物を想定しているが, 北辺中央部のピットは未検出である。P452 に切られる P453 から縄文土器細片の出土があるが, 帰属時期を特定する資料はない。南辺の柱筋上には SK19076 が存在する。長軸 0.75 m, 短軸 0.45 m, 検出面からの深さ 0.29 m の規模を有し, 8 が出土している。縄文時代晩期前半

に属すると考えられ、SB19094の所属時期の詳細を示す可能性がある。なお、SK19076の埋土は、SB19094を構成するピットと同色の黒褐色土である。

**【掘立柱建物SB22033 (Fig.23・24)】**

**構成** P'125・126・129・713～716 (717?)・718

**重複** P'718→P'127。

**平面・規模** 南部は既存建物によって攪乱を受けているため、南方向への延伸は特定できない。少なくとも1間×4間の掘立柱建物になる。梁間1.5mを測り、桁行は4.7m以上になる。主軸方向はN-13°-Eを示し、平面形は長方形をなすものと見られる。構成するピットは円

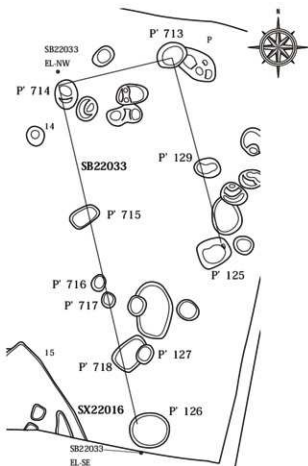


Fig.23 SB22033 平面 (S=1/50)

形状を呈し、直径0.25～0.5m、検出面からの深さ0.1～0.65mを測る。

**遺物** P'129から縄文土器片が出土したが、破片資料のため、図化には至っていない。

**時期・性格** 縄文時代の遺構であることを前提とすれば、その他の遺構と同様、縄文時代晩期前半に属する可能性が高いと思われる。但し、縄文土器の出土がP'129に留まるため、確認を得ることはできない。P'718に後出するP'127からは土師器片が出土している。

**【土坑SK22009 (Fig.25)】**

**重複** SK22009→P'39。

**平面・規模** 長軸1.3m、短軸0.75mを測り、検出面からの深さは0.1mを測る。北西部が北方向へ突出した不整形形状を呈する。

**遺物** 縄文土器深鉢(9)が出土した(Fig.29)。

**縄文土器深鉢(9)** 体部一部の遺存に留まり、内外面をケズリ調整される。

**時期・性格** 9は多くの縄文時代の遺物と同様、縄文時代晩期前半に属する可能性が考えられる。南東部をP'39によって切られる。P'39からも縄文土器深鉢(36)が出土している。SK22009及びP'39はほぼ同色の黒褐色土(10YR2/2)で埋没する。

**【土坑SK22030 (Fig.26・27)】**

**重複** ピット(遺物なし)→SK22030。

**平面・規模** 南北0.8m、東西1.0mを検出したが、北部が攪乱されるため、南北方向の規模は不明である。南部はやや隅丸方形形状に収容する。検出面からの深さは0.45mを測る。

**遺物** 縄文土器深鉢(10)が出土した(Fig.29)。

**縄文土器深鉢(10)** 口縁部は直線的なプロローションを呈する。金雲母を多量含む。

**時期・性格** 10は縄文時代晩期前半に属するものと考えられる。SK22030の西側にはSK22029が存在するが、大部分が削平され、遺物の出土もないために詳細は明らかでない。

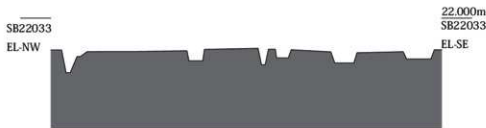


Fig.24 SB22033 断面 (S=1/50)

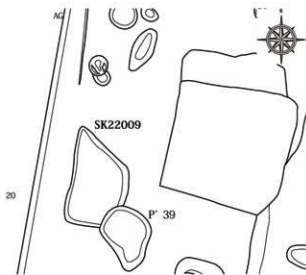


Fig.25 SK22009 平面 (S=1/50)

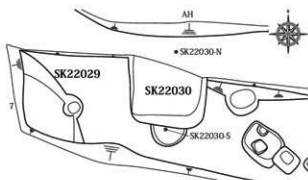


Fig.26 SK22030 平面 (S=1/50)



Fig.27 SK22030 土層断面 (S=1/50)

- 1 黒褐色シルト (10YR3/1) 小礫を少量含む 直径0.2～0.5cmの地山ブロックを微量包含する
- 2 黒褐色シルト (10YR3/1) 小礫を多量含む 直径0.5～1.5cmの地山ブロックを多量含む 1より僅かに赤みを帯びる
- 3 黒褐色シルト (10YR3/1) 小礫を少量含む 直径0.5～1.5cmの地山ブロックを少量含む 1よりやや色調が暗い

【溝 SD22028 (Fig.28)】

重複 SD22028 → SD22026, P'192.

平面・規模 上部を現代の掘削によって削平され、更に後出する SD22026 によって埋没するため、本来の形状を留めるものではない。更に北部は P'192 によって切られる。SD22026 底面からの深さは 0.05 m である。

遺物 縄文土器深鉢 (11) が出土した (Fig.29)。

縄文土器深鉢 (11) 凸帯文土器である。口縁部端部が剥落しているが、口縁部端部からやや下がった位置に素文凸帯が貼り付けられる。

時期・性格 11 は縄文時代晩期後半に帰属する。なお、細片資料であるが、先行する SD220026 からも凸帯を施された縄文土器深鉢が出土しており、ほぼ同時期に比定し得る。共に溝として捉えてはいるものの、周囲の掘削の影響が強く、全容は不明である。

【平地式住居 SX22014 (Fig.30)】

構成 P'55・56・59・65?・66・80・91・102・106・710・711・712 (76?)・713。

重複 P'66 → P'63。

平面・規模 ビット群が概ね等間隔に並びながら、楕円形状にまとまるため、建物の可能性を想定した。建物範囲は南北 6.7 m、東西 5.0 m に広がる。主軸方向は N-3°-E と正方位に近い。柱間はほぼ 1.2 m 前後に収まるが、一部 2.0 m に達する箇所もある。構成するビットは 12 基を数えるが、周囲の掘削の影響のために未検出である

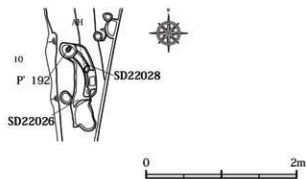


Fig.28 SD22028 平面 (S=1/50)

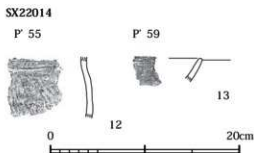


Fig.29 SK22009・30・SD22028・SX22014 出土遺物 (S=1/4)

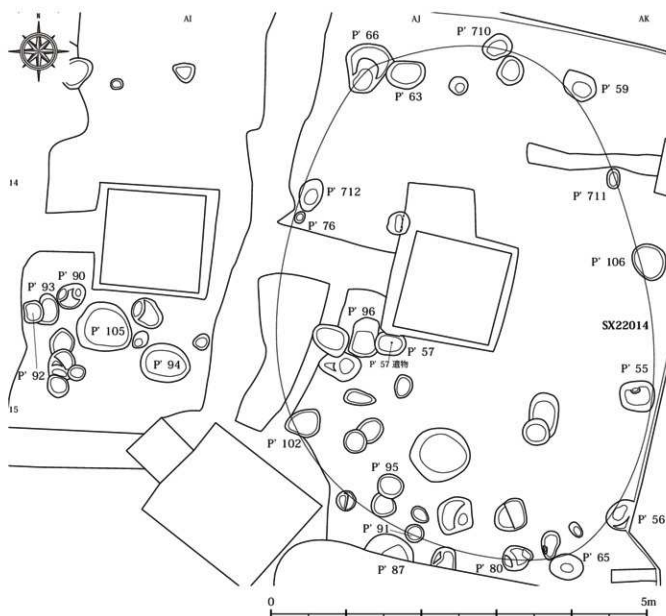


Fig.30 SX22014・P'57・94 平面 (S=1/50)

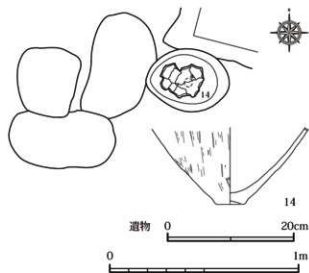


Fig.31 P'57 遺物出土状況 (S=1/20 遺物：S=1/6)

ものの、P'102とP'712の間にもう1基存在すると見られ、またP'65も加わる可能性がある。ピットは全て円形状で、直径0.35～0.65mを計測し、検出面からの深さは0.1～0.3mに落ち着くが、P'710のみ0.05mと浅い。

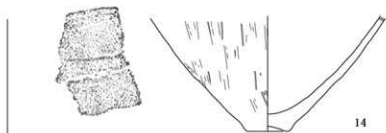
**遺物** P'55から縄文土器深鉢(12)、P'59から縄文土器深鉢(13)が出土した(Fig.29)。図化資料ではないが、P'56・65・66・91・102・106からも縄文土器片が出ている。

**縄文土器深鉢(12・13)** 共に内外面をケズリによって調整される。12は頸部に剥落しているが、上方は口縁部に向けてやや外反傾向を示す。

**時期・性格** ピットが整然と配置され、これらから縄文土器が出土することから、平地式住居の可能性を考えた。当該調査区内において唯一の検出となるが、平地式住居



P' 57



P' 94

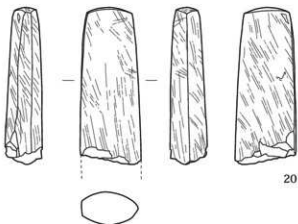
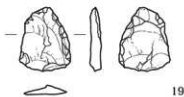
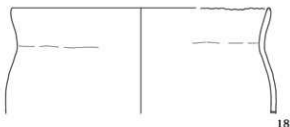


Fig.32 P'57・94 出土遺物 (S=1/4 石器:S=2/3)

となれば、非常に貴重な事例となる。住居内部のほぼ中央部は現代の攪乱によって失われている。12・13は縄文土器晩期前半に帰属すると考えられる。また、P'66に後出するP'63からはほぼ同時期に比定し得る縄文土器深鉢(38)が出ている。SX22014が存在する2区北部は縄文時代の遺構密度が高く、特に遊置里式の段階に位置付けられるものが殆どである。SX22014の内部には縄文時代晩期前半のP'57が、すぐ南側にも同時期のP'87がある。また、後述するが、西側においてもP'90・

93・94・105から縄文時代晩期前半の遺物が出土しており、その関連性が注目される。

【ビットP'57 (Fig.30)】

重複 P'57→P'96。

平面・規模 直径0.4mを測り、円形状を呈する。北部は現代の攪乱により失われている。検出面からの深さは0.1mである。

遺物 縄文土器深鉢(14)が出土した(Fig.32)。

縄文土器深鉢(14) 底部の完形資料である。底部はや

や上げ底である。外面はケズリ調整され、内面にはナデが施される。

**時期・性格** 14は縄文時代晩期前半の遊里式の段階に位置付けられる。P57のほぼ中央部において、上を向けて据え置かれるように出土した (Fig.31)。P57に後出するP96からは、時期を特定できる遺物の出土がない。

#### 【ピットP94 (Fig.30)】

重複 なし。

**平面・規模** 長軸0.65 m、短軸0.5 mを測る楕円形状のピットである。検出面からの深さは0.35 mである。

**遺物** 縄文土器深鉢 (15～18)、石鏝 (19)、石刀 (20) が出土した (Fig.32)。

**縄文土器深鉢 (15～18)** 全て胎土には金雲母を包含する。15は口縁部が強く外反する。16は粘土紐の接合部を境に口縁部下方が剥落する。17は口縁部が外反し、端部を丸く収める。18は口縁～頸部が良好に遺存する資料で、頸部は緩やかに湾曲する。口縁部上端にはキザミを有しており、キザミは工具による小波状をなす。

**石鏝 (19)** サヌカイト製品で、肉眼観察では金山産であることが分かる。完形資料であるが、未完成品の可能性も考えられる。両面に素材面を残す。

**石刀 (20)** 緑色片岩製の直刀形で、よく研磨されている。基部のみ遺存しているが、被熱後に欠損したものと考えられる。なお、第1次調査では、縄文時代晩期前半の石刀が弥生時代後期の方形周溝墓から出土している。溝の縁辺に長軸を揃えた特徴的な出土状況を示しており、非常に興味深い。三帯の文様帯を有するほぼ完形品であり、平成23年3月15日付けで鈴鹿市指定文化財に指定されている。

**時期・性格** 出土遺物の特徴から、縄文時代晩期前半の所産であると考えられる。建物等を構成するものではない単独のピットであるが、石刀を含む該当期の良好な資料を得ることができた。同時期の建物状遺構であるSX22014とは約1.2 m隔絶する。

#### 【縄文時代の遺構出土遺物】

前に触れた遺構以外にも、縄文時代の土器が多数出土した遺構が存在する (Fig.10)。ここでは、掘立柱建物等にまとまるものではないが、遺構 (ピット) から単独で出土した縄文土器及び該当期の石器を中心に順に記述する (Fig.33・34)。

**縄文土器深鉢 (21～29・31～41・43・44・46～48)** 21は体部下方向の資料で厚手である。22は口縁部上端に工具による小波状のキザミをもつ。直径0.4mm程度の隙を含み、金雲母を多量に包含する。25は底部が剥落する。体部はほぼ直線的に外反する。26は口縁部が

外反し、金雲母を多量に含む。内面は横方向の条痕で調整される。27は内面に煤が付着する。天地を逆にしている可能性もある。29は内面に条痕が施されるが、二枚貝で調整した後に巻貝による施文の意匠が観察できる。31・32は口縁部上端にキザミを有しており、工具の使用によって小波状を呈する。32は外面に横位の条痕で調整される。33は金雲母を多量に包含し、口縁部端部が外方へ揃み出される。口縁部端部からやや下げて凸帯文が貼り付けられ、凸帯上には指頭による長大なキザミが施される。粘土紐の接合痕の観察が容易で、外傾接合であることが分かる。35は粘土紐の接合痕が2箇所観察でき、共に外傾接合である。37は口縁部上端に小波状のキザミを有し、口縁部端部から下がった位置に凸帯が施文される。凸帯文は高く明瞭であり、貝殻によるキザミが施される。39は口縁部が外反し、口縁部端部に素文凸帯が貼り付けられる。40・41は多量の金雲母を包含する。43は金雲母を多量に含む。外面の条痕は、口縁部には二枚貝を使用して横位であるのに対し、体部は縦方向に、そして目の細かい異なる工具を用いている点に特徴がある。44・46・47は金雲母を多量に包含する。44は口縁部端部が剥落し、46はやや上げ底である。

**縄文土器鉢 (30)** 黒色磨研土器で、横位のミガキが密に施される。計測不能であるが、口径は非常に大きい。口縁部の外方への開きが強く、深鉢か浅鉢になるか判別できない。体部に向けて屈曲が強い。

**石鏝 (42・50)** 共にサヌカイト製品である。肉眼観察では、50は二上山産であると推定される。42は先端部、50は逆刺部を欠く。

**剥片 (45)** サヌカイト製で二上山産と推定される。主要剥離面に微細剥離が観察できるが、背面は疎らである。**石鏝 (49)** 二上山産のサヌカイト製品であると推定できる。基部を欠損する。

上記の殆どの遺物が縄文時代晩期前半に位置付けられるが、凸帯文土器である37・39は縄文時代晩期後半の所産である。そして、33は弥生時代前期の垂式遠賀川土器の前段階に相当する資料である。

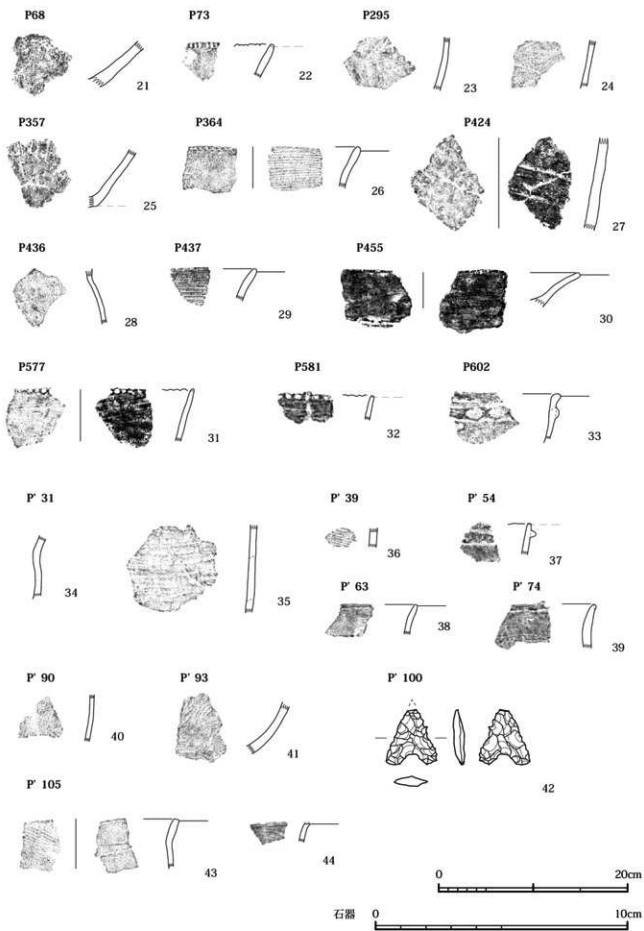


Fig.33 縄文時代の遺構出土遺物 1 (S=1/4 石器：S=2/3)

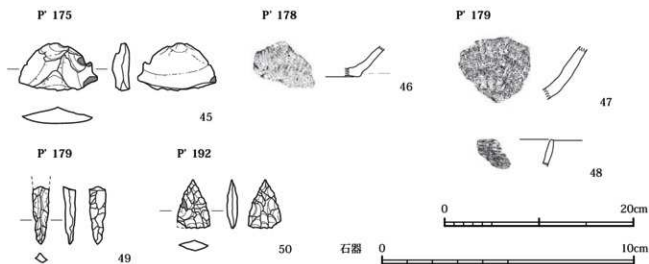


Fig.34 縄文時代の遺構出土遺物 2 (S=1/4 石器:S=2/3)

## 2 弥生・古墳時代の遺構 (Fig.35)

弥生～古墳時代と題して一括して扱うが、実際は弥生時代後期後半の山中式期から古墳時代初頭の廻間式期の遺構が大部分を占め、特に廻間Ⅰ式期の資料が中心となる。ここでは八王子古宮～山中式期を弥生時代後期、廻間Ⅰ～Ⅱ式期を古墳時代初頭、廻間Ⅲ式期を古墳時代前期として取り扱うことにする。なお、遺物の表記については明確に区分けできないものも多数存在し、また混同を避けるべく、廻間式期以前の時期に比定でき得るものは一括して弥生土器とする。この時期の遺構は第19次調査区を中心とし、ほぼ全域に万遍なく分布する。

### 【竪穴住居SH19001 (Fig.36・37)】

区別 北西～南東。

重複 P175 → SH19001 → SD19006, P183。

平面・規模 東西5.6 m, 南北5.0 mを測る。方形で床面積は24.4㎡である。主軸方向はW29°-Nを向く。

壁・周壁溝 南東コーナーは一部攪乱され、SD19006と重複する南東部のプランはやや不整である。検出面から床面までの深さは北壁で0.1 m, 南壁で0.05 mと非常に浅い。周壁溝は幅0.1～0.25 m, 床面からの深さ0.01～0.05 mを測る。壁治いはほぼ一周するが、南西コーナー付近で部分的に途切れる。

貼床 床面の全面に貼床を検出した。貼床は粘質の強い黒褐色土と地山を混ぜた土によって施され、その厚さは南西・北東・南東部で0.06 mであるのに対し、北西部では0.09 cmとやや厚い。

主柱穴 P184・186～188。直径0.25～0.5 m, 床面からの深さ0.15～0.3 mの円形状を呈し、SH19001の平面形と同様の形に配される。南東部主柱穴であるP187のみ底面に礎が埋設されていた。

土坑 南辺の中央からやや西寄りの位置にあり、長軸0.

75 m, 短軸0.7 mを測る。周壁溝と一体化し、周壁溝底面から0.24 m下がる。

屋外溝 付帯なし。

火処 地床炉が付帯する可能性が考えられるが、想定箇所の床面中央部が後世の攪乱を受けて完全に失われており、確認することができない。

遺物 弥生土器甕 (51)・壺 (52・55)・高坏 (53・54) が出土した (Fig.38)。なお、SH19001 北東部において、土師器壺 (56)・土師器鍋 (57・58) の混入を確認した。

弥生土器甕 (51) 受け口裏で口縁部端部の立ち上がりは明瞭で、やや内湾傾向である。口縁部外面に刺突文が施文されるが、磨滅のために痕跡を留めるのみである。弥生土器壺 (52・55) 52は口縁部一部を残す資料である。磨滅の影響を受けているものの、外面は本来、密にタテヘラミガキ調整が施されていたものと考えられる。55は口縁部端部の垂下が弱く、口縁部外面には凹みを有する。

弥生土器高坏 (53・54) 共に有稜高坏で、53は坏部上段が脱落している。54は坏部上下段の接合方法の観察が可能で、内外面をタテヘラミガキ調整される。

土師器壺 (56) 小型の壺で口縁部のほぼ完形資料である。口縁部の外反が強い。

土師器鍋 (57・58) 共に南伊勢系の鍋で、口縁部端部の折り返しがやや厚手である。57は小型である。58の口縁部は短い。

時期・性格 中世のSD19006に先行する。前後するP175・183からは帰属時期を特定する遺物の出土がない。51・54は古墳時代初頭の廻間Ⅰ式期に帰属するものと考えられる。混入遺物である56は、5世紀前半の松河戸Ⅱ式に属する可能性が考えられる。混入遺物であ



Fig.35 弥生・古墳時代の主要遺構配置図 (S=1/500)

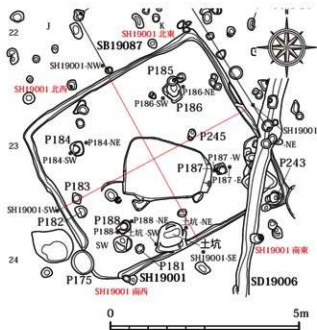


Fig.36 SH19001 平面 (S=1/100)

る 57・58 は、伊藤裕偉氏による土器器類編年（以下、伊藤編年と呼称）の第 1 段階に比定でき、その年代観は 12 世紀後半～13 世紀前半に求められる。中世の区画範囲内に位置することから、関連性が強く想定される。

【竪穴住居 SH19012 (Fig.39・40)】

重複 SH19012 → SH19057, SD19023, SX19056.P777・509。

平面・規模 東西 5.9m, 南北 5.6m を測る。方形のプランで、床面積は 28.6㎡程度である。全体的に掘削の影響が強く、また重複する SH19057 に大部分を切られている。主軸方向は W-42°-N を向く。

壁・周壁溝 SH19057 によって北東・南東コーナーは削平される。SH19057 の床面において周壁溝下部が埋没する様相を呈している。周壁溝は幅 0.15～0.3m を測り、SH19057 の床面から 0.05m 下がる。北西コーナーで一部西辺が途切れる。

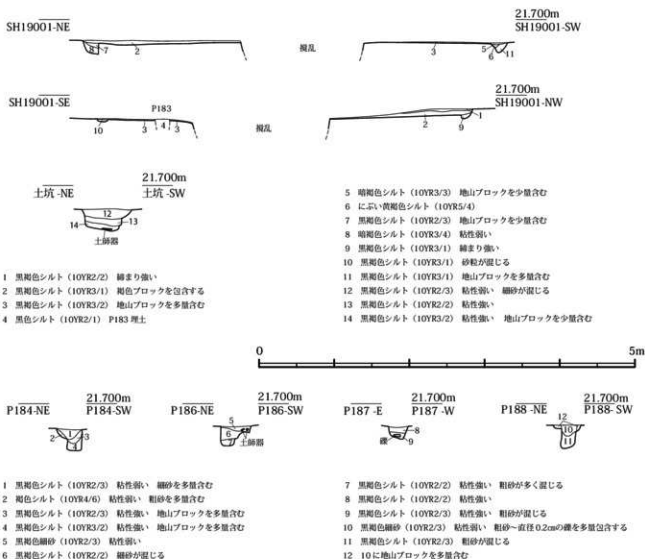


Fig.37 SH19001 土層断面 (S=1/50)



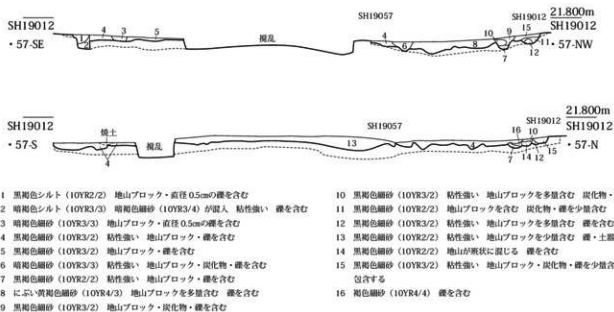


Fig.40 SH19012・57 土層断面 (S=1/50)

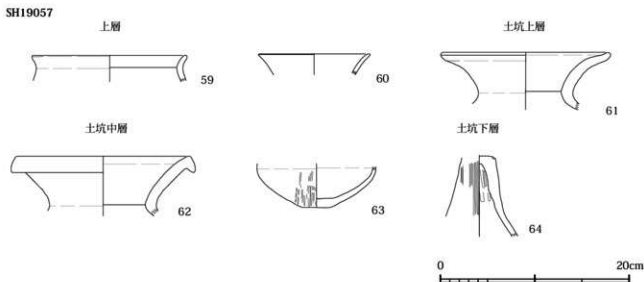


Fig.41 SH19057 出土遺物 (S=1/4)



### 【竪穴住居 SH19057 (Fig.39・40)】

区割 TP1～6。

重複 P508→SH19012→SH19057→SD19023, SX19056。

平面・規模 北西・南西コーナーの検出には至らなかったため、東西方向及び床面積等の規模は不明である。また、北辺を基準にすると、南辺がやや不整で外側に開く。南辺東部における計測では、南北方向は約6.2mになり、主軸はN-43°-E方向を向く。後世の遺構や擾乱によって削平されている箇所が多い。

壁・周壁溝 北東・南東コーナーを検出したが、西辺は未検出である。検出面から床面までの深さは北壁で0.07m、南壁で0.04mと浅い。周壁溝は0.1～0.3mを測り、床面からの深さは0.05～0.1mを計測する。

貼床 床面のほぼ全面に確認でき、黒褐色土と地山の混在土が用いられている。貼床の厚さは全体的に0.03～0.04mとほぼ均一である。

主柱穴 SH19057の全形が特定できないため、確実には言えない。北東部主柱穴のP518を確認すると、それと対になる北西部主柱穴は、北辺及び南辺の傾きに合わせてP534・726の可能性が考えられる。円形状の掘り方で、直径0.15～0.45m、床面からの深さ0.1～0.4mを測る。

土坑 周壁溝南辺と接して存在する。南北1.0mを測り、西半を擾乱されているため、東西方向の全体の規模は不明であるが、0.58mを検出した。周壁溝底面から0.43m掘り込まれる。南部はややテラス状に段掘りされ、この箇所の周壁溝底面からの深さは0.06mを測る。

屋外溝 周壁溝南辺が土坑と繋がった後、やや南方向へ軸を変えて屋外へ延びる様相を確認した。擾乱の影響で周壁溝の土坑以西の状況は不明であるが、屋外溝が付帯する可能性は高いものと考えられる。屋外溝の幅は0.15mを測り、周囲の検出面からの深さは0.08mである。SH19057屋外の南西方向へ1.4m走るが、擾乱によってその延長は確認できない。

火処 付帯なし。

遺物 弥生土器(59)・壺(60～63)・高環(64)が出土した(Fig.41)。

弥生土器(59) く字裏で、内外面をヨコナデ調整される。

弥生土器(60～63) 60は非常に薄手に作られ、磨滅のために調整が不明瞭である。61は口縁部端部を丸く取って面をもたず、口縁部内面には凹みを有する。62は口縁部端部の垂下が強い。63は小型で精緻な作りであり、外面のタテハラミガキは底部近くにまで及ぶ。体部最大径は下方に位置しよう。

弥生土器高環(64) 土坑下層からの出土品で、脚部は下方へ向けて強く外反する。

時期・性格 下面には縄文時代のP508やほぼ同時期と見られるSH19012が埋没する。そして、中世のSD19023に先行する。出土遺物はあまり多くないが、廻間1式期の段階に相当するものと考えられる。

### 【竪穴住居 SH19014 (Fig.42・43)】

重複 SH19053→SH19014→ピット(遺物なし)。

平面・規模 東西5.5m、南北5.1mを測り、方形の竪穴住居である。床面積は23.5㎡を計測する。主軸方向はW-2°-Nとほぼ正方位を示す。

壁・周壁溝 検出面から床面までの深さは北・南壁共に0.04mを測る。南辺が一部擾乱される。周壁溝は幅0.2～0.25mを測り、床面からの深さは0.08～0.13mである。壁に沿いながら一周する

貼床 床面のほぼ全面に貼床が施されている状況を確認した。また、西部で一部、地山ブロックを多く含む埋土7が集中的に堆積する状況を観察した。南北1.5m、東西0.7mの範囲内において、床面から0.15m落ち込む様相である。何らかの事情による地山の陥没に対し、厚く貼られている状況が窺われる。SH19014床面には黒褐色土と地山の混入土である埋土7が広く存在し、床面の凹部に合わせて数cm程度貼られたことが分かる。

主柱穴 P366・394(704?)・431・432。直径0.2～0.3m、床面からの深さ0.25～0.48mを測る。全て円形状である。形状及び埋土の様相からP366・394・431・432を主柱穴と考えたが、北西部のP394がやや北方向に外れるため、平面形を意識するとP704が妥当であるかもしれない。P704は直径0.2mを測り、床面から0.42m掘り込まれる。

土坑 南辺中央部やや西寄りの箇所に位置にし、長軸0.9m、短軸0.65mを測る。周壁溝と一体化し、周壁溝底面から0.13m下がる。弥生土器壺・壺・高環等が比較的まとまって出土している(Fig.45)。

屋外溝 付帯なし。

火処 床面中央部を中心に焼土を3箇所検出した。全て円形状の掘り込みとして遺存する。焼土1・2は直径0.4m、焼土3は直径0.25mを測り、床面からの深さは0.05～0.1mである。何れも僅かな掘り込みと焼土の硬化面を検出した。地床がの可能性があると考えられ、造り替えられたのであろうか。

遺物 弥生土器(65～71)・壺(73)・高環(74)・鉢(72)が出土した(Fig.46)。土坑からの出土品が中心となる。弥生土器(65～71) 65・66・68・69は受け口裏である。65の口縁部端部の立ち上がりは明瞭で、ほぼ直立する。66は口縁部上端に明瞭な面を有し、口縁部

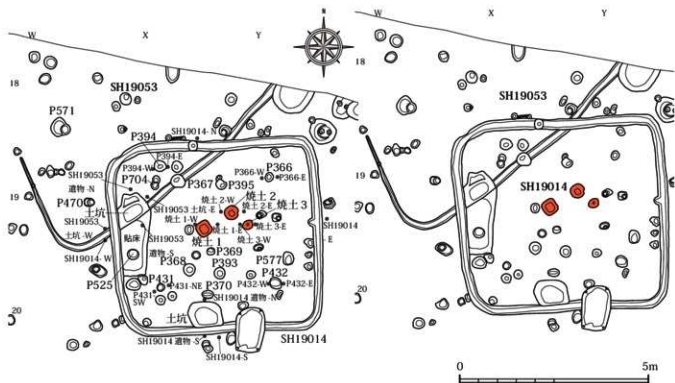


Fig.42 SH19014・53 平面 (S=1/100)

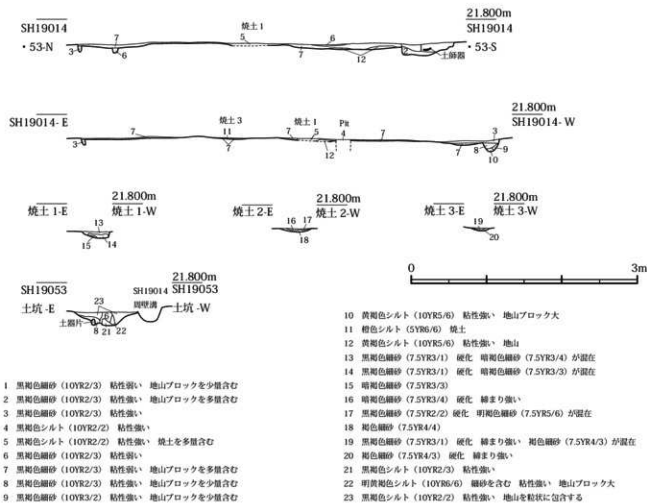
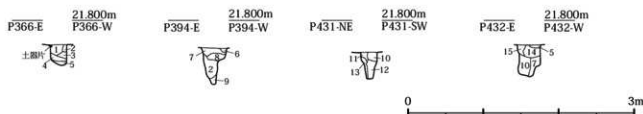


Fig.43 SH19014 土層断面 (S=1/50)

- 1 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い 地山ブロックを少量含む
- 2 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い 地山ブロックを多量含む
- 3 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い
- 4 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い
- 5 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 焼土を多量含む
- 6 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い
- 7 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い 地山ブロックを多量含む
- 8 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い 地山ブロックを少量含む
- 9 黒褐色細砂 (10YR3/2) 粘性強い 地山ブロックを少量含む

- 10 黄褐色シルト (10YR5/6) 粘性強い 地山ブロック大
- 11 棕色シルト (5YR6/6) 焼土
- 12 黄褐色シルト (10YR5/6) 粘性強い 地山
- 13 黒褐色細砂 (7.5YR3/1) 硬化 暗褐色細砂 (7.5YR3/4) が混在
- 14 黒褐色細砂 (7.5YR3/1) 硬化 暗褐色細砂 (7.5YR3/3) が混在
- 15 暗褐色細砂 (7.5YR3/3)
- 16 暗褐色細砂 (7.5YR3/4) 硬化 締まり強い
- 17 黒褐色細砂 (7.5YR2/2) 硬化 明褐色細砂 (7.5YR5/6) が混在
- 18 褐色細砂 (7.5YR4/4)
- 19 黒褐色細砂 (7.5YR3/1) 硬化 締まり強い 褐色細砂 (7.5YR4/3) が混在
- 20 褐色細砂 (7.5YR4/3) 硬化 締まり強い
- 21 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い
- 22 明黄褐色シルト (10YR6/6) 細砂を含む 粘性強い 地山ブロック大
- 23 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 地山を粘状に包含する



- 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを少量含む
- 2 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロックを多量含む 礫を含む
- 3 黒褐色シルト (10YR3/1) 地山が塊状に混じる
- 4 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い 地山ブロックを含む
- 5 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロックを多量含む
- 6 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロックを少量含む
- 7 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロックを多量含む
- 8 黒褐色シルト (10YR3/1) 地山ブロックを多量含む 礫を少量含む

- 9 黒褐色シルト (10YR3/2) 細砂を含む 地山ブロックを含む
- 10 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山が塊状に混じる
- 11 黒褐色シルト (10YR3/1) 粘性強い 地山ブロックを多量含む
- 12 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを多量含む
- 13 黒褐色シルト (10YR3/1) 地山ブロックを多量含む
- 14 黒色シルト (10YR2/1) 粘性弱い 地山が塊状に混じる 礫を少量含む
- 15 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山が塊状に混じる 礫を少量含む

Fig.44 SH19053 土層断面 (S=1/50)

端部はやや内側へ突出する。口縁部外面は被熱によって黒変している。68・69は薄手に作られ、68の口縁部端部の立ち上がりは弱く、僅かに内湾傾向を示す。69は口縁部外面に刺突文が施文され、口縁部端部の立ち上がりはやや外反する。67は台部で底部端部を丸く取る。外面はタテハケ調整が行われる。70は小型の甕で、体部は緩やかな丸みを帯びる。71はくの字甕で、内外面のハケ調整は磨滅のために不鮮明である。

**弥生土器壺 (73)** 底部の完形資料で、底部中央部がドーナツ状に上げ底される。

**弥生土器高坏 (74)** 外面にはタテヘラミガキ調整が観察でき、ハの字状に開脚する。

**弥生土器鉢 (72)** 小型で頸部の屈曲は弱い。口径が体部最大径を凌駕する。口縁部端部はやや内湾する。

**時期・性格** 古墳時代初頭のSH19053に後出するが、出土遺物を見ると時期差は大きくないものと考えられる。同じく同時期に比定できるSH19015との距離は2.8mと比較的近接する。

**【竪穴住居 SH19053 (Fig.42・44)】**

**重複** SH19053→SH19014, P367・559, ビット (遺物なし)。

**平面・規模** 南西コーナーと西・南辺の一部のみを検出した程度で、全体の規模は不明である。東部は既存建物によって攪乱されるため、広がりとは特定できない。方形の竪穴住居であると思われ、主軸方向は概ねW-24°-Nを向こう。検出範囲は東西7.0m、南北3.0mと東西方向に長大である。

**壁・周壁溝** SH19014によって削平されており、壁立ちはなく、周壁溝のみの確認に留まる。周壁溝は幅0.07～0.2m、床面からの深さ0.05mを測る。南辺の大部分はSH19014床面で埋没する。

**貼床** 付帯なし。

主柱穴 周壁溝内部で複数基のビットを検出したが、SH19053の規模及び範囲が不明であるため、不確定である。P470が南西部主柱穴になろうか。P470は直径0.2mの円形状を呈し、床面からの深さは0.35mを測る。土坑 南辺西部に所在する。SH19014によって西部を削平されているため、検出範囲は東西0.8m、南北0.75mである。周壁溝と一体化しながら、周壁溝底面から0.12m下がる。弥生土器甕が出土している。

**屋外溝** 付帯なし。

**火処** 付帯なし。

**遺物** 弥生土器甕 (75～77) が出土した (Fig.46)。

**弥生土器甕 (75～77)** 全て台部の完形品である。75は薄手の作りであり、外面にはタテヘラミガキ調整が密に施される。底部端部は内湾する。76・77は底部端部の平坦面が明瞭に認められる。内面天井部が下方へ突出し、粘土を上部から円盤充填させる製作方法が認められる。76の内面はクモの巣状に密にハケ調整される。

**時期・性格** 75は廻間I式期に帰属するものと考えられる。後出するSH19014とはほぼ同時期に位置付けられよう。SH19053を切るP367・559からは時期を特定できる遺物が出ていない。付帯する土坑からは台付甕の台部のみが3個体、重なり合うように出土している点特徴的である (Fig.47)。台部以外の出土はなく、非常に興味深い。

**【竪穴住居 SH19015 (Fig.48・50)】**

**区割** 北西→南東。

**重複** P412・438・570→SH19015→P330・342・406～408 (SB19095)・474・537。

**平面・規模** 南北5.5mを測る。東辺の大部分は攪乱されているため不明であるが、東西方向は6.2mまで広がり、床面積は29.6㎡程度になると推測される。主軸はW-37°-N方向に向ける。

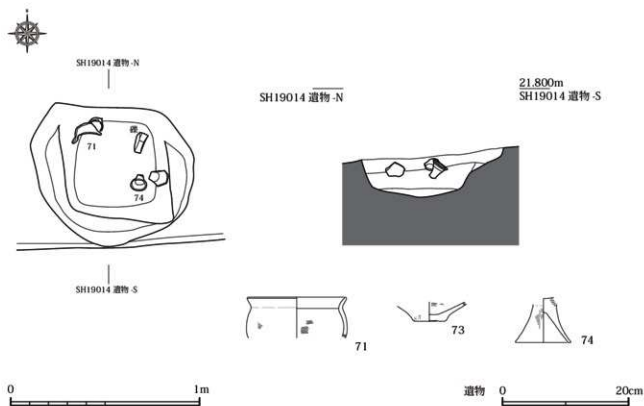
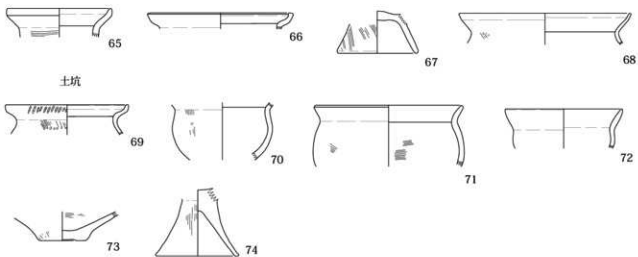


Fig.45 SH19014 遺物出土狀況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)

SH19014

北東

土坑



SH19053

土坑



Fig.46 SH19014・53 出土遺物 (S=1/4)



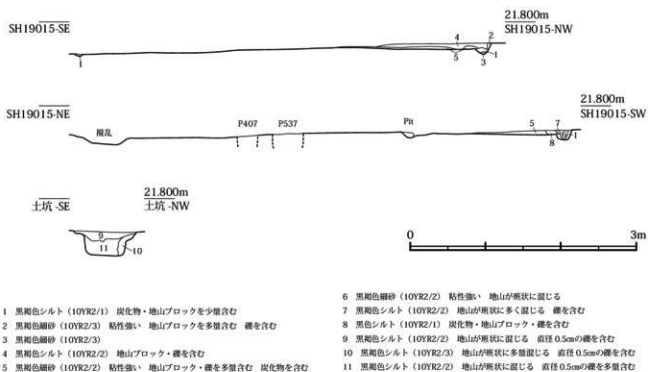


Fig.50 SH19015 土層断面 (S=1/50)

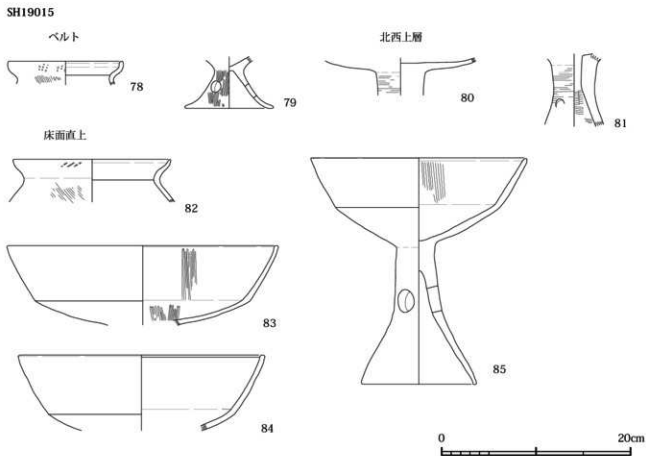


Fig.51 SH19015 出土遺物 (S=1/4)

壁・周壁溝 検出面から床面までの深さは北壁で0.05 m、南壁で0.02 mを測る。周壁溝は南辺中央部付近で薄く途切れ、西辺のP474重複部付近でやや不整となる。周壁溝の幅は0.15～0.3 m、床面からの深さは0.03～0.1 mを計測する。

貼床 床面の全面に貼床を検出した。貼床には黒褐色土と地山の混入土が用いられ、粘質性が非常に高い。当該混入土が床面全面に厚く、染み状に広がる様相を呈したため、竪穴住居の内部施設の検出には大変難航した。その厚さは南部で0.08 mであるのに対し、北部では0.12～0.15 cmとやや厚い。他の竪穴住居に比べて厚く施される点に特徴がある。

主柱穴 P411。北東部主柱穴は攪乱によって失しているものと見られる。床面を幾度か亘って慎重に検出したものの、西部の主柱穴の確認には至らなかった。P411は長軸0.3 m、短軸0.15 mの楕円形状で、床面から0.12 m掘り込まれる。

土坑 南辺中央部やや西寄りの位置にあり、長軸0.9 m、短軸0.8 mの円形状を呈する。周壁溝と繋がって一体となるものと見られる。西部が段掘りされており、中段となるテラス状の箇所は周壁溝底面より0.05 m低く、土坑底面はそこから更に0.25 m掘り込まれる。

屋外溝 付帯なし。

火処 付帯なし。

遺物 弥生土器甕(78・82)・高坏(79～81・83～85)が出土した(Fig.51)。

弥生土器甕(78・82) 共に受け口甕で、口縁部外面には刺突文が施文される。78の口縁部端部の立ち上がりは直立し、口縁部上端には内傾面を有する。頸部外面には一部煤が付着する。82の口縁部端部の立ち上がりは長く、緩やかに外方へ開く。

弥生土器高坏(79～81・83～85) 79は椀形高坏の脚部で、3方に円孔が穿かれる。脚部はハの字状に大きく外反し、外面は密にタテヘラミガキ調整される。80・81は外面に櫛形直線文が施され、坏部との接合部は円盤充填される。81は底部端部へ向けて内傾傾向である。83～85は有稜高坏で、稜が僅かに観察できる。84は胎土に直径0.3～0.5 cmの礫を包含する。85はほぼ完形に復元された。坏部上段は直線的に外反し、内面にはタテヘラミガキ調整が見受けられる。脚部は円形透孔を3方向有し、底部端部は内湾する。

時期・性格 縄文時代のP412・438・570に後出し、古代のP342・SB19095に先行する。他の重複遺構からは時期を掴める遺物の出土はなかった。北西部の床面直上からは、弥生土器甕・高坏が良好に出土し、時期決定の決め手となった(Fig.49)。82～85は古墳時代初頭

の廻間1式1段階に帰属する。

【竪穴住居SH19018(Fig.52～54)】

区割 TP1～4。

重複 SK19120, P649・662・681・687→SH19018  
→SX19017, SK19126, P675・677・682・690・692。

平面・規模 東西5.8 m、南北5.3 mを測り、方形の竪穴住居である。床面積は26.0㎡を計測する。主軸方向はW-30°Nである。

壁・周壁溝 検出面から床面までの深さは北壁で0.02 m、南壁で0.06 mを測る。周壁溝は幅0.2 m、床面からの深さ0.05～0.1 mを計測する。北辺の一部がSX19017・P682に切られるが、本来は壁沿いを一周するものと思われる。

貼床 床面の全面に貼られる。黒褐色土と地山を混入された粘質土を貼床としている。なお、床面北東部のSK19125及び南東部のSX19121については、土坑状の落ち込みに対し、黒褐色土と地山の混入土が単層で堆積しており、SH19014と同様、貼床の痕跡であると考えられる。SK19125は長軸0.9 m、短軸0.5 mを測り、床面からの深さは0.05 mを計測する。SX19121はSK19125より広範で、長軸2.5 m、短軸1.0 mの不整形形状を呈し、床面から0.12 m下がる。共に何らかの事情で生じた床面の落ち込みを解消する意図が考えられる。

主柱穴 床面には非常に多数のピットが存在するため、大変茫漠としている。調査時点においては、主柱穴候補として複数基のピットの記録を取ったが、何れも見当が外れている可能性がある。竪穴住居の平面形を意識すると、やや位置を外すものもあるが、P644・648・684・705が主柱穴となる可能性が高いと判断される。これらのピットは全て円形で、直径0.2～0.4 m、床面からの深さ0.08～0.23 mを測る。

土坑 他の竪穴住居と同様、南辺のほぼ中央部に落ち込みを確認した。但し、本来の土坑の形は東部のみ残り、多数の掘り込みがピット状に重なり合う状況を検出した。掘り込みに対してはそれぞれピット番号を付与し、P666～674としたが、東西・南北共に1.4 m程度の範囲内において、これらが重複しながら連なる。最も深い土坑中央部のP667は、周壁溝底面から0.3 m下がる。

屋外溝 付帯なし。

火処 床面中央部は後出するSK19126で攪乱されているため不明であるが、西部に焼土を2箇所確認した。共に楕円形状の掘り込みが認められ、床面から0.02 mと僅かに下がる。焼土1は長軸0.6 m、短軸0.4 m、焼土2は長軸0.55 m、短軸0.2 mを測る。焼土1は焼土が

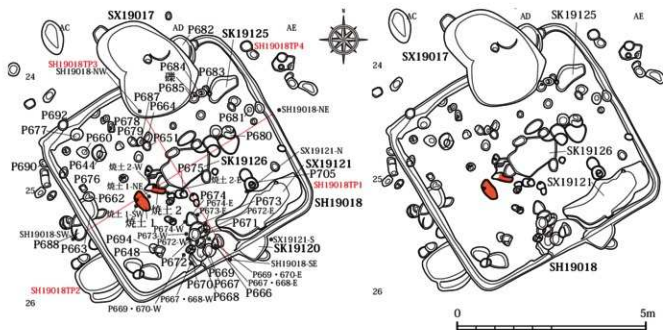


Fig.52 SH19018 平面 (S=1/100)

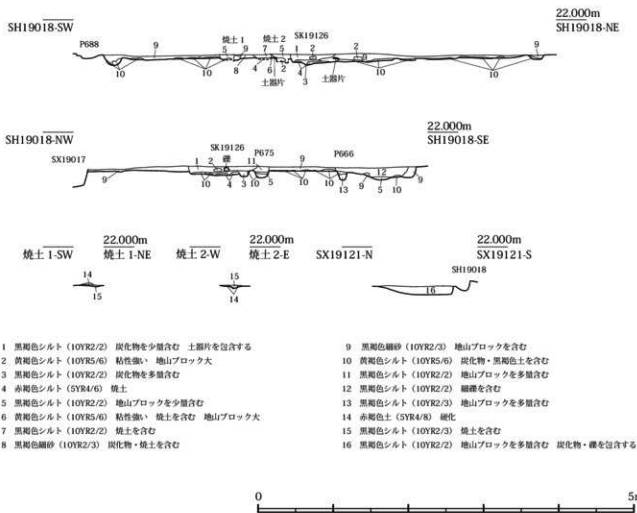


Fig.53 SH19018 土層断面 1 (S=1/50)



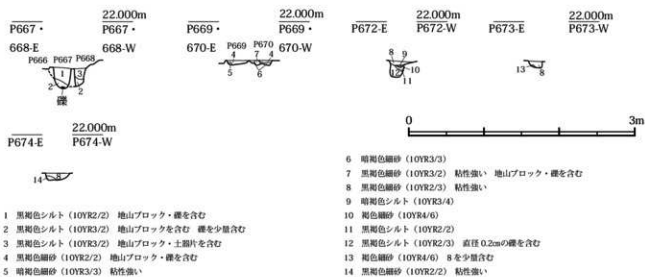


Fig.54 SH19018 土層断面 2 (S=1/50)

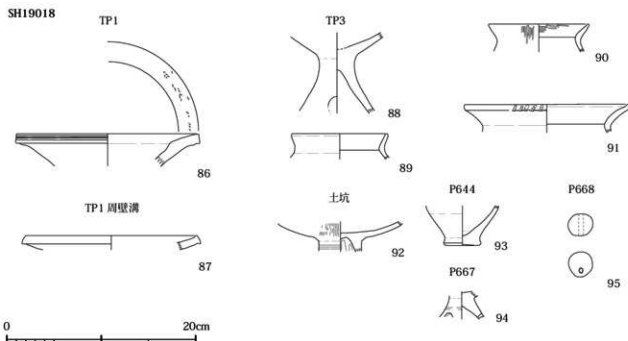


Fig.55 SH19018 出土遺物 (S=1/4)

硬化面として床面から0.02 m盛り上がった状態で検出された。地床炉であると考えられる。

**遺物** 弥生土器甕 (89～91)・甕 (86・87・93)・高坏 (88・92・94), 土鍾 (95) が出土した (Fig.55)。

**弥生土器甕 (89～91)** 全てくの字甕で、頸部の屈曲が強い。89の口縁部端部は内湾傾向を示す。90は小型土器である。内外面を丁寧にヘラミガキされ、精緻な作りである。91は口縁部端部を上方へ摘み上げ、口縁部外端面には刺突文が施される。刺突文の影響で、口縁部外端面下部が波状を呈する。

**弥生土器壺 (86・87・93)** 86は口縁部外端面が明瞭で、

掘凹線文が2条施される。口縁部内端面は2条の刺突羽状文で裝飾される。87は口縁部端部が肥厚し、僅かに垂下する。口縁部外端面に施文された凹線文は磨滅のために痕跡を残すのみである。93は小型の壺で僅かに上げ底される。磨滅によって、外面のタテヘラミガキ調整は不明瞭である。

**弥生土器高坏 (88・92・94)** 88・84はハの字状に開脚し、88は1方、94は3方に円形透孔が穿孔される。88は底部端部に向けて内湾指向である。94は脚部の開きが早い。92は脚部外面に柳描直線文が3条以上施され、坏部外面のタテヘラミガキ調整は磨滅している。

土鐘(95) 球形状を呈し、完形資料である。直径0.4 cmの円孔が貫通し、その断面は直線的である。穿孔位置は中心からやや外れる。

**時期・性格** 縄文時代のP649・662・681・687に後出し、古代のSK19017に先行する。他の重複遺構については、時期の絞り込みに繋がる遺物の出土はない。88・89は廻間Ⅰ式期の所産であると考えられる、また、91は山中式後期からの系譜で、廻間Ⅰ式1～2段階で終焉する資料である。

#### 【竪穴住居SH19034 (Fig.56・57)】

**重複** SH19034 = SK19033, SH19034 → SD19009, P20 (SB19084)・P129。

**平面・規模** 東西5.5 mを測り、主軸方向はW-23°-Nを示す。南半が完全に削平されているため、全体の規模は不明である。

**壁・周壁溝** 後世に整地された影響で、竪穴住居の壁立ちは見受けられない。周壁溝は北東コーナーのみ明瞭に遺存しているが、北西コーナーはやや不整で曲がりが多い。北辺は北西コーナー付近で部分的に途切れる。周壁溝の幅は0.15～0.3 m、床面からの深さは0.12 mを計測する。

**貼床** 付帯なし。

**主柱穴** P31・719。直径0.25～0.45 m、床面からの深さは0.16～0.36 mを測る。共に円形状である。P31の底面には直径0.2 mの礫が埋没する。SH19034は南半が削平されているため、南部主柱穴は特定できない。位置関係及び深さから、P24・192が候補として挙げられるが、P192からは古代の土師器甕(341)が出土しているため、適当ではない。

土坑 西辺中央部やや北寄りの位置には、SK19033が存在し、埋土色・質からも候補として有力である。長軸1.9 m、短軸1.05 mを測り、楕円形状を呈する。SH19034の周壁溝と繋がって一体化し、周壁溝底面から0.08 m下がる。但し、SK19033はSH19034屋外の西方向へ広がる。

**屋外溝** 付帯なし。

**火処** 付帯なし。

**遺物** P179から弥生土器甕(98)、SK19033から弥生土器高坏(96・97)が出土した(Fig.59)。

**弥生土器甕(98)** 胎土には雲母を多量包含する。非常に薄手に作られ、S字裏の台部になると思われる。

**弥生土器高坏(96・97)** 共に磨滅によって調整は不明瞭である。96はハの字状に脚部を開き、円孔を1箇所のみ残す。天井部内面には僅かな窪みが観察できるが、棒状工具による刺突の痕跡であると考えられる。

**時期・性格** 古代のSD19009、中世のSB19084に先行する。98はS字裏の台部であるが、96・97の出土と他の竪穴住居との関係から、概ね廻間Ⅰ式期の段階に比定できる。なお、SK19033はSH19034の屋外へ広がるが、例えばSH19057の土坑から溝が派生して屋外へ延びるように、同様の屋外溝的な機能を有するものと判断される。

#### 【溝SD19010 (Fig.56・58)】

**重複** P754 → SD19010。

**平面・規模** 幅0.5 m、検出面からの深さ0.4 mを測り、断面は逆台形に近い形状を呈する。調査区外西へ延びるため、全長は掴めないが、検出した長さは7.8 mである。土層観察用に設定したベルト付近で僅かに北方向に湾曲

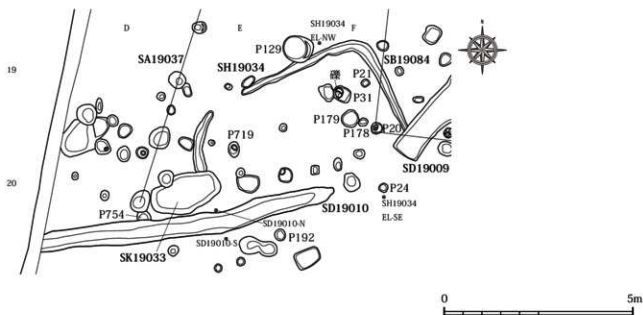


Fig.56 SH19034・SK19033・SD19010 平面 (S=1/100)

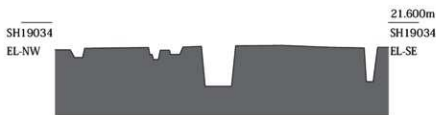
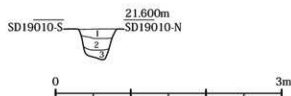


Fig.57 SH19034 断面 (S=1/50)



- 1 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い
- 2 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロックを多量含む
- 3 暗褐色シルト (10YR3/3) 細砂を含む

Fig.58 SD19010 土層断面 (S=1/50)

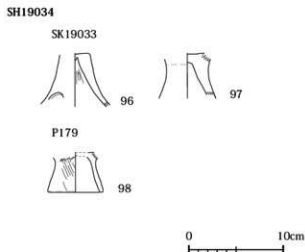


Fig.59 SH19034 出土遺物 (S=1/4)

するが、主軸方向は概ね W-10°-N を向けよう。しっかりと掘り方の溝であるものの、東部で忽然と途切れ、以東にはその痕跡を残さない。

**遺物** 弥生土器高坏等の細片資料が出土している程度であり、実測可能なものはなかった。

**時期・性格** 出土遺物の特徴から、概ね山中～廻間式の埋没が考えられる。位置的には SH19034 の内部を走ることになるが、新旧・関係性は不明である。なお、先行する P754 から遺物は出土していない。

**【竪穴住居 SH19058 (Fig.60・61)】**

**重複** SH19058 → SH19059, SX19103, P503・555・ピット (遺物なし)。

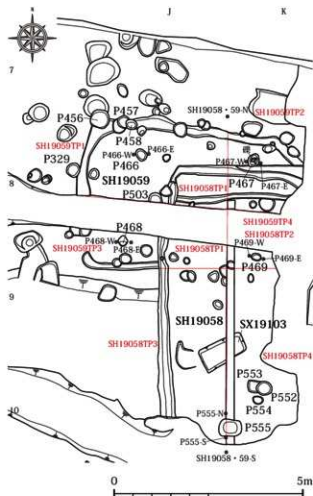


Fig.60 SH19058・59 平面 (S=1/100)

**平面・規模** 南部及び東部が面的に攪乱されているため、全体の規模は不明である。東西 3.8 m, 南北 7.4 m の範囲を検出した。主軸方向は正方位に近く、N-2°-E 程度を示すものと見られる。

**壁・周壁溝** 北部は SH19059 によって埋没し、南部及び東部は削平される。検出面から床面までの深さは西壁で 0.1 m を計測する。周壁溝は北西コーナーのみ遺存している。周壁溝の幅は 0.25 ~ 0.35 m, 床面からの深さは 0.05 ~ 0.1 m を測る。検出範囲における北辺東部のみ幅 0.4 ~ 0.5 m とやや幅広く掘削され、テラス状を呈する。床面から中段となるテラス状の箇所までの深さは 0.05 m である。北辺においては、周壁溝を二重に検出

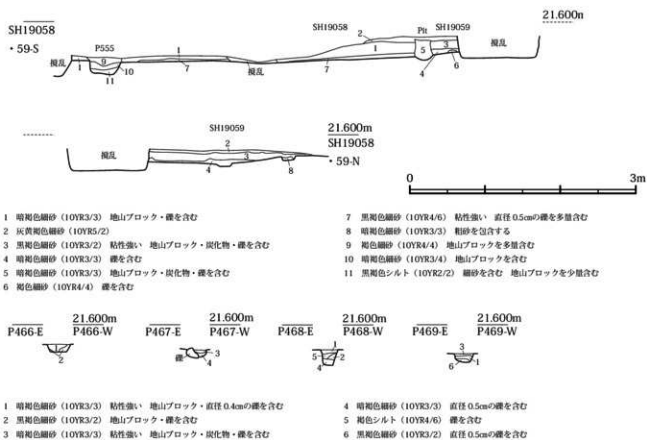


Fig.61 SH19058・59 土層断面 (S=1/50)

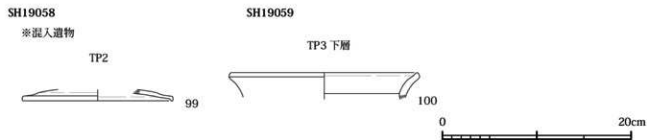


Fig.62 SH19058・59 出土遺物 (S=1/4)

した。内溝は幅0.15m、床面からの深さ0.02～0.03mとやや狭く浅い。

貼土 付帯なし。

主柱穴 床面には複数基のビットを検出したが、何れも床面からの深さ0.1m以下と浅く、全体の規模及び範囲が不明であるため、特定には至らなかった。北部が攪乱されるが、北西部主柱穴はこの箇所位置していた可能性も考えられる。

土坑 付帯なし。

屋外溝 付帯なし。

火処 付帯なし。

遺物 弥生土器片が出土したが、出土量も少なく、図化の対象となる遺物の出土はない。攪乱の影響と思われるが、須恵器環蓋 (99) の混入を確認した (Fig.62)。

須恵器環蓋 (99) 天井部及び宝珠摘みが剥落している。扁平な天井部を有するものとみられ、口縁部端部は内側へ強く屈曲する。

時期・性格 弥生時代後期～古墳時代初頭頃のSH19059に切られるが、その他の重複遺構からの有意な情報はない。また、時期の決め手となる出土遺物にも恵まれない。混入品である99は猿投窯編年のI25～MN32窯式の段階に位置付けられ、8世紀代の年代観である。なお、北辺が二重に回るが、これを同一箇所における竪穴住居の拡張であるとするならば、その拡張範囲は0.15mを計測する。SH19058は内部施設が西壁と周壁溝のみであるが、南北方向が7.4m以上に達し、竪穴住居であると仮定すると、大型のものとなる。

#### 【竪穴住居 SH19059 (Fig.60・61)】

重複 SH19058→SH19059→P329・456→458・ピット (遺物なし)。

平面・規模 南辺及び東辺の大部分が未検出であるため、全形は不明であるが、北辺東部がやや南方向へ湾曲しており、東辺の位置は概ね推測が可能となる。南北4.0mとやや小振りであるのに対し、東西方向は6.0m程度に達するものと見られる。床面積20㎡弱の長方形状を呈する竪穴住居になろう。主軸方向はW-8°-Sを指す。

壁・周壁溝 検出面から床面までの深さは北壁で0.05m、西壁で0.02mを測る。周壁溝は北西コーナーのみ遺存している。攪乱の影響で東辺を失し、西辺も部分的に削平される。幅0.2～0.4m、床面からの深さは0.03～0.06mを計測する。本来であれば先行するSH19059上面に南辺の延長が続くはずであるが、慎重に検出したものの、その確認には至らなかった。

貼床 付帯なし。

主柱穴 P466→469。全て円形状を呈し、直径0.25～0.3mとほぼ均一で、床面からの深さ0.1～0.2mを測る。北東部主柱穴のP467のみ、底面に礫が埋没されていた。礫の大きさは直径0.1m程度で、SH19059床面からの深さは0.12mを測る。

土坑 付帯なし。

屋外溝 付帯なし。

火処 付帯なし。

遺物 弥生土器甕(100)が出土した(Fig.62)。

弥生土器甕(100) 受け口甕である。口縁部端部の立ち上がりは緩やかに直立する。磨滅のために文様は剥落しているものと見られる。

時期・性格 他の竪穴住居との時期差は大きくないものと考えられるが、出土遺物が限定されるため、帰属時期の詳細を掴むことはできない。概ね弥生時代後期～古墳時代初期頃の竪穴住居であると考えたい。

#### 【竪穴住居 SH19060 (Fig.63・64)】

重複 SH19061, SK19082→SH19060→SD19007・130, SK19105, P109・516・529, ピット (遺物なし)。

平面・規模 東西・南北共に5.7mを測り、正方形の竪穴住居である。床面積は28.6㎡を計測する。主軸方向はW-21°-N方向を向く。

壁・周壁溝 検出面から床面までの深さは北壁で0.1mを測り、西壁で0.2mとやや壁立ちが明瞭である。南西・北東コーナー及び西辺の一部が攪乱されている。南辺はSD19007によって殆どを失われ、SD19007南壁にその一部が遺存しているが、P109に切れ、以東は痕跡を留めない。周壁溝は幅0.2～0.3m、床面からの深さ0.03～0.12mを測る。本来は壁沿いを全周するものと考え

られる。なお、東辺において、周壁溝を部分的に二重に検出し、内溝が外溝によって切られる状況を確認した。内溝は幅0.3m、床面からの深さ0.1mを測り、外溝の規模と大差はない。

貼床 付帯なし。

主柱穴 P152・568・727・728。全て円形状を呈し、直径0.2～0.6m、床面からの深さ0.12～0.2mを測る。形状及び埋土の様相からこれらを主柱穴と考えたが、SH19060の平面形を意識するとやや歪である。P515も候補に挙げられよう。P562は直径0.2mを測り、床面から0.15m下がる。

土坑 床面南部のやや西寄りに所在し、長軸0.7m、短軸0.6mを測る円形状の土坑である。周囲を含めた全体がSD19007によって埋没するが、SH19060の周壁溝南辺の想定ライン上に位置するものと考えられ、他の竪穴住居に付帯する土坑と同様の形状を示すものと考えられる。床面からの深さは0.5mで、部分的に遺存する周壁溝南辺からの深さは0.45mを測る。北部はテラス状に段掘りされ、底面から0.2m上がる。

屋外溝 付帯なし。

火処 付帯なし。

遺物 弥生土器甕(104・106～108・110～112・121・124・126)・壺(101～103・109・113～120・123)・高環(105・122・125・127)が出土した(Fig.66)。

なお、TP2上層には土師器皿(128)が混入している。また、後出するP516からは、弥生土器高環(129)が出土している。

弥生土器甕(104・106～108・110～112・121・124・126) 104・121はくの字甕である。頸部の屈曲は弱く、口縁部は端部に向けてやや内湾する。106・107・112・126は台部で、106・126は体部との接合部が上方から円盤充填される。107・112は底部端部に内湾傾向の意匠が観察できる。108は受け口甕で、口縁部端部の立ち上がりは短く、ほぼ直立する。口縁部端部は内傾面を有する。110・111はくの字甕で、口縁部端部を丸く収める。124はミニチュア土器の台部で、非常に薄手で丁寧に作られる。

弥生土器壺(101～103・109・113～120・123)

101は内外面をヨコナデ調整され、口縁部端部は明瞭に内湾する。102・103・118は底部で、全て上げ底されるが、103の上げ底は僅かに観察できる程度である。109は体部上半と底部を欠く資料であるが、体部最大径は中位になろう。113・120は小型の壺の底部である。114～116は全てTP2上層から出土した口縁部の資料で、114は口縁部端部がやや垂下して外端面を形成する。115は薄手の作りで、口縁部は直線的に外反する。117は小型

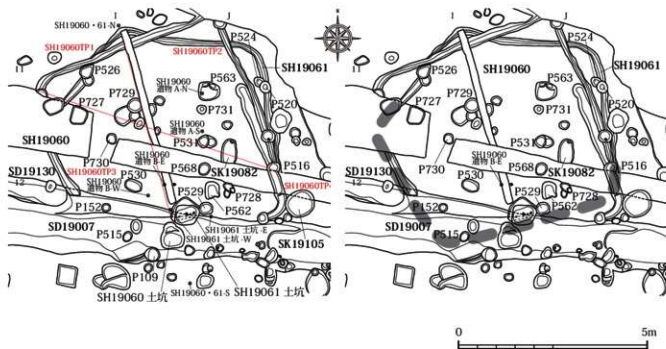


Fig.63 SH19060・61 平面 (S=1/100)

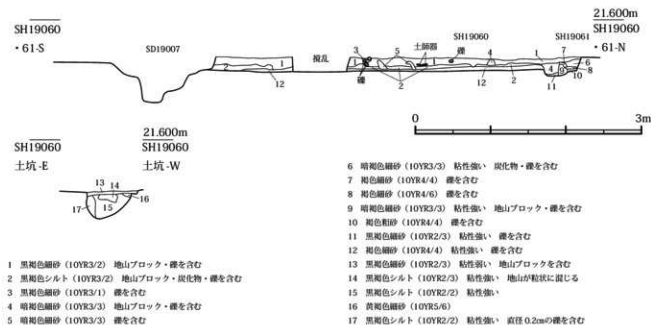


Fig.64 SH19060・61 土層断面 (S=1/50)

土器で、底部は上げ底状を呈する。体部最大径は中位に作られる。123の口径はやや小振りで、口縁部端部の垂下は僅かに認められる。土器で、底部は上げ底状を呈する。体部最大径は中位に部を丸く取る。124はミニチュア土器の台部で、非常に薄手で丁寧に作られる。

弥生土器高坏 (105・122・125・127) 105は有稜高坏である。稜は比較的明瞭に観察できる。内外面には密にタテヘラミガキ調整が施され、脚部には1箇所円形透孔を有する。122・125・127は脚部で、122・127

は1方、125は3方の円孔が穿かれる。122の外面には17条以上の櫛掛直線文が施文され、125外面のヘラミガキ調整は密である。127は脚部天井部が薄く作られる。

土師器皿 (128) 口縁部内外面が強くヨコナデ調整され、口縁部内面に段が生じている。口縁部内外面のヨコナデは1単位観察可能である。

弥生土器高坏 (129) 3方向に円孔が穿孔される。脚部は下方に向けて外反を強くする。

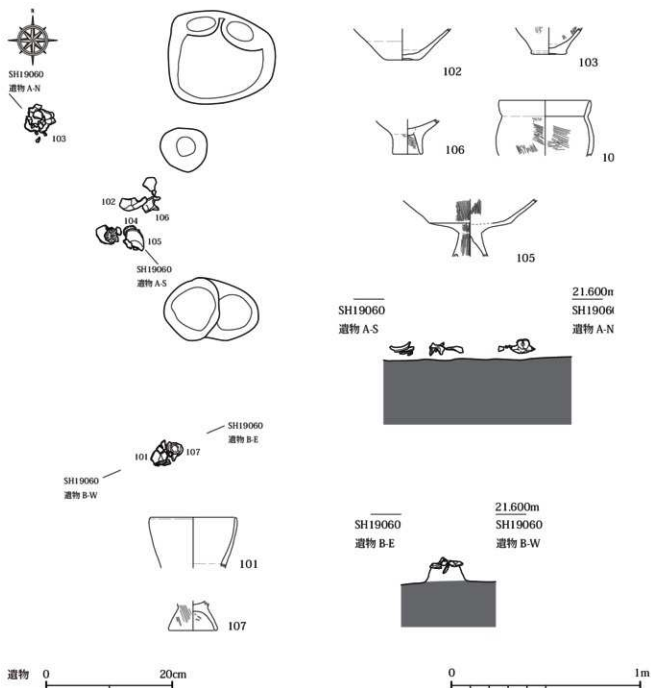


Fig.65 SH19060 遺物出土状況 (S=1/20 遺物：S=1/6)

**時期・性格** ほぼ同時期の可能性があるSH19061を切り、古代の灰軸陶器椀(337)が出土したP109、中世のSD19007に先行する。SH19060からは比較的多量の遺物が出土し、特に床面に近いレベルから良好な遺物の出土に恵まれた(Fig.65)。105は廻間1式1~2段階の所産であると考えられる。加えて、端部が内湾傾向を示す101・104・121等が出土し、またSD19007にはSH19060のものと考えられる弥生土器甕(369・370)が混入しており、該当時期における生計の営みを確認できる。

**【竪穴住居SH19061 (Fig.63・64)】**

**重複** SH19061→SH19060, P516・520・526・529, ビット(遺物なし)。

**平面・規模** 周壁溝北辺がやや北方向へ張り出す歪な形状を呈しており、五角形状の平面プランを想定した。大部分が後出するSH19060によって削平されているため、確認を得ないが、五角形の竪穴住居であると仮定すると、北辺の突出部が五角形の先端部分に相当する。東西5.1m、南北4.6mの範囲を検出し、主軸はN-20°E程度の方向を向こう。

SH19060

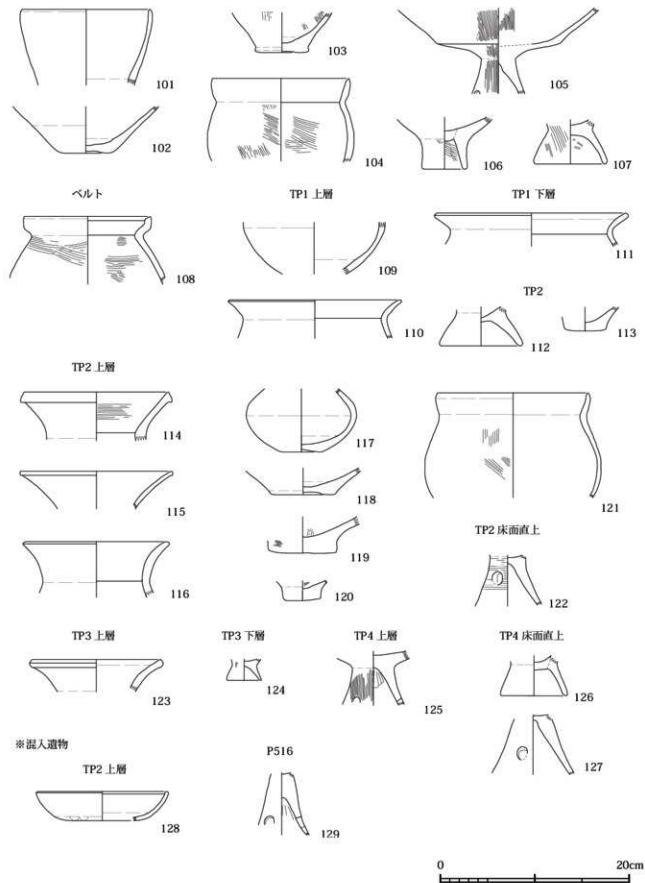


Fig.66 SH19060・P516 出土遺物 (S=1/4)



壁・周壁溝 検出面から床面までの深さは北壁で0.07 mである。後出するSH16060の方が床面レベルを低く造られているため、床面は僅少な遺存に留まる。周壁溝は幅0.15～0.2 mを測り、床面からの深さは0.06 mを計測する。北辺及び東辺の一部を残すのみである。

貼床 付帯なし。

主柱穴 五角形の平面プランを想定すると、P530・568・729～731が妥当である。全て円形状を呈する。概ね直径0.25～0.45 mを測り、下面のSH19060床面からの深さは0.06～0.09 mと浅い。本来の深さは失われているものと考えられる。南東部主柱穴は、近似した深さを示すSK19082によって覆乱されている可能性が考えられる。

土坑 南辺想定ライン上のほぼ中央部に位置し、長軸0.8 m、短軸0.75 mの円形状を呈する。SD19007によって南半が埋没し、東部をP529に切られる。SH19060床面からの深さは0.44 mと深い。北部が段掘りされてテラス状をなすが、この箇所はSH19060床面から0.1 m下がる。周壁溝とは接点がないが、その底面からは充分な深さをもつ。

屋外溝 付帯なし。

火処 付帯なし。

遺物 弥生土器片が出土したのみである。検出範囲が限定されることもあり、遺物の出土量は乏しい。

時期・性格 古墳時代初期のSH19060に先行する。廃絶後にSH19060に建て替えられた可能性を考えると、やや古手の時期に遡るのであろうか。その他の重複する遺構からは、時期の絞り込みに繋がる遺物は出土していない。なお、比較的近隣の五角形の竪穴住居となると、岸岡山Ⅲ遺跡や四日市市山奥遺跡等においてそれぞれ1棟ずつ検出されており、非常に興味深い。共に周壁溝及び炉、土坑等の内部施設を備え、主柱穴を5基付帯する。五角形の先端部を北方へ向け、土坑が南部に備わることに特徴がある。山奥遺跡の竪穴住居からは出土遺物が少ないものの、岸岡山Ⅲ遺跡の例では非常に多量の遺物と共に未加工の軽石が多く出土している。SH19061の詳細は不明であるが、五角形の先端を北方向へ向け、南辺に土坑を付帯する点が共通している。SH19060に切られるため、遺物の多寡については判断できない。山奥遺跡は山中式後期、岸岡山Ⅲ遺跡は山中式中期、共に弥生時代後期の所産である。SH19061も同時期に比定できるのかもしれない。

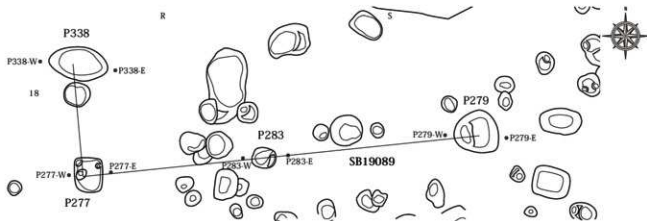
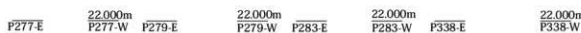


Fig.67 SB19089 平面 (S=1/50)



- 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを含む
- 2 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山が塊状に混じる 土器片を包含する
- 3 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・礫を含む 炭化物を微量含む
- 4 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロックを含む
- 5 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・礫を含む

- 6 暗褐色細砂 (10YR3/4) 粘性強い
- 7 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い 地山ブロックを含む
- 8 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い 細砂を含む
- 9 黄褐色シルト (10YR5/6) 粘性強い 黒褐色土を少量含む



Fig.68 SB19089 土層断面 (S=1/50)

**【掘立柱建物 SB19089 (Fig.67・68)】**

構成 P277・279・283・338。

重複 なし。

平面・規模 1間×2間の建物範囲を確認したが、北東部のピットは未検出である。検出範囲は南北1.5m、東西5.3mを測る。主軸はW-6°-N方向を向ける。構成するピットは、直径0.3～0.8mの円形状を呈し、検出面からの深さは0.1～0.32mを測る。北側は既存建物によって広く攪乱されているため、遺構の広がり特定することはできない。

遺物 図化可能なものではないが、P279から弥生土器高坏、P283から弥生土器壺が出土した。

時期・性格 出土遺物は多くないが、その特徴から弥生時代後期～古墳時代初期の年代観が想定できる。

**【掘立柱建物 SB19093 (Fig.69～71)】**

構成 P334・351・359・373～375・720。

重複 ピット(遺物なし)→P359。P373→ピット(遺物なし)。P720→土坑状遺構(遺物なし)→P319。

平面・規模 2間×2間の側柱建物である。梁間4.0m、桁行4.1mを測り、正方形の平面形である。主軸方向はW-4°-Nを示す。構成するピットの規模は、直径0.25～0.35mを測り、検出面からの深さは0.12～0.3mを計測する。慎重に検出を行ったが、南辺中央部のピットの確認には至らなかった。

遺物 P359から弥生土器壺(130)が出土した(Fig.72)。その他のピットから遺物は一切出土していない。

弥生土器壺(130) 受け口裏である。口縁部端部の立ち上がりは明瞭で、やや外側へ開く。内外面は丁寧にヨコナデ調整される。

時期・性格 130は古墳時代初期に属すると見られるが、弥生時代後期の山中式期に遡る可能性も残す。重複遺構からの遺物出土がなかったため、それ以上の手掛かりはない。

**【掘立柱建物 SB19087 (Fig.73～75)】**

構成 P201・204～206・721・722・723。

重複 SX19038→P205。P721→SD19006。

平面・規模 少なくとも1間×4間の側柱建物であると考えられる。梁間2.7m、桁行5.2mの規模を検出し、長方形の平面形を呈するものと見られる。主軸方向はN-32°-Eである。構成するピットは、直径0.2～0.4mの規模であり、検出面からの深さは0.05～0.42mと幅がある。

遺物 P201から弥生土器の細片が出土したのみである。その他のピットから遺物は一切出土していない。

時期・性格 詳細な時期比定に繋がる遺物はない。確かであるのは、中世のSD19006に遡ることのみである。

しかし、主軸方向が近隣に所在するSH19001及びSX19002とほぼ同一であるため、これらと近い時期になる可能性が高いものと考えられる。但し、新旧関係は不明であるが、SH19001と一部重なるため、やや前後するものと見られる。南方向へ更に延びる可能性があるが、東辺及び西辺の延長上には共に攪乱範囲が存在しており、判然としにくい。

**【風倒木 SX19038 (Fig.73・76)】**

重複 SX19038→SX19002, P205 (SB19087)。

平面・規模 SX19002によって北部を攪乱されているが、幅0.6～1.1mの溝状の遺構が急激に湾曲する形状を呈する。検出面からの深さは0.3mを測る。南西部でやや段が形成され、この中段部分の検出面からの深さは0.1mを計測する。

遺物 出土遺物は全くない。

時期・性格 一切の遺物出土がなかったため、帰属時期の詳細は不明である。古墳時代初期のSX19002に先行する。埋土の状況も近い。近隣に所在する古墳時代初期のSH19001やSX19002と類似した埋土で埋没するが、全体的に地山ブロックを含む点が特徴的である。これらと近い時期の風倒木痕であると判断される。

**【方形周溝墓 SX19002 (Fig.73・77)】**

区割 TP1～4。

重複 SX19038, P696 (SB19086)→SX19002→ピット(遺物なし)。

平面・規模 溝が逆L字状に湾曲して配され、方形周溝墓と判断した。後世に整地された影響で北辺及び西辺の痕跡は確認できない。検出した規模は南辺8.6m、東辺7.2mであり、主軸はW-29°-N方向を向く。周溝は幅0.6～1.2mを測り、検出面からの深さは0.15～0.22mを計測する。周溝の幅は南東コーナー付近でやや狭まり、0.4～0.5mになる。

遺物 弥生土器高坏(131)が出土した(Fig.78)。131はTP3・4の境となる土層断面SX19002Aの南側に設定したサブトレンチ北からの出土品である。

弥生土器高坏(131) 脚部下半のみ遺存する資料で、外面は丁寧にタテヘラミガキ調整される。3方向に円形透孔が穿かれる。

時期・性格 131は概ね廻間式の段階に比定でき、廻間I式期の所産であるSX19013との時期差は少ないものと見られる。SX19013とは比較的近い主軸方向を示しており、また同じく廻間I式期のSH19001の主軸とは全く同方向を向く。主体部は後世の遺構によって破壊されたものと思われ、明確な痕跡は残されていない。東辺北部の下面には縄文時代のSB19086を構成するP696が埋没する。なお、SX19002東辺北部にはSX19

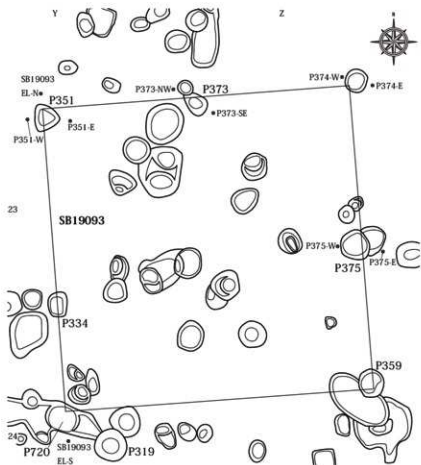


Fig.69 SB19093 平面 (S=1/50)

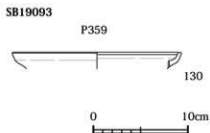


Fig.72 SB19093 出土遺物 (S=1/4)

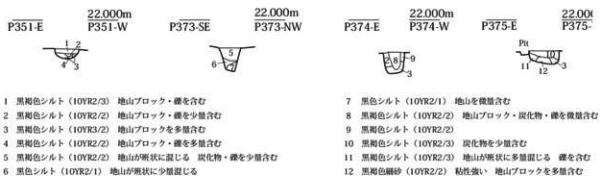


Fig.70 SB19093 土層断面 (S=1/50)

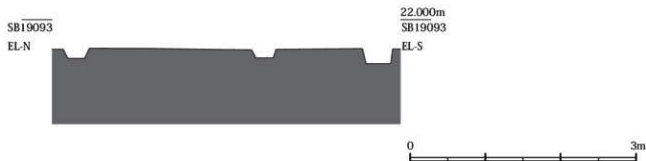


Fig.71 SB19093 断面 (S=1/50)



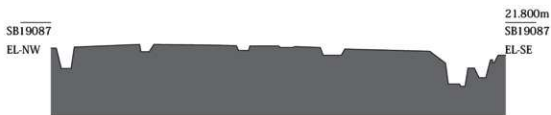
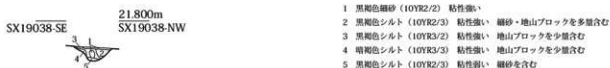


Fig.75 SB19087 断面 (S=1/50)



- 1 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性強い
- 2 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い 細砂・地山ブロックを多量含む
- 3 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性強い 地山ブロックを少量含む
- 4 暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性強い 地山ブロックを少量含む
- 5 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い 細砂を含む

Fig.76 SX19038 土層断面 (S=1/50)



- 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性やや強い 地山ブロックを少量含む
- 2 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い 直径 0.2 ~ 0.5cm の礫を少量含む
- 3 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性弱い 地山ブロックを多量含む
- 4 明黄褐色細砂 (10YR6/6)
- 5 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い 地山ブロックを少量含む
- 6 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性やや強い 地山ブロックを多量含む
- 7 黒褐色シルト (10YR2/2) 4と地山ブロックを含む
- 8 黒褐色シルト (10YR2/2) 4が混在
- 9 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性やや強い
- 10 黒褐色シルト (10YR2/2) シルト粘性強い

Fig.77 SX19002 土層断面 (S=1/50)

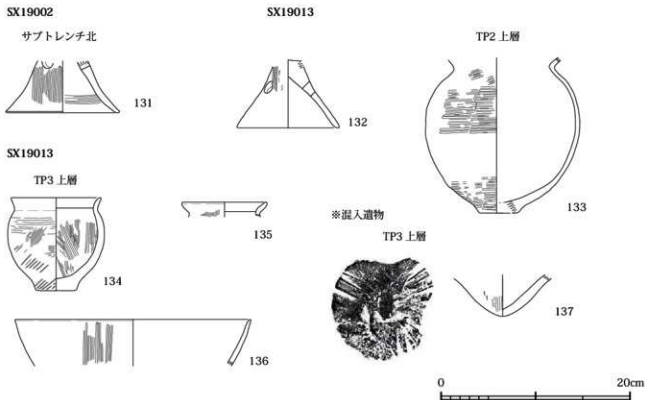


Fig.78 SX19002・13 出土遺物 (S=1/4)

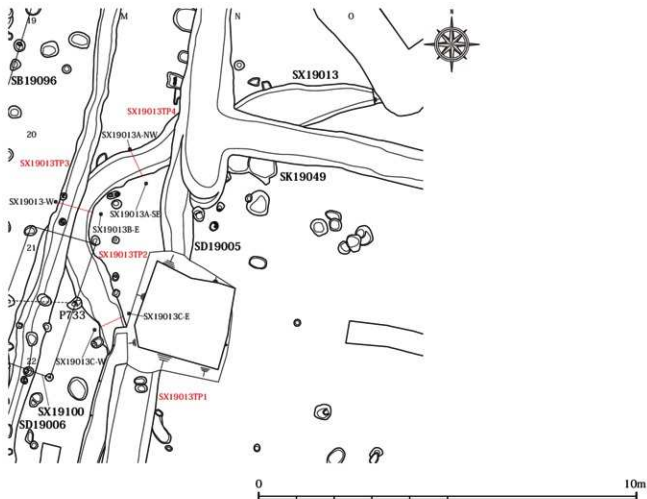


Fig.79 SX19013 平面 (S=1/100)

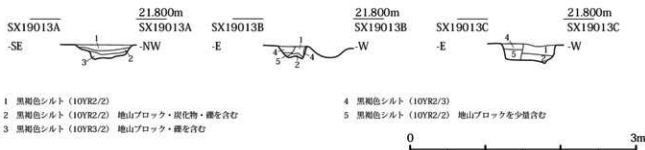


Fig.80 SX19013 土層断面 (S=1/50)

102 が近接するが、これは SX19002 周溝の一部である可能性が高いと判断される。SX19002 と SK19102 との距離は 0.35 m と狭く、開口部と言うよりも、本来は繋がっていたものとする方が妥当であろう。出土遺物は全体的に少ない。

**【方形周溝墓 SX19013 (Fig.79・80)】**

区別 TP1～4。

重複 SX19013 → SD19005・6, P733 (SX19100), ピット (遺物なし)。

平面・規模 周溝が L 字状に湾曲する様相を確認した。

東辺及び南辺は完全に削平されているものと考えられる。また、北辺は東部を後世の擾乱によって失われ、西辺も後世の遺構及び擾乱によって分断されており、東西 8.0 m、南北 6.4 m の範囲を検出した。周溝は幅 0.7～1.2 m、検出面からの深さ 0.12～0.22 m を測る。主軸方向は W-22°-N を示す。

遺物 弥生土器甕 (133～135)・高坏 (132・136) が出土した (Fig.78)。TP3 上層には縄文土器深鉢 (137) の混入を確認した。

弥生土器甕 (133～135) 全て小型のくの字甕である。

133は頸部の屈曲が強く、体部の丸みが強い。内面のヨコハケ調整は磨滅のために痕跡化している。体部外面には横位のタタキが観察できるが、体部上方～頸部にはナメタタキが右肩上がり方に施される。134は頸部が緩やかに屈曲し、ほぼ直口に近い形状を呈する。内面は密にタテハケ調整され、外面には粗いハケが縦と斜め方向に施される。あたかもハケによってタタキを模写したような意匠を感じ取ることができる。135は口縁部端部がやや内湾する。

**弥生土器高環 (132・136)** 共に外面が縦方向のヘラミガキによって調整される。132は3方に円孔が穿孔され、脚部端部は僅かに内湾傾向を示す。136は有稜高環の坏部上段であり、坏部は比較的深いタイプのものになる。

**縄文土器深鉢 (137)** 尖底の深鉢で、外面は縦方向のケズリ調整される。やや小振りである。

**時期・性格** 中世のSD19005・6・SX19100に切られる。132～134・136は廻間Ⅰ式期の所産である。断片的な検出に留まるため、開口部や陸橋の有無は不明である。埋葬施設の確認にも至らなかった。小型の弥生土器裏が供献されている点が特徴的である。SX19002とは4.7mの距離を保つ。

**【土器棺墓 SX22015 (Fig.81)】**

重複 なし。

**平面・規模** 長軸1.1m、短軸0.85mを測り、検出面からの深さは0.17mを計測する。円形状の平面形態で、主軸方向をW-19°-Sに向ける。

**遺物** 弥生土器壺 (138・140)・裏 (139) が出土した (Fig.83)。

**弥生土器壺 (138・140)** 共に広口壺である。138は頸部の屈曲が強く、口縁部端部は僅かに垂下する。頸部外面には凸帯文が施され、凸帯文上は刺突文で裝飾される。口縁部内面はハケをナゲ消している。140は大型製品で良好に復元された。外面は密にハケ調整されるが、内面は磨滅が顕著である。体部最大径はほぼ中位におかれ、僅かに上げ底される。

**弥生土器裏 (139)** く字裏の小型品である。非常に薄手の作りである。外面のタテハケ調整は磨滅のためにほぼ痕跡化している。

**時期・性格** 140は廻間Ⅱ式、若しくは廻間Ⅲ式に帰属し、古墳時代初頭～前期の所産であると判断される。土器棺墓であると考えられ、棺身にはこの壺を用い、土坑の中央～東部において、直立するように出土した (Fig.82)。また、140の南西部には別個体である138が接し、口縁部を下に向けた状態で出土している。墓壇の上部が失われているため、状況は不明であるが、供献さ

れた可能性が高いものと判断される。大型の広口壺を棺身とした乳幼児の埋葬施設である可能性が高いものと思われる。

**【ビットP'124 (Fig.81)】**

重複 なし。

**平面・規模** 直径0.5mを測り、円形状を呈する。検出面からの深さは0.5mである。

**遺物** 弥生土器裏 (142)・高環 (141) が出土した (Fig.83)。

**弥生土器裏 (142)** く字裏で、頸部が強く屈曲する。口縁部上端に面を有するが、上端面の中央部はやや凹む。台部は剥落しているが、体部との接合部は上方から粘土を円盤充填される。体部内外面はハケ調整されるが、上方が横位であるのに対し、体部下方は不定ハケ調整される。

**弥生土器高環 (141)** 有稜高環で、胎土は金雲母を多量に包含する。坏部上段のみの遺存で、内外面にはタテヘラミガキ調整が施される。口縁部上端に明瞭な面をもち、口縁部は端部に向けて内湾傾向を示す。

**時期・性格** 141は古墳時代初頭の廻間Ⅰ期に所属する可能性が高い。142はP'124のほぼ中央部で破片資料がバラバラに積み重なる出土状況を示す (Fig.82)。出土状況には特段有意な点は見受けられなかったが、良好に復元された。調査当時はSX22015から0.7m隔絶した真南において、同時期に比定でき得る資料が良好に出土したことにより、その関係性を大いに想定したが、SX22015より遡ることが判明した。

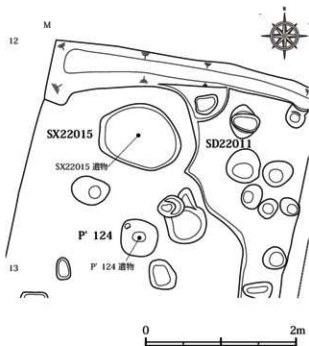


Fig.81 SX22015・P'124 平面 (S=1/50)

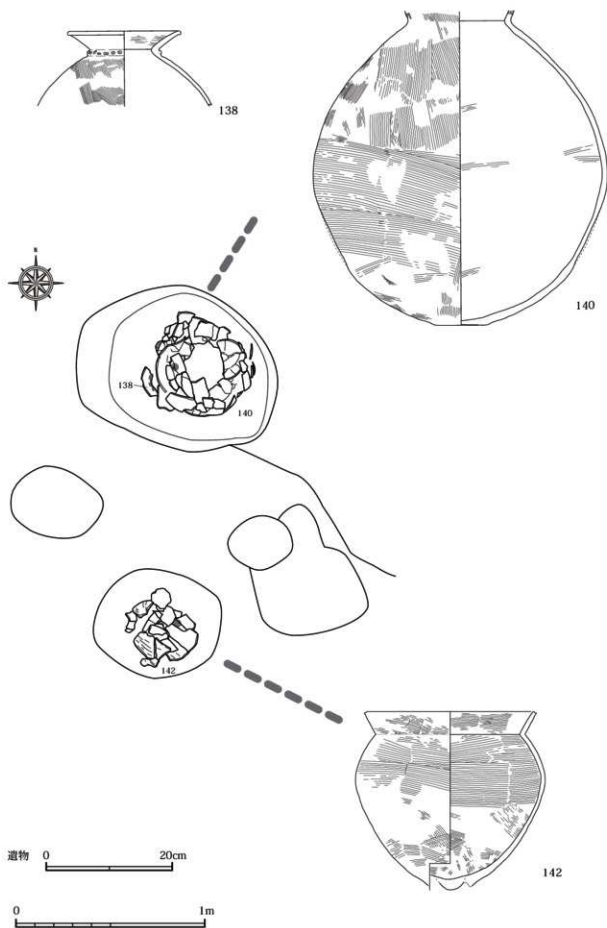
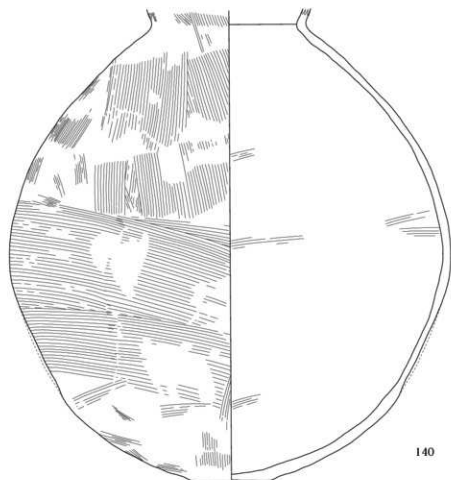
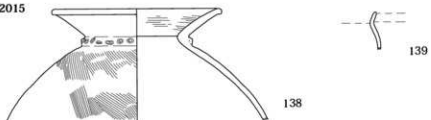


Fig.82 SX22015・P'124 遺物出土状況 (S=1/20 遺物：S=1/6)



SX22015



P' 124

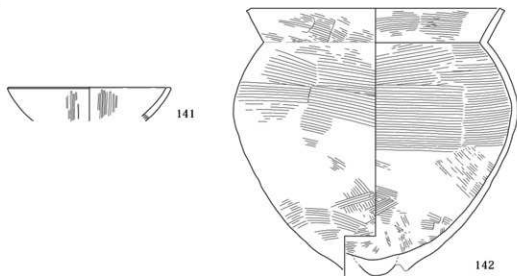


Fig.83 SX22015・P'124 出土遺物 (S=1/4)

#### 【溝 SD19115 (Fig.84・85)】

重複 SD19115 → P622・689, ビット (遺物なし)。SD19115 = SD19116・22002。

平面・規模 北部が攪乱で失われ、南部は調査区外へ続く。幅 2.8 m 以上を測り、検出した長さは 2.4 m である。検出面からの深さは 0.5 m を測る。南西部はやや外側へ開き、検出面から 0.22 m の深さでテラス状に段掘りされる。攪乱を挟んで北側に部分的に検出した SK19118 は、遺物の出土がないもの、形状や埋土の様相から SD19115 の北続きとなる可能性が高いものと考えられる。

遺物 遺物の出土が殆どない。攪乱の影響が、縄文土器深鉢 (164) の混入を確認した程度である (Fig.87)。

縄文土器深鉢 (164) 底部外面は一部剥落する。胎土には多量の金雲母が観察できる。

時期・性格 古墳時代初頭の SD22002 と一連の溝であると考えられる。後述するが、全体的に湾曲する形状を呈しており、SD19116・22002 と接続し、周溝状の遺構を形成するものと判断される。

#### 【溝 SD19116 (Fig.84・85)】

重複 ビット (遺物なし) → SD19116 → ビット (遺物なし)。SD19116 = SD19115・22002。

平面・規模 北部は第 22 次調査 2 区へと延長し、南部は攪乱の影響で途中で途切れる。検出した規模は幅 2.2 m、長さ 7.3 m を測る。検出面からの深さは 0.4 m を計測する。中央部がやや内側へ湾曲するが、概ね直線的に延びる。

遺物 弥生土器高環 (144)・器台 (143) が出土した (Fig.87)。

弥生土器高環 (144) 3 方に円形透孔をもつ。ハの字状に脚部を開き、外面にはタテヘラミガキ調整を観察できる。

弥生土器器台 (143) 1 方に円孔が穿かれる。受け部には穿孔が認められる。穿孔は焼成前に施されたものと考えられる。

時期・性格 古墳時代初頭の SD22002 と同一の溝であり、遺構の中心は SD22002 である。

#### 【溝 SD22002 (Fig.84・85)】

区別 TP1～4。

重複 SD22002 = SD19115・116。

平面・規模 北部は既存建物によって完全に削平され、南部は調査区外の南東方向へ広がるため、全体の規模・形状は不明である。全体的に攪乱の影響が強く、特に TP2～3 付近に顕著である。形状及び位置関係を鑑みると、SD19115・116 と一連の溝を形成し、L 字状に湾曲する溝になると思われる。幅 3.2～4.0 m を測り、検出

した総長は 19.4 m に達する。検出面からの深さは 0.45～0.7 m と幅があるが、底面は複数回掘削されて階段状に凹凸が生じている。TP3 の第 19 次調査区との境において、弥生土器高環が良好に出土した箇所が最も深まる。主軸方向は W-40°・N から N-34°・E 方向へ弧を描くように展開する。

遺物 弥生土器甕 (145～153)・壺 (154・155)・高環 (156～160・163)・器台 (161)、土鍾 (162) が出土した (Fig.87)。また、攪乱の影響によるものか、縄文土器深鉢 (165・166・168～171・174)、須恵器高環 (167)、弥生土器高環 (172・173) の混入遺物を確認した。特に TP3 に縄文土器がよく混入している。

弥生土器甕 (145～153) 145・147・148 は受け口甕である。口縁部端部の立ち上がりは明瞭で、145・148 は外反する。145 は口縁部外面に刺突文が施文され、147 はほぼ直立する口縁部端部が外面を形成し、この箇所が刺突文で裝飾される。148 は小型土器で、頭部の屈曲が強い。薄手で丁寧な作りである。146 は口縁部上端に明瞭な面を有し、口縁部内面はやや凹む。150 は口縁部の外反が強く、外面はタテヘラミガキ調整される。151 は頭部の屈曲が強く、口縁部端部は内湾する。器面の風化が著しく、調整の観察は困難である。152 は小型製品で、体部には 2 箇所の接合痕が確認できる。527 は台部で、底部端部には平坦面を有する。底部は端部に向けて内湾傾向を示し、内面にはやや粘土がはみ出す。

弥生土器壺 (154・155) 154 は口縁部内面が 3 列の刺突羽状で裝飾される。155 は底面中央部がドーナツ状に上げ底され、内面のハケは密である。

弥生土器高環 (156～160・163) 156 は有縁高環で、内外面はタテヘラミガキ調整が丁寧に施される。158 はミニチュア製品の脚部で、ハの字状に脚を開ける。159 は外面が密にヘラミガキ調整され、天井部内面には棒状工具による刺突痕が 2 箇所確認される。160 は開脚が早く、円形透孔が 1 箇所遺存する。163 は椀形高環の坏部で、脚部が剥落している。体部は緩やかな丸みを帯び、口縁部は外反する。内外面はタテヘラミガキ調整される。

弥生土器器台 (161) 受け部には直径 0.4 cm の円孔が穿かれ、脚部と繋がる。磨滅により、外面のタテヘラミガキ調整はほぼ痕跡を残すのみである。

土鍾 (162) 棒状の形状で、途中で欠落しているため、部分的に遺存する。直径 0.4～0.5 cm の円孔がほぼ直線的に貫通する。穿孔位置はほぼ中心である。

縄文土器深鉢 (165・166・168～171・174) 165・166・168 は凸帯文土器である。165・168 は口縁部端部からやや下がった位置に凸帯文が施文され、165 は凸帯上に貝殻によるキザミが確認できる。165 の凸帯は厚

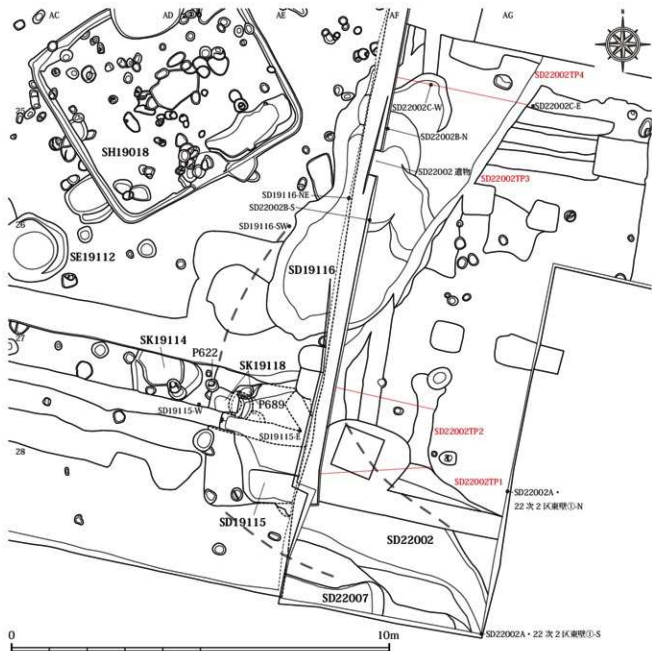


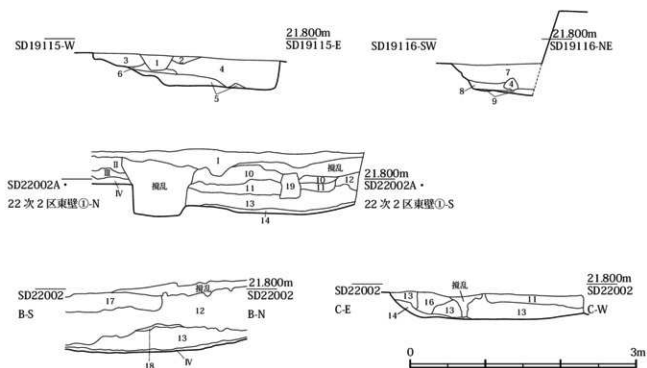
Fig.84 SD19115・116・22002 平面 (S=1/100)

く大きい。166・168・174には素文凸帯が貼り付けられる。166は口縁部の外反が強く、3帯の凸帯文が観察でき、その断面は蒲鉾状に緩やかに突出する。165・168は縄文時代晩期後半の所産であるが、166は遠賀川系弥生土器の変容壺になり、弥生時代前期頃に降る可能性のある資料である。169は縄文時代晩期前半の深鉢で、口縁部は外反する。口縁部上端にはキザミを有し、工具の使用によって小波状をなす。内面はケズリ、外面は横位の条痕で調整される。170は縄文時代中期末の北白川C式の時期に比定される。横位の沈線文を3条1組として施文している。171は素文凸帯が3条貼り付けられる。凸帯は断面形状が三角形に尖り、凸帯文間のピッチも狭く、凸帯文期のものとはその性格を異にする。文様構

成は3条を1組とする意匠であり、本来の沈線文を凸帯文で代用したものであろうか。

須恵器環(167) 環身の底部資料である。高台は高く貼り付けられ、ハの字状に開く。体内内面には自然釉がかかる。7～8世紀に属するものと考えられる。

弥生土器高環(172・173) 172はウィングラス形高環で、環部は丸みが強い球形状を呈する。薄手の作りであり、口縁部端部は外反する。173は有稜高環で、明瞭な稜を有する。環部上段が強く外反し、環部は比較的浅い。口縁部上端には明瞭な面をもつ。共にSD22002をやや遡る弥生時代後期の混入遺物である。172は山中式中～後期に盛行し、173は山中式前～中期のものである。時期・性格 145・148・153・163は廻間I式期で、



- I 灰黄褐色土 (10YR5/2) 表土
- II 黒色土 (10YR3/2)
- III 黒褐色シルト (10YR3/2) 黒褐色シルト (10YR2/2)・地山ブロックを多量含む
- IV 明黄褐色シルト (10YR7/6) 黒褐色シルト (10YR3/2) を少量含む
- 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山が斑状に混じる 礫を含む
- 2 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロックを多量含む 礫を含む
- 3 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロックを多量含む 礫を含む
- 4 黒褐色細砂 (10YR2/1) 粘性強い 礫を含む
- 5 暗褐色細砂 (10YR3/3)
- 6 黄褐色細砂 (10YR5/6) 粘性強い
- 7 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性弱い
- 8 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い
- 9 褐色細砂 (10YR4/6) シルト混在 黒褐色土を少量含む
- 10 黒褐色シルト (10YR3/1) 黒色シルト (10YR2/1)・細礫を少量含む

- 11 黒褐色シルト (10YR3/2) 細礫を多量含む 焼土を微量含む
- 12 黒色シルト (10YR2/1) 焼土を少量含む
- 13 黒褐色シルト (10YR2/2) 黒色シルト (10YR2/1)・細礫を多量含む 焼土を微量含む
- 14 灰黄褐色土 (10YR4/2) 黒褐色シルト (10YR2/2)・黒色シルト (10YR2/2)・細礫・礫を多量含む
- 15 黒褐色シルト (10YR3/2) 黒褐色シルト (10YR2/2) を多量含む 地山ブロックを少量含む
- 16 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロックを少量含む
- 17 暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性やや弱い 細礫を少量含む
- 18 におい黄褐色シルト (10YR4/3) におい黄褐色シルト (10YR7/4) を多量含む 焼土を微量含む
- 19 黒褐色シルト (10YR3/2)

Fig.85 SD19115・116・22002・22次2区東壁①土層断面 (S=1/50)

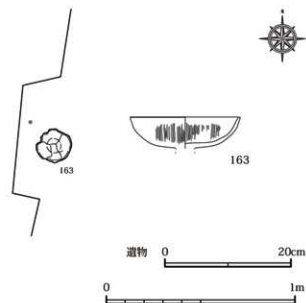
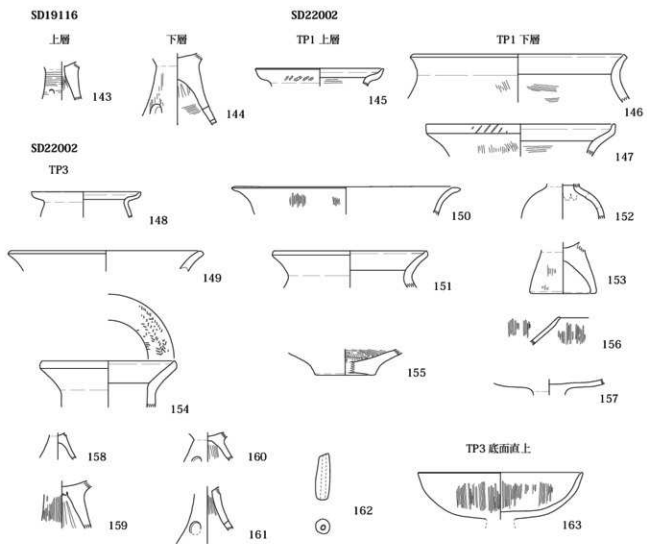


Fig.86 SD22002 遺物出土状況 (S=1/20 遺物：S=1/6)

特に 163 は廻間 I 式 1～2 段階に所属する。163 は椀形高坏環部の良好資料で、SD22002 最深部となる TP3 の底面直上において、据え置かれるように出土した (Fig.86)。口縁部を上方向に付けているが、接続する脚部は未確認であり、打ち欠いた後に据えられた可能性がある。SD22002 は、北側の既存建物に伴う掘乱以北には現れないため、プラン通りにそのまま周溝状に湾曲するものと見られる。周溝の内部は調査区外となるため、その詳細は不明である。



※混入遺物

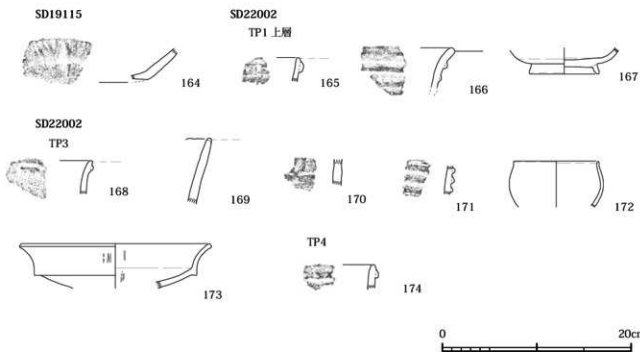


Fig.87 SD19115・116・22002 出土遺物 (S=1/4)

【溝 SD19004 (Fig.88・89)】

区割 TP1～4。

重複 ビット(遺物なし)→SD19004→SD19007・8・20・21・22・24, P132 (SA19044), P32・750・751 (SA19037), P155 (SB19036), SE19025, SX19048, P1・2・4～10・12・17・28・29・49・65・70・71・86・88～90・116～119・122・125・126・144・532・544, ビット(遺物なし)。

平面・規模 主に古代～中世の遺構によって切られており、広大な遺構範囲の上面にはその時期の生業が確認できる。南部は調査区外南西方向へ延びるため、全体の形状は不明であるが、大規模に掘削された溝である。北部は北方向へ行くに従い、徐々に深さを浅くする。SD19007 との重複箇所以北になると、溝の掘り込みが検出面とほぼ一体化して失われ、4層の黒褐色粗砂の広がりをお互いに留まった。幅は3.8～4.4m程度を測るが、コーナー部分でやや内側へ広がり、7.0mにまで達する。調査区内における長さは28.6mを測る。主軸はW-24°NからN-72°E方向へ、L字状に強く湾曲する。検出面からの深さは南～中央部で0.4～0.5m、北部で0～0.3mを測る。

遺物 弥生土器甕(176・178)・高坏(175・177・179)が出土した(Fig.90)。175はTP1・2の境となる土層断面SD19004Cの東側に設定したサブレンチ南からの出土品である。全体的に古代から中世における遺物が多く混入している。当該混入遺物は上層からの出土で、土師器皿(180・184)、須恵器坏(182)・坏蓋(183)、黒色土器椀(181)、山皿(185)である。

弥生土器甕(176・178) 176はくの字甕で、頸部の屈曲が強い。178は受け口甕である。口縁部端部の立ち上がりは明瞭で、全体的に外反傾向を示す。

弥生土器高坏(175・177・179) 175・177は外面が櫛描直線文で装飾され、175は17条以上、177は12条以上の文様を確認できる。175は太く施文され、厚手で重厚な作りである。177は内面の絞り痕が密である。175・179は1方向の円形透孔を有する。

土師器皿(180・184) 180は口縁部端部をやや上方へ摘み上げ、口縁部内面は凹みをもつ。184は口縁部が外反し、端部を丸く収める。共に12～13世紀の所産である。

須恵器坏(182) 口縁～体部は直線的に外反する。高台の有無は不明である。猿投窯編年のK14窯式の段階で、9世紀前半に位置付けられる。

須恵器坏蓋(183) 天井部の膨らみは乏しく、凹縁によって口縁部と天井部が区別される。口縁部端部には内傾面をもつ。陶器窯跡群編年のTK10段階に相当するも

のと考えられる。

黒色土器椀(181) 内面の黒化処理を行う内黒であり、緻密なヘラミガキが施される。口縁部内面は僅かに凹められる。9世紀の所産である。

山皿(185) 口縁部は外反し、底部はやや厚手に作られる。底面には墨書が観察できる。墨書は磨滅のために薄く、剥離もしているため、判読が困難であるが、「上上」と読める。同様の文字は他に2個体出土している。藤澤良祐氏による山茶椀製品編年(以下、藤澤編年と呼称)の5型式に相当し、12世紀後半～13世紀初頭のものである。

時期・性格 大規模な溝であるが、古代の道路遺構の路面上に位置し、更に中世の屋敷地の区画範囲内にあるため、それまでの間に大幅に整地されたものと考えられる。上面にはその他にも、後出する遺構が多数存在する。上層には特に古代～中世の遺物の混入が顕著であるため、これらに伴うことは間違いない。SD19004が本来機能していたと見られる時期の遺物の出土量は乏しく、図化可能遺物に至っては更に限定され、遺構の広がり反比例して乏しい結果となった。弥生時代後期～古墳時代初頭に帰属するものと考えたい。その性格については、当初に古墳の周溝、または流路を想定したが、古墳よりも遮るものと考えられる。土層断面の観察でも、埋土の主体は細砂であるが、最下層となる7・9層にシルト層が堆積しており、流水の根拠には弱い。また、第19次調査区の西側は第1次調査区北部に該当するが、その結果においても、SD19004の延長等、関連するような結果は得られておらず、周知の古墳も存在しない。該当期の環濠集落が広がる可能性も極めて低いと考えられる。SD19004は、竪穴住居を中心とする集落と同時期かそれよりもやや古い時期に存在したことは確実であるが、その関係性は不明である。

【土坑 SK19066 (Fig.91・92)】

重複 SK19066→P422・423, ビット(遺物なし)。

平面・規模 長軸3.8m, 短軸2.0mを測り、検出面からの深さは0.15mを計測する。南部にやや張り出す楕円形状を呈し、主軸方向はW-46°Nを向く。後出するビットによって切られる。

遺物 弥生土器甕(186)が出土した(Fig.93)。

弥生土器甕(186) 小型の甕で、内外面をタテヘラミガキ調整される。口縁部端部は内湾する。

時期・性格 186は畑間1式の段階で、古墳時代初頭の所産である。後出する遺構からは時期の比定に有意な遺物の出土はない。



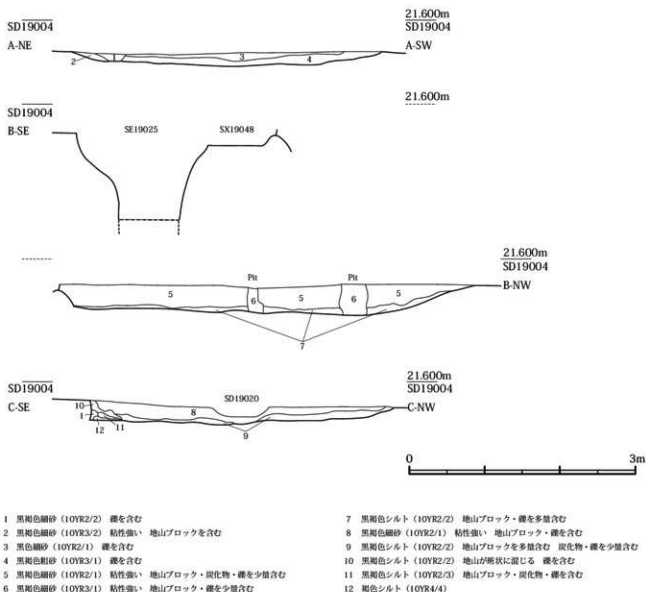


Fig.89 SD19004 土層断面 (S=1/50)

### 【弥生・古墳時代の遺構出土遺物】

上記の遺構以外にも、弥生後期～古墳時代初頭の遺構が分布する (Fig.35)。以下には、竪穴住居及び掘立柱建物等にまとまらないピットや土坑等から出土した弥生土器について記載する (Fig.94)。図化資料は、比較的残りの良い台付甕の台部や高坏の脚部が多くを占める。弥生土器甕 (188・193～195・200・201) 188・193・194 は台部である。188 は内外面が被熱によって黒変し、底部端部には平坦面を有する。193 は台部の完形品で、内外面にはハケ調整を観察できる。194 は体部との接合部が円盤充填される。195 は受け口甕で、口縁部端部の立ち上がりは明瞭に直立する。内外面には被熱による黒変を観察できる。200・201 はハの字甕で、共に頸部外面が刺突文で裝飾される。200 は直径0.5cmの礫を包含する。201 は頸部の屈曲が強く、刺突文の上下

部にタテハケ調整が施される。

弥生土器壺 (192・196・198・199) 192 は小型製品で、体部最大径はやや下方に作られる。外面にはタテハケが観察可能だが、磨滅のためにミガキの有無は不明である。口縁部端部は内湾傾向を示す。底部形状はほぼ平底だが、底面中央が僅かにドーナツ状に上げ底される。196・199 は口縁部がやや垂下し、196 は口縁部外面に刺突文が施される。198 は小型の壺で、やや上げ底される。

弥生土器高坏 (187・189～191・197・202) 全て脚部である。187 は磨滅が著しく、器面調整は不明である。189・197 は外面に櫛歯直線文が施され、189 は16条以上観察できる。197 は3方に円孔が穿かれ、穿孔位置は高い。190・191・202 は外面がタテハラミガキで調整され、191 はハの字状に開脚する。202 は底部



サブトレンチ南



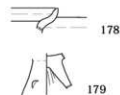
TP2 上層



TP2 下層



TP3 上層



※混入遺物

上層



TP2 上層



TP3 上層



TP4 上層



Fig.90 SD19004 出土遺物 (S=1/4)

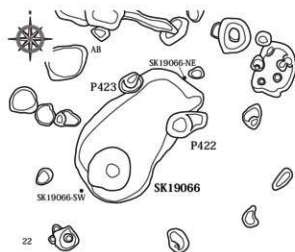
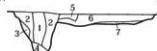


Fig.91 SK19066 平面 (S=1/50)

SK19066-SW 21.600m SK19066-NE



- 1 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性強い 地山が塊状に露じる 礫を含む
- 2 黒褐色極細砂 (10YR2/1) 粘性弱い 地山ブロック・礫を含む
- 3 黒褐色シルト (10YR3/1) 地山ブロックを多量含む
- 4 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・礫を含む
- 5 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性強い
- 6 黒褐色細砂 (10YR3/2) 粘性弱い にくい黄褐色土 (10YR4/3) が露在 直径1cmの礫を含む
- 7 褐色シルト (10YR4/6) 6 が露在

Fig.92 SK19066 土層断面 (S=1/50)



Fig.93 SK19066 出土遺物 (S=1/4)

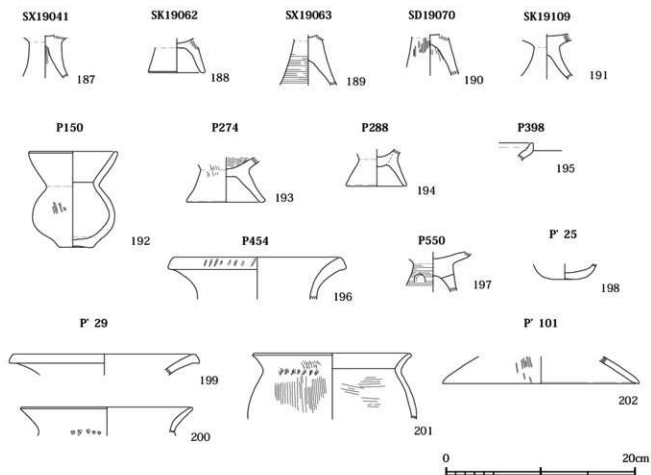


Fig.94 弥生・古墳時代の遺構出土遺物 (S=1/4)

端部のみ遺存する資料で、端部内面には内傾面を有する。

全て弥生時代後期～古墳時代初頭に位置付けられる。192はほぼ完形品となる好資料で、廻間Ⅰ式の段階に比定できる。また、201の年代観は弥生時代後期前半の八王子古宮Ⅰ式から始まり、古墳時代初頭の廻間Ⅱ式頃に終焉する。この時期に営まれた集落や墓域の時間幅と概ね一致するものである。

### 3 古代の遺構 (Fig.95)

古代の遺構は、7世紀後半頃から本格的に始まり、8～9世紀代に隆盛する。それ以前の時期のものや10～11世紀に降る資料はあまり多くない。遺構の分布は、第19次調査区西部、東部～第22次調査区で密となり、中央部は疎である。第19次調査区西部においては、直線的に開掘された道路遺構が中心となり、これが廃絶した後も生業が営まれる。第19次調査東部では掘立柱建物等による居住域を検出したが、全体的には土坑状の遺構の確認が主となる。なお、建物にまとまらない単独のピットから、比較的良好に遺物が出土している特徴がある。

#### 【欄列 SA19044 (Fig.96・97)】

構成 P100・167～169・172。

重複 ピット (遺物なし) → P167。P168 → P112。P132・167・172 → SD19008。

平面・規模 5間の規模を検出した。西側は不明であるが、東側一帯に既存建物にかかる攪乱範囲が広がるため、この方向に更に延びる可能性を残す。総長9.4mで、柱間は西から1.2m+1.5m+1.6m+2.1m+3.0mを測る。東に向けて柱間を大きくする。主軸方向はW6°・Nとほ

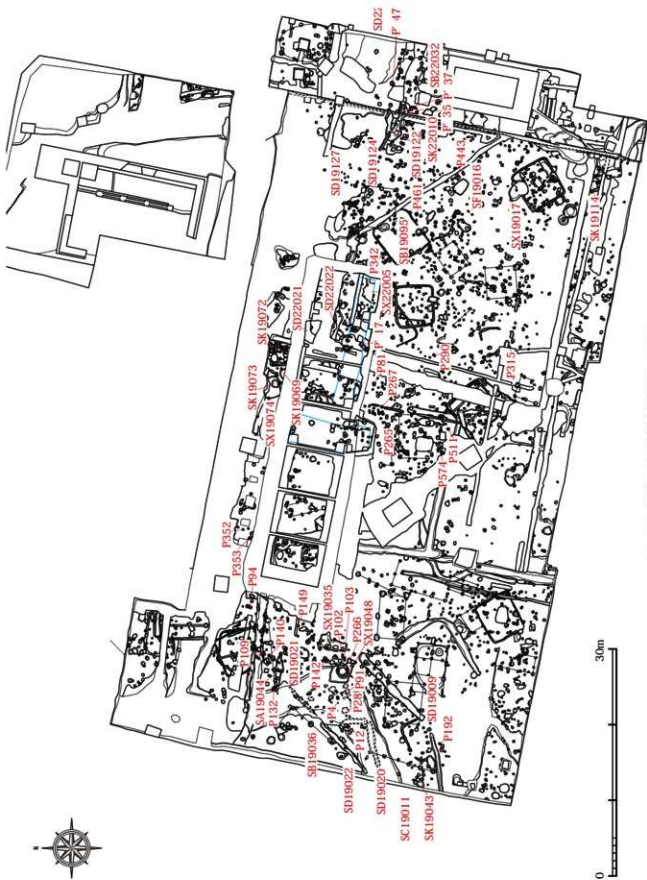


Fig.95 古代の主要遺構配置図 (S-1/500)

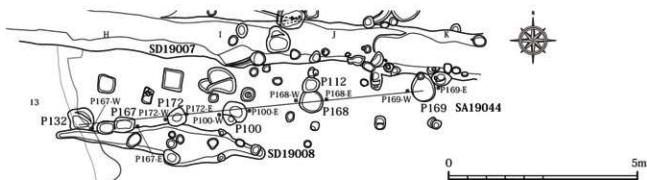


Fig.96 SA19044 平面 (S=1/100)

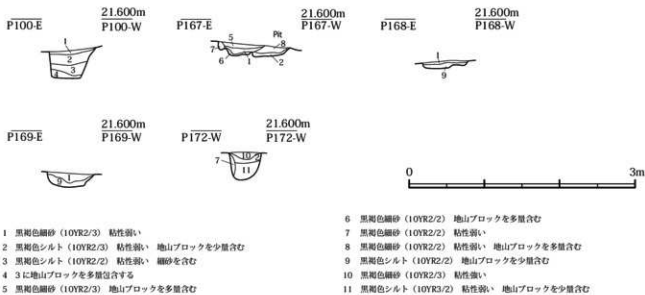


Fig.97 SA19044 土層断面 (S=1/50)

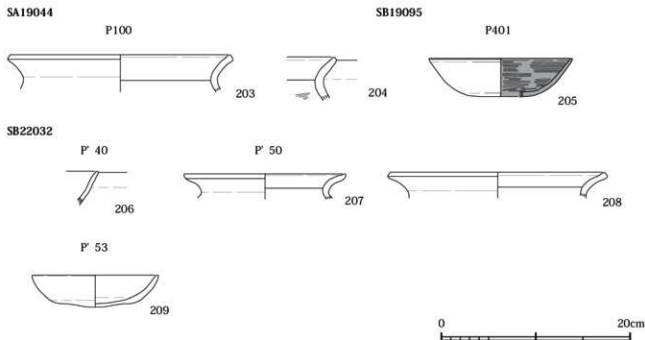


Fig.98 SA19044・SB19095・22032 出土遺物 (S=1/4)

ぼ正方位に直交する。構成するピットは、直径0.4～0.8 mのやや大振りの円形状を呈し、検出面からの深さは0.1～0.35 mを測る。

**遺物** P100から土師器甕(203・204)が出土した(Fig.98)。P172からも土師器及び須恵器が出土しているが、図化できる資料は得られなかった。

**土師器甕(203・204)** 共に口縁部端部をやや上方へ摘み上げ、口縁部内外面はヨコナデ調整される。203は口縁部外端に明瞭な面を有する。

**時期・性格** 203・204は口縁部の特徴から、概ね9世紀頃の産物であると比定できる。西部のピットを切るSD19008は中世の区画溝である。P168を切るP112からは古代の土師器及び須恵器片が出土しているが、時期の絞り込みに繋がる遺物はない。

**【掘立柱建物SB19095 (Fig.99～101)】**

**構成** P399～404・406～408・732。

**重複** SH19015→P406～408。P540→P400。P504→402。P405→P732。

**平面・規模** 3間×2間の側柱建物である。北方向には多数のピットが存在し、その方向へ延びる可能性もあるが、擾乱範囲と重複するために確認を得ない。梁間4.3 m、桁行5.4 mを測り、東西方向に長い長形状の平面形をなす。主軸はW-7°S方向を向ける。構成するピットの規模は、直径0.35～0.8 mの円形状を呈し、検出面からの深さは0.1～0.45 mを測る。

**遺物** P401から黒色土器椀(205)が出土した(Fig.98)。他にも、P399・400・402～404から土師器が出ていたが、細片資料につき図化は行っていない。

**黒色土器椀(205)** 平底で無高台である。口縁部は直線的に外反し、口縁部端部を丸く取める。内面全体に黒化処理が施され、丁寧にヘラミガキされる。

**時期・性格** 205は9世紀前半～中葉に属すると考え

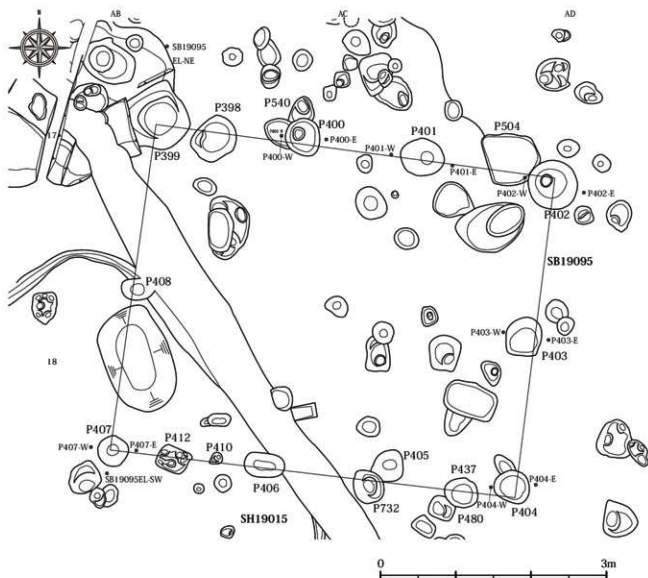


Fig.99 SB19095 平面 (S=1/50)

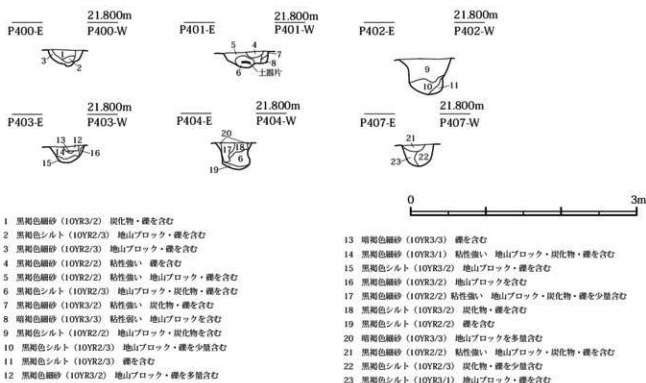


Fig.100 SB19095 土層断面 (S=1/50)



Fig.101 SB19095 断面 (S=1/50)

られる。古墳時代初頭のSH19015に後出するが、それ以外の重葺遺構からの有意な遺物の出土はない。南辺の柱筋上東部に存在するP437からは縄文土器深鉢(23)、北辺西部のP398からは弥生土器甕(195)が出土している。

#### 【掘立柱建物 SB22032 (Fig.102・103)】

構成 P'40 (41?)・42・50・53・58・64・71・113。

重複 P'112→P'50。P'73→P'71。

平面・規模 2間×2間の掘立柱建物である。梁間2.8m、桁行3.1mを測る。主軸方向はW-5°Nを示し、正方形に近い平面形状を呈する。構成するピットは概ね円形状をなし、直径0.4～0.55m、検出面からの深さ0.28～0.6mを測る。P'53・64は特に深く掘削される。なお、3辺は2間の規模に造られているが、西辺のみ3間になる可能性がある。北西部のピットは未検出であるものの、本来の西辺の規模を想定すると、これを等分する箇所に

P'40・42が配される。変則的な柱の配置になり、掘立柱建物の構造の詳細は不明であるが、非常に興味深い事例である。

遺物 P'40から灰釉陶器椀(206)、P'50から土師器甕(207・208)、P'53から土師器環(209)等、比較的多数の遺物が出土した(Fig.98)。その他にも、P'42から土師器及び須恵器、P'64・71・113から土師器が出土しているが、全て細片資料であるため、図化が可能なものではない。

灰釉陶器椀(206) 口縁部一部のみを留める資料で、口縁部は緩やかに外反する。内外面に施軸が確認できる。外面の施軸は薄い。

土師器甕(207・208) 共に口縁部端部を僅かに上方へ揃み上げる。207は頸部の屈曲が強い。208は口縁部外端に明顯な面をもつ。

土師器環(209) 口縁部は直線的に外反する。底部に焼き歪みが生じており、薄手である。

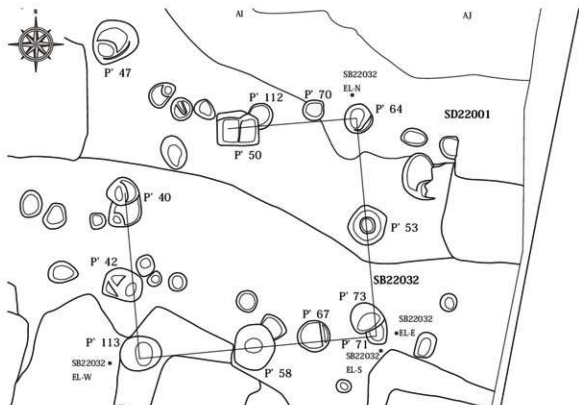


Fig.102 SB22032 平面 (S=1/50)

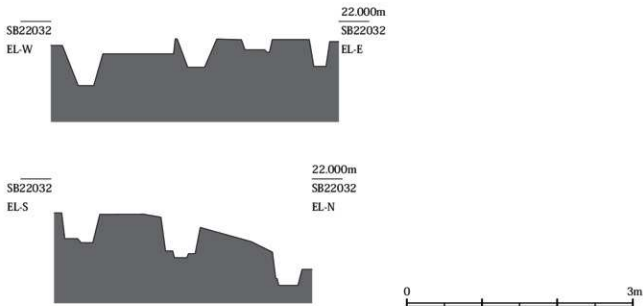


Fig.103 SB22032 断面 (S=1/50)

**時期・性格** 206は猿投窯編年のK90窯式の段階で、9世紀後半に属するものと考えられる。南辺の柱筋上にあるP'67からは縄文土器、P'71に先行するP'73からも縄文土器、P'50を切るP'112からは古代の土師器が出土している。なお、西辺の北方向の延長上にはP'47が存在し、直径0.6m、検出面からの深さ0.35mを測る。柱の位置・間隔を鑑みると、SB22032を構成するピツ

トとして申し分なく、土師器環(353)が出土している。しかし、単独で検出されたため、SB22032に伴うとは言い切れない。

**【溝SD19020 (Fig.104・105)】**

重複 SD19004 → SD19020。

平面・規模 幅0.55～0.8m、検出面からの深さ0.15mを測る。東西方向は共に途切れており、検出した長さ

は3.0 mである。溝の立ち上がりは緩やかで、断面は皿状を呈する。主軸はW-12°-N方向を指す。  
**遺物** 図化可能遺物ではないが、土師器甕及び須恵器壺が出土している。

**時期・性格** 弥生時代後期～古墳時代初頭のSD19004の上面において検出した。土師器甕は長胴タイプになると見られ、7～8世紀を中心とする時期に属するものと考えられる。位置的にはSA19037の柱筋上にあるが、新旧関係は不明である。また、溝の肩が0.09 mと近接するSD19024は中世の所産である。

【溝SD22021 (Fig.106・107)】

**重複** ビット (遺物なし) →SD22021。

**平面・規模** 既存建物の下面において検出したため、攪乱の影響を強く受ける。北部及び南部は完全に削平されてしまっているため、全体の規模は不明である。幅1.2 mを測り、検出した長さは2.8 mである。検出面からの深さは、0.12 mを測る。

**遺物** 土師器甕 (210) が出土した (Fig.110)。

**土師器甕 (210)** いわゆる清郷型甕で、口縁部及び凸帯部は丁寧にヨコナデされる。凸帯部は上方に摘み上げられ、先端部はやや尖る形状を示す。

**時期・性格** 210は永井宏幸氏による清郷型鍋 (甕) 編年 (以下、永井編年と呼称) のⅢ期に比定でき、その年代観は10世紀後半～11世紀に求められる。重複するビットからの遺物出土はない。湾曲する形状を示し、周溝状遺構のコーナー部分に該当するものと見られる。

【溝SD22022 (Fig.106・107)】

**重複** SD22022→ビット (遺物なし)。

**平面・規模** 大部分を攪乱され、僅かに南肩のみ残す。また、周囲には既存建物による攪乱と見られるSX22018等が存在する状況で、遺存状態は著しく不良である。幅0.6 m以上、検出した長さは3.3 mを測る。

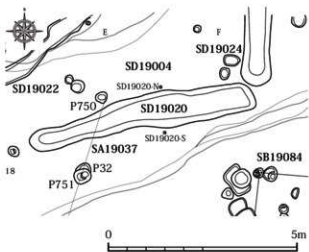


Fig.104 SD19020 平面 (S=1/100)

検出面からの深さは計測不能である。

**遺物** 土師器及び灰軸陶器壺が出土しているが、図化の対象となる遺物はなかった。

**時期・性格** 出土遺物から得られる情報は乏しいが、破片資料である灰軸陶器壺は山茶碗の前段階の資料で、猿投窯編年の百代寺窯式に属するものと見られる。後出するビットからは遺物が全く出ていない。形状及び埋土の状況を類推すると、SD22021が湾曲してSD22022に繋がり、一連の溝になると考えられる。併せて11世紀前半の年代観を想定したい。該当する平安時代後期の遺構はあまり多くなく、遺構の周囲への広がりも攪乱によって大変茫漠としている。

【土坑状遺構SX22005 (Fig.108・109)】

**重複** ビット (遺物なし) →SX22005→ビット (遺物なし)。

**平面・規模** 既存建物に起因する攪乱のため、方形遺構の北西コーナー部分のみの遺存に留まる。攪乱の影響か、北辺が不整となる。検出した規模は東西2.6 m、南北1.4 mを測り、検出面からの深さは0.02～0.05 mと浅い。主軸方向は概ねW-38°-Sを示す。

**遺物** 須恵器環 (211) が出土した (Fig.110)。

**須恵器環 (211)** 口縁部は外反し、底面に貼り付けられた高台は低い。直径0.3～0.6 cmの隙を包含する。底部は焼き歪んでおり、ほぼ接地する。

**時期・性格** 211は猿投窯編年のNN32窯式期で、8世紀後半に帰属するものと考えられる。北部で後出するビットからは遺物が一切出土していない。SX22005は部分的な確認に留まるために確認を得ないが、堅穴住居の可能性も考えられる。なお、「Ⅲ 調査の方法 3 解体工事 (第22次)」においても述べたが、既存建物内部の基礎等の解体・撤去時期にかかる問題で、第22次調査1区中央部及び東部に対しては、先行してトレンチ調査を行った。平面図に示した青色のラインは、トレンチ2調査区を表すものである (Fig.108)。トレンチ2の外側は既存建物基礎の直下にあたり、より攪乱の影響が強い。

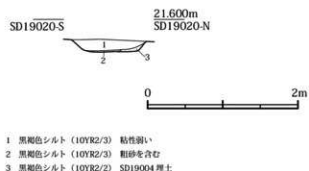


Fig.105 SD19020 土層断面 (S=1/50)

- 1 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い
- 2 黒褐色シルト (10YR2/3) 粗砂を含む
- 3 黒褐色シルト (10YR2/2) SD19004埋土



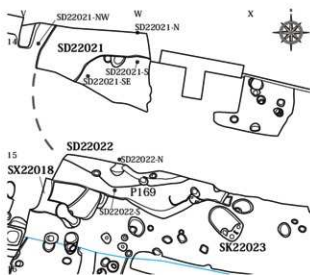


Fig.106 SD22021・22 平面 (S=1/100)

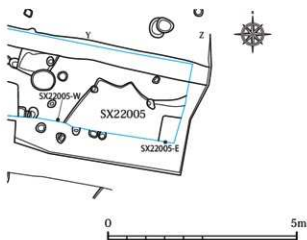


Fig.108 SX22005 平面 (S=1/100)

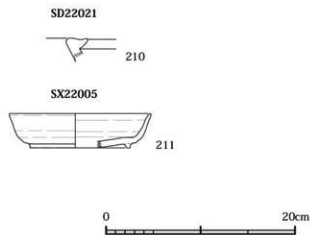
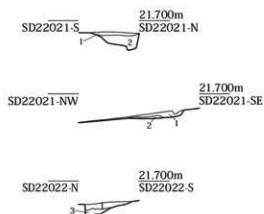
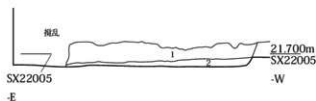


Fig.110 SD22021・SX22005 出土遺物 (S=1/4)



- 1 黒褐色シルト (10YR3/1) 地山ブロックを少量含む
- 2 黒褐色シルト (10YR3/1) 極細砂・地山ブロックを微量含む
- 3 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性強い 地山ブロック・焼土を微量含む

Fig.107 SD22021・22 土層断面 (S=1/50)



- 1 黒褐色シルト (10YR3/2) 締まり強い 粘性やや強い 地山ブロック・細砂を少量含む 炭化物を微量含む
- 2 黒褐色シルト (10YR2/2) 締まり強い 粘性やや強い 地山ブロックを多量含む 炭化物を微量含む

Fig.109 SX22005 土層断面 (S=1/50)

SX22005の北辺及び西辺の延長等、掘り込みの浅い遺構は失われてしまったものと推測できる。SX22005の西部にはピットを数基確認したが、関係性は判断としない。

#### 【土坑 SK19073 (Fig.111・112)】

重複 SX19074 → SK19073

平面・規模 長軸 2.0 m, 短軸 1.8 mを測るやや大型の円形状土坑である。検出面からの深さは 0.25 mを測る。主軸方向は W-1°-S とほぼ正方位に直交する。周囲には先行する SX19074 が広範に存在する。

遺物 土師器甕 (212 ~ 216)・坏 (217) が出土した (Fig.114)。全体的に遺物を多量に包含しており、その遺存状態も良好である。

土師器甕 (213 ~ 217) 212 は口縁部を欠くが、長胴甕の体部の中央～下方の資料となろう。内外面がハケ調整されるが、体部下外面は横位のヘラケズリが施され

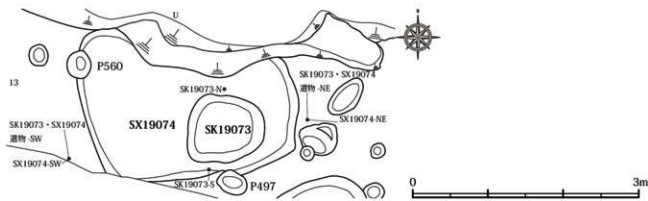


Fig.111 SK19073・SX19074 平面 (S=1/50)



- |   |                                     |
|---|-------------------------------------|
| 1 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロック・礫を少量含む        | 5 褐色シルト (10YR4/6) 黒褐色シルトが混在 礫を含む    |
| 2 暗褐色シルト (10YR3/3) 地山ブロックを多量含む 炭化物・礫を含む | 6 暗褐色細砂 (10YR3/4) 粘性強               |
| 3 暗褐色シルト (10YR3/3) 地山ブロックを含む 炭化物・礫を少量含む | 7 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強、地山ブロック・炭化物を含む |
| 4 暗褐色シルト (10YR3/3) 地山ブロック・礫を含む          | 8 黄褐色細砂 (10YR5/6) 粘性強、黒褐色土を少量含む     |

Fig.112 SK19073・SX19074 土層断面 (S=1/50)

る。213～216は全体的に粗いハケで調整される。214は口縁部端部をやや上方へ積み上げられ、頸部の屈曲が強く、底部は上げ底である。215は口縁部上端に明瞭な面を有し、口縁部内面には僅かに凹みを観察できる。体部内面に施されたハケはやや細かく、外面とは異なる工具が使用されたものと考えられる。216は口縁部端部が上方へ直立するように屈曲している。

**土師器環 (217)** 小型で平底の環である。口縁部は直線的に外方へ開く。口縁部端部はやや内傾する。

**時期・性格** 出土遺物の特徴から、9世紀の所産であると考えられる。遺物は良好に復元されるものが多かったが、その出土状況は破片資料が万遍なく分布し、特に上層に集中するものであった (Fig.113)。周囲のSX19074からも土師器環が良好に出土しており、SK19073出土品とほぼ同レベルで近接しているが、SK19073はSX19074を明確に掘り込んで造られており、別遺構となる。

**【土坑状遺構 SX19074 (Fig.111・112)】**

**重複** SX19074→SK19073, P497・560。

**平面・規模** 北部を水槽升、南西部を既存建物によって深く掘乱される。長軸5.5m、短軸4.2mを測る。方形状プランの北西・南東コーナーが遺存しているため、概ねこの規模に落ち着くものと見られる。検出面からの深さは0.05～0.1m程度である。主軸はW-13°-N方向を向く。

**遺物** 土師器環 (218～220)・甕 (221) が出土した (Fig.114)。

**土師器環 (218～220)** 218・220は口縁部端部を僅かに上方へ積み上げ、体部のハケ調整は磨滅のために不鮮明である。219は口縁部端部が明瞭に積み上げられ、口縁部外端には面を有する。この面の中央部は凹線状に窪められる。体部は下方に向けて薄手に作られる。

**土師器甕 (221)** 底部のみを残す資料であるが、体部は底部から上方に向けて直線的に立ち上がり、円筒状を呈するものと考えられる。器面の調整は体部外面をタテハケ、内面をヨコハケで調整する。底部下端にはハラケズリが観察でき、内外面を円周に沿うように施される。

**時期・性格** 9世紀のSK19073に先行する。その他の後出するピットからは、時期の詳細を決定する遺物の出土はない。SX19074はその出土遺物の特徴から、SK19073とほぼ同時期、若しくはやや遅る時期に比定できよう。遺物の出土状況については非常に注目すべき点があり、土坑の中央部からやや南西寄りの箇所において、2個体の土師器環 (219・220) が口縁部を上方に向けて出ている (Fig.113)。更に横断面の観察では、体部下半が失われ、打ち欠いて据え置かれたような状況であった。SX19074については、その形状及び規模から竪穴住居の可能性が考えられる。そうすると、特徴的な出土状況を示す土師器環の付近には竈が存在し、これらの遺物が燃焼部における支脚となる可能性が想定でき

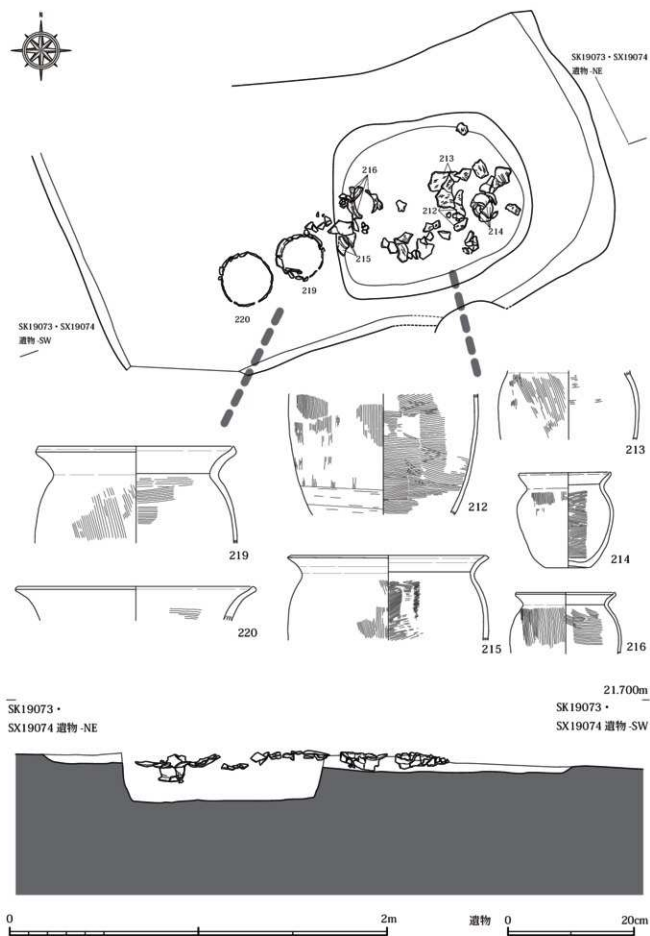
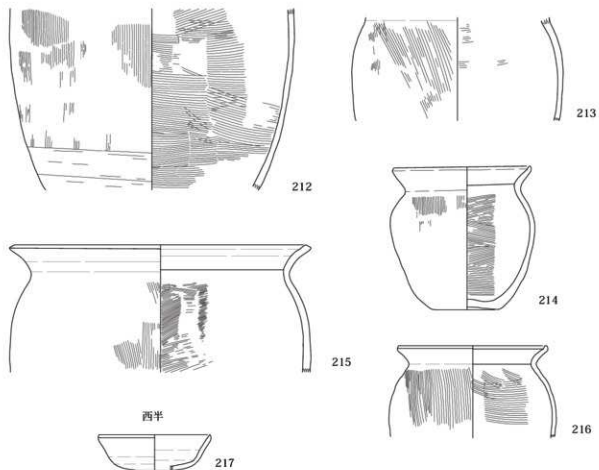


Fig.113 SK19073・SX19074 遺物出土状況 (S=1/20 遺物：S=1/6)

SK19073



SX19074

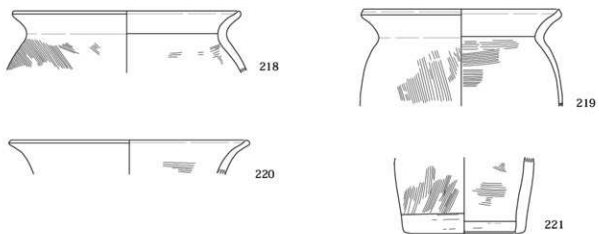


Fig.114 SK19073・SX19074 出土遺物 (S=1/4)

る。土師器甕の体部上半以上を残し、口縁部上面のレベルをほぼ同一になるように設置されている。但し、遺物の出土付近を含め、SX19074に明確な焼土や炭化物等は認められず、加えて前提となる竈のプランの検出にも至らなかった。特徴的な出土状況が見られる土坑であるが、現状ではその性格付けが困難であるため、類例の増加を待つこととし、今後の検討材料としたい。

#### 【土坑状遺構 SX19017 (Fig.115・116)】

重複 SH19018, P682・685・686→SX19017

平面・規模 長軸2.8m, 短軸1.8m, 検出面からの深さ0.35～0.5mを測る。主軸方向はN-35°-Eである。大型の円形状の遺構で、西部中央部がくびれ、南東部が東側へやや張り出す形状をなす。

遺物 土師器甕 (222～224・227・229・230・233)・甕 (225)・高環 (231), 須恵器壺 (226)・提瓶 (234)・

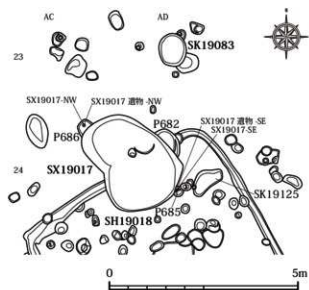
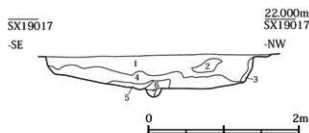


Fig.115 SX19017 平面 (S=1/100)



- 1 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性弱い
- 2 黒褐色細砂 (10YR2/3) 5が混在
- 3 黄褐色シルト (5/6) 黒褐色土を少量含む
- 4 黒色シルト (10YR2/1) 地山ブロックを少量含む
- 5 黄褐色シルト (10YR5/6) 粘性強い
- 6 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロックを含む
- 7 黒色シルト (10YR2/1) 粘性強い

Fig.116 SX19017 土層断面 (S=1/50)

長頸瓶 (228), 紡錘車 (232) が出土した (Fig.118)。全て上層からの出土であるが、弥生土器甕 (237)・壺 (235)・高環 (236・238) は混入遺物である。多くは重複する SH19018に関連するものと考えられる。

土師器甕 (222～224・227・229・230・233) 222は把手の大部分が剥落している。丸底の甕で、体部外面にはハケ調整が密に施される。口縁部端部は丸みを帯び、僅かに積み上げられる。胎土には金雲母を含む。223は体部下半のみを残し、外面には密なハケ調整が観察できる。224は口縁部が長く、体部とはくの字状に直線的に交わる。口縁部端部には内傾面を有し、体部内外面のハケは非常に細かいことが特徴である。227は頸部の屈曲が強い。口縁部端部は強く積み上げられ、口縁部外端は拡張して明瞭な面をもつ。229の底部形状は丸底で、体部外面には煤が付着している。磨滅のため、ハケ調整は僅かに痕跡として認められる。230は口縁部端部を僅かに上方へ積み上げられ、233の積み上げは明瞭である。土師器甕 (225) 口縁部と底部を欠く資料である。体部は円筒状に直立し、把手を有する。把手は緩やかに上方へ向けて湾曲する。

土師器高環 (231) 口縁部の外反が強く、開きの早い皿状の環部を有する。口縁部外面はやや凹む。脚部との接合部で剥落しており、磨滅によって不明瞭であるが、外面にはヨコハケ調整が一部残る。

須恵器壺 (226) 口縁～頸部を欠き、肩部を残す資料である。底部が剥落しているため、高台の有無は不明である。壺と捉えたが、234とは接合しないものの、胎土の質や器壁の厚さ等が類似しているため、提瓶になる可能性もある。234はサブトレンチからの出土品であるが、サブトレンチ設定箇所と226の出土位置は乖離するものではない。

須恵器提瓶 (234) 体部は球形を呈し、肩部には強く屈曲する耳が付帯する。耳は鉤状を呈し、先端部が尖る。

須恵器長頸瓶 (228) 口縁部は剥落しているが、長頸瓶になるものと考えられる。肩部の張り出しが強い。外面は頸部と体部との境が凹線にて区別される。底部形状は平底である。

紡錘車 (232) 土師質で、直径3.5cmの円形状を呈する。中央部が0.6cm程度窪められ、そこに穿孔される。孔径は0.4cmを測る。

弥生土器甕 (237) 受け口甕で、頸部の屈曲が強い。口縁部端部の立ち上がりは明瞭で、ほぼ直立し、口縁部に外端面を形成する。古墳時代初頭に属する SH19018との関連性が高いものと考えられる。

弥生土器壺 (235) 小型の壺である。底部形状はほぼ

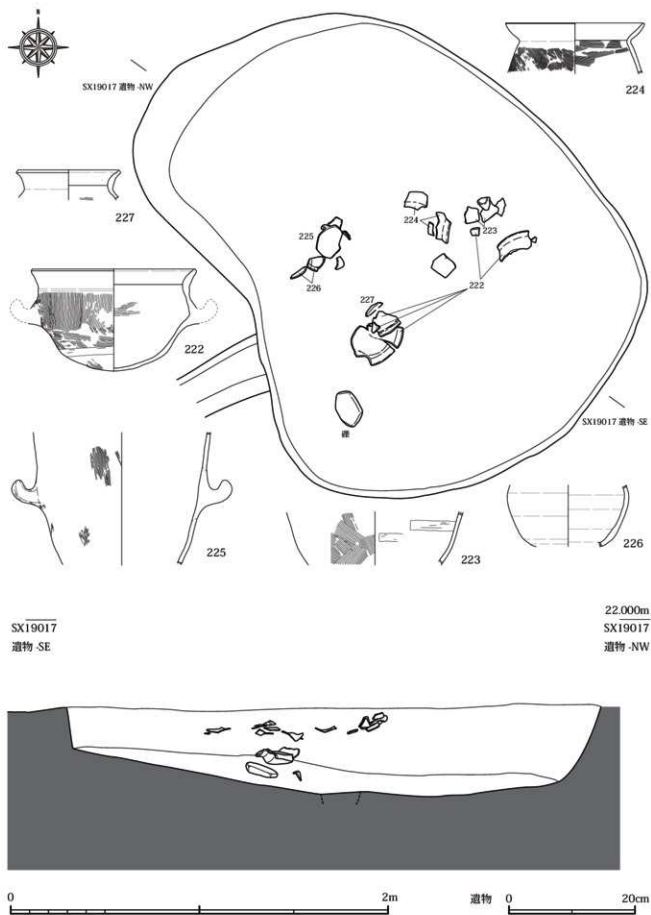


Fig.117 SX19017 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)

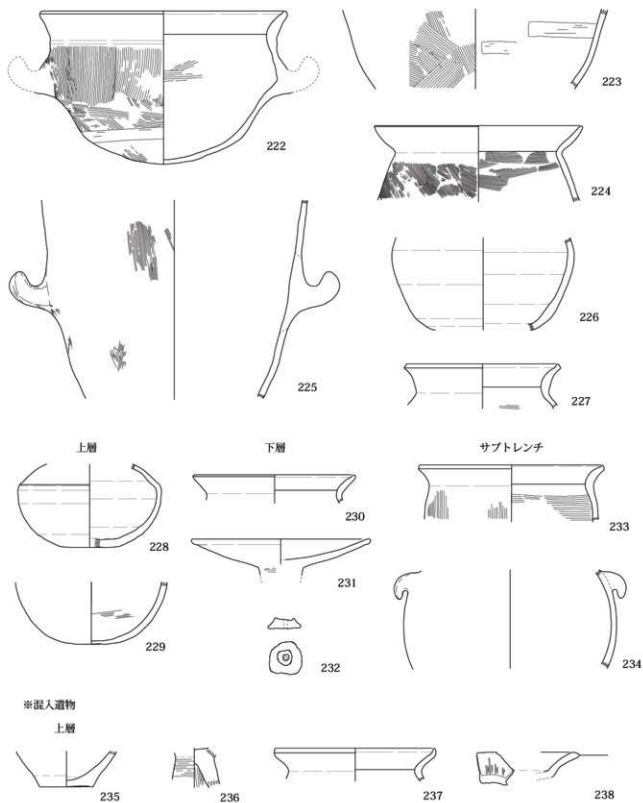


Fig.118 SX19017 出土遺物 (S=1/4)

平底であるが、僅かに上げ底される。

**弥生土器高坏 (236・238)** 236 は外面が 10 条以上の  
縞直線文で裝飾され、内面には絞り痕が密に観察できる。  
238 は有稜高坏である。強く内反する坏部上段のみ  
遺存する資料で、口縁部上端に明瞭な面を有する。内外  
面にタテヘラミガキ調整が施されるが、磨滅によってほ  
ぼ失われている。外面は黒変している。坏部が浅い段階  
のものであると推測され、SH19018 を遡る弥生時代後  
期の山中式前半～中期に比定できる。

**時期・性格** 古墳時代初頭の SH19018 を切り、同じく  
先行する P682・685・686 の時期の特定には至ってい  
ない。遺構の中央部を中心に遺物がまぎらまぎら出土した  
(Fig.117)。多くが上層からの出土であるが、227 は下  
層からの出土で、222 の出土位置は上層と下層の境とな  
る。出土状況に有意な規則性はない。出土遺物は 8 世紀  
後半～9 世紀の年代観が考えられ、その他の古代遺構の  
時期と符合する。当該出土遺物の中では、234 が異質で  
あり、本来であれば 6 世紀～7 世紀前半頃に遡る資料で  
あると考えられる。但し、226 と同一個体である可能性  
があり、その場合は一括性の高いものとなる。別の古代  
の遺構と重複する可能性も低く、234 が 8 世紀後半～9  
世紀以降であることを示す資料となるのかもかもしれない。

#### 【土坑墓 SX19035 (Fig.119)】

**重複** P219・221, ビット (遺物なし) → SX19035 →  
ビット (遺物なし)。

**平面・規模** 不整形の遺構で、北部は東西へ広がる。全  
体の規模は長軸 3.7 m, 短軸 1.3 m を測り、北部では短  
軸となる東西方向は 2.6 m にまで広がる。調査時点では  
認知せずに一括して掘削しているが、北部の SK19129  
と南部の SX19035 で別遺構になり、楕円形状を呈する  
SX19035 が土坑墓になる可能性が高いものと判断され  
る。SX19035 の規模は、長軸 2.9 m, 短軸 1.3 m, 検  
出面からの深さ 0.25 m を測る。主軸は N-14°-W 方向  
を向く。SK19129 は、検出面からの深さ 0.1～0.2 m  
とやや浅い。

**遺物** 土師器甕 (240～245)・坏 (249)・皿 (250・  
251), 黒色土器椀 (246～248), 須恵器环 (239) が  
出土した (Fig.122)。

**土師器甕 (240～245)** 240 の底部は丸底と平底の中  
間のような形状を呈し、体部は球形形状を呈する。240・  
241 は頸部の屈曲が強く、口縁部端部は丸みを帯び、上  
方へやや摘み上げられる。242・243 は頸部の屈曲が緩  
やかであり、口縁部端部の摘み上げは僅かである。243  
は口縁部外端面に凹線状の窪みが観察できる。244 は頸  
部の屈曲が強く、口縁部外端の面が明瞭である。243 と  
同様、この面が凹線状に僅かに窪む。直径 0.5cm の礫を

包含する。245 は頸部～体部上方を残す資料である。長  
胴タイプの甕になると見られ、粗いハケ調整される。

**土師器坏 (249)** 小型の坏である。口縁部は直線的に  
外側へ開き、端部はやや内傾する。口縁部内面はやや凹  
む。

**土師器皿 (250・251)** 250 は口縁部が緩やかに立ち  
上がり、251 は口縁部が短く折り曲げられる。250 は口  
縁部のヨコナデが強く、内面が僅かに凹む。251 は金雲  
母を多量包含する。

**黒色土器椀 (246～248)** 全て内面全体が黒化処理  
される内黒である。口縁～体部が直線的に外反する。  
246・247 は口縁部内面がやや凹む。247 は無高台の平  
底であることが確認でき、内外面のヘラミガキは密に施  
される。

**須恵器环 (239)** 高台はやや低く貼り付けられ、底部  
端部は接地する。

**時期・性格** 下面にはビットが数基埋没し、その他に  
も重複するビットが存在するが、時期の分かるものは  
ない。南部下層において、下面に埋没するビットとの  
境から、239・240 が割れて重なるように出土している  
(Fig.120)。出土遺物の多くはこの箇所からの出土であ  
り、9 世紀代に比定できる。239 は猿投窯編年の MN32  
～K14 窯式の産物である。加えて 247 の出土から、9  
世紀前半の年代観が考えられる。比較的多量の遺物の出  
土に恵まれ、黒色土器椀が 3 個体出土しており、非常に  
注目される。

#### 【ビット P142 (Fig.119)】

**重複** P57 → P96。

**平面・規模** 直径 0.4 m を測り、楕円形状を呈する。検  
出面からの深さは 0.2 m である。プランが南西～南東方  
向に不整に広がるが、これは P142 の柱の抜き取り痕と  
考えられる。

**遺物** 土師器甕 (252～255)・坏 (256)・高坏 (257),  
須恵器壺 (258) が出土した (Fig.122)。

**土師器甕 (252～255)** 252 は底部の完形に近い資料  
である。底部形状は丸底で、体部内面のハケ調整は密に  
施される。体部内面下方の調整は不明であるが、ヘラケ  
ズリされているものと見られる。253・254 は内面が細  
かいハケ調整されるのに対し、外面は粗い。異なる工具  
が使用されていると考えられる。254 は頸部の屈曲が強い。  
口縁部端部は丸く取められ、僅かに摘み上げ処理さ  
れる。255 は磨滅のために調整が痕跡化している。体部  
の膨らみが強い。口縁部端部はやや面取りされ、外端面  
を形成する。

**土師器坏 (256)** 平底である。口縁～体部は直線的に  
開き、口縁部端部を丸く取める。



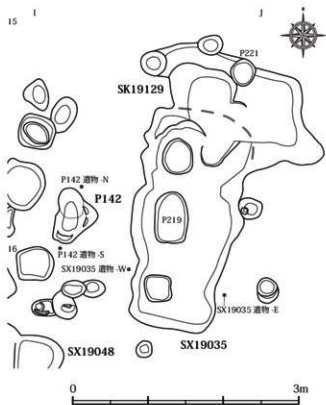


Fig.119 SK19035・SK19129・P142 平面 (S=1/50)

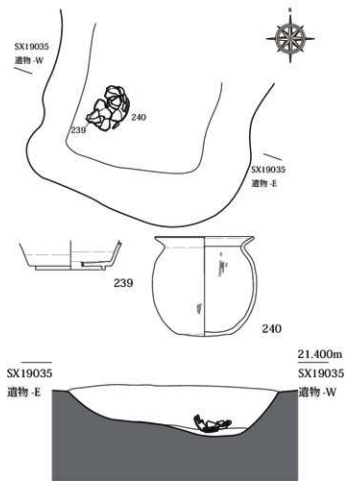


Fig.120 SX19035 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)

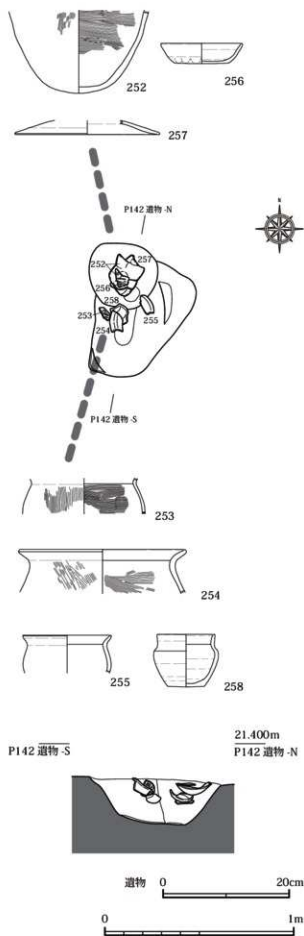
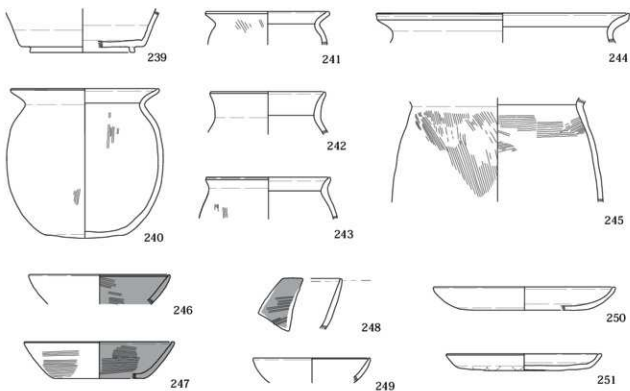


Fig.121 P142 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)

SX19035



P142

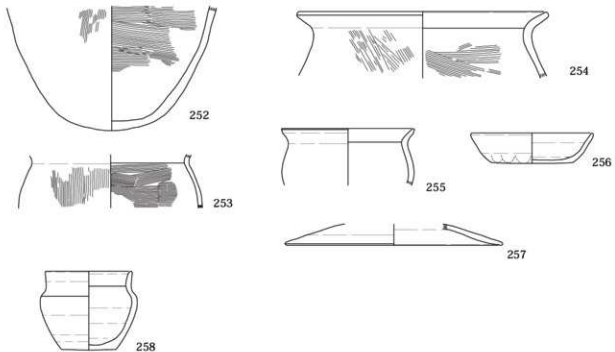


Fig.122 SX19035・P142 出土遺物 (S=1/4)

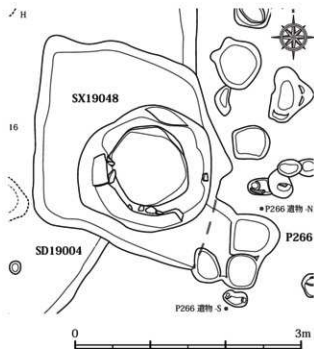


Fig.123 SX19048・P266 平面 (S=1/50)

脚柱部が脱落する。脚部端部内面はやや凹む。  
須恵器壺 (258) 小型の壺で平底である。口縁部は短く立ち上がり、緩やかに外反する。肩部外面の一部には自然軸が観察できる。

時期・性格 単独のピットから豊富な出土品が得られた。抜き取り痕と考えられる痕跡を検出したため、柱の存在が大いに想起されるものの、建物等にまとまるものではない。遺物は全て上層からの出土であり、全体的に9世紀の特徴を留める (Fig.121)。抜き取り痕から出土した258は、猿投窯編年のNN268 窯式期に相当し、9世紀前半の年代観である。P142の廃絶時期を示す資料であるが、その他の遺物との時期差は殆どないものと思われる。なお、関係は不明だが、P142の東側に存し同時期に帰属するSX19035とは0.68 m離れる。P142及びその抜き取り痕は同色の黒褐色土 (10YR3/1) で埋没し、SX19035はこれに地山ブロックを含む。

【土坑状遺構 SX19048 (Fig.123)】

重複 SD19004, ピット (遺物なし) → SX19048 → SE19025

平面・規模 隅丸方形状を志向する遺構であり、北東コーナーのみ曲がりの開きが大きい。東西及び南北共に2.5

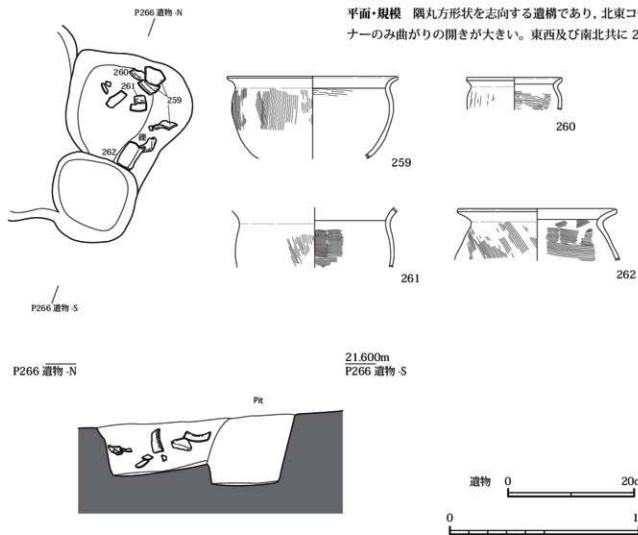
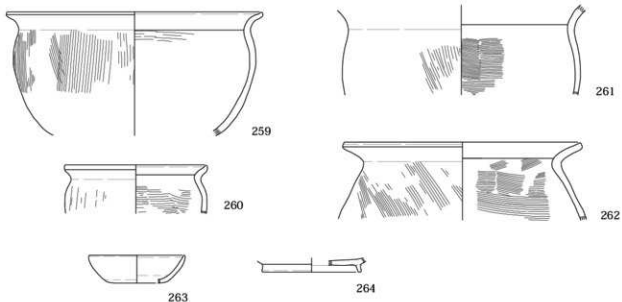
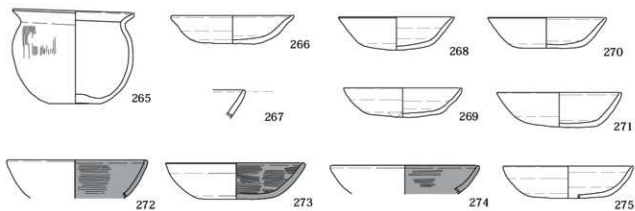


Fig.124 P266 遺物出土状況 (S=1/20 遺物:S=1/6)

P266



P342



P461

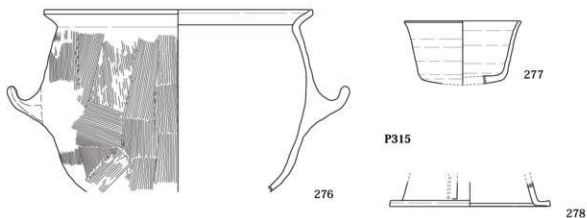


Fig.125 P266・315・342・461 出土遺物 (S=1/4)

mを測り、主軸方向はN5°-Wを向く。検出面からの深さは0.2mを測る。中央部を後世のSE19025によって広く掘乱されている。

**遺物** 土師器甕が出土しているが、図化の対象となる遺物はなかった。

**時期・性格** 大型の土坑状の遺構である。弥生時代後期～古墳時代初頭のSD19004を切り、中世のSE19025に先行する。出土遺物の特徴から古代に属するのは間違いないと言えるが、時期の絞り込みは困難である。他の多くの古代遺構と同様、8世紀後半～9世紀に帰属する可能性が考えられるが、確証はない。性格も不明である。なお、すぐ東側にあり8世紀後半～9世紀のP266と同色・質の黒褐色土（10YR3/1）で埋没する。

#### 【ピット P266 (Fig.123)】

**重複** ピット（遺物なし）→P266。

**平面・規模** 直径0.7mを測り、円形状を呈する。但し、南西部が方形に収斂するため、本来はこの形であったのかもわからない。検出面からの深さは0.3mを測る。

**遺物** 土師器甕（259～262）・坏（263）、須恵器环（264）が出土した（Fig.125）。

**土師器甕（259～262）** 全体的に粗いハケ調整が施される。259は頸部の屈曲が緩やかで、体部に向けて丸みを帯びる。259・260・262は口縁部端部を僅かに上方へ積み上げる。259・260の口縁部端部は丸みが強く、260は口縁部内面のヨコナデが強い。261は体部内面のヨコナデが細かく、外面とは異なる工具を用いて調整されたものと考えられる。262は口縁部が長く、体部とはくの字状に直線的に交わる。頸部の屈曲が強く、口縁部外端面は明瞭である。口縁部外端面には僅かに凹みが認められる。

**土師器环（263）** 小型の坏で、口縁部はやや内湾気味に開く。口縁部内面には僅かな凹みが観察できる。

**須恵器环（264）** 底部のみの資料である。貼付高台で、高台は高い。底部端部は接地する。

**時期・性格** 掘立柱建物等を構成するものではない単独のピットであるが、多くの遺物が出土した。遺物はピットの掘り方の縁辺部に沿うように出土した（Fig.124）。出土遺物は8世紀後半～9世紀のものである。先行するピットまたは遺物は全く出土していない。前述したSX19048とは0.3m離れるが、同色且つ同質の埋土で埋没しており、関連するものと考えられる。P266の北側には9世紀代のSX19035及びP142が近接し、概ね同時期の遺構が集中する様相を示す。

#### 【ピット P342 (Fig.126)】

**重複** SH19015、P568→P342。

**平面・規模** 長軸0.6m、短軸0.25～0.4mを測る楕

円形状のピットである。段掘りされ、検出面からの深さは中段部分が0.2m、底面までは0.3mを測る。

**遺物** 土師器甕（265）・坏（266～271・275）、黒色土器碗（272～274）が出土した（Fig.125）。

**土師器甕（265）** 小型で平底の甕である。歪みが生じており、底部はやや厚みをもつ。口縁部端部をやや上方へ積み上げる。体部外面下半には煤が付着している。

**土師器环（266～271・275）** 全て平底である。266は口縁部の外反が強い。268・270・271・275は外反する口縁～体部の直線性が高い。266・270・271は口縁部内面がやや凹む。口径は12cm～13cm台に落ち着く。

**黒色土器碗（272～274）** 全て内面のみ黒化処理される内黒である。口縁部は直線的に外反し、口縁部内面には凹みが観察できる。272・273はミガキが密に施される。273は平底で無高台であることが分かる。

**時期・性格** P342は建物等の一部を構成するものではないが、土師器と黒色土器が一括して出土しており、非常に興味深い。遺物は破片状態としての出土であるが、遺構全体に万遍なく分布しており、その出土位置はやや上位となる（Fig.127）。一括して廃棄されたものと考えられる。遺物は9世紀前半～中葉の産物であると判断される。267～271・275は橙～赤褐色の胎土で作られ、黒色土器（272～274）と共に都城の影響が色濃く反映されているものと考えられる。対して、266は白味の強い浅黄褐色の胎土であり、いわゆる在地産のものである。これらが混在する点で、大変貴重な資料となる。埋土の主体は黒褐色土（10YR3/1）に地山ブロックを多量含む様相であり、古墳時代初頭のSH19015の周壁溝を切る。同じく先行するP568の帰属時期は不明である。同時期に所属するSB19095の西側において、これと3.2m隔絶する。

#### 【ピット P461 (Fig.128)】

**重複** なし。

**平面・規模** 直径0.45mを測り、円形状を呈する。2段に掘削され、検出面から中段箇所までの深さは0.08m、底面までの深さは0.11mを計測する。

**遺物** 土師器甕（276）、須恵器环（277）が出土した（Fig.125）。

**土師器甕（276）** 把手を付帯する甕である。胎土には直径0.5cm程度の礫を含み、体部外面一部には煤が付着する。体部外面はハケ調整されるが、ハケは非常に細かい。口縁部端部は積み上げられ、全体的に丸みを帯びる。口縁部内面はやや凹む。

**須恵器环（277）** 無高台の坏身である。口縁～体部は直線的に外反する。口縁部端部は丸く収める。

**時期・性格** 前述したP142・266・342と同様、掘立

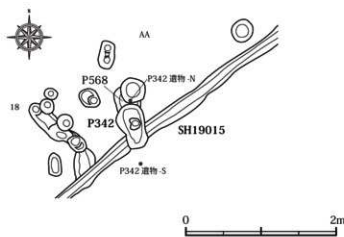


Fig.126 P342 平面 (S=1/50)

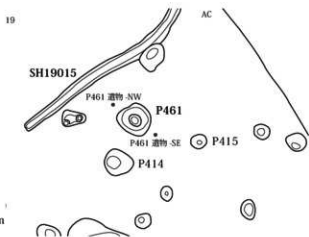


Fig.128 P461 平面 (S=1/50)

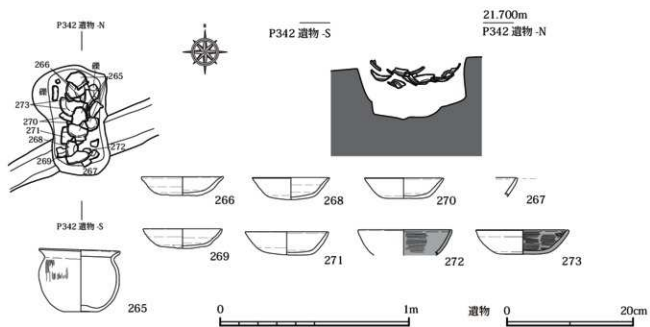


Fig.127 P342 遺物出土狀況 (S=1/20 遺物:S=1/6)

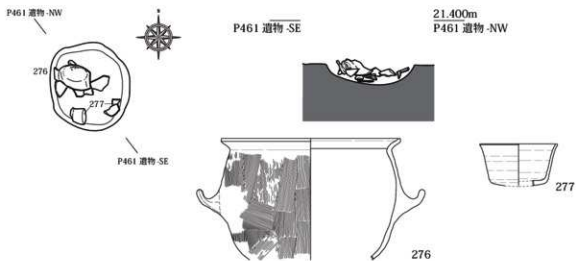


Fig.129 P461 遺物出土狀況 (S=1/20 遺物:S=1/6)

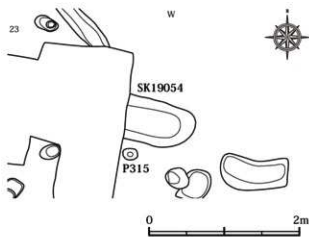


Fig.130 P315 平面 (S=1/50)

柱建物や柵列、竪穴住居等を構成せず、単独のピットであり、破片状態の出土ではあるものの、ピットの全面から土師器及び須恵器が良好に出土した (Fig.129)。出土遺物の年代観は、概ね 8 世紀後半～9 世紀に求められる。埋土は主に黒褐色土 (10YR3/1) で埋没する。9 世紀前半～中葉の SB19095 から南方向へ 2.8 m の距離をもつ。

【ピット P315 (Fig.130)】

重複 なし。

平面・規模 直径 0.2 m を測り、円形状を呈する小振りのピットである。検出面からの深さは 0.15 m を計測する。

遺物 須恵器円面硯 (278) が出土した (Fig.125)。

須恵器円面硯 (278) 脚部一部のみを留める資料で、底径 17 cm とやや小振りである。脚部外端に明瞭な面を有し、この面にはやや凹みが認められる。大部分が欠落しているものの、方形の透かしをするものと見られる。

時期・性格 破片資料であるが、須恵質の円面硯が出土した。その他の出土遺物は、土師器細片のみである。埋土は黒褐色土 (10YR3/1) が主体となる。辛うじて攪乱を免れたが、すぐ北側に所在する SK19054 は遺物の出土がなく、詳細は不明である。

【溝 SD19122 (Fig.131・132)】

重複 SD19124 → SD19122 = SD19123, SK22010 → ピット (遺物なし)。

平面・規模 検出した長さは 3.8 m で、幅は 0.75 m を測り、中央部では 1.5 m にまで膨らむ。主軸方向は W-26° S である。検出面からの深さは、西部で 0.05 m と浅いが、中央部で段掘りされ、東に向けて深さを増す。東部における深さは 0.5 m にまで達する。中央～東部を攪乱される。第 22 次調査 2 区へと延長し、SK22010 に繋がるものと考えられる。西部は忽然と途切れるが、埋土の様相からは SD19123 に接続する可能性も考えら

れる。SD19123 は不定形で、長軸 2.1 m、短軸 1.3 m を測る。検出面からの深さは、SD19122 西部とほぼ同レベルを示す。

遺物 土師器甕 (279)、土鍾 (280) が出土した (Fig.133)。土師器甕 (279) 口縁部のみ遺存する資料で、口縁部端部はやや上方へ積み上げられる。

土鍾 (280) 棒状の形状を示し、ほぼ完形品であると考えられる。胎土は精製される。直径 0.4 cm の円孔が穿かれ、直線的に貫通する。穿孔位置は中心である。

時期・性格 遺物の出土が限られるため、得られる情報は乏しいが、同一遺構と考えられる SK22010 は 9 世紀の所産である。SD19123 からは土師器の細片資料が得られただけである。また、7 世紀中葉～後半の SD22001 に繋がる SD19124 を切る。

【土坑 SK22010 (Fig.131・132)】

重複 P45 → SK22010 = SD19122 → ピット (遺物なし)。

平面・規模 長軸 1.7 m、短軸 1.3 m を測り、SD19122 を含めた全長は 5.5 m を計測する。底面は複数回段掘りされ、検出面からの深さは 0.3～0.68 m と西方向へ向けて深まり、SD19122 の東部底面と近似した標高を測る。東部はやや方形に収斂する。

遺物 黒色土師碗 (281) が出土した (Fig.133)。図化には至っていないが、他にも土師器甕や須恵器が出ている。

黒色土師碗 (281) 内面ののみ黒化処理が施される。高台は内面端部が部分的に剥落している。

時期・性格 出土した 281 や土師器甕の特徴は 9 世紀代に帰属するものと考えられる。重複するピットからは、時期の絞り込みに繋がる遺物の出土はない。SD19122 と合わせ、長楕円形状の遺構となり、底面は階段状に凹凸を形成するが、遺構の性格は不明である。

【溝 SD19124 (Fig.131・132)】

重複 SD19124 = SD22001 → SD19122。

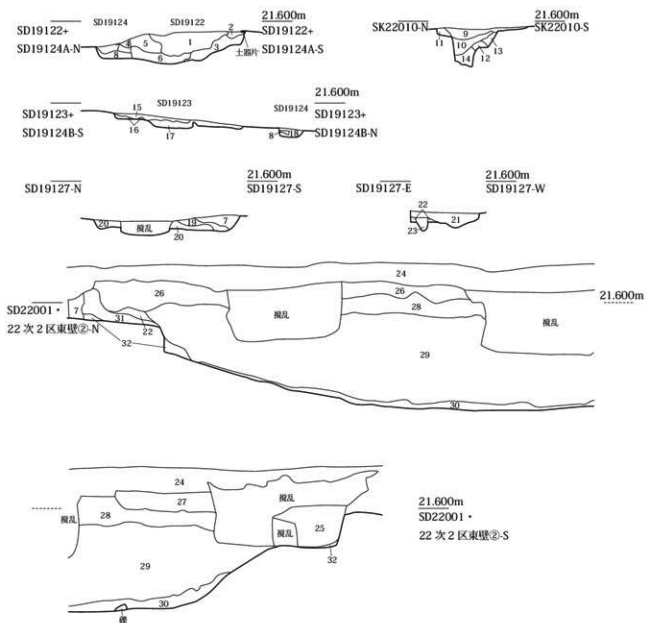
平面・規模 検出した規模は、長さ 5.3 m、幅 0.3～1.0 m を測り、細長い溝状の遺構として遺存する。底面はやや不均質で、検出面からの深さは 0.12～0.25 m を計測する。西部は北方向に湾曲しながら途切れ、東部は第 22 次調査 2 区へ延びて SD22001 に繋がるものと考えられる。中央部及び南東部が一部攪乱される。

遺物 土師器及び須恵器が出土したが、図化の対象となる遺物はない。

時期・性格 出土遺物は古代の産物であるが、時期の詳細は不明である。9 世紀に比定でき得る SD19122 に先行する。同一の遺構である SD22001 は 7 世紀中葉～後半に埋没したのと考えられる。







- 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い、地山ブロックを少量含む
- 2 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロックを少量含む
- 3 褐色シルト (10YR4/4) 粘性強い
- 4 褐色シルト (10YR4/6) 礫を含む、黒褐色土を少量含む
- 5 褐色シルト (10YR4/6) 細砂を含む
- 6 黒褐色シルト (10YR2/3) 礫を少量含む
- 7 黒褐色シルト (10YR2/2) 礫を少量含む
- 8 黒褐色粗砂 (10YR2/2) 礫を含む、黒褐色土を少量含む
- 9 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロック、炭化物、焼土を微量含む
- 10 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロックを少量含む、焼土を微量含む
- 11 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロックを多量含む、炭化粒を微量含む
- 12 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロックを多量含む
- 13 濃い黄褐色シルト (10YR5/4) 黒褐色シルト (10YR3/2) を少量含む
- 14 濃い黄褐色シルト (10YR5/4) 黒褐色シルト (10YR3/2) を多量含む
- 15 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い
- 16 褐色シルト (10YR4/4) 細砂を含む
- 17 褐色細砂 (10YR4/6) 黒褐色土を多量含む

- 18 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い、礫を多量含む
- 19 暗褐色シルト (10YR3/4) 粗砂・礫・炭化物を含む
- 20 黒褐色シルト (10YR2/2) 礫を多量含む
- 21 黒褐色シルト (10YR2/2) 炭化物を含む
- 22 黒褐色シルト (10YR3/2) 礫を少量含む
- 23 黒褐色シルト (10YR2/2) 粗砂を含む
- 24 灰黄褐色土 (10YR5/2) 表土
- 25 褐色土 (10YR4/4) 締まり強い、粗砂を多量含む
- 26 暗褐色土 (10YR3/3) 礫を少量含む
- 27 暗褐色土 (10YR4/4) 礫を多量含む、炭化物を少量含む
- 28 黄褐色シルト (10YR5/6) 礫を多量含む、炭化物を少量含む、下部には地山ブロックがやや集中する
- 29 黒褐色シルト (10YR2/2) 礫・炭化物を多量含む、下部は黒味がやや強い
- 30 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを多量含む
- 31 黒褐色シルト (10YR2/3) 礫を多量含む、地山ブロックを少量含む
- 32 明黄褐色シルト (10YR6/8) 粘性強い、地山

Fig.132 SD19122～124・127・22001・SK22010・22次2区東壁②土層断面 (S-1/50)

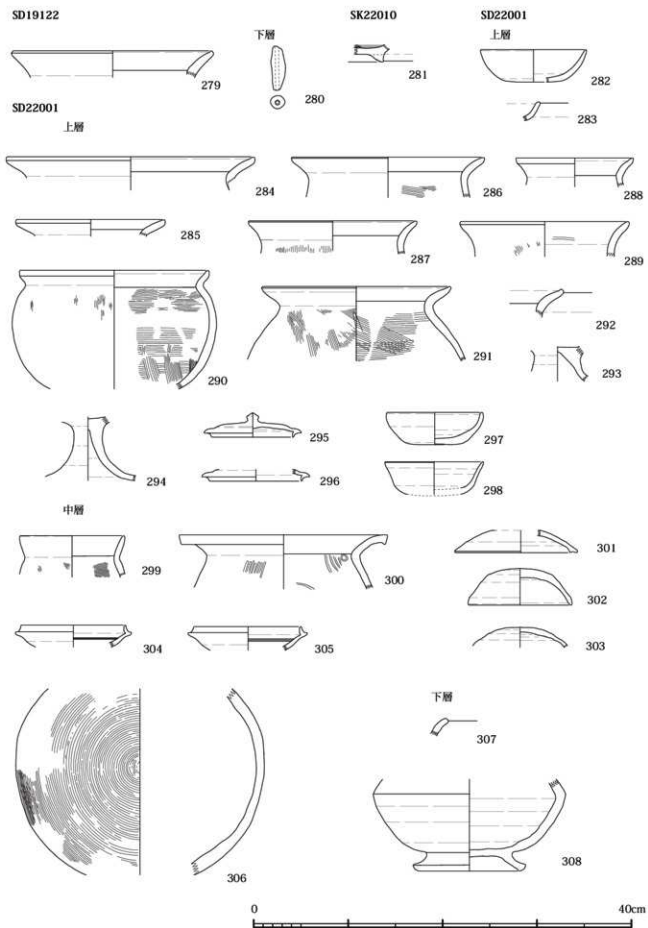


Fig.133 SD19122・127・22001・SK22010 出土遺物 1 (S=1/4)

※混入遺物

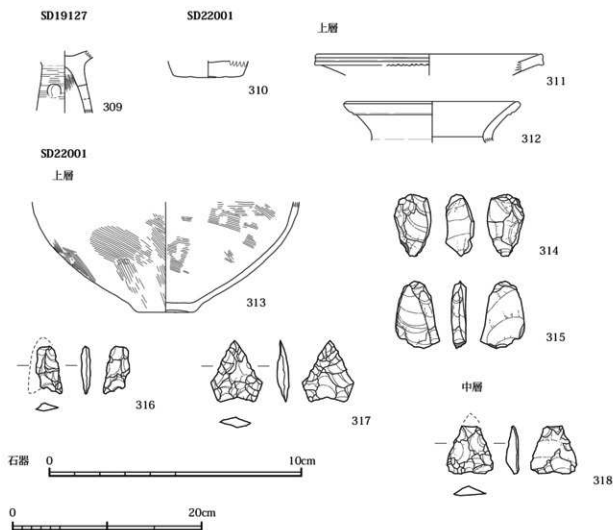


Fig.134 SD19122・127・22001・SK22010出土遺物2 (S=1/4)

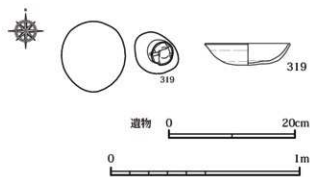


Fig.135 P37 遺物出土状況 (S=1/20 遺物:S=1/6)

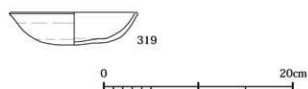


Fig.136 P37 出土遺物 (S=1/4)

【溝SD19127 (Fig.131・132)】

重複 SD19127 = SD22001 →ピット (遺物なし)。

平面・規模 全体的にプランは不整であり、東西 6.1 m、南北 1.3 ~ 6.7 m の範囲を検出した。北部を攪乱され、僅かに北側を残す。検出面からの深さは西部で 0.07 m、東部で 0.2 m を測る。SD19124 と同様東部は SD22001 に続くものと判断される。

遺物 弥生土器高坏 (309) が出土した (Fig.134)。SD22001 と同一の遺構になるため、309 は混入遺物である可能性が高い。

弥生土器高坏 (309) 外面には 14 条以上の櫛描直線文が施文され、内面には絞り痕が密に施される。3 方に円形透孔を有する。弥生時代後期～古墳時代初頭に属するものと考えられる。

時期・性格 SD22001 と同時期の 7 世紀中葉～後半の埋没が考えられる。北側で後出するピットからは遺物の出土がないため、その帰属時期は不明である。

【溝 SD22001 (Fig.131・132)】

重複 P62, ビット (遺物なし) → SD22001 = SD19124・127 → P47, P50・64 (SB22032), ビット (遺物なし)。

平面・規模 大規模に掘削された溝状の遺構である。検出面からの深さは、概ね 0.85 ～ 1.0 m で、最深部は 1.2 m と深い。南辺は大部分が遺存しているが、北辺は構造物による攪乱の影響を受け、東部のみ部分的に残る。西部を広く深く攪乱されており、検出した規模は南北 10.0 m, 東西方向は 6.4 m 程度である。前述した通り、SD19124・127 と一連の遺構を形成し、これらを合計すると東西 15.6 m に達する。東部は調査区外東方向へ延長するため、非常に大型のものとなる。なお、SD19127 は不整なプランを呈するが、本来はより南方向へ広がって SD19124 と一繋がりとなっていたものと考えられる。P664・665 とその付近に存在するビット群は、ビットというよりも、寧ろ SD19124・127 の下層が断片的に遺存しているものと考え方が妥当であろう。全形が特定できず、プランもやや不整となるが、北側のラインを繋いで計測すると、主軸は概ね W-8°-S 方向を向こう。

遺物 土師器甕 (284 ～ 292・299・307)・環 (282)・皿 (283), 須恵器甕 (300)・壺 (308)・高環 (293・294)・環蓋 (295・296・301 ～ 303)・環 (297・298) 坏身 (304・305)・提瓶 (306) が出土した (Fig.133・134)。また、縄文土器深鉢 (310), 弥生土器壺 (311 ～ 313), 石鏝 (316 ～ 318), ビエスエスキュー (314・315) の混入を確認した。これらの混入遺物については、北側に重複する構造物による攪乱付近からよく出ている。この箇所を中心とし、該当期の遺構が存在した可能性が想定される。なお、出土遺物については、上～下層と峻別して取り上げを行った。これは明確な層序をなさず、ほぼ一括の堆積状況を示す 29 層に対して人工層序を設定したものである。約 0.4 m ずつの深度で掘り下げ、上・中・下層と機械的に分類した。なお、29 層の下部には地山ブロックを多量包含する 30 層が薄く堆積し、これを最下層として扱ったが、この層からの遺物の出土はない。

土師器甕 (284 ～ 292・299・307) 284 ～ 292 は若干であるものの、口縁部端部を上方へ積み上げられる。口縁部端部に内傾面が観察できる個体が多い。284 は頸部の屈曲が強い。口縁部内面はヨコハケ調整されるが、磨滅のために痕跡と化している。289 は頸部が緩やかに湾曲する。290 は口縁部端部の内傾面が明瞭で、口縁部内面には凹みが生じている。体部は球形状に丸みを帯びる。胎土には直径 0.5 cm の礫を包含する。291 は頸部の屈曲が強く、口縁部と体部がくの字状に交わる。292 は

口縁部端部の積み上げが明瞭である。299 は小型の甕で、体部内面は細かいハケによって調整される。頸部の屈曲が弱く、口縁部端部を丸く収める。307 は口縁部外面のヨコナデが強く、器面に凹みが発生している。

土師器環 (282) 口縁～体部は外反する。底部形状は平底になるよう。

土師器皿 (283) 口縁部の一部のみを留める資料で、口縁部は短く折り曲げられる。底部に向けて屈曲が早く、皿になるものと考えられる。

須恵器甕 (300) 口縁部が外反し、頸部が強く屈曲する。口縁部端部は垂下し、口縁部外端に面を形成する。体部外面には平行に、体部内面には同心円状にタタキ調整が施される。全体的に焼きが甘い。

須恵器壺 (308) 底部の完形資料で、肩部から上方が剥落している。底部には脚部が付帯する。脚部は厚く、外側へ踏ん張るように広がる。脚部端部は上下に膨らみ、明瞭な面を形成する。肩部が外側に強く張り出して稜を作る。体部内面中央には自然軸がかかる。器面には黒斑を多く観察することができる。

須恵器高環 (293・294) 共に脚部である。293 は脚の開きが早く、比較的低脚になるものと見られる。294 はラッパ状に大きく開脚し、底部に向けて外反が強い。

須恵器環蓋 (295・296・301 ～ 303) 295・296・301 は天井部頂部に宝珠摘みを有し、302・303 は有さないタイプに分類できる。295 は天井部が一段高い膨らみをもち、天井部内面の膨らみも強い。295・296 は口縁部内面にカエリを有し、この先端は口縁部以下に突出する。296・301 は宝珠摘みを剥落し、301 はカエリの大部分が剥がれている。301 の口径はやや大振りである。302・303 の天井部は未調整である。302 の天井部の膨らみは大きく、天井部と口縁部の境界は不明瞭である。

須恵器環 (297・298) 共に小振りの形状を呈する。297 の底部は未調整で、口縁部はやや内湾気味に直立する。298 の口縁部は外反し、底部は剥落している。

須恵器坏身 (304・305) 全体的にやや小振りの坏身であり、共に底部は剥落する。口縁部の立ち上がりは低く、内傾する。内面には 2 条の沈線文が回り、口縁部と底部が区別されている。

須恵器提瓶 (306) 体部前面には回転を利用したカキメが密に施される。部分的にタタキの痕跡を残している。

縄文土器深鉢 (310) 底部の一部のみを残す資料で、ほぼ平底を呈する。

弥生土器壺 (311 ～ 313) 311 は口縁部外端面が明瞭で、この面が凹線文で装飾される。口縁部外端面下部にはキザミが施される。工具の使用により、口縁部外端面下部は波状を呈する。312 は口縁部が直線的に外反し、

頸部の屈曲が強い。口縁部外面には凸帯文が施文される。313は底部の完形資料で、内外面をハケ調整される。上げ底状の底部形状で、体部内面中央はやや膨らみをもつ。311は弥生時代中期前半の資料で、312・313は弥生時代後期～古墳時代初頭の産物である。

**石礫 (316～318)** 全てサヌカイト製で、肉眼観察では二上山産の製品である。316は逆突部片側のみ遺存し、318は先端部を欠損する。317は完形品である。

**ピエスエスキュー (314・315)** 共にサヌカイト製品の楔形石器である。肉眼観察ではあるが、二上山産であることが分かる。314は完形資料で、両端に剥離痕が生じている。315は部分的に欠損する。

**時期・性格** 9世紀後半のSB22032・P47に先行する。SD22001の南肩付近には複数基のピットが存在するが、これらはSD22001より後出する。底面にはP62等のピットが埋没するが、帰属時期や関係は不明である。308は猿投窯編年のH50窯式の産物であり、295・302・304・305等、それ以外の遺物は概ね同窯編年の117窯式期に位置付けられる。これらの結果から、人工層序による分類ではあるものの、上～中層から7世紀後半、下層からは7世紀中葉の遺物が出土し、やや時期を隔てた2時期に埋没したことが想定できる。SD19124・127・22001は、SD19127の西部が南方向へ湾曲して収斂する様相を呈している。これらの遺構の北西～西側には広く攪乱範囲が存在するため、確実に言えるものではないが、比較的良好に遺存するSD22001南肩の西側延長ライン上にはその痕跡を残さないため、SD19124・127を西限とし、この箇所では収斂の可能性が考えられる。SD22001を中心とするこれらの遺構については不明な点が多いが、SD19124・127付近を限りとして終わるのであれば大規模な水溜的な施設、これらが北方向へ湾曲していくなら古墳の周溝との可能性を考えておきたい。7世紀代に比定できる明確な遺構は唯一となり、大型の規模を誇るため、非常に注目される。

#### 【ピットP37 (Fig.131)】

**重複** なし。

**平面・規模** 直径0.2mを測り、円形状を呈する小振りのピットである。検出面からの深さは0.1mを計測する。

**遺物** 土師器環(319)が出土した(Fig.136)。

**土師器環(319)** 口縁～体部は外反が強く、口縁部端部は外側へつまみだされる。底部にはやや歪みが生じている。

**時期・性格** 出土遺物は319のみであるが、これが完形で、ピットのほぼ中央部において良好に出土した(Fig.135)。遺物の出土が限定されるものの、9世紀代に属し、すぐ北側に近接するSK22010、P35と同時期

になるものと考えられる。

#### 【道路遺構側溝SD19009 (Fig.137・138)】

**重複** SH19034, P177, ピット(遺物なし)→SD19009→P18・198 (SB19084)・546, ピット(遺物なし)。

**平面・規模** 検出した長さ11.9m、幅0.7～1.2mを測る。検出面からの深さは、0.05～0.15mを計測する。途中で途切れており、南北方向共に、その延長上に痕跡は確認できない。攪乱の影響か、ややプランが乱れる。

**遺物** 弥生土器壺(320)が出土した(Fig.140)。320は混入遺物である。他には土師器片が僅かに出土したに留まり、図化できる対象はなかった。

**弥生土器壺(320)** 底部の完形資料である。明瞭に上げ底される。底面には成形時のものと見られる板状の圧痕を観察できる。

**時期・性格** 帰属時期の特定に繋がる遺物の出土はない。古墳時代初頭のSH19034に後出し、中世のSB19084に先行する。その他、複数の遺構が重複するが、遺物が出土したピットに限っても、先行するP177からは弥生土器高坏、後出するP18からは土師器片、P546からは土師器甕(349)、灰陶陶器壺(348)が確認された程度で、弥生時代後期～10世紀前半と年代幅が大きい。道路遺構の東側側溝であり、西側側溝のSD19021・22と共に道路遺構SC19011を形成する。遺存状態によるものか、西側側溝に比較して規模が大きい。

#### 【道路遺構側溝SD19021 (Fig.137・138)】

**重複** SD19004, P122→SD19021→ピット(遺物なし)。

**平面・規模** 全体をSD19004の上面において確認した。検出した長さ4.9m、幅0.4～0.5mを測る。南部で幅0.1m程度と非常に細く掘り込みを失い、ここで途切れる。北部についても途中で途切れ、SD19009と同様、以北にその延長を検出することはできなかった。検出面からの深さは、0.05～0.08mを測る。

**遺物** 土師器の細片資料が得られたのみである。図化対象遺物の確認には至らなかった。

**時期・性格** 出土遺物からは、所属時期を判断することはできない。弥生時代後期～古墳時代初頭のSD19004を切るが、重複するピットからの有意な情報はない。形状及び主軸方向、位置関係、埋土の状況から、SD19009と対になり、南側に存在するSD19022と接続して道路遺構の西側側溝となるものと考えられる。

#### 【道路遺構側溝SD19022 (Fig.137・138)】

**重複** SD19004, ピット(遺物なし)→SD19022→P156 (SB19036), ピット(遺物なし)。

**平面・規模** 部分的にSD19004の上面に存在する。検出した規模は長さ9.1m、幅0.4～0.7mを測る。検出





Fig.138 SD19009・21・22 土層断面 (S=1/50)



Fig.139 SB19036 土層断面 (S=1/50)

※混入遺物



Fig.140 SD19009 出土遺物 (S=1/4)

面からの深さは、0.03～0.06 mと浅い。南部は調査区内で終焉するが、更に南方向へ延びるものと考えられる遺物 土師器及び須恵器の細片が出土したに留まる。実測が可能となる遺物の出土はなかった。

**時期・性格** 有意な遺物の出土はなく、帰属時期を比定することは困難である。弥生時代後期～古墳時代初頭のSD19004に後出し、古代のSB19036に先行する。SB19036は9世紀代の産物であると考えられる。北東方向に約1.1 m離れたSD19021とは一連の遺構であり、道路遺構の西側側溝であると判断される。

【道路遺構 SC19011 (Fig.137)】

**重複** SD19009・21・22の項を参照。道路の路面上には複数の遺構が存在するが、路面形状を留めないため、重複関係が不明な遺構も存在する。

**平面・規模** SD19009を東側側溝、SD19021・22を西側側溝とする道路遺構を総称し、SC19011とする。素掘りの側溝を付帯する。この2条の側溝が並行し、直線的に走行する。全体の規模は長さ15.8 mに達し、側溝の内法間の距離を測定した路面幅はほぼ9.0 mである。主軸方向はN-45°-Wを向き、正方位に対して斜位に造られている。

**遺物** SD19009・21・22の項を参照。

**時期・性格** 帰属する時期の詳細を特定できる遺物は得られず、重複する遺構との関係から、それを類推する程度である。時期を積極的に示す成果を得られなかったが、過去の調査の結果から、8世紀代に存続した可能性が高いものとされており、その見解に迫ることが妥当であろう。今回の結果からも9世紀以前に比定されることは確実である。なお、中世に至るまでには完全に整地されたものと考えられ、路面形状は不明である。

【掘立柱建物 SB19036 (Fig.137・139)】

**構成** P120・135・155・156。

**重複** SD19004, P116・117→P155, SD19022→P156。

**平面・規模** 1間×2間以上の規模を有し、掘立柱建物であると考えられる。東辺の南続きや西辺を構成するピットの検出には至らなかった。確認した規模は東西3.2 m、南北7.0 mを測る。主軸はN-41°-W方向を向ける。構成するピットの規模は、直径0.45～0.75 mとやや大振りの円形状を呈し、検出面からの深さは0.1～0.3 mを測る。P135の南～西部はやや不整に乱れ、木の根等で攪乱されている可能性もある。

**遺物** P120・135から土師器及び須恵器が出ているが、実測が可能となる遺物の出土はなかった。

**時期・性格** P155に先行するSD19004, P116・117は、弥生時代後期～古墳時代初頭の所産である。また、奈良時代に比定される道路遺構SC19011の主軸と近い数字を示すため、これとの親近性が考えられるが、P156が西側側溝のSD19022を切る。出土遺物の特徴も加味し、他の多くの古代遺構と同様、9世紀代に属するものと思われる。

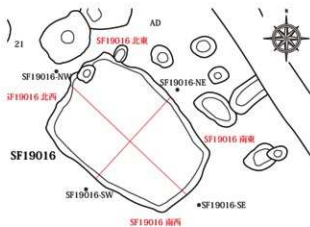


Fig.141 SF19016 平面 (S=1/50)

聞わる可能性がある。SF19016は、SC19011の路面中央部から南東へ約70m隔絶する。また、SF19016は当初、その形状から土坑墓の可能性を考えた。しかし、遺構の検出時点から、遺構の縁をなぞるように焼土及び炭化物が見られ、埋土にも比較的多く含まれていた。底面においては特に被熱の痕跡が顕著で、西部を中心に焼土が面的に広がり、炭化物がまとまって検出された(Fig.143)。また、硬化した被熱塊が中央～西部に集中する。相当期間の被熱が想定され、土器焼成坑であると考えた。被熱箇所の分布からは、中央～西部が焼成室で、炭化物や焼土塊の範囲からは複数回の焼成が考えられる。上部は削平されていると判断され、その詳細な構造は不明である。煙道的な施設の確認にも至らなかった。

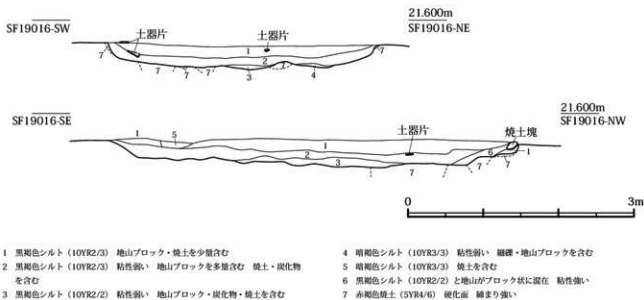


Fig.142 SF19016 土層断面 (S=1/50)

#### 【土器焼成坑 SF19016 (Fig.141・142)】

区割 北西～南東。

重複 ビット (遺物なし) → SF19016。

平面・規模 長軸 2.2 m, 短軸 1.5 m を測る。検出面からの深さは 0.2 m 程度であり、底面はほぼフラットである。主軸は W44°・S 方向を示す。楕円形状を呈するが、遺構のプランはやや波打つように不整である。

遺物 土器器の裏が数点出土しているが、全て細片資料のため、実測の対象となるものはなかった。

時期・性格 出土遺物の遺存状態が芳しくないため、得られた情報は限られるものの、古代の所産である可能性が高いと考えられる。全体的に細かいハケ調整が施され、いわゆる長岡京期以前の 7～8 世紀の段階に位置付けられよう。これに弥生時代後半～古墳時代初頭頃の遺物がやや混じる。該当期の主な遺構は 7 世紀中葉～後半の道路遺構である SC19011 とは主軸方向が直交するため、

しかし、土層断面の観察では、北西部の壁面から崩れるように流れ込む 6 層を確認しており、これが上層等の天井材の一部が崩れて混入した可能性がある。地山と黒褐色シルト (10YR2/2) を混ぜた粘質の強い土を用い、被覆させていたことが想定される。なお、出土遺物は破片資料が主となるため、焼成対象となる遺物の絞り込みは困難である。

#### 【ビット P353 (Fig.144)】

重複 なし。

平面・規模 直径 0.4 m を測り、円形状を呈する。検出面からの深さは 0.32 m を計測する。

遺物 土器器裏 (321・322) が出土した (Fig.145)。土器器裏 (321・322) 共に内外面にやや粗いハケ調整が観察でき、口縁部端部を丸く取る。321 は口縁部～体部上半の資料で、頸部の屈曲が弱い。322 は平底の底部形状で、体部外面下半はヘラケズリ調整が施される。



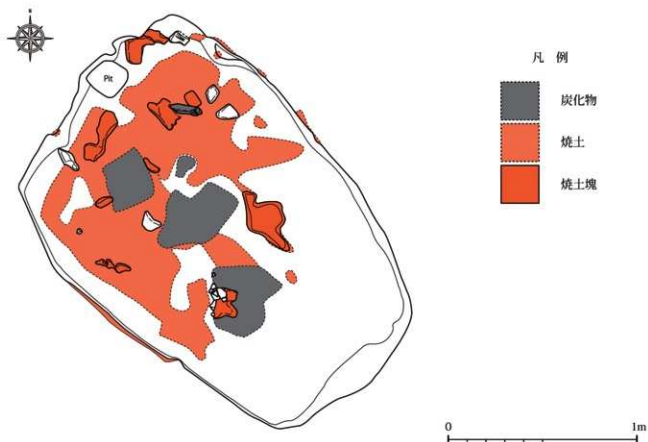


Fig.143 SF19016 出土状況 (S=1/20)

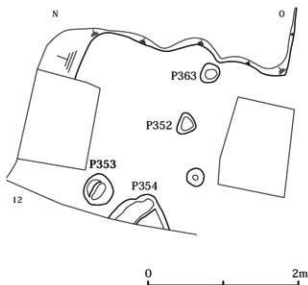


Fig.144 P353 平面 (S=1/50)

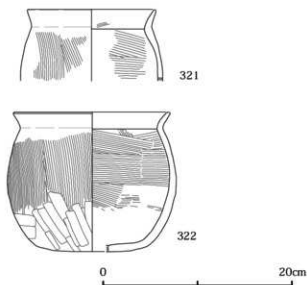


Fig.145 P353 出土遺物 (S=1/4)

**時期・性格** 既存建物北側において検出したが、建物や水槽弁による擾乱を免れている。検出範囲においては、掘立柱建物等の一部になるかどうか判断としない。比較的良好な遺物の出土が得られ、9世紀の所産であると判断される。

**【古代の遺構出土遺物】**

前に述べてきた以外にも、古代の遺構が存在する (Fig.

95)。ここでは、掘立柱建物等の建物にまとまることのないピット及び土坑から出土した古代遺物について記述する (Fig.146・147)。図化の対象となる遺物は、土師器裏を中心に黒色土器及び灰軸陶器碗、緑軸陶器碗、製塩土器等の希少なものが並び、該当期における生業の痕跡を示すものとして、非常に興味深い。

土師器甕 (323～326・331・333・335・338・340

・341・346・349) 323・324は頸部の屈曲が強く、口縁部端部を丸く収める。共に粗いハケ調整される。325は体部下方の資料である。体部は直線的に上方へ延び、長胴タイプのものになろう。内面はヘラケズリ調整される。326・331・335・338・341・346は口縁部端部を上方へ積み上げられる。326は口縁部外端面を有し、内外面に施されたハケは粗い。338は口縁部上端面及び内面にへ凹みが観察可能である。直径0.4cmの礫を含む。340は平底で内面のハケ調整が細かい。胎土には、直径0.5cmの礫及び雲母を多く含む。341は頸部の屈曲が強い。口縁部端部の積み上げが著しく、端部をやや薄くされている。346・348は小振りの甕で、348の口縁部は短い。348は外面全体に煤が付着している。

**土師器杯 (330・332・342・353)** 330・332は小振りの杯である。口縁部は外側へ開く。332の口縁部内面には凹みが観察できる。342は器面の磨滅が著しく、調整の痕跡を留めない。353は口縁～体部が直線的に外反し、僅かに上げ底の底部形状を呈する。

**土師器甕 (344)** 移動式の甕である。胎土には金雲母を多量包含する。接合痕の観察が容易である。外面のタテハケ調整は磨滅によって不鮮明であり、内面はタテヘラケズリされる。

**須恵器杯 (339)** 高台は外側に作られ、体部が立ち上がる箇所と近接する。

**黒色土器椀 (328・329・334・343)** 全て内面のみが黒化処理される内黒である。328・334・343は口縁部の一部を残す資料で、口縁部端部はやや内湾する。口縁部内面には凹みが生じている。329は比較的大型の底部から、体部が外反しながら立ち上がる。内面は密にミガキ調整される。

**灰釉陶器椀 (327・337・347・350・351)** 327・337は内面のみ施釉され、347・350・351は内外面に釉が施される。327は薄手で精緻な作りであり、口縁部端部は外方へ折り曲げられて屈曲する。337は口縁部端部が上方へ立ち上がり、内面には凹みが観察できる。347の施釉は体部内外面のみで、底部には確認できない。三日月高台が高く貼り付けられ、底部内面が一部剥落する。350は薄手の作りで、外面の施釉はやや薄い。

**灰釉陶器壺 (348)** 頸部及び体部下方が剥落する。内外面に施釉されているものと見られるが、剥がれて観察できない。

**緑釉陶器椀 (345・352)** 共に緑釉単彩が内外面に施釉される。345は口縁部端部の外反が強い。黒味の強い緑色を呈し、施釉後の被熱が考えられる。352は高台及び体部下半のみ遺存する資料で、小型である。精緻な作りで、ガラス質の良好な仕上がりである。高台は高く貼

り付けられる。

**製塩土器 (336)** 志摩式製塩土器でたらい形のプロボーションを呈する。粗い胎土で、口縁～体部は直線的に外反する。外面のユビオサエ調整が顕著で、器面には凹凸が生じている。底部内面には凹みが観察できる。

出土遺物は、当該調査区における古代の生業の中心となる8世紀後半～9世紀の位置付けである。327・337は猿投窯編年のK14窯式で9世紀前半、347が同窯編年のK90窯式で9世紀後半の産物である。350・351も347とほぼ同時期に属するものと見られる。また、345はやや古手で8世紀代であると考えられ、348・349は猿投窯編年のO53～百代寺窯式の段階に比定でき、その年代観は10世紀前半～11世紀前半と時期を降る。黒色土器及び緑釉陶器、K14窯式期の灰釉陶器等、比較的流通量が限られるものが出ており、特殊な生産がなされていた可能性が考えられる。一般的集落とは隔絶した特定の階層の居住を示すものとして、大いに注目すべき資料である。

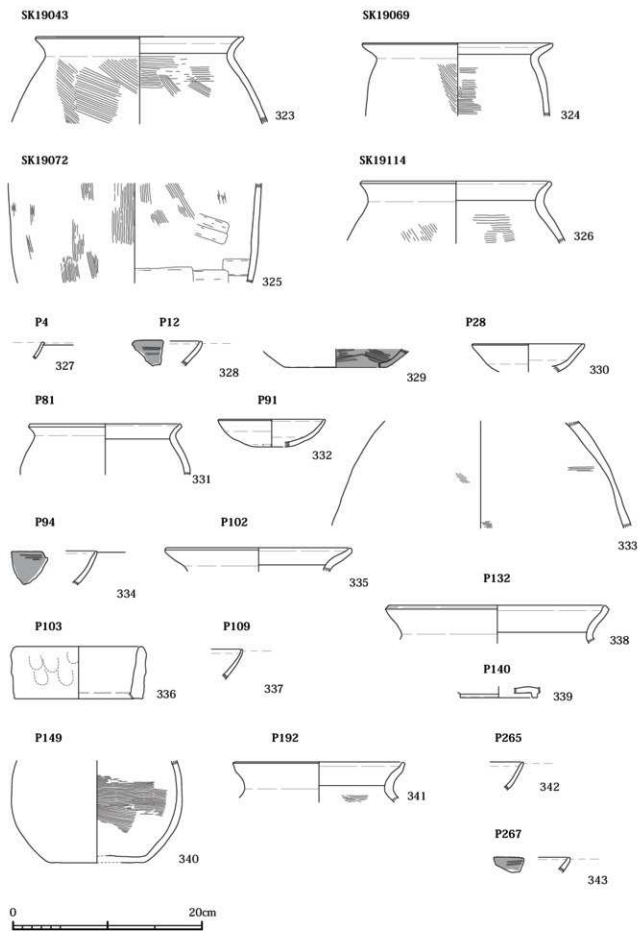


Fig.146 古代の遺構出土遺物 1 (S=1/4)

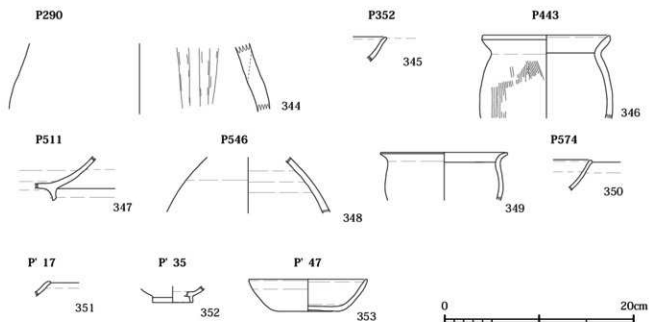


Fig.147 古代の遺構出土遺物 2 (S=1/4)

#### 4 中世の遺構 (Fig.148)

中世の遺構は、12～13世紀の中世前期の段階が中心となる。多量に出土した山茶碗の時期を見ると、藤澤編年の5～6型式のものが多数を占め、概ね12世紀後半～13世紀前半に盛行したと考えられる。反面、この前後の時期のものは非常に少ない。全体的として、この鎌倉時代初頭～前半期に比定できる遺物の出土量が最も多く、特に山茶碗の出土が顕著である。遺構の中心は第19次調査区の西～南西部で、二重の溝によって区画された屋敷地である。長方形を呈し、広大な規模を誇る屋敷地内において、掘立柱建物や大型の土坑、井戸等による生業を確認した。屋敷地の範囲外においては、該当期の遺構密度は極端に疎らとなる。

##### 【溝 SD19007 (Fig.149・150)】

重複 SD19004・130, SH19060・61, P110・113・115・152・169 (SA19044)・515, ビット (遺物なし) → SD19007 → P95, ビット (遺物なし)。

平面・規模 検出した規模は、長さ19.8m、幅1.0～1.6m、検出面からの深さは0.07～0.35mを測る。掘り方は西部で薄く、段状に0.05m程度上がり、検出面とほぼ一体化する。主軸方向はW-17°-S方向を示す。西部はやや北側に湾曲しながら調査区外の西方向へ延び、東部は位置関係から第22次調査1区のSD22011へと繋がるものと判断される。

遺物 山茶碗 (354～365)・鉢 (368)、青磁碗 (367)、白磁碗 (366) が出土した (Fig.151)。また、上層からは弥生土器甕 (369・370) の混入を確認した。

山茶碗 (354～365) 全体的に低く扁平な高台を付帯

する。粗肌土の胎土で、南部系のもので推定される。354～357は口縁～体部が直線的に外反し、354・356は口縁部端部が内傾する。354～356の口縁部外面には凹みが認められ、354に顕著である。354は高台に初痕が明瞭に観察され、底面には板状工具で押圧された痕跡が確認できる。355は内面の凹みにより、体部と底部の間が区別される。356・361・362・365は体部内面に自然釉が薄くかかる。357の高台は剥がれているものと考えられる。359・361・362・365の高台には初痕を確認できる。359は体部及び底部の内面に朱墨が観察できる。朱墨は体部下方の一部でやや濃く施される。364は高台がほぼ剥離しているが、底面には墨書が施され、「一」と判読される。365は山皿の前段階で、高台を有する小碗になると考えられる。

山茶碗鉢 (368) 厚手の作りで、体部は直線的に外反する。ロクロ目が強く、体部外面一部及び内面には自然釉が見られる。無高台であるが、高台は剥落しているものと見られる。

青磁碗 (367) 体部下方から底部にかかる資料である。内外面に施釉される。

白磁碗 (366) 底部内面に厚く施釉が確認される。丁寧な作りである。高台は削り出され、扁平で幅広く作られる。内面には圈縁が施され、体部と底部が明瞭に区別される。

弥生土器甕 (369・370) 共に口縁部外面を刺突文で装飾される。369は受け口甕であり、口縁部端部の立ち上がりは明瞭で、やや外反する。370は薄手の作りである。頸部の屈曲が強く、口縁部は全体的に外反し、端

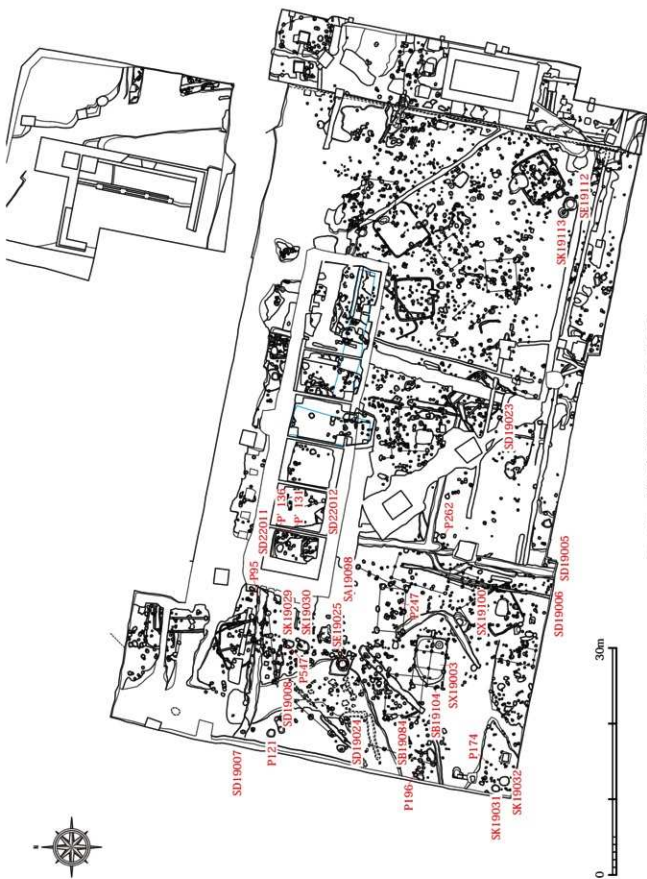


Fig.148 中世の主要遺構配置図 (S=1/500)

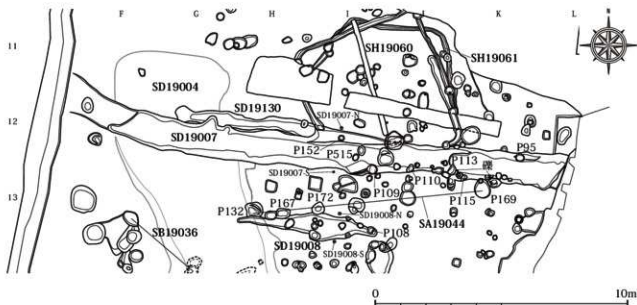


Fig.149 SD19007・8平面 (S=1/150)



Fig.150 SD19007・8土層断面 (S=1/50)

部は外側へ湾曲する。S字裏0類の段階に比定でき、その年代観は古墳時代初頭の廻間1式1～2段階である。**時期・性格** 出土した山茶椀は全体的に藤澤編年の5型式で、12世紀後半～13世紀初頭に属するものと考えられる。365のみ山茶椀小椀で、4型式以前に遡る可能性のある資料であるが、小型化する段階にあり、4形式の中でも新相に分類される。12世紀中葉～後半の年代観が求められ、他の遺物と整合するものと考えられる。遺構の重複関係を見ると、弥生時代後期～古墳時代初頭のSD19004、古墳時代初頭のSH19060・61、古代のSA19044・P109に後出する。SD19007を切るP95からは山茶椀(558)が出土しているが、時期差は乏しいものと判断される。また、北側で並行するSD19130はほぼ同色の埋土を呈し、近い時期の埋没が想定される。SD19007にやや先行するものと見られるが、遺物の出土がないため、詳細は不明である。屋敷地の周囲を二重に回る区画溝であり、北辺の外溝に該当する。

【溝SD19008 (Fig.149・150)】

重複 SD19004、P132・167・172 (SA19044)、ビット(遺物なし)→SD19008→P108、ビット(遺物なし)。

平面・規模 幅0.3～1.1m、検出面からの深さ0.05～0.1mを測る。中央部でやや幅広となる。西部はSD19004上面において検出したが、東西方向共に途切れ、その延長は確認できない。確認した長さは5.6mを測る。検出範囲が限定されるため誤差が生じてしまうが、主軸は概ねW-7°S方向を示すものと見られる。

**遺物** 山茶椀(371)が出土した(Fig.151)。

**山茶椀(371)** 底部の一部を留めるのみで、高台は低く貼り付けられる。内外面はロクロナデ調整が施され、底面は糸切りされる。胎土は粗肌手で、南部系のものと推定される。

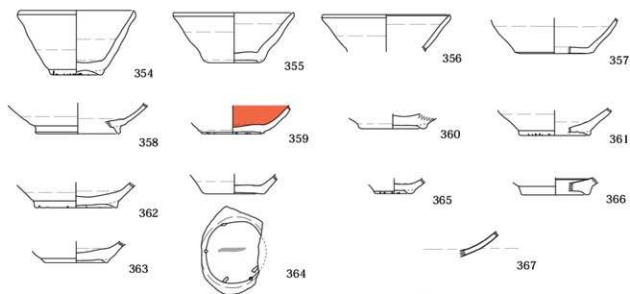
**時期・性格** 検出範囲が限定され、掘り込みも浅いため、出土遺物は僅少である。弥生時代後期～古墳時代初頭のSD19004、古代のSA19044に後出する。SD19007に並行しており、屋敷地の回りに設定された区画溝の一部であり、北辺の内溝になるものと考えられる。外溝のSD19007とは内法間で2.0mの距離をもつ。出土遺物からも齟齬は生じない。

【溝SD19005 (Fig.152・153)】

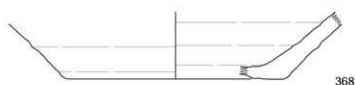
重複 SD19005東西、SK19049、SX19013、ビット(遺

## SD19007

上層

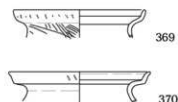


下層



※混入遺物

上層



## SD19008



Fig.151 SD19007・8出土遺物 (S=1/4)

物なし) → SD19005 →ピット (遺物なし)

**平面・規模** 検出した規模は、長さ 26.4 m、幅 0.8 ~ 1.5 m を測り、検出面からの深さは 0.2 ~ 0.45 m を計測する。調査区外の南へ延び、北方向は第 22 次 1 区の SD2011・12 に接続するものと考えられる。主軸方向は N-10°-W を向く。中央～南部を攪乱されるが、この中央部の外灯に伴う方形状攪乱付近において、急激に浅くなり、検出面からの深さは 0.06 ~ 0.15 m になる。底面のレベルは上昇傾向を示すが、攪乱範囲が重なるため、形状の詳細は不明である。方形状の攪乱箇所北側では底面は段状を呈し、この部分から直交するように東方向へ分岐する。この溝は幅 1.0 ~ 1.2 m、検出面からの深さ 0.35 ~ 0.45 m を測り、長さは 8.7 m を検出した。形状的には同一の溝であり、埋土の状況からも似ているが、当該東西溝が埋没した後に南北溝が開掘されていることが判明した。中央部で溝が浅くなる箇所を SD19005 出

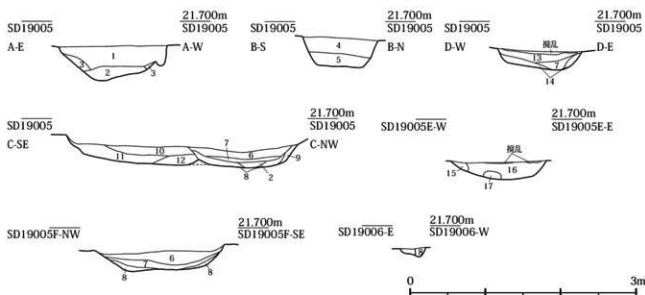
入口、僅かに先行する東西溝を SD19005 東西と呼称し、遺構の主体となる南北溝 SD19005 から峻別し、細分して表現することとしている。

**遺物** 山茶椀 (372 ~ 387・391 ~ 399・402・406・407・411)・山皿 (408 ~ 410)・鉢 (388・400・403)、土師器皿 (389・404・405)、青磁椀 (390)、土鍾 (401) が出土した (Fig.156・157)。上層には須恵器環 (412) が混入し、また攪乱の影響によるものか出入口の上層にも平瓦 (413) の混入を確認した。

**山茶椀** (372 ~ 387・391 ~ 399・402・406・407・411) 胎土は粗肌手であり、南部系の所産であると推定される。扁平な高台を付帯する。口縁～体部はほぼ直線的に外反し、374 ~ 377・387・391・393・394・406・407・411 の口縁部外面は凹む。375・378 ~ 382・385 ~ 387・391 ~ 393・395・397・399・406 の高台には初痕痕が観察され、382・395 は特に顕著であ







- 1 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性やや強い、炭化物を少量含む
- 2 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い
- 3 1に地山ブロックを少量含む
- 4 暗褐色細砂 (10YR3/3) 粘性弱い、繊維を多量含む 地山ブロックを少量含む
- 5 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性やや強い、繊維を多量含む
- 6 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い、炭化物を少量含む
- 7 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い、細砂を含む
- 8 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロックを含む
- 9 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロックを多量含む

- 10 暗褐色細砂 (10YR3/3) 粘性弱い、繊維を多量含む
- 11 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い、繊維・地山ブロックを多量含む
- 12 暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性強い、繊維・地山ブロックを多量含む
- 13 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い
- 14 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロックを少量含む
- 15 黒褐色シルト (10YR2/2) 繊維・地山ブロック・炭化物を少量含む
- 16 黒褐色シルト (10YR2/3) 繊維・地山ブロック・炭化物を含む
- 17 黒褐色シルト (10YR2/2) 繊維・地山ブロックを少量含む
- 18 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性やや強い、粗砂・地山ブロックを少量含む

Fig.153 SD19005・6 土層断面 (S=1/50)



- 1 黒褐色シルト (10YR2/3) 地山ブロックを含む
- 2 暗褐色シルト (10YR3/3) 繊維を含む
- 3 黒色シルト (10YR2/1) 地山ブロックを含む
- 4 黒褐色シルト (10YR2/2) 繊維・地山ブロックを含む
- 5 黒褐色シルト (10YR3/1) 繊維・地山ブロックを含む
- 6 黒褐色シルト (10YR2/2)

- 7 黒褐色シルト (10YR2/3) 繊維を含む
- 8 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロックを含む
- 9 暗褐色シルト (10YR3/3) 繊維・地山ブロックを含む
- 10 黒色シルト (10YR2/1) 繊維・地山ブロックを含む
- 11 黒褐色シルト (10YR2/2) 繊維・地山ブロックを少量含む
- 12 黒褐色シルト (10YR2/2) 繊維を含む

Fig.154 SX19100 土層断面 (S=1/50)



- 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・炭化物を微量含む
- 2 黒褐色シルト (10YR2/2) 地山ブロック・炭化物を少量含む
- 3 黒褐色シルト (10YR3/1) 繊維・炭化物を含む
- 4 黒褐色シルト (10YR3/2) 繊維・地山ブロックを含む
- 5 黒褐色シルト (10YR3/2) 繊維を含む

Fig.155 SK19049 土層断面 (S=1/50)

る。373は口縁部外面一部及び体部内面に自然軸がかかる。376は口径が16.8cmと大きく、体部外面が部分的に黒変する。自然軸は内面に薄く見られる。377は口縁部外端に明瞭なさ面を有し、この面に自然軸が観察できる。379・383・385の底部は厚手であり、379は底面の糸切り痕が明瞭である。380～382・386は体部内面に自然軸がかかり、381・382は薄い。387は口縁部内外面及び体部外面の一部に自然軸が観察でき、底面には墨書が施される。墨書は「上上」と判読され、これが横並びに配置される。391は内面全体及び口縁部外面一部、392は口縁～体部内面に自然軸が施され、392は薄く観察できる。394は口縁部外端面が明瞭であり、内面全体及び口縁部外面に自然軸が見られる。396は剥落の

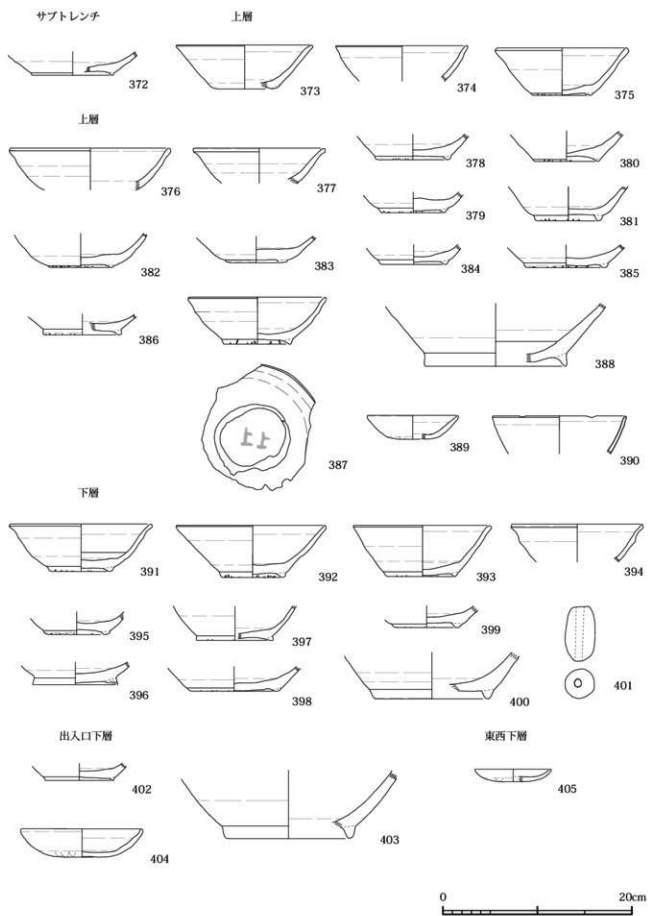
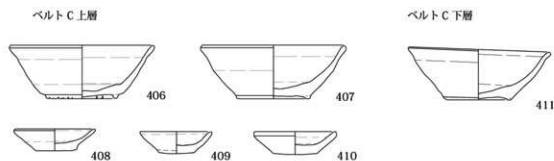


Fig.156 SD19005 出土遺物 I (S=1/4)



※混入遺物



Fig.157 SD19005 出土遺物 2 (S=1/4)

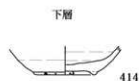


Fig.158 SD19006 出土遺物 (S=1/4)

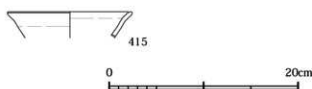


Fig.159 SK19049 出土遺物 (S=1/4)

ために高台形状は不明である。397の底部は未調整であり、体内内面下方に薄く自然軸がかかる。402の高台端部は尖り、断面は三角形を呈する。393・406・411の内面はやや凹み、体部と底部が分割される。407の自然軸は体内内面に薄く、411は口縁部内外面に観察できる。411の口縁部内面の自然軸は厚く、その下地は黒変している。

山皿(408～410) 全て高台を有さない山皿である。全体的に厚手の作りである。408・409の底部は突出して作られ、408・410は口縁～体部が直線的に外反する。409の口縁～体部はやや丸みを帯びる。

山茶碗鉢(388・400・403) 全て体部下方～底部の資料である。389・403は体内内面に薄く自然軸がかかる。389は高台が高く貼り付けられ、内面の稜によって体部と底部が分けられる。400・403は断面が方形で重厚な高台を有し、底部端部の接地面が明瞭である。400は厚手の作りで、403は使用の痕跡によるものか、器面の内面が摩耗している。

土師器皿(389・404・405) 389は口縁～体部が緩やかに外反する。404は口縁部端部が折曲げられ、直立する。内面のナデは2単位観察できる。405は小皿で扁

平な作りである。

青磁碗(390) 内外面に施釉され、口縁部には輪花が施される。口縁部は直線的に外反し、端部を丸く収める。無文である可能性が高いと判断される。

土鍾(401) やや厚手で棒状を呈する資料で、完形品であると見られる。精緻な胎土で作られる。直径0.8cmの円孔穿かれ、これが直線的に貫通する。穿孔箇所はほぼ中央である。

須恵器杯(412) やや小振りの器形で、無高台である。口縁～体部は緩やかに外反し、口縁部端部の外反が強い。猿投窯編年の125窯式の段階であると考えられ、8世紀前半の混入品である。

平瓦(413) 粘土紐桶巻作りによるもので、凹面には布目痕を確認し、それがダーツ状に縦じわされる痕跡が観察できる。挟端面のケズリはやや甘い。凸面は格子タタキが見られる。平田遺跡では同様の瓦が一定量出土しており、全体的に焼成が良好であり、黄褐・黄橙・橙色の色調を呈し、凸面調整が格子タタキされる特徴を有する。413のタタキの格子目は細長く、菱形を呈しており、吉田真由美氏による平田遺跡出土瓦の凸面に対する工具(叩き貝)分類(以下、吉田真分類と呼称)の

斜格子B類に該当するものと考えられる。7世紀後半～8世紀前半の年代観が与えられる。

**時期・性格** 山茶椀及び山皿は全体的として藤澤編年の5型式であり、その年代観は12世紀後半～13世紀初頭である。古墳時代初頭のSX19013を切る。また、SK19049やSD19005東西に後出するもの、出土遺物からは大きな時期差は見受けられない。屋敷地の周囲を二重に区画する溝で、東辺の外溝となる。なお、やや先行するSD19005東西は、この区画から外れるように東方へ延び、攪乱を挟んだ後にSD19023に繋がり、そして南方向へ湾曲して走るものと見られる。SD19005出入口については後述する。

**【溝SD19006 (Fig.152・153)】**

**重複** SH19001, P241, ビット(遺物なし)→SD19006 = P734 (SX19100)→ビット(遺物なし)

**平面・規模** 検出した規模は長さ20.2 mを検出し、幅0.3～0.9 mを測る。検出面からの深さは0.07～0.2 mを計測する。中央部はテラス状を呈し、中段部分は検出面から0.05 m程度掘削される。この中央部は幅広であるが、南部に向けて狭まる。南部は調査区外へ延びるが、北部の延長は未確認である。主軸方向はN-13°-W方向

を向く。

**遺物** 山茶椀(414)が出土した(Fig.158)。

**山茶椀(414)** 扁平な高台を有し、粉殻痕が観察できる。胎土は粗肌手で、南部系の産物であると推定される。

**時期・性格** 古墳時代初頭のSH19001を切るが、その他の重複するビットからは時期の絞り込みに繋がる遺物の出土がない。SD19005と並行し、屋敷地の回りを二重に走る区画溝であり、東辺の内溝に相当する。SD19005と比較すると、幅が狭く、深さも浅く掘削されており、特に遺物の出土量は圧倒的に少ない特徴がある。出土遺物の特徴からは、SD19005との時期差はないものと判断される。また、内溝であるSD19005との距離を内法間で測定すると、2.0 mを測り、これは北溝における外溝SD19007と内溝SD19008の距離と近似する。

**【橋状遺構SX19100 (Fig.152・154・160)】**

**構成** P227～231・733・734・735 ?。

**重複** SX19013→P733, P734 = SD19006。

**平面・規模** 1間×2間の規模を有し、長方形の平面形を呈するものと考えられる。主軸はN-18°-W方向を示す。構成するビットは直径0.2～0.4 mの円形状を呈

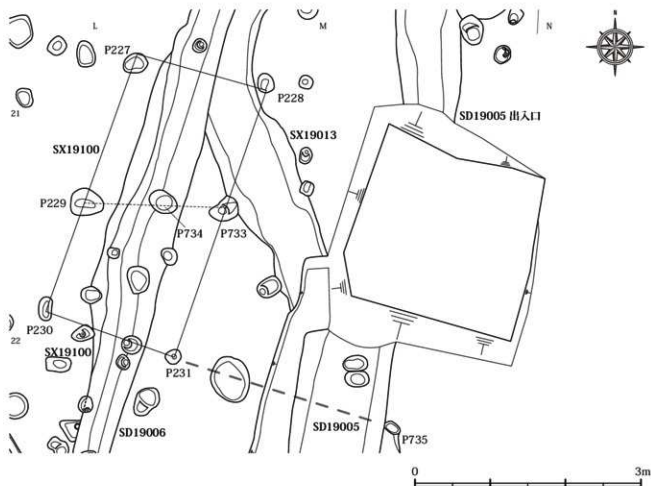


Fig.160 SX19100平面 (S=1/50)

し、検出面からの深さは0.05～0.2mを測る。主軸とはやや方向を異にするが、P229とP733を結ぶほぼ中間の箇所にてP734が存在し、これもSX19100を構成する可能性が高いと判断される。

**遺物** 遺物の出土は一切なかった。

**時期・性格** 屋敷地の東辺において、SX19100の短辺がSD19006を橋状に跨ぐように配置される。SX19100はSD19006とほぼ並行し、埋土の様相からもSD19006との親近性が窺われる。加えて、SD19006のすぐ東側は、ちょうどSD19005が浅く掘削されてSD19005出入口と考える箇所相当する。SX19100が橋状にかかるとしてSD19006とSD19005出入口付近を比較すると底面のレベルがほぼ同一になるように造られている。また、SX19100南辺の東方向の延長線上にはP735があり、全体的に東方へ延びる可能性も残すが、SD19005出入口付近の大部分が攪乱によって消失しているため、詳細は不明である。SD19005出入口とSX19100の存在及び形状を合わせて考えると、この箇所が屋敷地内における東西方向の出入口であったものと想定される。出入口であれば、門の存在も想起されるが、検出範囲においては確認されていない。不明な点が多いが、特にSD19005については、SD19006に合わせるために通常よりも0.15～0.2m程度浅く造られており、計画性が窺われる。これが同様の橋状遺構を設定するためであったのか、それとも通行の便を講ずるために何らかの処置が必要となった結果であるのか、非常に興味深い。なお、当該出入口施設の設置箇所は、屋敷地の区画全体の北から1/3程度の位置に当たる。

**【土坑SK19049 (Fig.152・155)】**

**重複** SK19049→SD19005東西、ピット(遺物なし)。  
**平面・規模** 東西0.77m、南北0.66mを測り、円形状を呈する。SD19005東西に攪乱されるため北方向への広がりには不明であるが、西部は重複するピットの下面でプランの確認に至ったため、概ねこの規模になろう。南部はやや不整である。検出面からの深さは0.5mを計測する。

**遺物** 山茶椀(415)が出土した(Fig.159)。

**山茶椀(415)** 粗肌手の胎土で、南部系であると推定される。口縁部外面には凹みが認められる。

**時期・性格** 12世紀後半～13世紀初頭のSD19005東西に先行するが、出土遺物を見ると時期差は乏しく、概ね同時期に比定できよう。後出するピットからは遺物の出土がない。

**【溝SD22011 (Fig.161・162)】**

**重複** SD22013, P130・132・133・135・136・141, ピット(遺物なし)→SD22011=SD22012。

**平面・規模** 攪乱の影響を大きく受け、部分的な検出に留まるが、確認した長さは5.7m、幅は1.5mを測る。検出面からの深さは0.1～0.2mを計測する。北西部ではややプランが乱れるが、北西方向へ向けて湾曲する志向が窺われる。

**遺物** 山茶椀(416～418・420～423)、土師器鍋(419・424)が出土した(Fig.163)。

**山茶椀(416～418・420～423)** 全て粗肌手の胎土で、南部系の産物であると推定される。図化可能なものは、全て底部である。高台は全体的に低い幅平な形状を呈する。418・422は体部内面に自然軸がかかる。420は内面の凹みによって体部と底部が分割される。体部はやや丸みをもちながら直線的に立ち上がる。

**土師器鍋(419・424)** 南伊勢系の鍋である。口縁部は短く、内側へ折り返される。419は口縁部一部を残す資料で、口縁部の折り返しは僅かに認められる。口縁部端部は丸く肥厚する。424は小型製品で、頭部の屈曲が強い。口縁部の折り返しはやや厚手で丸みを帯びる。

**時期・性格** 出土遺物の山茶椀は、概ね藤澤編年の5型式に相当する。加えて土師器鍋は、伊藤裕偉氏による土師器鍋編年(以下、伊藤編年と呼称)の第1段階に比定できる。12世紀後半～13世紀前半の埋没が考えられる。また、遺構の重複関係を見ると、時期不明のSD22013等に後出する。先行するP131から山茶椀(567)、P136からも同様に山茶椀(568)が出土しており、時期差は大きくないものと見られる。その他のピットからは、時期の特定に繋がる有意な遺物は出ていない。SD22011は、既存建物の基礎梁によって攪乱・分断されるが、形状及び位置関係、埋土の様相から、北西方向へ湾曲してSD19007に繋がり、南方向はSD19005に接続するものと考えられる。そして、東側で並行するSD22012も同一の溝である。

**【溝SD22012 (Fig.161・162)】**

**重複** SD22017→SD22012=SD22011。

**平面・規模** 既存建物の基礎梁による攪乱のため、東側を検出したのみである。検出した規模は長さ3.7m、検出面からの深さ0.1mを測る。SD22011・12を合わせた幅は、1.5～2.1mを計測する。主軸方向はN-8°Eを指す。

**遺物** 山茶椀及び土師器片が出土しているが、図化可能となる遺物はなかった。

**時期・性格** 先行するSD22017からは遺物が一切出土していないため、その帰属時期は不明である。SD22011と一連の遺構で、屋敷地の周囲を回る溝の北東コーナーに該当する。過去の調査においては、当該屋敷地にかかる区画溝の明瞭なコーナーの確認には至っていない



Fig.161 SD22011・12平面 (S=1/100)

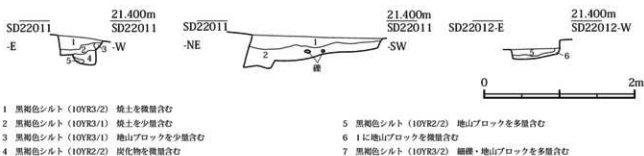


Fig.162 SD22011・12 土層断面 (S=1/50)

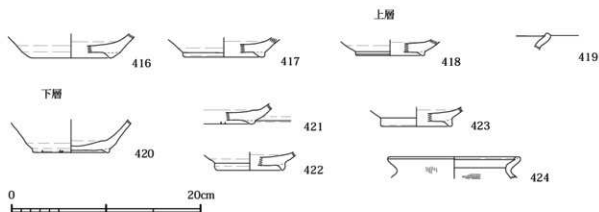


Fig.163 SD22011 出土遺物 (S=1/4)

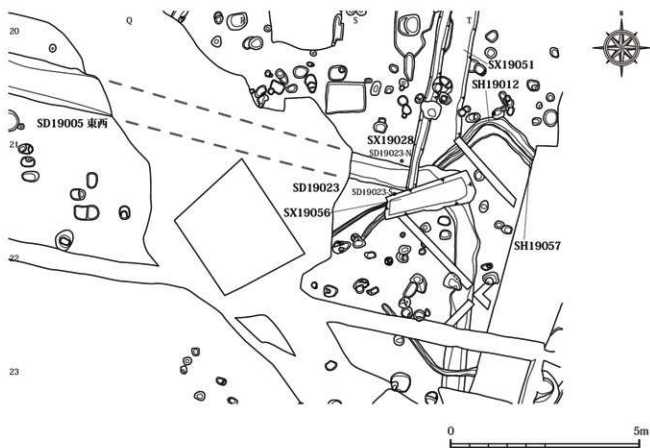


Fig.164 SD19023 平面 (S=1/100)



Fig.165 SD19023 土層断面 (S=1/50)

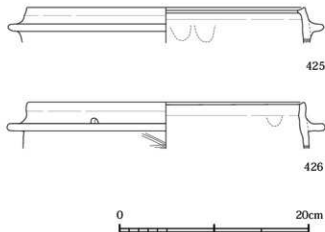


Fig.166 SD19023 出土遺物 (S=1/4)

め、その北限及び東限が確実となった。なお、区画溝は二重に回るため、本来であればSD22011・12の内側に同様の溝が走ることが想定されるが、SD19006・8の様相や過去の調査結果を鑑みると、全体的に細く浅く掘削されているため、削平されてしまったものと推測される。

#### 【溝 SD19023 (Fig.164・165)】

重複 SH19012・57、ピット(遺物なし)→SD19023→SX19028・51・56。

平面・規模 幅0.5～1.0mを測り、検出面からの深さは0.3mである。南部に向けて浅まり、0.05mになる。西部及び南部は擾乱範囲が広がるため、検出した長さは8.2mである。湾曲するコーナー部分をSX19056で擾乱されているが、主軸方向はW-13°Sから南方へ湾曲し、N-5°W方向へと向きを変えている。

遺物 土師器羽釜(425・426)が出土した(Fig.166)。その他に土師器鍋等の破片が出土しているが、実測に至るものではない。

土師器羽釜(425・426)共に短い口縁部に銜部が付帯し、銜部下方には煤の付着が観察できる。口縁部は内傾し、口縁部上端は凹線状の窪みが認められる。426の銜部上方には円孔が施され、その穿孔は焼成前に行われたことが分かる。

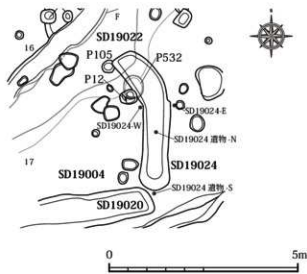


Fig.167 SD19024 平面 (S=1/100)



Fig.168 SD19024 土層断面 (S=1/50)

時期・性格 古墳時代初頭のSH19012・57に後出し、擾乱のSX19028・51・56に切られる。図化した土師器羽釜の特徴は、伊藤裕偉氏による土師器羽釜編年(土師器鍋と同様、伊藤編年と呼称)の第3段階の所産である。14世紀後半～15世紀前半の産物であるが、SD19023は擾乱によって分断されるものの、埋土の状況と位置関係から、SD19005東西と繋がるものと考えられる。SD19005東西は、原敷地の区画溝東辺の外溝であるSD19005より僅かに先行し、概ね12世紀後半～13世紀初頭の埋没が想定される。SD19023からは該当期に比定できる土師器鍋の破片も出ているため、SD19005東西と一連の溝となり、何らかの区画を形成する可能性が高いものと判断される。なお、南部は広範に擾乱されるため茫漠としており、擾乱を免れた調査区最南部にはその延長は現れておらず、全体像は不明である。

#### 【溝 SD19024 (Fig.167・168)】

重複 SD19004、P12・105・532→SD19024。

平面・規模 SD19004の上面に存在する。幅0.7～0.8m、検出面からの深さは0.1mを測る。途中で途切れているため、検出に至った長さは3.9mである。主軸方向は正方位を示すが、北部は西側へ湾曲傾角を呈し、N-37°E方向を向く。北～南方にはその延長は確認できない。



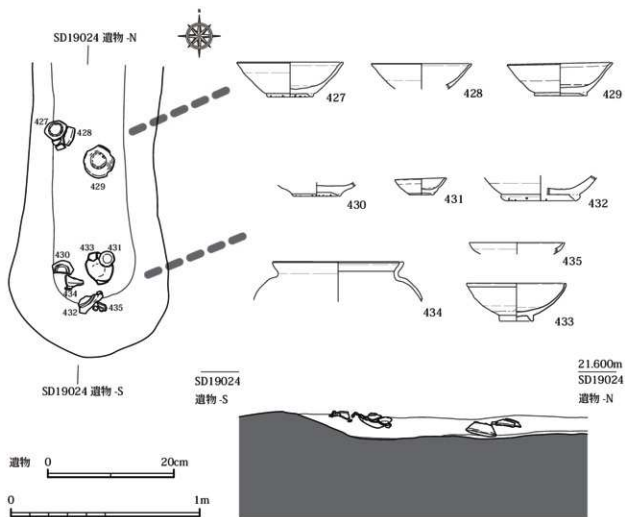


Fig.169 SD19024 遺物出土状況 (S=1/20 遺物 : S=1/6)

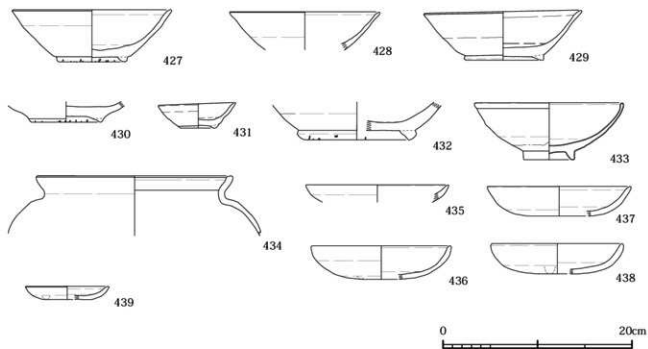


Fig.170 SD19024 出土遺物 (S=1/4)

**遺物** 山茶椀 (427～431)・鉢 (432), 土師器甕 (434)・皿 (435～439), 白磁椀 (433) が出土した (Fig.170)。  
**山茶椀 (427～431)** 粗肌手の胎土で作られ、南部系の所産であると推定される。概ね扁平な高台が貼り付けられ、427・430は高台に初段痕が観察できる。427～429は口縁部が直線的に外反する。427・428は、口縁・体部内面に薄く自然軸がかかる。431は山皿の前段階となる小椀である。ほぼ完形資料で、扁平な高台を有する。429・431にはやや歪みが認められる。

**山茶椀鉢 (432)** 重厚な高台が貼り付けられ、底部端部には外端面が作られる。高台には初段痕が確認できる。内面全体が黒変しているが、これは焼成時のものと考えられる。

**土師器甕 (434)** 頸部の屈曲が強く、体部上方は丸みを帯びる。口縁部は短く、内面は内側へ突出し肥厚する。  
**土師器皿 (435～439)** 全て口縁部端部を丸く取める。435・436・438は口縁部を上方向へ向けられる。437・439は口縁部が外側へ開く。437は内面に2単位のナデが施される。439は小皿で扁平な作りである。

**白磁椀 (433)** 胎土が精製され、精緻な作りである。口縁部は直立し、底部は高台が削り出される。底部端部はほぼ接地する。灰白色の施軸が施されており、内面全体と口縁部外面、そして体部外面一部に観察可能である。

**時期・性格** 弥生時代後期～古墳時代初頭のSD19004、古代のP12に後出する。出土した山茶椀の特徴は、藤澤編年の4型式に該当すると考えられる。そして、434は伊藤編年の(仮)A段階に比定でき、12世紀前半～中葉の年代観である。屋敷地の区画内部には位置するものの、他の中世遺構をやや遡る。検出範囲は限られるにも関わらず、良好な遺物の出土に恵まれ、特に南部に集中する (Fig.169)。最南部では433が口縁部を上にし、それに重なり合うように431が底部を上方向に向けて出土した。また、この北方には427・429が伏せられた状態を出ている。431はほぼ完形品で、429・433も遺存状態が比較的良好である。非常に精緻に作られ、高級品と見られる433の出土が特に注目される。

【井戸SE19025 (Fig.171・172)】

**重複** SD19004, SX19048→SE19025。

**平面・規模** 前代のSD19004及びSX19048の上面から掘り込みが認められる。直径1.7mを測り、円形状の平面形を呈する素掘りの井戸である。検出面からは深く下がり、下層には粘質の強いシルト層である5層が厚く堆積する。安全面を考慮し、1.25m程度の深さで掘削を断念した。埋土の様相からは、底面まではまだ深く掘り下がるものと考えられるが、このレベルで一定量の湧水の発生を確認した。掘り方の円周に沿うように段掘り

され、テラス状に中段をなす箇所を検出面からの深さは、北部及び南部で0.4m、西部及び東部で0.6mを測る。南～西部にはこの部分に直径0.1～0.2mの礫の埋没を確認した。

**遺物** 山茶椀 (440・441・446～451), 山皿 (442・452), 土師器甕 (443)・皿 (445・453), 青磁椀 (444) が出土した (Fig.175)。

**山茶椀 (440・441・446～451)** 全て粗肌手の胎土によって作られ、南部系の所産であるものと推定される。底部には扁平で低い高台が貼り付けられる。440・441・448・449の高台には初段痕が残存する。446～448は口縁～体部が直線的に外反する。446・448の口縁部外面には凹みが認められ、特に448に顕著である。446は胎土に直径0.4～1.0cmの礫を包含し、口縁部外面には自然軸が施される。447は口縁部内面に薄く自然軸がかかる。448にはやや歪みがある。448は内面の凹み、451は内面の稜により、体部と底部が明瞭に分割される。

**山皿 (442・452)** 共に無高台の皿で、442は内面全体、452は口縁～体部内面に自然軸が施される。共に口縁部端部を丸く取める。442は底部が1/3程度残存しているが、底面には墨書が観察できる。欠落しているために確認はないが、残存範囲からは「天」と判読されるものと推測される。452は内面に明瞭な稜が作られ、体部と底部が区別される。

**土師器甕 (443)** 頸部の屈曲が強く、口縁部端部をやや上方へ揃み上げる。口縁部はやや肥厚する。口縁部内外面及び体部内面はヨコナデされ、体部外面には粗いタテハケ調整を観察できる。

**土師器皿 (445・453)** 共に小皿であり、445は扁平に作られる。445は口縁部が短く折り曲げられ、やや外反する。453は口縁部端部がほぼ直立する。丁寧な作りである。

**青磁椀 (444)** 口縁～体部を残す資料である。薄手の作りであり、内外面に施軸される。口縁部端部は外側へ引き出され、口縁部上端に面を形成する。

**時期・性格** 弥生時代後期～古墳時代初頭のSD19004、古代のSX19048に後出する。出土した山茶椀及び山皿は藤澤編年の5型式に相当し、12世紀後半～13世紀初頭に属すると考えられる。出土遺物に大きな時期差は認められないため、比較的短期間に埋没したものと見られる。屋敷地の区画内部に存し、関連する遺構と同時期に比定される。

【井戸SE19112 (Fig.173・174)】

**重複** SK19113→SE19112。

**平面・規模** 直径1.8mを測り、円形状を呈する。素掘り

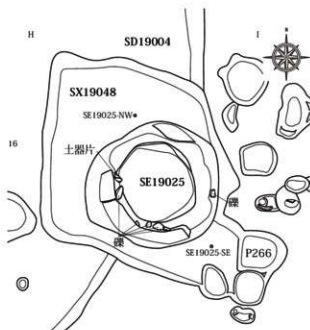
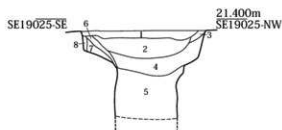


Fig.171 SE19025 平面 (S=1/50)



- 1 黒褐色細砂 (10YR3/2) 粘性強い、細礫を含む
- 2 黒褐色細砂 (10YR2/3) 細礫を多量含む
- 3 暗褐色細砂 (10YR3/4) 地山ブロックを多量含む
- 4 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い
- 5 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い、細礫を多量含む
- 6 暗褐色細砂 (10YR3/4) 細礫・地山ブロックを多量含む
- 7 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い
- 8 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い、地山ブロックを少量含む

Fig.172 SE19025 土層断面 (S=1/50)

りの井戸である。検出面から 0.92 m 掘削したが、底面までは到達せず、安全面を考慮してこの面で掘削を止めた。西部及び北～東部において、検出面から 0.3 m 程度掘削される。湧水の発生は僅かであり、底面の到達までには相当な深さが必要であると考えられる。

**遺物** 山茶碗 (454～456・458・459), 土師器皿 (457) が出土した (Fig.175)。

**山茶碗 (454～456・458・459)** 胎土は粗肌手であり、南部系のものであると推定される。口縁部外面には凹みを有し、ほぼ直線的に外反する。454・456・459の口縁部端部はやや肥圧し、外端面を有する。454・455は底部が遺存しており、無高台であることが分かる。454は、胎土に直径 0.2～0.4cm の礫を包含する。455はやや歪みが認められ、内面は焼成によって黒変している。**土師器皿 (457)** 小皿である。扁平な作りであり、口縁部は僅かに上方へ摘まんで作られ、体部との差が不明瞭である。

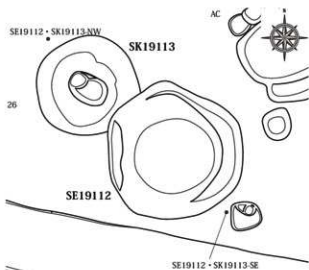
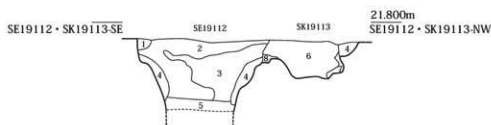


Fig.173 SE19112・SK19113 平面 (S=1/50)



- 1 褐色細砂 (10YR4/6) シルト混じり、黒褐色土を少量含む
- 2 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い、地山ブロックを少量含む
- 3 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い、地山ブロックを多量含む
- 4 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い、地山ブロックを少量含む

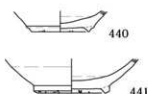
- 5 黒褐色細砂 (10YR2/3) 細礫を多量含む、地山ブロックを少量含む
- 6 黒褐色シルト (10YR2/3) 粗砂を含む、地山ブロックを少量含む
- 7 黄褐色シルト (10YR5/6) 黒褐色土を多量含む
- 8 黄褐色シルト (10YR5/6) 粗砂を含む、黒褐色土を少量含む

Fig.174 SE19112・SK19113 土層断面 (S=1/50)

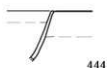


## SE19025

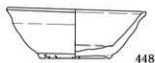
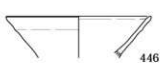
上層



上層



下層

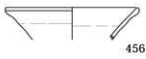
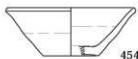


中層



## SE19112

上層



下層



## SK19113



※混入遺物



Fig.175 SE19025・112・SK19113 出土遺物 (S=1/4)

**時期・性格** 北西方向に隣接する中世のSK19113を切る。出土した平底の山茶碗を見ると、藤澤編年の8型式の段階に比定でき、その年代観は13世紀後半～14世紀前半に相当する。屋敷地の区画範囲からは東方向へ外れ、降る時期に造られている。

**【土坑SK19113 (Fig.173・174)】**

**重複** SK19113→SE19112。

**平面・規模** 直径1.4mを測る円形土坑である。検出面からの深さは0.4mを測り、そこから長楕円形のピット状に段掘りされ、最終的には検出面から0.7m下がる。南東部を後出するSE19112によって削平されている。

**遺物** 土師器鍋(460・461)が出土した(Fig.175)。また、

灰釉陶器碗(462)の混入を確認している。

**土師器鍋(460・461)** 南伊勢系の鍋である。460は口縁部、461は体部一部を留める資料である。460は口縁部の折り返しが非常に薄く、扁平な中央部には凹みが観察できる。外面には煤が付着している。461は薄手に作られ、胎土には多量の金雲母を含む。体部外面はヨコハケ調整されるが、磨滅によって痕跡化している。

**灰釉陶器碗(462)** 口縁部は外反し、端部を丸く収める。内外面に施釉されるが、剥がれて薄いため、色調は判別できなかった。猿投窯編年のK90窯式期の所産で、9世紀後半のものである。

**時期・性格** 13世紀後半～14世紀前半のSE19112に

先行する。出土遺物は多くないが、土師器類は伊藤編年の第1段階で、12世紀後半～13世紀前半に帰属するものと考えられる。比較的大型の土坑で、遺物量が僅少である特徴を有する。土層断面の観察から、ほぼ一括して埋没したことが分かる。SK19113は検出時点では井戸の可能性を考えたが、何らかの事情で掘削を中断して一度に埋められ、後にSE19112に作り替えられたことが想定される。遺構の中心間を測定すると、SE19112はSK19113から南東方向へ1.5mの距離をもつ。確証を得ないものの、SK19112は湧水の発生し得ない中途半端な掘削深に留まり、生活臭が乏しく、人為的な一括堆積の様相から、造り替えのために掘削を放棄した事例となる可能性があり、非常に興味深い。加えて、底面が凹凸状に不均質である点からも、これを追認したい。

【土坑SK19029 (Fig.176)】

重複 P547・548, ビット (遺物なし) → SK19029 → ビット (遺物なし)。

平面・規模 長軸1.4m, 短軸1.1mを測る。楕円形状を呈する土坑で、検出面からの深さは0.1mを計測する。

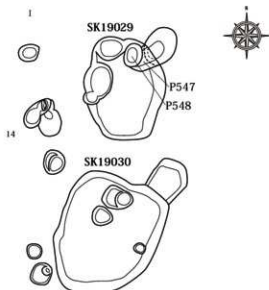


Fig.176 SK19029・30 平面 (S=1/50)



Fig.178 SK19031 土層断面 (S=1/50)

主軸方向はN-3°Eである。下面にはビットが4基埋没し、これらは検出面から0.15～0.2mの深さをもつが、この内、P548のみ0.4mとやや深い。北東部に重複するビットのみSK19029に後出する。

遺物 山茶碗 (463) が出土した (Fig.180)。

山茶碗 (463) 南部系と推定され、粗肌手の胎土である。口縁部は直線的に外反し、端部を丸く取める。

時期・性格 全体的に遺物の出土量が乏しい。463の出土に加え、SK19029と類似した形状及び埋土の状況を示すSK19030の存在から、これと同時期になる可能性を考えたい。SK19030は12世紀後半～13世紀前半の所産であり、SK19029を一回り大きくしたような規模である。なお、先行するP547からは山皿 (566) が出土しているが、これとの時期差は大きくないものと思われる。その他に重複するビットからは、時期の特定に繋がる遺物が出ていない。

【土坑SK19030 (Fig.176)】

重複 ビット (遺物なし) → SK19030。

平面・規模 長軸1.6m, 短軸1.3mを測る楕円形状の

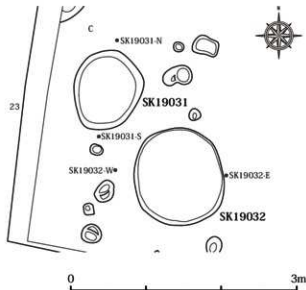


Fig.177 SK19031・32 平面 (S=1/50)



Fig.179 SK19032 土層断面 (S=1/50)

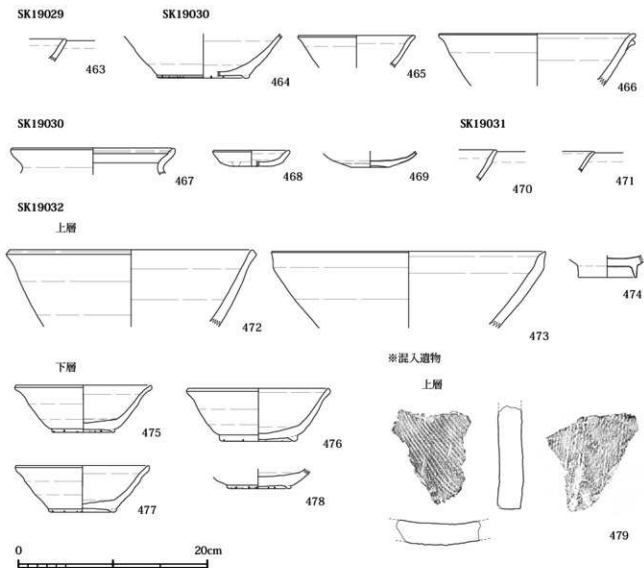


Fig.180 SK19029～32出土遺物 (S=1/4)

土坑である。検出面からの深さは0.15mを計測する。主軸方向はN-30°-W方向を向く。重複するピットに後出し、下面には3基のピットが埋没する。これらのピットは検出面から0.25～0.4m下がる。

**遺物** 山茶椀(464・465)・鉢(466)、土師器鍋(467)・皿(468)、白磁皿(469)が出土した(Fig.180)。

**山茶椀(464・465)** 粗肌手の胎土で作られ、南部系の所産であると推定される。464は扁平な高台が貼り付けられ、高台には初段痕が観察できる。体部はほぼ直線的に外反し、体部内面には薄く自然釉がかかる。465は口縁部外面にやや凹みが見られ、口縁部内面には自然釉が施される。

**山茶椀鉢(466)** 口縁部端部は外反し、口縁部には注口が付帯する。自然釉が口縁部内外面と体部外面にかかる。

**土師器鍋(467)** 南伊勢系の鍋で、小型製品である。口縁部は短く、頸部の屈曲が強い。口縁部の折り返しは

薄く、中央部がやや凹む。

**土師器皿(468)** 小皿である。口縁部は外反し、端部を丸く収める。

**白磁皿(469)** 体部外面及び体～底部内面に施釉が施される。底部形状は無高台で、僅かに上げ底される。体部の外側への開きが大きく、皿であると判断した。

**時期・性格** 先行するピットからは、遺物の出土が得られなかった。出土した山茶椀及び山茶椀鉢は藤澤編年の5型式、土師器鍋は伊藤編年の第1段階に比定でき、12世紀後半～13世紀前半に帰属するものと考えられる。1個体ではあるが、469の出土が特徴的である。北側に並ぶSK19029との関連が深いものと思われる。SK19029とは0.45m離れる。共に屋敷地の区画範囲内に位置する。

**【土坑SK19031 (Fig.177・178)】**

重複なし。

平面・規模 長軸1.1m、短軸0.9mを測り、検出面か

らの深さは0.14 mを計測する。やや南北に長い楕円形状を呈し、主軸はN-19°W方向に向ける。

**遺物** 山茶碗(470・471)が出土した(Fig.180)。

**山茶碗(470・471)** 共に粗肌手の胎土で、南部系であると推定される。口縁部一部のみを留める資料である。470はロクロ目が強く、口縁部外面は凹む。471は薄手の作りで、口縁部の外反が強い。内面には自然軸がかかる。

**時期・性格** 遺物の出土が僅かであり、帰属時期の詳細を掴むことは困難である。形状及び位置関係、埋土の様相、出土遺物等を鑑み、南東に近いSK19032と関係するものと考えられる。SK19032は12世紀後半～13世紀初頭の産物であり、これと同時期になるのか。

**【土坑SK19032 (Fig.177・179)】**

**重複** なし。

**平面・規模** 直径1.3mを測り、円形状の平面形を呈する。検出面からの深さは0.3mを計測する。

**遺物** 山茶碗(475～478)・鉢(472・473)、青磁椀(474)が出土した(Fig.180)。上層には平瓦(479)の混入を確認した。

**山茶碗(475～478)** 粗肌手の胎土で、南部系の産物であると推定される。全て扁平な高台が貼り付けられ、この箇所には刷段痕が確認できる。475～477は体部下方向が丸みを帯びつつ、口縁～体部がほぼ直線的に外反する。口縁部外面の凹みが強く認められる。475は口縁部外面に薄く自然軸がかかる。内面には浅い凹みが作られ、体部と底部が分割される。476は内面のロクロナデ調整が強い。

**山茶碗鉢(472・473)** 共に口縁部がほぼ直線的に外反する。475は口縁部上端に明瞭な面を有し、この面はナデ調整によって凹線状に凹む。473は口縁部外面が面取りされ、口縁部内面には外傾面が作られる。

**青磁椀(474)** 体部外面と体～底部内面が施軸される。高台は高く削り出され、その断面は方形状を呈する。底径は狭く、底部端部の接地面は明瞭である。

**平瓦(479)** 一枚作りによるもので、凹面には布目痕及び糸切り痕が観察され、凸面には縄目タタキが見られる。挟断面が残存している。8世紀中葉の所産であるとされる。

**時期・性格** 出土遺物の観察から、山茶碗及び山茶碗鉢が藤原編年の5型式に相当し、12世紀後半～13世紀初頭に属するものと思われる。比較的多くの遺物が出ており、474の出土が目目される。SK19031の規模をやや大きくし、これから南東方向へ0.38 m離れて造られている。SK19031・32は、前述したSK19029・30と共に大小のセット関係にあるものと見られる。SK19029・

30はやや不整な平面形を呈するが、やや規模の大きい方を南側に配置し、ここからの遺物量が多い点が共通しており、非常に興味深い結果となった。全て屋敷地内の遺構であり、土坑墓の可能性が高いものと判断される。規模が大きいSK19032は、SK19030から南西へ約30 m隔絶する。

**【欄列SA19098 (Fig.181・182)】**

**構成** P244・251～254。

**重複** P244→246。ピット(遺物なし)→P252。ピット(遺物なし)→P253。P235(SB19086)→P254。

**平面・規模** 検出した規模は4間で、総長7.0 mを計測する。柱間は北から1.6 m+1.2 m+2.0 m+2.2 mとP244・252間が狭く配置されている。主軸方向はN-27°W方向を示す。構成するピットの規模は、直径0.35

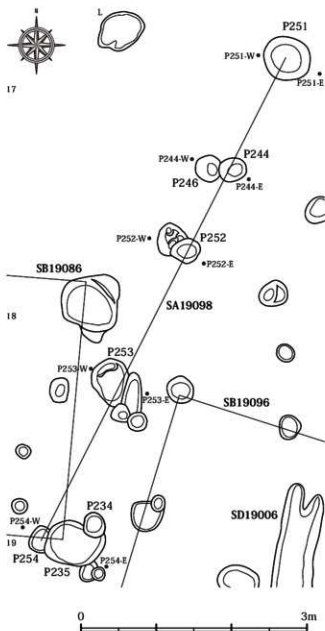


Fig.181 SA19098 平面 (S=1/50)

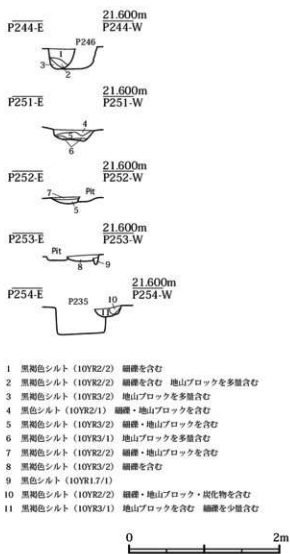


Fig.182 SA19098 土層断面 (S=1/50)



Fig.183 SA19098・SB19084 出土遺物 (S=1/4)

～0.6 mの円形状を呈する。検出面からの深さは0.07～0.25 mを測る。南方方向には延長は確認できないが、北側には攪乱範囲が広範に存在するため、この方向に延びる可能性を残している。

**遺物** P244から山茶椀(480)が出土した(Fig.183)。その他のピットからは、全く遺物が出土していない。  
**山茶椀(480)** 粗肌手の胎土で、南部系のものであると推定可能である。口縁部の外反が強く、内面には自然釉がかかる。口縁部外面には凹みが見られる。

**時期・性格** 先行するP235は縄文時代晩期前半のSB19086を構成し、P244からは古代の土師器及び須恵器片が出土している。出土遺物が山茶椀口縁部の一部を残す資料に留まるため、帰属時期の詳細は不明である。主軸方向にも有意な点は見受けられないが、屋敷地の区画内部に配されており、その他の中世遺構と同時期である藤澤5型式期の段階に比定したい。

**【掘立柱建物SB19084 (Fig.184～186)】**

**構成** P20・23・177?・193・198・200?・736～739?。

**重複** P22→P23。P193→SX19003。SD19009→P198。

**平面・規模** 側柱建物で、梁間4.8 m、桁行5.4 mを測る。主軸方向はW-6°S方向である。構成するピットは、直径0.25～0.35 mを測り、円形状を呈する。検出面からの深さは0.07～0.32 mを測る。P20・23の底面には、直径0.3～0.45 mを計測する礎が2個重なるように埋没している。1間×1間以上の規模は確定であるとして、柱筋上には複数のピットが存在する。古代の土師器及び須恵器片が出土しているP157は除くとしても、北辺には複数基のピットが存するため、大変茫漠としている。加えて、西辺のP736と東辺のP200の位置関係が対をなす、南辺の柱筋上にも適当となるピットが配されないため、疑義が残る。

**遺物** P20から山茶椀(481)が出土した(Fig.183)。  
**山茶椀(481)** 粗肌手の胎土によって作られ、南部系の産物と推定される。口縁部は外反し、上端には明瞭な面を有する。

**時期・性格** 古代のSD19009に後出し、中世のSX19003に先行する。現状においては1間×1間の側柱建物を想定しているが、有意な遺物が出土しているのがP20に限定され、またP20・23・193・198以外のピットについては、埋土の様相からも決手に欠ける状況である。但し、屋敷地の区画内の内部に存在しているため、これらと関連する可能性が考えられる。なお、同様に屋敷地の区画範囲内にあり、12世紀後半～13世紀初頭に属するSX19003によってP193が埋没するため、これよりも若干遡るものと判断される。

**【掘立柱建物SB19104 (Fig.187～188)】**

**構成** P199・291・740～749。

**重複** P740→P162。SB19104＝SX19003。

**平面・規模** 梁間4.0 m、桁行6.5 mを測る。主軸方向はW-8°S方向とやや南振りである。構成するピットは、直径0.2～0.55 mの円形状を呈し、検出面からの深さは0.1～0.5 mを測る。2間×3間の総柱建物であり、ピットは柱間2.0～2.3 m間隔で、ほぼ均等に配置される。





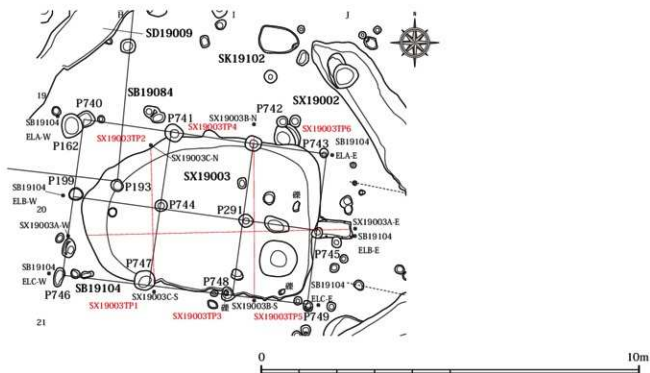


Fig.187 SB19104 · SX19003 平面 (S=1/50)



Fig.188 SB19104 断面 (S=1/50)

建物範囲は大型の土坑状遺構であるSX19003とほぼ重なる。SX19003内部にあるP291・744は特に深く掘削されている。P745はやや周囲を擾乱される。

遺物 P291から土師器皿(482)が出土した(Fig.190)。その他にはP199から土師器片が出たのみで、図化可能なものが存在しなかった。

土師器皿(482) 小皿であり、扁平な作りである。口縁部は緩やかに外側へ開き、端部を丸く収める。

時期・性格 P740を切るP163からは土師器の破片資料が出土するに留まる。出土した482は中世の所産であるが、帰属時期の詳細についての特定は難しい。なお、下面に存在するSX19003とは一連の遺構を形成するものと考えられ、その年代観は12世紀後半～13世紀初頭である。屋敷地の区画の内部に造られる。中世は元より、検出に至った掘立柱建物の中で、唯一の総柱建物となる。

#### 【土坑状遺構SX19003 (Fig.187・189)】

区割 TP1～TP6

重複 P193 (SB19084) → SX19003。SX19003 = SB19104。

平面・規模 長軸6.2m、短軸4.2mを測る大型の遺構である。平面形は隅丸方形状で、西側がやや外方へ張り出す形をなす。主軸方向はW8・SとSB19104と同一の方向を示す。東部でやや擾乱される。検出面からの深さは0.15～0.2mを測り、中央部が掘り鉢状に深められる。下面には関連するSB19104のもの以外にも、数基のピットが埋没する。これからは遺物が全く出でず、SX19003の底面から0.1～0.3m下がる。規模は直径0.2～1.0mと差がある。また、東部及び南東部の下面には、0.3m程度の大きさの礫を確認した。

遺物 山茶碗(483・484・487・488・492・496～504・525～531・535～546)・山皿(489・505・506・547～549)・鉢(493)、土師器鍋(494・507・556)・皿(508～514・532～534・550～555)、青磁碗(490・491・495・515～522)・皿(485)、白磁皿(523)、常滑焼裏(524)、土唾(486)が出土した(Fig.190・191)。南西部のTP1には、須恵器坏(557)が混入している。

山茶碗(483・484・487・488・492・496～504・525～531・535～546) 粗肌手の胎土で、南部系の所産であると推定される。全体的に低く扁平な高台が貼り付けられ、487・488・502・503・531・537・543～546の高台には粗製痕が観察でき、特に546に顕著に認められる。口径は15cm前後で作られるものが大多数で、484・535のみ約12cmと小型である。口縁部は外反し、483・484・497・498・525・535～540の口縁部外面は凹みを有する。口縁部端部は概ね丸く収めるが、535はやや尖り、540は外端に面を形成する。自然釉は483の内外面全体、488・546の体部内面、496の口縁～体部内面、497・540の口縁部外面、537の口縁部内外面の一部、538・539の口縁部内外面に観察できる。483の口縁部内面は厚く、496・540・546は薄くかかる。492・501・527・528・530・543は内面の凹みにより、体部と底部が区別される。501は胎土に直径0.2～0.3cmの礫を包含する。542は高台がほぼ剥落しており、底面には墨書が観察される。「上上」と墨書されるが、2つの文字がやや斜めにずれて配されており、そこに整然性は見受けられない。

山皿(489・505・506・547～549) 506・549の底部の突出は明瞭である。489・547の底部もやや突出

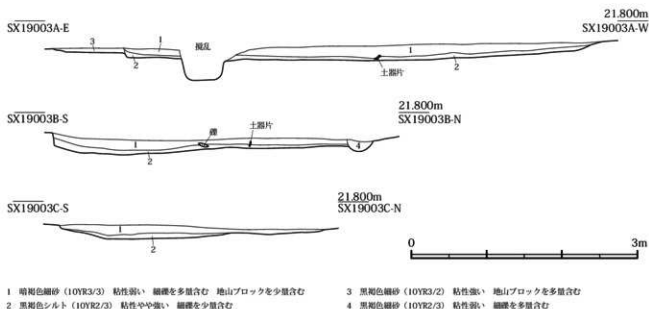


Fig.189 SX19003土層断面 (S=1/50)

SB19104

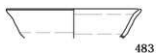
SX19003

P291

上層



482



483



484



485



486

SX19003

TP1

TP2



487



488



489



490

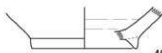


491

TP3



492



493



494

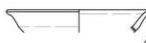


495

TP4



496



497



498



499



500



501



502



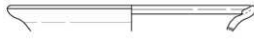
503



504



505



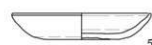
507



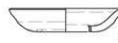
508



506



509



510



511



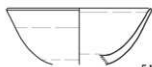
512



513



514



515



516



517



518



519



520



521



522



523

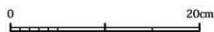
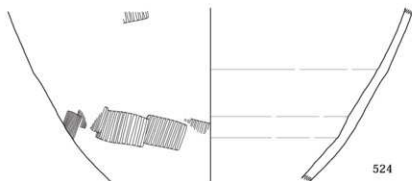


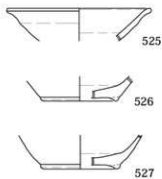
Fig.190 SB19104・SX19003 出土遺物 1 (S=1/4)

SX19003

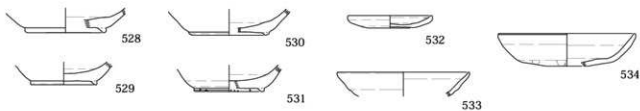
TP4



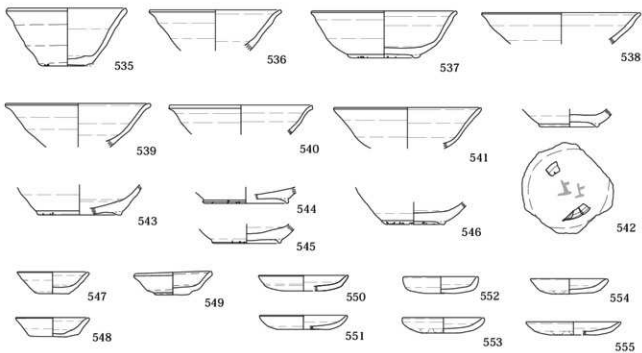
TP5



TP5



TP6



※混入遺物

TP1



Fig.191 SB19104・SX19003 出土遺物 2 (S=1/4)

する。口縁～体部はやや丸みを帯びながら外反する。505は口縁部内面に薄く自然軸が施される。

**山茶椀鉢 (493)** 体部下方～高台のみ遺存しており、高台は高く貼り付けられる。厚手で重厚な作りである。  
**土師器鍋 (494・507・556)** 全て南伊勢系の鍋である。全体的に口縁部は短い。494は口縁部一部のみを残し、口縁部の折り返しは薄く、その上部はやや凹む。507は口縁部の折り返し幅が広く、中央部は強いヨコナデ調整によって凹む。口縁部端部は立ち上がり、やや受け口状を呈する。556は口縁部～体部下方を留める好資料である。非常に薄手に作られ、口縁部の折り返しも薄い。507と同様、口縁部のヨコナデ調整が強く、折り返しの中央部は著しく凹み、口縁部端部が立ち上がる。磨滅のために不鮮明であるが、体部外面に細かいハケ調整が観察できる。

#### 土師器皿 (508～514・532～534・550～555)

口径10cm以下の小皿と口径が12cmを超えるタイプの2つに分類される。511～514・532・550～555は小皿である。512～514・532・555は器高が低く、扁平に作られる。511・513・534・550・551は口縁部のヨコナデ調整が強く、513・550は外面に段が生じている。534は内面のナデを2単位観察できる。口縁部の形状は、緩やかに外反するものが多い。但し、小皿である514・552は、口縁部が上方へ短く折り曲げられ、屈曲が強い。その他の小皿は口縁部端部が直立する511を除くと、外側へ開くものが主流である。

**青磁鉢 (490・491・495・515～522)** 全て内外面に施軸される。軸葉はオリブ灰～明オリブ灰のものが多数である。491・516～518・520～522は内面に文様が施される。特に516は、施文が口縁～体部の内面全体に確認される。491・515・516・519・521は口縁部端部を丸く取め、516の口縁部外面には凹みが認められる。490は口縁部外面に段を有する。495・515・516・521・522は体部下方を残すが、高台部分が剥落しているものと思われる。517・518は高台が削り出され、518は断面が方形で重厚な高台が付帯している。518は精緻で丁寧に作られる。519は口縁部端部の外反が強い。

**青磁皿 (485)** 口縁部の一部のみ遺存する。内外面に施軸される。口縁部外面にはやや凹みが認められる。

**白磁皿 (523)** 口縁部の一部を留める資料である。薄手で精緻な作りであり、内外面に施軸される。口縁部端部は外反する。皿としているが、椀の可能性もある

**常滑焼裏 (524)** 体部下半の資料で、底部を欠く。やや厚手の作りである。内面には自然軸がかかり、下方へ向けて厚みを増す。外面はタタキ(押印文)で裝飾され、

これが帯状に重なるように連続して施文される。

**土鍾 (486)** 完形品である。細長い棒状の形状を呈する。直径0.4cmの円孔が穿かれ、これが直線的に貫通する。穿孔箇所は、ほぼ中央に配置される。

**須恵器环 (557)** 低い高台が貼り付けられ、底部端部は接地する。高台はやや外側に作られ、体部の立ち上がりと近接する。

**時期・性格** ほぼ同時期に比定できるSB19084に後出する。出土遺物を観察すると、山茶椀製品は藤澤編年の5型式、土師器鍋は伊藤編年の第1段階に相当し、12世紀後半から13世紀初頭～前半に属するものと考えられる。また、524の常滑焼裏は、中野晴久氏による常滑製品編年(以下、中野編年と呼称)の3～5型式に比定でき、その年代観に矛盾はない。屋敷地の区画範囲内において、他の多くの中世遺構と同時期に帰属する。非常に大型の土坑状の遺構であり、SB19104と主軸を揃えて重なる。遺物は中央部北半のTP4～北東部のTP6に集中する傾向を示すが、青磁がまとまって出土している点も非常に興味深い。

#### 【中世の遺構出土遺物】

前述した遺構以外にも、中世の遺構が分布する(Fig.148)。以下に、掘立柱建物等の建物や櫓列にまとまることのないピットから出土した遺物について記載する(Fig.192)。図化の対象となる資料は、山茶椀製品及び土師器皿である。

**山茶椀 (558～560・562・567・568)** 粗肌手の胎土で作られ、南部系の産物と推定される。558・560・568は高台が低く扁平に貼り付けられ、全て粗粒痕が観察できる。558・568の粗粒痕は顕著である。559・562・567は口縁部端部が丸く取められ、559・567は口縁部外面に凹みを有する。562の口縁部は直線的に外反する。567は口縁部上面に自然軸がかかる。568は厚手の作りであり、体部内面には影らみ有する。

**山皿 (566)** 底部はやや突出し、扁平な作りである。口縁部内外面には自然軸がかかる。

**山茶椀鉢 (563)** 口縁部の一部のみを残す資料である。厚手の口縁部が直線的に外反する。

**土師器皿 (561・564・565)** 561は小皿であり、ほぼ完形の資料である。口縁部の外側への開きが大きい。564は口縁部が上方へ立ち上がる。ヨコナデ調整が強く、口縁部外面には段が作られる。565は短い口縁部が外方へ開き、扁平なタイプであると思われる。口縁部を部分的に留めるのみであるが、口径は小皿のように小さくはないものと判断される。

出土した山茶椀等は、藤澤編年の5型式の段階に区分され、当該調査区において確認した生業の中心となる1

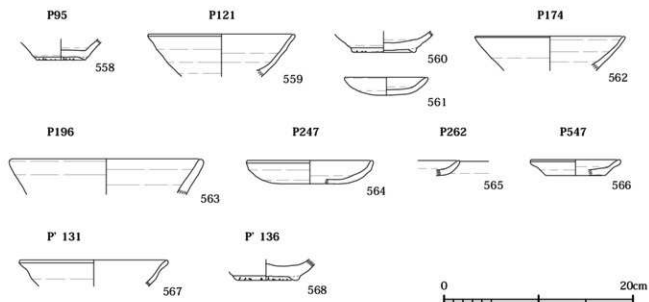


Fig.192 中世の遺構出土遺物 (S=1/4)

2世紀後半～13世紀初頭に位置付けられる。土師器皿についても、これと共伴する時期のものと考えられる。遺構の分布は、大多数の中世遺構と同様、第19次調査区西部における屋敷地の区画範囲内に限定される。

## 5 その他の遺構と遺物 (Fig.193)

### (1) 時期不明遺構

ここでは、特に建物等の重要遺構を抜粋し、その詳細について述べる。これらは出土遺物からの情報が乏しく、明確な時期区分が困難なものである。以下、遺構の規模やその所属時期を類推し、若干の考察を行うものとする。

#### 【欄列 SA19037 (Fig.194・195)】

**構成** P32・～35・750・751?・753。

**重複** SD19004→P32・750・751。P751→P32。P752→P34。P754→P753。

**平面・規模** 5間の規模を検出した。柱間は北から1.9m+2.1m+1.6m+1.6m+1.8mを測り、総長は9.0mに達する。主軸はN-17°-W方向を指す。構成するピットの規模は、直径0.3～0.6mを測り、円形状の平面形をなす。検出面からの深さは0.15～0.42mを測る。南北方向共に、その延長は確認されない。

**遺物** P32～35から土師器片が出土しているが、細片資料につき、図化には至らなかった。

**時期・性格** 出土遺物からは帰属時期の推測は困難である。弥生時代後期～古墳時代初頭のSD19004に後出するが、その他に重複するピットからは遺物の出土がない。主軸方向を見ると、SD19006・SK19031・SX19100と近似し、SD19005とほぼ直交する値を示す。これらは12世紀後半～13世紀初頭の産物であり、中世の屋敷地に関わる遺構である。SA19037も同時期にならうか。該当時期における大多数の遺構と同様、屋敷地の区画範囲内に位置する点からも、その可能性が高まるものと判断される。なお、P751はSA19037の柱筋上に存在し、P32に先行する。直径0.4m、検出面からの深さ0.35m



Fig.193 その他の遺構配置図 (S-1/500)



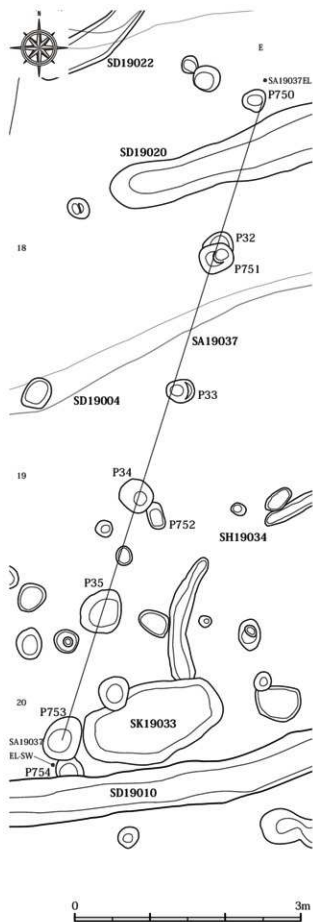


Fig.194 SA19037 平面 (S=1/50)

を測り、SA19037を構成するピット群と規模・形状が近く、また埋土の様相も類似する。何らかの事情により、P751からP32に造り替えたものと推測される。

**【掘立柱建物SB19088 (Fig.196・197)】**

構成 P207・209?・210~214・755・756?。

重複 P212→P539。ピット(遺物なし)→P213。P755→ピット(遺物なし)。

平面・規模 2間×3間の側柱建物である。梁間2.2m、桁行5.5mを測り、長方形の平面形を呈する。主軸方向はN-12°-Wを向く。構成するピットの規模は、直径0.2~0.5mの円形状で、検出面からの深さ0.05~0.25mを測る。南辺が確定し、北側にも延びることがないため、概ねこの規模に落ち着くものと思われる。

遺物 なし。

時期・性格 遺物の出土が一切なく、P212に後出するP539からは土師器片の出土に留まるため、所属する時期を掴むことは困難である。出土遺物からの情報は皆無に等しい状況であるが、主軸方向を見ると、比較的類似した数値を示すものに、SD19006・SK19029・31・SA19037・SX19100の中世遺構があるが、古代のSX19035・48・SA19044も比較的近い。遺構の分布を見ると、付近には古代遺構がやや散漫であるのに比較して、中世は屋敷地の区画内部となり、より関係性が窺われる。12世紀後半~13世紀初頭の掘立柱建物になる可能性が考えられる。なお、北東部はやや茫漠としており、北辺及び東辺の柱筋上のピットは未検出である。また、北東隅のP756は位置的には申し分ないが、プランが乱れているため、攪乱の影響を受けている可能性がある。直径0.4m、検出面からの深さは0.05mを計測する。建物内部には複数基のピットが見られるが、多くからは遺物の出土がなく、関係は不明である。

**【掘立柱建物SB19096 (Fig.198・199)】**

構成 P255~260・759?。

重複 P757→P257。P758→P255。

平面・規模 2間×4間の規模を検出し、側柱建物であると考えられる。梁間3.4m、桁行7.4mを測る。主軸方向はN-17°-Wを向く。構成するピットの規模は、直径0.3~0.4mを測り、検出面からの深さは0.06~0.25mを計測する。全て円形状の平面形を呈する。北辺及び西辺の検出に至ったが、北辺東部を延長するとSD19007と重なる位置に該当し、また西辺の南方向への延長も未確認である。南辺及び東辺は不明であるが、東辺はSD19007と重複して削平されている可能性が考えられる。

遺物 なし。

時期・性格 構成するピットからは、破片資料さえ出土

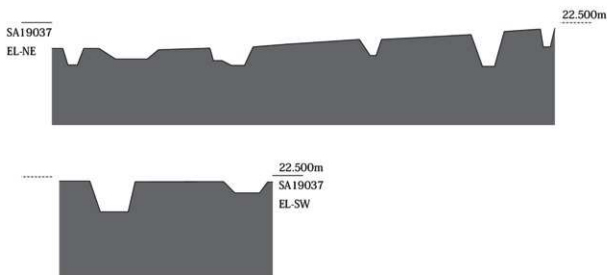


Fig.195 SA19037 断面 (S=1/50)

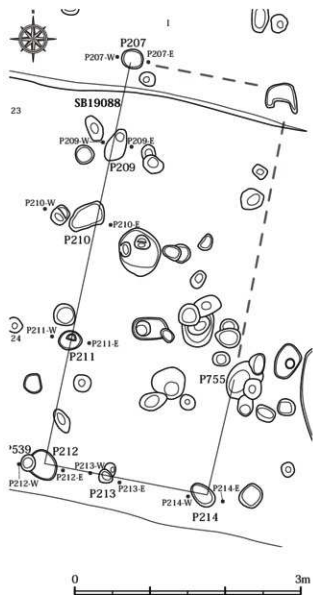
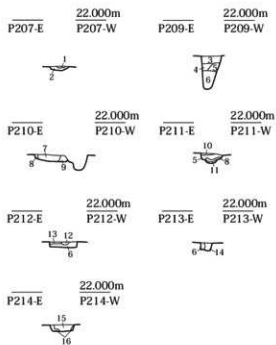


Fig.196 SB19088 平面 (S=1/50)



- 1 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い 細砂を含む
- 2 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性強い 地山ブロックを含む
- 3 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い 地山ブロックを含む
- 4 黒褐色シルト (10YR3/2) 粘性強い 地山ブロックを多量含む
- 5 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性強い 地山ブロックを多量含む
- 6 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロックを含む
- 7 黒褐色シルト (10YR2/3) 粘性弱い 細砂を含む
- 8 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性弱い
- 9 黒褐色細砂 (10YR3/2) 粘性弱い
- 10 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロックを多量含む
- 11 暗褐色シルト (10YR3/3) 粘性強い 地山ブロックを多量含む
- 12 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 細砂を含む 炭化物を少量含む
- 13 黒褐色細砂 (10YR3/2) 粘性強い
- 14 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性強い
- 15 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性弱い 地山ブロックを少量含む
- 16 褐色シルト (10YR4/6) 粘砂を含む 15が少量混じる

Fig.197 SB19088 土層断面 (S=1/50)

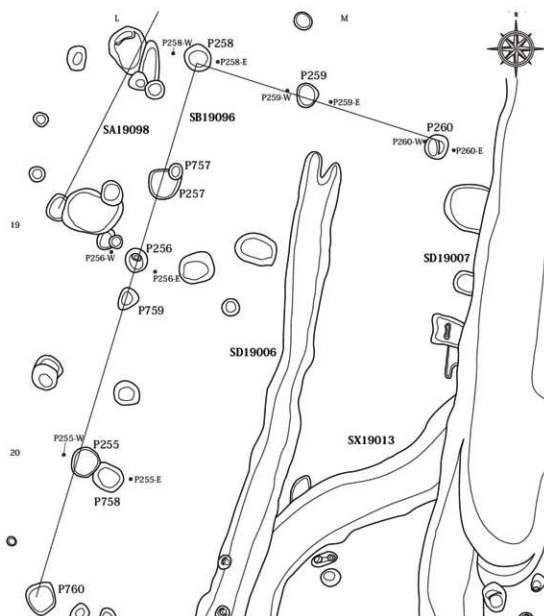
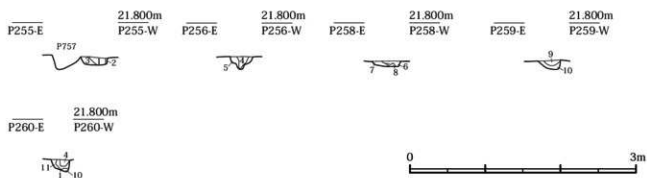


Fig.198 SB19096 平面 (S=1/50)



- |                                       |                                      |
|---------------------------------------|--------------------------------------|
| 1 黒褐色シルト (10YR2/3) 細礫を含む              | 7 暗褐色細砂 (10YR3/3) 細礫を含む              |
| 2 黒褐色シルト (10YR3/2) 地山ブロックを多量含む        | 8 黒褐色シルト (10YR3/2) 細礫・地山ブロックを含む      |
| 3 黒褐色シルト (10YR3/2) 細礫を含む 地山ブロックを少量含む  | 9 黒褐色シルト (10YR2/2) 細礫を少量含む           |
| 4 黒褐色シルト (10YR2/2) 細礫を含む              | 10 黒褐色シルト (10YR2/3) 細礫・地山ブロックを多量含む   |
| 5 黒褐色シルト (10YR3/2) 粗砂を含む 細礫・地山ブロックを含む | 11 暗褐色細砂 (10YR3/3) 細礫を含む 地山ブロックを多量含む |
| 6 黒褐色シルト (10YR3/2) 細礫を含む              |                                      |

Fig.199 SB19096 土層断面 (S=1/50)

していない。また、P255・257に切られるP757・758からも遺物の出土が全くない。主軸方向を検討すると、SA19037と同一の方向を示し、同じようにSD19005・6・SK19031・SX19100等の中世遺構と親近性が高いものと思われる。中世の屋敷地の区画範囲の内部に存在する点からも、これを追認したい。遺構の平面形は橋状遺構と捉えたSX19100のようにSD19006を跨ぐように配置されるが、SX19100のように東方向の延長上におけるSD19005が浅く掘削されるような有意な形状変化を見ることはできない。また、前述したようにSD19007と重なり、これを切るピットの検出には至らなかった。加えて、南辺を東方向へ延ばすとSX19100に干渉する

ため、別時期に比定できる可能性が高い。中世の中でもより古手の段階に位置付けられる。なお、構成するピットについては、P256を候補として考え、土層断面等の記録をとっているが、P257との距離が近すぎるため、P759の方が妥当であるかもしれない。P759は直径0.25mとやや小振りの円形状で、検出面からの深さは0.14mを計測する。

#### 【掘立柱建物SB19106 (Fig.200・201)】

構成 P583～587。

重複 P763→584。P762→P586。

平面・規模 側柱建物であると考えられ、2間×2間の範囲を検出した。北西及び北東コーナーの確認により、北限と東西方向の規模は固まったが、南側一帯には攪乱範囲が広がるため、遺構範囲を掴むことができない。確認した規模は、東西2.9m、南北3.0mを測り、主軸方向はN-19°-W方向を向く。構成するピットは、直径0.3～0.6mの円形状を呈し、検出面からの深さは0.03～0.16mを計測する。

遺物 なし。

時期・性格 遺物の出土は一切ない。重複するP762・763からも遺物が全く出ていないため、帰属時期を特定することは難しい。主軸方向は中世遺構との類似性が挙げられるが、位置的には屋敷地を構成する区画溝の外側となり、同じく区画から外れたSE19112・SK19113との関係も乏しい。付近には古墳時代初頭のSH19012・57、円面硯が出土したP315が位置するが、明確な関連性は見受けられず、不明である。

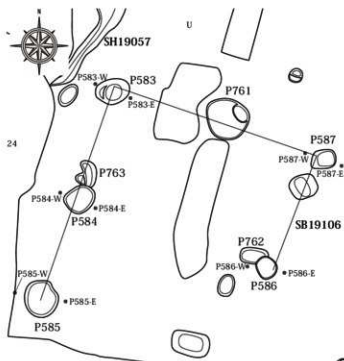
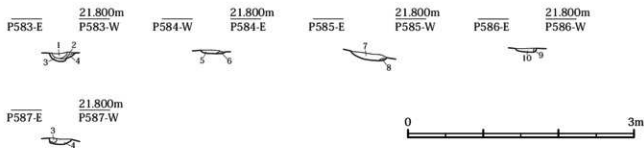


Fig.200 SB19106 平面 (S=1/50)



- 1 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い
- 2 黒褐色シルト (10YR2/2) 粘性強い 地山ブロックを少量含む
- 3 褐色シルト (10YR4/4) 粘性強い 黒褐色土を多量含む
- 4 褐色シルト (10YR4/4) 粘性強い 黒褐色土を少量含む
- 5 黒褐色細砂 (10YR2/3) 粘性弱い
- 6 オリーブ褐色シルト (2.5Y4/4) 粘性強い 黒褐色土を少量含む
- 7 黒褐色細砂 (10YR2/2) 粘性弱い
- 8 灰黄褐色粘土 (10YR4/2) 粘性強い
- 9 黒褐色細砂 (10YR2/3) 炭化物を少量含む
- 10 褐色細砂 (10YR4/4) 粘性弱い

Fig.201 SB19106 土層断面 (S=1/50)

## (2) その他の出土遺物

表土及び包含層掘削、遺構検出時においても、比較的多量の遺物が出土し、比較的遺存状態が良好な個体を抽出した (Fig.202 ~ 204)。弥生・古墳時代から中世に至るまで、幅広い時代に跨る遺物が万遍なく確認され、少量ではあるものの縄文土器の出土も見られる。また、一部ではあるが、攪乱の可能性が高いSX22018・19からの出土品、建物等にまとまらないピットから出土した帰属時期の特定が困難な遺物についても、併せてここに記述している。

**縄文土器深鉢 (609・610・612・613・615)** 609・612は凸帯文土器であり、共に凸帯文上には貝殻によるキザミが施される。609は口縁部端部からやや下がった位置に凸帯が貼り付けられる。610の外側は、3条1組で横位の沈線文によって装飾される。沈線文は半截竹管状工具を使用して施文されている。胎土には金雲母を含む。613は底部の資料で、ほぼ平底の底部形状である。胎土には金雲母が観察できる。615は口縁部上端にキザミを有しており、これは工具の使用によって小波状を呈する。口縁部の外反が強い。609・612は縄文時代晩期後半、615は縄文時代晩期前半の産物である。なお、610は縄文時代中期末の北白川C式の段階であると考えられる。

**弥生土器甕 (569・570・595・604・605)** 569はく字甕で、頸部の屈曲が弱い。口縁部外端には明瞭であり、体部内外面には粗いハケ調整される。570・605は受け口甕で、共に口縁部端部の立ち上がりは明瞭で、570は外反が強い。595はS字甕の口縁部である。口縁部は全体的に外反傾向を示し、端部は外側へ湾曲する。604は口縁部上端面が明瞭に作られ、口縁部端部はやや内湾する。胎土には雲母を多量包含する。595はS字甕0類の段階に相当し、古墳時代初頭の廻間1式1～2段階の年代観が与えられる。604は弥生時代後期前半の八王子古宮1式以降の資料であるが、口縁部端部が内湾傾向であるため、廻間式期の所産であると考えたい。

**弥生土器壺 (571～573・596～598・606・611)** 571は直立する頸部を有し、口縁部は外側へ折り曲げられるように強く屈曲する。口縁部外端には明瞭な面を有する。外面はタテハケ後にタテハラミガキ調整されるが、磨滅のために不明瞭である。572は口縁部上端面が明瞭である。573の底部形状は丸底で、底部が突出する。内面は密にハケ調整される。瓢盥になろうか。596は僅かに上げ底される。597は薄手の作りであり、口縁部の形状は直口である。598は送水場建物の北側中央部において、表土掘削中に出土した小型土器の完形品である。該当箇所は攪乱の影響が著しく、該当時期の遺構は検出さ

れていない。短頸で、口縁部が内湾する。体部は球形状に膨らみ、その最大径は中位に作られる。底部形状は平底である。606・611は口縁部外端に明瞭な面を有する。606は口縁部外端部に凹みが認められ、外端部下部にキザミが施される。キザミは工具の使用によって小波状をなす。611は口縁部外端部が4条の凹線文によって装飾される。外端部下部にはキザミを有するが、指頭による押圧が施されたものと考えられ、幅広く被打っている。口縁部内面には凹みが観察できる。571は弥生時代後期前半の八王子古宮式の段階になろうか。598は古墳時代初頭の廻間1式期の所産である。606・611は弥生時代中期前半に遡る資料である。

**弥生土器高坏 (574・607・608)** 574は有稜高坏の坏部で、坏部上段は直線的に外反する。坏部は比較的深く、脚部との接合部が剥落している。坏部外面のタテハラミガキ調整は、磨滅のために痕跡化している。607・608は脚部で、607はハの字状に大きく脚を開ける。外面は櫛描直線文で装飾されるが、磨滅によって不鮮明である。608は小型で低脚である。有稜高坏の脚部になると考えられる。円形透孔が3方に穿かれるが、孔径は0.5cmと小さい。574は山中式後期の所産で弥生時代後期に比定できる。608は古墳時代初頭頃の産物であろうか。

**土師器甕 (575)** 体部はやや薄手の作りであるが、口縁部は肥厚する。口縁部端部は上方へ明瞭に摘み上げられる。体部内外面は粗いハケ調整される。平安時代後期頃の所産であると考えられる。

**土師器甕 (576)** 移動式の甕である。体部を部分的に留める資料であるが、切開部が残存する。把手部が剥落しているが、その下地にもハケ調整の痕跡が観察できる。口径は40cm強に復元され、大型のものとなる。

**須恵器壺 (578・603)** 578は大型の壺で、口縁部端部の外反が強い。口縁部外端には明瞭な面が形成される。口縁部内面には薄く自然軸がかかる。603は厚手に作られ、重厚な高台が貼り付けられる。底部端部は内傾し、内面には稜をもつ。内外面には自然軸が観察可能である。ロクロ目が強い特徴がある。

**須恵器坏 (577・601)** 共に底部の完形品である。577は体部が薄手であり、丸みを帯びて立ち上がる。坏としたが、碗の可能性もある。601は体部内面に自然軸がかかる。

**須恵器転用硯 (602)** 本来の須恵器坏の内面を硯面に転用しており、僅かに墨の付着が観察可能である。体部内面中央の平坦面が広いいため、有用であったものと想像できる。高台は外側に作られており、体部が立ち上がる部分と非常に近接する。底部端部には内傾面を有する。

**灰釉陶器碗 (579～582)** 全て底部一部を留める資料

表土 (第19次)

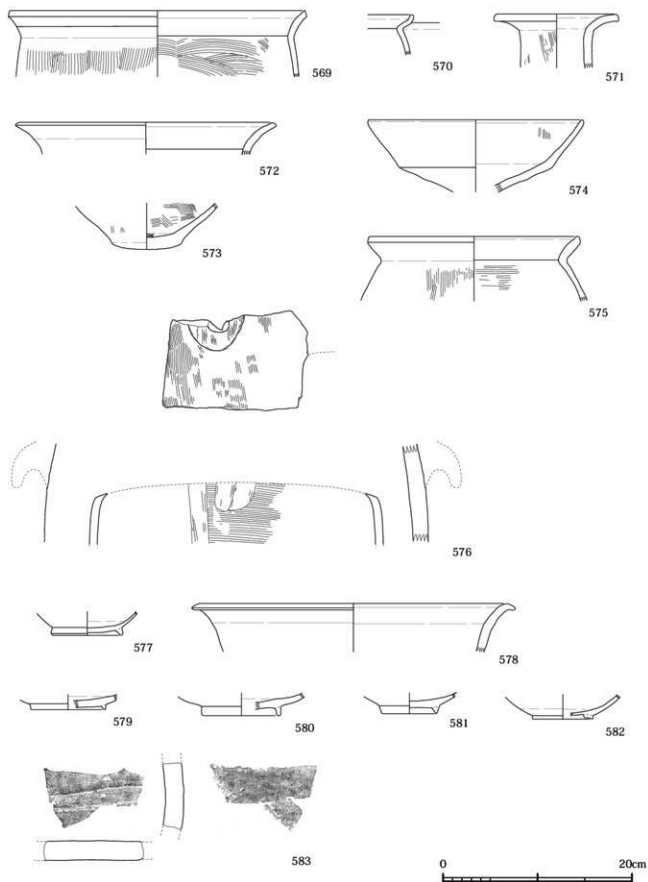
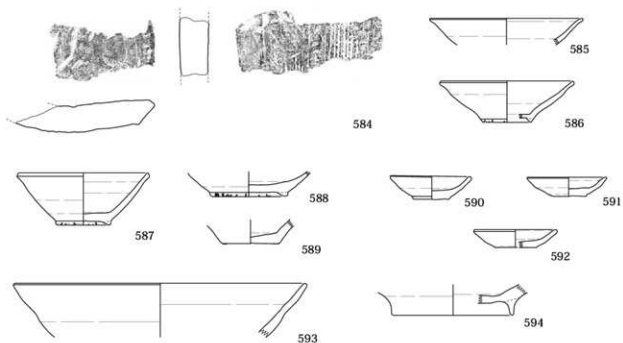
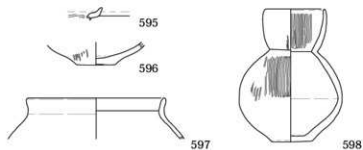


Fig.202 その他の出土遺物 1 (S=1/4)

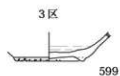
表土 (第19次)



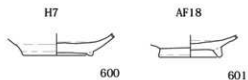
送水場建物北側



表土 (第22次)



検出 (第19次)

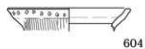


包含層 (第22次)

1区



1区 TP1



1区 TP4



1区 TP2

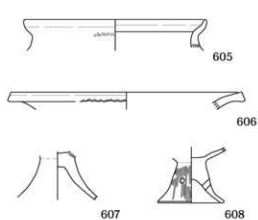


Fig.203 その他の出土遺物 2 (S=1/4)

包含層 (第22次)

2区

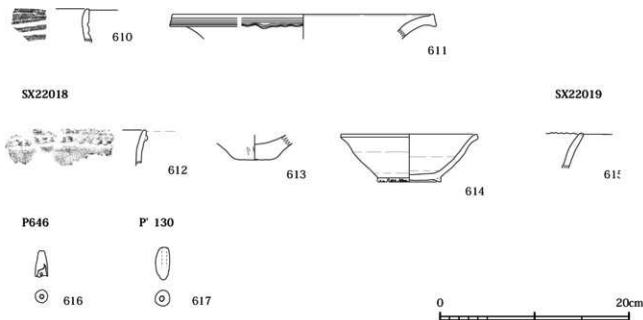


Fig.204 その他の出土遺物 3 (S=1/4)

で、灰白色の素地に対し、灰オリーブ色の灰軸が施される。579・581・582は内面全体に施軸され、580のみ体部内面に施軸される。580については、トチンを用いずに直接重ね焼きが行われたと考えられ、高台接地面となる底部内面は無軸である。579・580・582は断面方形の高台が貼り付けられ、581は三角形状を呈する。582の高台は幅広く扁平であり、内面には段を有する。これらは猿投窯編年のK14～90窯式の産物で、9世紀代に比定できる。唯一、580のみK90窯式の段階に限定でき、9世紀後半の所産であると判断される。

**平瓦 (583・584)** 583は粘土組桶巻作りによるもので、両端部を欠損する。凹面には布目痕を確認し、その縦じ合わせ目の観察が可能である。凸面は丁寧にケズリ調整される。584は一枚作りによるもので、厚手の作りである。側面が残存しており、凸面側縁が面取りされる。凹面には布目痕、凸面は縄タタキが確認される。583は橙色系の胎土で、平田遺跡出土系統の瓦であると判断され、7世紀後半～8世紀前半の年代観である。584は8世紀中葉の所産である。

**山茶鉢 (585～589・599・600・614)** 全て粗肌手の胎土で作られ、南部系の産物であるものと推定される。これらの中には、低く扁平な高台が貼り付けられる。586～588・599・614の高台には初煎痕が観察でき、588・599・614は特に顕著である。585～587・614

の口縁部外面には凹みが認められる。585は口径が16.2cmと大きく復元される。586の外表面全体、600・611の体部内面には自然軸がかかり、589・600は薄い。586はロクロ目が強く、体部と底部の境が角張る。587・614は口縁部端部が上方へ向けて尖る。589は高台が剥離しており、焼成に起因するものか、内面が黒変している。これらの遺物は、当該調査区における中世の生業の中心となる藤澤編年5型式の段階に比定でき、12世紀後半～13世紀初頭に属するものと考えられる。

**山皿 (590～592)** 590・591は底部の突出が強く、592もやや底部が突出する。590・592は口縁部端部を丸く収め、直線的に外反する。591はロクロ目が強く、体部内面には薄く自然軸がかかる。592の自然軸は口縁～体部内面に薄い。胎土には直径0.4cmの礫を包含する。全て12世紀後半～13世紀初頭に帰属すると判断される。

**山茶鉢鉢 (593・594)** 593は口縁部、594は底部の一部を留める資料である。593は口縁部が直線的に外反し、外面には凹みを有する。口縁部内面には自然軸が薄くかかる。594は高台が高く貼り付けられる。体部に比較して底部はやや薄手に作られる。

**土鍾 (616・617)** 共に完形品ではないが、棒状の土鍾である。616は0.4cm、617は0.5cmの円孔が貫通するものと見込まれる。穿孔箇所はほぼ中心である。



### (3) SX22031 について

【近代遺構 SX22031 (Fig.205・206)】

区割 TP1・2。

重複 SX22031 → 平田送水場水槽升。

平面・規模 3区の大平を占めるコンクリート製の構造物で、その全てが水槽升を覆う土盛によって埋没する。西～南西部を現代の水槽升によって掘乱されるため、全形は不明である。検出した範囲は東西13.7m、南北17.8mを測る長方形を呈する。北辺東部のコンクリートは厚く、北方向へ4.6m突出する。構成するコンクリートの厚さは1.2mを計測するが、東辺のみ1.8mと厚い。内部は空洞であり、TP1・2の間には厚さ0.9mの仕切り壁が存在する。この仕切り壁もコンクリート造りである。主軸方向はN-11°-W方向を示す。矩形を志向するSX22031の4辺はほぼ同一レベルに造られ、そのコンクリート上端の標高は23.4m、TP1・2の仕切り壁の上端は23.1mを測る。重複する水槽升上端の標高は24.1～24.2mを計測する。なお、SX22031の埋土には、直径1.0mを超過するコンクリート塊が多数混入しており、調査は非常に難航した。表土掘削の段階において、SX22031の建物の一部と見られるコンクリート塊が少量に露出し、この除去には多大な努力を要した。コンクリート塊はまた相当量埋没しており、安全面も考慮し、完掘には至っていない。そのため、調査はTP1で標高19.4～19.7m、北部で19.1m、TP2は21.2～20.9mまでを対象として行い、下面には前代の遺構が存在しないことを確認している。

遺物 なし。調査区全面においても、近代遺物の出土はない。SX22031付近の表土からは山茶碗(599)が出土しているが、水槽升を被覆する土盛中からの出土である。

時期・性格 第22次3区の調査において、調査区が面的に削平されている状況を確認した。また、平田送水場建物北側に埋設された水槽升を覆う土盛箇所について、その東～北東部が調査対象となっていたため、その表土掘削を行ったところ、SX22031を検出した。SX22031は重厚なコンクリート造りの構造物であるが、水槽升によって南西コーナーを破壊されている。

ここで、後出する水槽升を含む平田送水場について確認する。平田送水場については、鈴鹿市における上水道創設の水源送水場と位置付けられているが、その前身は鈴鹿海軍工廠の水道施設として供されていた。当該施設の南側一帯には、鈴鹿海軍工廠及び工具養成所、鈴鹿共済病院等が置かれた。建物の建設は、鈴鹿海軍工廠が開廠されたのと同年の昭和18年(1943年)に遡る。昭和22年(1947年)9月には、大蔵省(当時)から施

設を一時的に無償借用し、給水した経緯があるが、これが鈴鹿市における水道事業の開始とされている。送水場建物は、増補改良工事が昭和37年(1962年)9月に着工され、1年後の昭和38年(1963年)9月に完成している。以降、24,000m<sup>3</sup>/日もの給水量を供給する鈴鹿市における重要な送水施設として利用されてきた。老朽化に伴い、今回の発掘調査の要因となった改築工事のため、平成22年(2010年)1月6日にその稼働を停止している。また、送水場の北側に併設する水槽升についても、詳しい資料はないが、本格的に水道事業が開始される昭和38年の送水場建物完成時には存在していた可能性が高いものと考えられる。つまり、SX22031は昭和38年以前に建てられた構造物と言える。SX22031の周囲はその掘り方で大規模に掘削され、近世以前の痕跡を留めない。

なお、近代における水道施設で著名なものとして、桑名市の諸戸水道の例を参考にし、諸戸水道は明治37年(1904年)に竣工され、新しい水道に替わる昭和4年(1929年)まで利用された施設である。桑名市における上水道の起源であり、現存する施設や資料により、水源池や配管、貯水池施設等の様子や貯水池施設の上屋構造も分かる貴重な資料である。ここで注目されるのは貯水槽である(Fig.207・208)。全体の規模は東西13.4m、南北23.2mの矩形を呈し、深さは3.4mに達する。側壁はコンクリート製で、内壁は全て煉瓦積みによって造られている。中央部には仕切り壁が存在し、2槽に分けられる。各槽にはそれぞれ煉瓦造の2枚の導水壁が2枚設置され、これが交互に配される。構成するコンクリートの厚さは0.3m～0.4mを測り、煉瓦の大きさは0.2m×0.1m×0.6m程度である。施設の廃絶後も水が溜まるため、付近の人々が水を汲み上げて利用していたと伝わる。当該遺構は、昭和40年(1965年)には、桑名市指定文化財に登録されている。

SX22031は形状的に諸戸水道の貯水池施設に類似する。共にコンクリート造りによるもので、矩計形を志向する。内部には導水壁が存在する点も共通する。諸戸水道はコンクリート躯体を構築した後、槽の内側には煉瓦が積み上げられるが、SX22031には煉瓦が見られず、埋土にも煉瓦片は全く検出されなかった。コンクリートの打ち出し仕上げによる構造であると思われる。また、断面の観察によると、断面Bにおいては、内壁東面に梯子状のステップが5箇所遺存し、乗降可能な構造であったものと判断される。また、断面Aでも確認できるが、導水壁の東西南面が約0.2m掘り抜かれ、アーチ状の平面形を呈する。この装飾は壁の両面に3箇所ずつ施されている。内部構造を更に見ると、諸戸水道では中央仕切壁

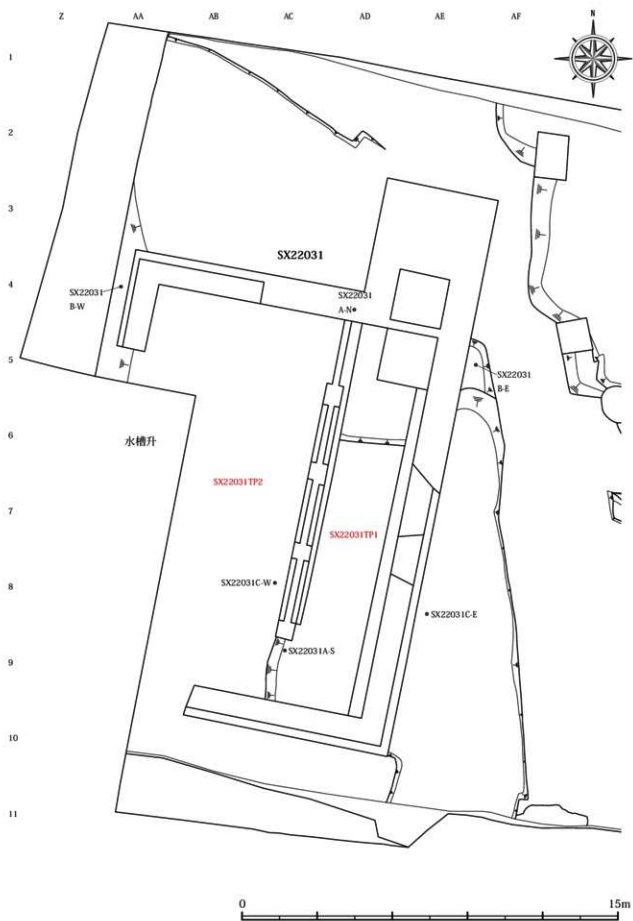


Fig.205 SX22031 平面 (S=1/150)

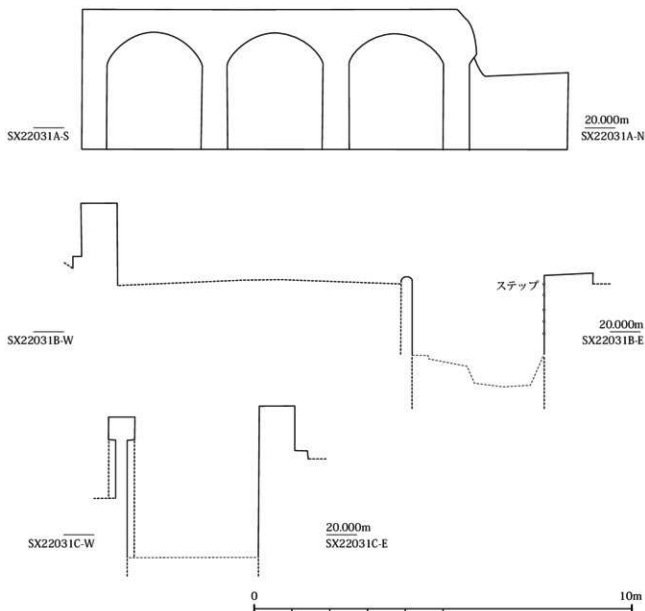


Fig.206 SX22031 断面 (S=1/100)

によって北・南槽に分割されるが、SX22031は現存する

範囲では仕切壁は存在せず、導水壁も1枚のみである。

貯水容量の点から比較すると、まず諸戸水道は概ね923.6 $\text{m}^3$ （内法測定：東西12.2 $\text{m}$ ×南北22.3 $\text{m}$ ×深さ3.395 $\text{m}$ ）を測るものと考えられる。SX22031は深さが不明であるものの、底面積は172.89 $\text{m}^2$ （内法測定：東西11.3 $\text{m}$ ×南北15.3 $\text{m}$ ）を計測する。深さはTP1北部で4.3 $\text{m}$ を測るも、底面の到達には至らず、諸戸水道と比較しても深い。現存する規模から判断しても、諸戸水道の貯水容量に匹敵するものと考えられる。

以上のことから、SX22031は貯水槽としての性格を有していたと判断される。昭和38年を遡る時期のものであるが、国土地理院発行の米軍による空中写真を参照すると、昭和22年（1947年）11月4日に撮影された

USA-R470-70には、送水場の前身となる建物の北側に隣接し、SX22031と見られる構造物が建っていることを確認できる。写真では、SX22031は南西コーナーがそのまま形状に収斂するよう見えるため、平面規模は概ね推測可能である。SX22031は、昭和18年に鈴鹿海軍工廠の水道施設として利用された時期の貯水槽であり、昭和38年までにはその機能を失っていたものと考えたい。平田地域は、昭和18年の鈴鹿海軍工廠閉廠以来、鈴鹿市における拠点的な水源を供える地域として、非常に重要であるものと言える。



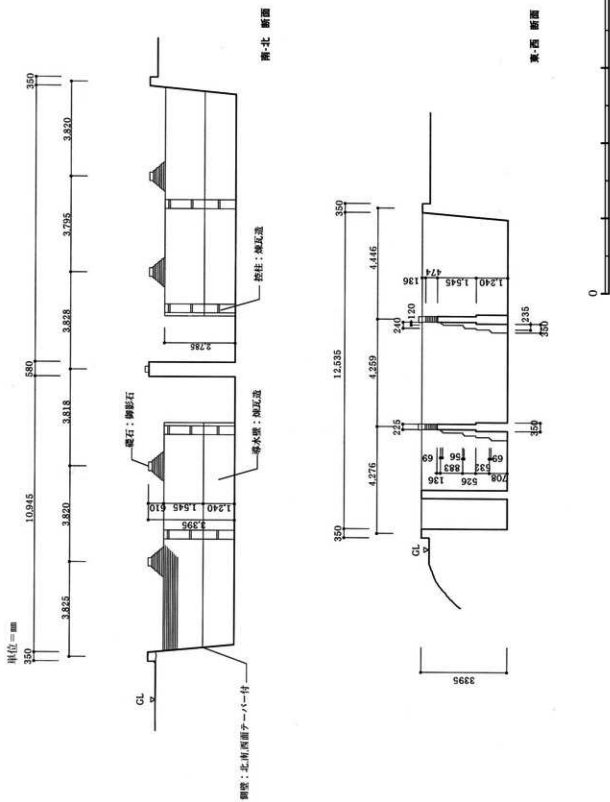


Fig.208 諸戸水道貯水槽断面 (S-1/150)

Tab.1 遺構一覧 (1)

遺構	調査	規模 (m)										主軸方向	時期
		辺長		床面積 (㎡)	床面 深さ	貼床 厚さ	周壁溝		土坑				
		東西	南北				幅	深さ	直径	深さ			
SH19001	19次	5.6	5.0	24.4	0.05-0.1	0.06-0.09	0.1-0.25	0.01-0.05	0.7-0.75	0.24	W-29°-N	古墳初頭	
SH19012	19次	5.9	5.6	28.6	-	-	0.15-0.3	0.05	-	-	W-42°-N	古墳初頭?	
SH19014	19次	5.5	5.1	23.5	0.04	0.02-0.15	0.2-0.25	0.08-0.13	0.65-0.9	0.13	W-2°-N	古墳初頭	
SH19015	19次	6.2	5.5	29.6	0.02-0.05	0.08-0.15	0.15-0.3	0.03-0.1	0.8-0.9	0.3	W-37°-N	古墳初頭	
SH19018	19次	5.8	5.3	26.0	0.02-0.06	0.03-0.12	0.2	0.05-0.1	1.4	0.3	W-30°-N	古墳初頭	
SH19034	19次	5.5	-	-	-	-	0.15-0.3	0.1	1.05-1.9	0.1	W-23°-N	古墳初頭	
SH19053	19次	(7.0)	(3.0)	-	-	-	0.07-0.2	0.1	0.75-0.8	0.1	W-24°-N	古墳初頭	
SH19057	19次	-	(6.2)	-	0.04-0.07	0.03-0.04	0.1-0.3	0.05-0.1	(0.1)	0.58	N-43°-E	古墳初頭	
SH19058	19次	(3.8)	(7.4)	(17.7)	0.1	-	0.25-0.35	0.05-0.1	-	-	N-2°-E	?	
SH19059	19次	6.0	4.0	20.0	0.02-0.05	-	0.2-0.4	0.03-0.06	-	-	W-8°-S	弥生後期～ 古墳初頭?	
SH19060	19次	5.7	5.7	28.6	0.1-0.2	-	0.2-0.3	0.03-0.12	0.6-0.7	0.45	W-21°-N	古墳初頭	
SH19061	19次	5.1	4.6	(21.8)	0.07	-	0.15-0.2	0.06	0.75-0.8	0.42	N-20°-E	弥生後期?	

## 【備考】

- ① (計測値) は損乱・重複等によって消失し、規模が不明確であるため、検出規模を示す。それ以外の数値は、規模が確定しているものは実測値、コーナー等の検出によって容易に推測可能なものは推測値を記している。
- ② 東西・南北方向の辺長は、周壁溝の外法間距離を測定した全長を示し、床面積については、周壁溝 2 辺の内法間距離に基づいて算出している。
- ③ 床面深さは、遺構検出面から床面までの深さを表す。
- ④ 周壁溝深さは、床面から周壁溝底面までの深さを表す。
- ⑤ 土坑深さは、近接した周壁溝底面から土坑底面までの深さを表す。
- ⑥ ビット深さは、遺構を構成するビットの遺構検出面から底面までの深さを表す。
- ⑦ 形式は、側柱=側柱据立柱建物、総柱=総柱据立柱建物、平地=平地式住居にそれぞれ対応する。

Tab.2 遺構一覧 (2)

遺構	調査	地区	規模 (m)				形式	主軸方向	時期																																																																																																																																																																										
			桁行	梁間	ピット																																																																																																																																																																														
			間数	間数	直径	深さ																																																																																																																																																																													
SB19036	19次	-	(7.0)	(3.2)	0.45-0.7	0.1-0.3	側柱	N-41° -W	9世紀?																																																																																																																																																																										
			(2)	(1)						SB19084	19次	-	5.4	4.8	0.25-0.35	0.07-0.32	側柱	W-6° -S	12世紀後半~ 13世紀初頭?	1	1	SB19086	19次	-	5.7	3.4	0.65-0.8	0.4-0.55	側柱	W-5° -S	縄文晩期前半	2	1	SB19087	19次	-	(5.2)	2.7	0.2-0.4	0.05-0.42	側柱	N-32° -E	古墳初頭?	(4)	1	SB19088	19次	-	5.5	2.2	0.2-0.5	0.05-0.25	側柱	N-12° -W	12世紀後半~ 13世紀初頭?	3	2	SB19089	19次	-	(5.3)	(1.5)	0.3-0.8	0.1-0.32	側柱	W-6° -N	弥生後期~ 古墳初頭	(2)	(1)	SB19090	19次	-	(5.7)	3.7	0.4-0.7	0.05-0.35	側柱	N-1° -W	縄文晩期前半?	(2)	3	SB19093	19次	-	4.1	4.0	0.25-0.35	0.12-0.3	側柱	W-4° -N	弥生後期~ 古墳初頭	2	2	SB19094	19次	-	3.6	2.9	0.2-0.4	0.25-0.35	側柱	W-35° -N	縄文晩期前半?	2	2	SB19095	19次	-	5.4	4.3	0.35-0.8	0.1-0.45	側柱	W-7° -E	9世紀前半 ~中葉	3	2	SB19096	19次	-	(7.4)	(3.4)	0.3-0.4	0.06-0.25	側柱	N-17° -W	12世紀後半~ 13世紀初頭?	(4)	(2)	SB19104	19次	-	6.5	4.0	0.2-0.55	0.1-0.5	総柱	W-8° -S	12世紀後半~ 13世紀初頭	3	2	SB19106	19次	-	(3.0)	2.9	0.3-0.6	0.03-0.16	側柱	N-19° -W	?	(2)	2	SX22014	22次	2区	南北 6.7	東西 5.0	0.35-0.65	0.05-0.3	平地式	N-3° -E	縄文晩期前半	SB22032	22次	2区	3.1	2.8	0.4-0.55	0.28-0.6	側柱	W-5° -N	9世紀後半	2	2~3	SB22033	22次	1区	(4.7)
SB19084	19次	-	5.4	4.8	0.25-0.35	0.07-0.32	側柱	W-6° -S	12世紀後半~ 13世紀初頭?																																																																																																																																																																										
			1	1						SB19086	19次	-	5.7	3.4	0.65-0.8	0.4-0.55	側柱	W-5° -S	縄文晩期前半	2	1	SB19087	19次	-	(5.2)	2.7	0.2-0.4	0.05-0.42	側柱	N-32° -E	古墳初頭?	(4)	1	SB19088	19次	-	5.5	2.2	0.2-0.5	0.05-0.25	側柱	N-12° -W	12世紀後半~ 13世紀初頭?	3	2	SB19089	19次	-	(5.3)	(1.5)	0.3-0.8	0.1-0.32	側柱	W-6° -N	弥生後期~ 古墳初頭	(2)	(1)	SB19090	19次	-	(5.7)	3.7	0.4-0.7	0.05-0.35	側柱	N-1° -W	縄文晩期前半?	(2)	3	SB19093	19次	-	4.1	4.0	0.25-0.35	0.12-0.3	側柱	W-4° -N	弥生後期~ 古墳初頭	2	2	SB19094	19次	-	3.6	2.9	0.2-0.4	0.25-0.35	側柱	W-35° -N	縄文晩期前半?	2	2	SB19095	19次	-	5.4	4.3	0.35-0.8	0.1-0.45	側柱	W-7° -E	9世紀前半 ~中葉	3	2	SB19096	19次	-	(7.4)	(3.4)	0.3-0.4	0.06-0.25	側柱	N-17° -W	12世紀後半~ 13世紀初頭?	(4)	(2)	SB19104	19次	-	6.5	4.0	0.2-0.55	0.1-0.5	総柱	W-8° -S	12世紀後半~ 13世紀初頭	3	2	SB19106	19次	-	(3.0)	2.9	0.3-0.6	0.03-0.16	側柱	N-19° -W	?	(2)	2	SX22014	22次	2区	南北 6.7	東西 5.0	0.35-0.65	0.05-0.3	平地式	N-3° -E	縄文晩期前半	SB22032	22次	2区	3.1	2.8	0.4-0.55	0.28-0.6	側柱	W-5° -N	9世紀後半	2	2~3	SB22033	22次	1区	(4.7)	1.5	0.25-0.5	0.1-0.65	側柱	N-13° -E	縄文晩期前半?	(4)	1				
SB19086	19次	-	5.7	3.4	0.65-0.8	0.4-0.55	側柱	W-5° -S	縄文晩期前半																																																																																																																																																																										
			2	1						SB19087	19次	-	(5.2)	2.7	0.2-0.4	0.05-0.42	側柱	N-32° -E	古墳初頭?	(4)	1	SB19088	19次	-	5.5	2.2	0.2-0.5	0.05-0.25	側柱	N-12° -W	12世紀後半~ 13世紀初頭?	3	2	SB19089	19次	-	(5.3)	(1.5)	0.3-0.8	0.1-0.32	側柱	W-6° -N	弥生後期~ 古墳初頭	(2)	(1)	SB19090	19次	-	(5.7)	3.7	0.4-0.7	0.05-0.35	側柱	N-1° -W	縄文晩期前半?	(2)	3	SB19093	19次	-	4.1	4.0	0.25-0.35	0.12-0.3	側柱	W-4° -N	弥生後期~ 古墳初頭	2	2	SB19094	19次	-	3.6	2.9	0.2-0.4	0.25-0.35	側柱	W-35° -N	縄文晩期前半?	2	2	SB19095	19次	-	5.4	4.3	0.35-0.8	0.1-0.45	側柱	W-7° -E	9世紀前半 ~中葉	3	2	SB19096	19次	-	(7.4)	(3.4)	0.3-0.4	0.06-0.25	側柱	N-17° -W	12世紀後半~ 13世紀初頭?	(4)	(2)	SB19104	19次	-	6.5	4.0	0.2-0.55	0.1-0.5	総柱	W-8° -S	12世紀後半~ 13世紀初頭	3	2	SB19106	19次	-	(3.0)	2.9	0.3-0.6	0.03-0.16	側柱	N-19° -W	?	(2)	2	SX22014	22次	2区	南北 6.7	東西 5.0	0.35-0.65	0.05-0.3	平地式	N-3° -E	縄文晩期前半	SB22032	22次	2区	3.1	2.8	0.4-0.55	0.28-0.6	側柱	W-5° -N	9世紀後半	2	2~3	SB22033	22次	1区	(4.7)	1.5	0.25-0.5	0.1-0.65	側柱	N-13° -E	縄文晩期前半?	(4)	1																
SB19087	19次	-	(5.2)	2.7	0.2-0.4	0.05-0.42	側柱	N-32° -E	古墳初頭?																																																																																																																																																																										
			(4)	1						SB19088	19次	-	5.5	2.2	0.2-0.5	0.05-0.25	側柱	N-12° -W	12世紀後半~ 13世紀初頭?	3	2	SB19089	19次	-	(5.3)	(1.5)	0.3-0.8	0.1-0.32	側柱	W-6° -N	弥生後期~ 古墳初頭	(2)	(1)	SB19090	19次	-	(5.7)	3.7	0.4-0.7	0.05-0.35	側柱	N-1° -W	縄文晩期前半?	(2)	3	SB19093	19次	-	4.1	4.0	0.25-0.35	0.12-0.3	側柱	W-4° -N	弥生後期~ 古墳初頭	2	2	SB19094	19次	-	3.6	2.9	0.2-0.4	0.25-0.35	側柱	W-35° -N	縄文晩期前半?	2	2	SB19095	19次	-	5.4	4.3	0.35-0.8	0.1-0.45	側柱	W-7° -E	9世紀前半 ~中葉	3	2	SB19096	19次	-	(7.4)	(3.4)	0.3-0.4	0.06-0.25	側柱	N-17° -W	12世紀後半~ 13世紀初頭?	(4)	(2)	SB19104	19次	-	6.5	4.0	0.2-0.55	0.1-0.5	総柱	W-8° -S	12世紀後半~ 13世紀初頭	3	2	SB19106	19次	-	(3.0)	2.9	0.3-0.6	0.03-0.16	側柱	N-19° -W	?	(2)	2	SX22014	22次	2区	南北 6.7	東西 5.0	0.35-0.65	0.05-0.3	平地式	N-3° -E	縄文晩期前半	SB22032	22次	2区	3.1	2.8	0.4-0.55	0.28-0.6	側柱	W-5° -N	9世紀後半	2	2~3	SB22033	22次	1区	(4.7)	1.5	0.25-0.5	0.1-0.65	側柱	N-13° -E	縄文晩期前半?	(4)	1																												
SB19088	19次	-	5.5	2.2	0.2-0.5	0.05-0.25	側柱	N-12° -W	12世紀後半~ 13世紀初頭?																																																																																																																																																																										
			3	2						SB19089	19次	-	(5.3)	(1.5)	0.3-0.8	0.1-0.32	側柱	W-6° -N	弥生後期~ 古墳初頭	(2)	(1)	SB19090	19次	-	(5.7)	3.7	0.4-0.7	0.05-0.35	側柱	N-1° -W	縄文晩期前半?	(2)	3	SB19093	19次	-	4.1	4.0	0.25-0.35	0.12-0.3	側柱	W-4° -N	弥生後期~ 古墳初頭	2	2	SB19094	19次	-	3.6	2.9	0.2-0.4	0.25-0.35	側柱	W-35° -N	縄文晩期前半?	2	2	SB19095	19次	-	5.4	4.3	0.35-0.8	0.1-0.45	側柱	W-7° -E	9世紀前半 ~中葉	3	2	SB19096	19次	-	(7.4)	(3.4)	0.3-0.4	0.06-0.25	側柱	N-17° -W	12世紀後半~ 13世紀初頭?	(4)	(2)	SB19104	19次	-	6.5	4.0	0.2-0.55	0.1-0.5	総柱	W-8° -S	12世紀後半~ 13世紀初頭	3	2	SB19106	19次	-	(3.0)	2.9	0.3-0.6	0.03-0.16	側柱	N-19° -W	?	(2)	2	SX22014	22次	2区	南北 6.7	東西 5.0	0.35-0.65	0.05-0.3	平地式	N-3° -E	縄文晩期前半	SB22032	22次	2区	3.1	2.8	0.4-0.55	0.28-0.6	側柱	W-5° -N	9世紀後半	2	2~3	SB22033	22次	1区	(4.7)	1.5	0.25-0.5	0.1-0.65	側柱	N-13° -E	縄文晩期前半?	(4)	1																																								
SB19089	19次	-	(5.3)	(1.5)	0.3-0.8	0.1-0.32	側柱	W-6° -N	弥生後期~ 古墳初頭																																																																																																																																																																										
			(2)	(1)						SB19090	19次	-	(5.7)	3.7	0.4-0.7	0.05-0.35	側柱	N-1° -W	縄文晩期前半?	(2)	3	SB19093	19次	-	4.1	4.0	0.25-0.35	0.12-0.3	側柱	W-4° -N	弥生後期~ 古墳初頭	2	2	SB19094	19次	-	3.6	2.9	0.2-0.4	0.25-0.35	側柱	W-35° -N	縄文晩期前半?	2	2	SB19095	19次	-	5.4	4.3	0.35-0.8	0.1-0.45	側柱	W-7° -E	9世紀前半 ~中葉	3	2	SB19096	19次	-	(7.4)	(3.4)	0.3-0.4	0.06-0.25	側柱	N-17° -W	12世紀後半~ 13世紀初頭?	(4)	(2)	SB19104	19次	-	6.5	4.0	0.2-0.55	0.1-0.5	総柱	W-8° -S	12世紀後半~ 13世紀初頭	3	2	SB19106	19次	-	(3.0)	2.9	0.3-0.6	0.03-0.16	側柱	N-19° -W	?	(2)	2	SX22014	22次	2区	南北 6.7	東西 5.0	0.35-0.65	0.05-0.3	平地式	N-3° -E	縄文晩期前半	SB22032	22次	2区	3.1	2.8	0.4-0.55	0.28-0.6	側柱	W-5° -N	9世紀後半	2	2~3	SB22033	22次	1区	(4.7)	1.5	0.25-0.5	0.1-0.65	側柱	N-13° -E	縄文晩期前半?	(4)	1																																																				
SB19090	19次	-	(5.7)	3.7	0.4-0.7	0.05-0.35	側柱	N-1° -W	縄文晩期前半?																																																																																																																																																																										
			(2)	3						SB19093	19次	-	4.1	4.0	0.25-0.35	0.12-0.3	側柱	W-4° -N	弥生後期~ 古墳初頭	2	2	SB19094	19次	-	3.6	2.9	0.2-0.4	0.25-0.35	側柱	W-35° -N	縄文晩期前半?	2	2	SB19095	19次	-	5.4	4.3	0.35-0.8	0.1-0.45	側柱	W-7° -E	9世紀前半 ~中葉	3	2	SB19096	19次	-	(7.4)	(3.4)	0.3-0.4	0.06-0.25	側柱	N-17° -W	12世紀後半~ 13世紀初頭?	(4)	(2)	SB19104	19次	-	6.5	4.0	0.2-0.55	0.1-0.5	総柱	W-8° -S	12世紀後半~ 13世紀初頭	3	2	SB19106	19次	-	(3.0)	2.9	0.3-0.6	0.03-0.16	側柱	N-19° -W	?	(2)	2	SX22014	22次	2区	南北 6.7	東西 5.0	0.35-0.65	0.05-0.3	平地式	N-3° -E	縄文晩期前半	SB22032	22次	2区	3.1	2.8	0.4-0.55	0.28-0.6	側柱	W-5° -N	9世紀後半	2	2~3	SB22033	22次	1区	(4.7)	1.5	0.25-0.5	0.1-0.65	側柱	N-13° -E	縄文晩期前半?	(4)	1																																																																
SB19093	19次	-	4.1	4.0	0.25-0.35	0.12-0.3	側柱	W-4° -N	弥生後期~ 古墳初頭																																																																																																																																																																										
			2	2						SB19094	19次	-	3.6	2.9	0.2-0.4	0.25-0.35	側柱	W-35° -N	縄文晩期前半?	2	2	SB19095	19次	-	5.4	4.3	0.35-0.8	0.1-0.45	側柱	W-7° -E	9世紀前半 ~中葉	3	2	SB19096	19次	-	(7.4)	(3.4)	0.3-0.4	0.06-0.25	側柱	N-17° -W	12世紀後半~ 13世紀初頭?	(4)	(2)	SB19104	19次	-	6.5	4.0	0.2-0.55	0.1-0.5	総柱	W-8° -S	12世紀後半~ 13世紀初頭	3	2	SB19106	19次	-	(3.0)	2.9	0.3-0.6	0.03-0.16	側柱	N-19° -W	?	(2)	2	SX22014	22次	2区	南北 6.7	東西 5.0	0.35-0.65	0.05-0.3	平地式	N-3° -E	縄文晩期前半	SB22032	22次	2区	3.1	2.8	0.4-0.55	0.28-0.6	側柱	W-5° -N	9世紀後半	2	2~3	SB22033	22次	1区	(4.7)	1.5	0.25-0.5	0.1-0.65	側柱	N-13° -E	縄文晩期前半?	(4)	1																																																																												
SB19094	19次	-	3.6	2.9	0.2-0.4	0.25-0.35	側柱	W-35° -N	縄文晩期前半?																																																																																																																																																																										
			2	2						SB19095	19次	-	5.4	4.3	0.35-0.8	0.1-0.45	側柱	W-7° -E	9世紀前半 ~中葉	3	2	SB19096	19次	-	(7.4)	(3.4)	0.3-0.4	0.06-0.25	側柱	N-17° -W	12世紀後半~ 13世紀初頭?	(4)	(2)	SB19104	19次	-	6.5	4.0	0.2-0.55	0.1-0.5	総柱	W-8° -S	12世紀後半~ 13世紀初頭	3	2	SB19106	19次	-	(3.0)	2.9	0.3-0.6	0.03-0.16	側柱	N-19° -W	?	(2)	2	SX22014	22次	2区	南北 6.7	東西 5.0	0.35-0.65	0.05-0.3	平地式	N-3° -E	縄文晩期前半	SB22032	22次	2区	3.1	2.8	0.4-0.55	0.28-0.6	側柱	W-5° -N	9世紀後半	2	2~3	SB22033	22次	1区	(4.7)	1.5	0.25-0.5	0.1-0.65	側柱	N-13° -E	縄文晩期前半?	(4)	1																																																																																								
SB19095	19次	-	5.4	4.3	0.35-0.8	0.1-0.45	側柱	W-7° -E	9世紀前半 ~中葉																																																																																																																																																																										
			3	2						SB19096	19次	-	(7.4)	(3.4)	0.3-0.4	0.06-0.25	側柱	N-17° -W	12世紀後半~ 13世紀初頭?	(4)	(2)	SB19104	19次	-	6.5	4.0	0.2-0.55	0.1-0.5	総柱	W-8° -S	12世紀後半~ 13世紀初頭	3	2	SB19106	19次	-	(3.0)	2.9	0.3-0.6	0.03-0.16	側柱	N-19° -W	?	(2)	2	SX22014	22次	2区	南北 6.7	東西 5.0	0.35-0.65	0.05-0.3	平地式	N-3° -E	縄文晩期前半	SB22032	22次	2区	3.1	2.8	0.4-0.55	0.28-0.6	側柱	W-5° -N	9世紀後半	2	2~3	SB22033	22次	1区	(4.7)	1.5	0.25-0.5	0.1-0.65	側柱	N-13° -E	縄文晩期前半?	(4)	1																																																																																																				
SB19096	19次	-	(7.4)	(3.4)	0.3-0.4	0.06-0.25	側柱	N-17° -W	12世紀後半~ 13世紀初頭?																																																																																																																																																																										
			(4)	(2)						SB19104	19次	-	6.5	4.0	0.2-0.55	0.1-0.5	総柱	W-8° -S	12世紀後半~ 13世紀初頭	3	2	SB19106	19次	-	(3.0)	2.9	0.3-0.6	0.03-0.16	側柱	N-19° -W	?	(2)	2	SX22014	22次	2区	南北 6.7	東西 5.0	0.35-0.65	0.05-0.3	平地式	N-3° -E	縄文晩期前半	SB22032	22次	2区	3.1	2.8	0.4-0.55	0.28-0.6	側柱	W-5° -N	9世紀後半	2	2~3	SB22033	22次	1区	(4.7)	1.5	0.25-0.5	0.1-0.65	側柱	N-13° -E	縄文晩期前半?	(4)	1																																																																																																																
SB19104	19次	-	6.5	4.0	0.2-0.55	0.1-0.5	総柱	W-8° -S	12世紀後半~ 13世紀初頭																																																																																																																																																																										
			3	2						SB19106	19次	-	(3.0)	2.9	0.3-0.6	0.03-0.16	側柱	N-19° -W	?	(2)	2	SX22014	22次	2区	南北 6.7	東西 5.0	0.35-0.65	0.05-0.3	平地式	N-3° -E	縄文晩期前半	SB22032	22次	2区	3.1	2.8	0.4-0.55	0.28-0.6	側柱	W-5° -N	9世紀後半	2	2~3	SB22033	22次	1区	(4.7)	1.5	0.25-0.5	0.1-0.65	側柱	N-13° -E	縄文晩期前半?	(4)	1																																																																																																																												
SB19106	19次	-	(3.0)	2.9	0.3-0.6	0.03-0.16	側柱	N-19° -W	?																																																																																																																																																																										
			(2)	2						SX22014	22次	2区	南北 6.7	東西 5.0	0.35-0.65	0.05-0.3	平地式	N-3° -E	縄文晩期前半	SB22032	22次	2区	3.1	2.8	0.4-0.55	0.28-0.6	側柱	W-5° -N	9世紀後半	2	2~3	SB22033	22次	1区	(4.7)	1.5	0.25-0.5	0.1-0.65	側柱	N-13° -E	縄文晩期前半?	(4)	1																																																																																																																																								
SX22014	22次	2区	南北 6.7	東西 5.0	0.35-0.65	0.05-0.3	平地式	N-3° -E	縄文晩期前半																																																																																																																																																																										
SB22032	22次	2区	3.1	2.8	0.4-0.55	0.28-0.6	側柱	W-5° -N	9世紀後半																																																																																																																																																																										
			2	2~3						SB22033	22次	1区	(4.7)	1.5	0.25-0.5	0.1-0.65	側柱	N-13° -E	縄文晩期前半?	(4)	1																																																																																																																																																														
SB22033	22次	1区	(4.7)	1.5	0.25-0.5	0.1-0.65	側柱	N-13° -E	縄文晩期前半?																																																																																																																																																																										
			(4)	1																																																																																																																																																																															

Tab.3 遺物一覧(1)

報告番号	遺物番号	種別	発出	調査	地区	遺構	位置	法量 (m)		出土	形状	色別	残存率	土層深部層		体部調整		文様	特記事項	
								上段	下段					内面	外面	内面	外面			
1	404	縄文土器	深溝	19次	P292					縄 織物	織	灰黄陶	体部一部			ケズリ	ケズリ	金雲母 粒付		
2	405	縄文土器	深溝	19次	P292					縄 織物	織	灰黄陶	体部一部			ケズリ	表面	金雲母		
3	459	縄文土器	深溝	19次	P226					縄 織物	織	にぶい-黄	体部一部			ケズリ	ケズリ			
4	400	縄文土器	深溝	19次	P226					縄 織物	織	黄	体部一部			ケズリ	ケズリ			
5	453	縄文土器	深溝	19次	P233					縄 織物	織	にぶい-黄	体部一部				ケズリ		黒方皿 金雲母	
6	450	縄文土器	深溝	19次	P237					今中 群 縄文土器	織	にぶい-黄	土層部一部	ケズリ	ケズリ					
7	483	縄文土器	深溝	19次	P281					今中 群 縄文土器	織	黄陶	土層部一部	ケズリ	ケズリ			鉄線 金雲母 キザミ		
8	486	縄文土器	深溝	19次	SK19075					今中 群 縄文土器	織	にぶい-黄	土層部一部	ケズリ	ケズリ					
9	617	縄文土器	深溝	22次	2IK SK22009					今中 群 縄文土器	織	にぶい-黄	体部一部				ケズリ	ケズリ		
10	604	縄文土器	深溝	22次	3IK SK22030					縄 織物	織	灰黄陶	土層部一部			ケズリ		金雲母		
11	399	縄文土器	深溝	22次	3IK SK22028					今中 群 縄文土器	織	黄	土層部一部	ナデ	ナデ			○内嵌文	表文	
12	627	縄文土器	深溝	22次	2IK P55					今中 群 縄文土器	織	灰黄陶	体部一部			ケズリ	ケズリ			
13	624	縄文土器	深溝	22次	2IK P59					今中 群 縄文土器	織	灰黄陶	体部一部	ケズリ	ケズリ			金雲母		
14	621	縄文土器	深溝	22次	2IK P57			4.6		今中 群 縄文土器	織	にぶい-黄	土層部一部	地味突出		ナデ	ケズリ		上付底	
15	603	縄文土器	深溝	22次	2IK P94					今中 群 縄文土器	織	黄陶	土層部一部	ケズリ	表面			金雲母		
16	622	縄文土器	深溝	22次	2IK P94					今中 群 縄文土器	織	灰黄陶	土層部一部	ケズリ	ケズリ			金雲母		
17	625	縄文土器	深溝	22次	2IK P94					今中 群 縄文土器	織	灰黄陶	土層部一部	ケズリ	ケズリ			金雲母		
18	626	縄文土器	深溝	22次	2IK P94			26.2		今中 群 縄文土器	織	黄陶	層部 1/10	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ		キザミ 金雲母	
21	407	縄文土器	深溝	19次	P68					縄 織物	織	にぶい-黄	体部一部			ケズリ	ケズリ	黒手 金雲母		
22	452	縄文土器	深溝	19次	PT3					今中 群 縄文土器	織	にぶい-黄	土層部一部	ヨコナデ	ヨコナデ			キザミ 金雲母		
23	461	縄文土器	深溝	19次	P295					今中 群 縄文土器	織	にぶい-黄	体部一部			ケズリ	ケズリ			
24	462	縄文土器	深溝	19次	P295					今中 群 縄文土器	織	にぶい-黄	体部一部			ケズリ	ケズリ			
25	466	縄文土器	深溝	19次	P357					縄 織物	織	にぶい-黄	体部一部			ケズリ	ケズリ			
26	454	縄文土器	深溝	19次	P364					今中 群 縄文土器	織	黄陶	土層部一部	黒斑	ヨコナデ			金雲母		
27	456	縄文土器	深溝	19次	P424					縄 織物	織	にぶい-黄	体部一部			ケズリ	ケズリ	黒		
28	458	縄文土器	深溝	19次	P436					今中 群 縄文土器	織	黄陶	土層部一部	黒・ 斑部		ケズリ	ケズリ			
29	451	縄文土器	深溝	19次	P437					今中 群 縄文土器	織	黄陶	土層部一部	黒斑	ヨコナデ			金雲母		
30	327	縄文土器	井	19次	P455					縄 織物	織	黄陶	土層部一部	ミウキ ミウキ				黒斑 黒手 黒土		
31	455	縄文土器	深溝	19次	P577					今中 群 縄文土器	織	黄	土層部一部	ケズリ	ケズリ			キザミ		
32	449	縄文土器	深溝	19次	P581					今中 群 縄文土器	織	にぶい-黄	土層部一部	ヨコナデ	表面			キザミ		
33	463	縄文土器	深溝	19次	P602					縄 織物	織	黄	土層部一部	ナデ	ナデ			○内嵌文	金雲母 粒付	
34	610	縄文土器	深溝	22次	1IK P31					今中 群 縄文土器	織	灰黄陶	体部一部			ケズリ	ケズリ			
35	613	縄文土器	深溝	22次	1IK P31					今中 群 縄文土器	織	灰黄陶	体部一部			ケズリ	表面	金雲母 粒付	2	
36	615	縄文土器	深溝	22次	2IK P36					今中 群 縄文土器	織	灰黄陶	体部一部				黒斑	金雲母		
37	628	縄文土器	深溝	22次	2IK P54					縄 織物	織	にぶい-黄	土層部一部	ナデ	ナデ			○内嵌文	キザミ 金雲母	
38	608	縄文土器	深溝	22次	2IK P63					今中 群 縄文土器	織	にぶい-黄	土層部一部	ケズリ	ケズリ					
39	632	縄文土器	深溝	22次	2IK P74					今中 群 縄文土器	織	灰陶	土層部一部	ケズリ	ケズリ	ナデ		○内嵌文	表文	
40	618	縄文土器	深溝	22次	2IK P90					今中 群 縄文土器	織	灰黄陶	体部一部			ケズリ	ケズリ	金雲母		
41	616	縄文土器	深溝	22次	2IK P93					今中 群 縄文土器	織	灰黄陶	体部一部			ケズリ	ケズリ	金雲母		
43	612	縄文土器	深溝	22次	2IK P105					今中 群 縄文土器	織	黄陶	土層部一部	ナデ	表面	ケズリ	表面	金雲母		
44	619	縄文土器	深溝	22次	2IK P105					今中 群 縄文土器	織	にぶい-黄	土層部一部		表面					
46	614	縄文土器	深溝	22次	1IK P178					縄 織物	織	灰黄陶	体部一部			ケズリ				
47	629	縄文土器	深溝	22次	1IK P179					縄 織物	織	灰黄陶	体部一部			ナデ	ケズリ	金雲母		
48	630	縄文土器	深溝	22次	1IK P179					縄 織物	織	灰黄陶	土層部一部	ケズリ	ケズリ			金雲母		



報告 番号	国庫 番号	種別	調査 期日	調査 地区	遺構	位置	法量 (m)			出土 物	地味	色別	残存率	1層部遺構		2層部遺構		文書	特記事項	
							口前	幅	深					内周	外周	内周	外周			
51	207	赤土土器	美	19次	SH0903	北西	16.6			赤 土	硬	焼	土 器	1層部 1/14	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	○研究文	銅 管 管口
52	411	赤土土器	赤	19次	SH0903	北東	(幅) 14.8			赤	硬	灰 黄	陶 器	1層部 1/8	ヨコナデ	タテハラ ミガキ				銅 管
53	293	赤土土器	高坪	19次	SH0903	南西	(幅) 15.4			赤 土	硬	焼	土 器	1層部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		銅 管
54	192	赤土土器	赤	19次	SH0903	北	(幅) 9.8			赤	硬	焼	土 器	1層部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハラ ミガキ	タテハラ ミガキ		銅 管 接合方法
55	362	赤土土器	赤	19次	P186		17.0			赤	硬	灰 黄	土 器	1層部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ				管下1層
56	183	土器類	赤	19次	SH0903	北東	14.1			赤	硬	焼	土 器	1層部 ほぼ完了	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハラ		銅 管
57	149	土器類	赤	19次	SH0903	北東	14.8			赤	硬	灰 白	土 器	1層部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		銅 管 伊勢系 小型 管口返し
58	176	土器類	赤	19次	SH0903	北東	23.4			赤	硬	灰 白	土 器	1層部 1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		銅 管 伊勢系 中型 管口返し
59	442	赤土土器	赤	19次	SH0903	北	15.4			赤	硬	に 灰-黄	土 器	1層部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ				くの字
60	440	赤土土器	赤	19次	SH0903	伊勢	11.8			赤	硬	に 灰	土 器	1層部 1/9	ヨコナデ	ヨコナデ				銅 管 管口
61	224	赤土土器	赤	19次	SH0907	北土層	17.4			赤	硬	に 灰-黄	土 器	1層部 1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		
62	159	赤土土器	赤	19次	SH0907	北土層	18.2			赤	硬	に 灰-黄	土 器	1層部 1/9	ヨコナデ	ヨコナデ				管下1層
63	160	赤土土器	赤	19次	SH0907	北土層	3.0			赤	硬	硬 灰	土 器	1層部 完了		タテハラ ミガキ		ヨコナデ		小 管 1層 銅 管
64	246	赤土土器	高坪	19次	SH0907	北土層				赤	硬	灰 黄	土 器	1層部 完了		タテハラ ミガキ				小 管 1層 銅 管
65	439	赤土土器	赤	19次	SH0914		11.2			赤	硬	に 灰-黄	土 器	1層部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			管口
66	144	赤土土器	赤	19次	SH0914	北東	15.2			赤	硬	(内) 灰 黄 (外) 灰 黄	土 器	1層部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ				管口
67	153	赤土土器	赤	19次	SH0914	北	8.6			赤	硬	硬 灰	土 器	1層部 ほぼ完了		タテハラ	ヨコナデ			
68	161	赤土土器	赤	19次	SH0914	北	18.2			赤	硬	に 灰-黄	土 器	1層部 1/12	ヨコナデ		ナナメハ ケ			管口 銅 管
69	205	赤土土器	赤	19次	SH0914	北	13.0			赤	硬	に 灰-黄	土 器	1層部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ナナメハ ケ	○研究文	管口 銅 管
70	410	赤土土器	赤	19次	SH0914	北	(幅) 10.0			赤	硬	灰 黄	土 器	1層部 1/6	ヨコナデ		タテハラ			銅 管 土層 くの字
71	290	赤土土器	赤	19次	SH0914	北	15.6			赤	硬	硬 灰	土 器	1層部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ナナメハ ケ		銅 管 土層
72	438	赤土土器	赤	19次	SH0914	北	12.4			赤	硬	灰 黄	土 器	1層部 1/12		ヨコナデ				銅 管 土層
73	148	赤土土器	赤	19次	SH0914	北	5.2			赤	硬	灰 黄	土 器	1層部 完了		ヨコナデ		ナナメハ ケ		1層底 銅 管
74	292	赤土土器	高坪	19次	SH0914	北	8.7			赤	硬	硬 灰	土 器	1層部 完了		ヨコナデ		タテハラ ミガキ		銅 管
75	152	赤土土器	赤	19次	SH0953	北	6.2			赤	硬	に 灰-黄	土 器	1層部 完了		ヨコナデ	タテハラ ミガキ			小 管 銅 管
76	151	赤土土器	赤	19次	SH0953	北	8.6			赤	硬	に 灰-黄	土 器	1層部 完了		ハケ	タテハラ			銅 管 伊勢系
77	150	赤土土器	赤	19次	SH0953	北	8.0			赤	硬	灰 黄	土 器	1層部 完了		ヨコナデ				銅 管 伊勢系
78	206	赤土土器	赤	19次	SH0915	ベクト	12.2			赤	硬	灰 黄	土 器	1層部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ナナメハ ケ	○研究文	銅 管 管口 返し
79	193	赤土土器	高坪	19次	SH0915	ベクト	9.2			赤	硬	硬 灰	土 器	1層部 2/5		ヨコナデ	タテハラ ミガキ			銅 管 伊勢系
80	204	赤土土器	高坪	19次	SH0915	北西土層				赤	硬	灰 黄	土 器	1層部 完了		ヨコナデ				○研究文 管口 返し
81	291	赤土土器	高坪	19次	SH0915	北西土層				赤	硬	灰 黄	土 器	1層部 完了		ヨコナデ				○研究文 管口 返し
82	188	赤土土器	赤	19次	SH0915	床面直上	16.6			赤	硬	灰 黄	土 器	1層部 1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ナナメハ ケ	○研究文		銅 管 管口 返し
83	201	赤土土器	高坪	19次	SH0915	床面直上	(幅) 24.7			赤	硬	灰 黄	土 器	1層部 1/12	タテハラ ミガキ	タテハラ ミガキ				銅 管 接合
84	203	赤土土器	高坪	19次	SH0915	床面直上	(幅) 19.6			赤	硬	灰 黄	土 器	1層部 1/5						銅 管 接合
85	242	赤土土器	高坪	19次	SH0915	床面直上	22.8	12.2	23.9	赤	硬	灰 黄	土 器	1層部 4/5 2層部 2/5	タテハラ ミガキ		ヨコナデ			銅 管 有 管口 返し 3層部 内周
86	297	赤土土器	赤	19次	SH0918	TP1	19.2			赤	硬	灰 黄	土 器	1層部 1/6						○研究文 管口 返し
87	405	赤土土器	赤	19次	SH0918	TP1 河原溝	19.0			赤	硬	灰 黄	土 器	1層部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ				○研究文 管口 返し
88	299	赤土土器	高坪	19次	SH0918	TP2				赤	硬	明 黄	土 器	1層部 完了		ヨコナデ				銅 管 管口 返し
89	441	赤土土器	赤	19次	SH0918	TP2	10.2			赤	硬	に 灰-黄	土 器	1層部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ				くの字
90	443	赤土土器	赤	19次	SH0918	TP2	10.6			赤	硬	に 灰-黄	土 器	1層部 1/8	ヨコナデ	タテハラ ミガキ	タテハラ ミガキ			小 管 くの字 銅 管
91	446	赤土土器	赤	19次	SH0918	TP2	17.4			赤	硬	に 灰-黄	土 器	1層部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ				○研究文 くの字
92	309	赤土土器	高坪	19次	SH0918	北				赤	硬	灰 黄	土 器	1層部 完了		ケズリ				銅 管 伊勢系 管口 返し
93	289	赤土土器	赤	19次	P644		4.0			赤	硬	硬 灰	土 器	1層部 完了		ヨコナデ		タテハラ ミガキ		小 管 有 管口 返し
94	308	赤土土器	高坪	19次	P667					赤	硬	硬 灰	土 器	1層部 完了		ヨコナデ				○研究文 管口 返し
95	298	土器類	土層	19次	P668		(長) 2.3	(幅) 2.6	(厚) 2.7	赤	硬	に 灰-黄	土 器	1層部 完了						銅 管 管口 返し

報告 番号	実施 年月	種別	調査 期日	調査 地区	道県	位置	法量 (m)		樹種	色別	残存率	1層部調査		体部調査		文庫	刊記事項
							上段	下段				内面	外面	内面	外面		
965	258	赤生土層	高坪 19 次	SH19033				葉	緑	にぶい・暗	体部一部			乾り			新編 内孔 1 残
977	304	赤生土層	高坪 19 次	SH19033				今中層	緑	浅黄緑	体部 1/3						新編
984	447	土層部	栗 19 次	P179			5.8	葉	緑	にぶい・黄緑	体部 1/5				ハケ		多田内 藤子 5 字書
990	175	灰緑層	野藪 19 次	SH19058	TP2		16.0	葉	緑	灰	1層部 1/8	ロケロナ ダ	ロケロナ ダ				新編 変付口
1000	171	赤生土層	栗 19 次	SH19059	TP3 下層		19.8	葉	緑	浅黄緑	1層部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ				新編 変付口
101	179	赤生土層	栗 19 次	SH19060			13.6	葉	緑	暗	1層部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ				1層部内面
102	157	赤生土層	栗 19 次	SH19060			6.0	葉	今中層 緑	(P) 灰白 (N) にぶい・暗	体部 1/10						新編 13 号底
103	164	赤生土層	栗 19 次	SH19060			5.2	今中層	緑	暗	体部 3/4			ナメハ ケ	タテハツ		新編 13 号底
104	170	赤生土層	栗 19 次	SH19060			14.4	葉	緑	にぶい・黄緑	1層部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハ ケ	タテハツ ナメハ ケ		くの字 新編
105	191	赤生土層	高坪 19 次	SH19060			100 13.0	葉	緑	暗	体部一部	タテハツ ミヅホ	タテハツ ミヅホ				新編 13 号底 1
106	158	赤生土層	栗 19 次	SH19060			4.8	今中層 緑	今中層 緑	(P) 浅黄緑 (N) にぶい・暗	体部 1/4			ナメハ ケ	ヨコハ ケ		新編 13 号底
107	180	赤生土層	栗 19 次	SH19060			7.6	葉	緑	暗	体部 1/4			ナメハ ケ	タテハツ		新編
108	167	赤生土層	栗 19 次	SH19060	ベクト		13.4	葉	緑	にぶい・黄緑	1層部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハ ケ	ヨコハ ケ		変付口
109	163	赤生土層	栗 19 次	SH19060	TP1 上層		108 15.0	葉	今中層 緑	(P) 灰白 (N) 暗	体部 1/4				ヨコナデ	ヨコナデ	新編
110	184	赤生土層	栗 19 次	SH19060	TP1 上層		18.0	葉	緑	にぶい・暗	1層部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ				くの字
111	165	赤生土層	栗 19 次	SH19060	TP1 下層		20.0	葉	緑	にぶい・暗	1層部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ				くの字 新編
112	166	赤生土層	栗 19 次	SH19060	TP2		8.4	今中層 緑	緑	にぶい・暗	体部 1/3						新編
113	168	赤生土層	栗 19 次	SH19060	TP2		4.4	今中層 緑	緑	灰白	体部 1/10						新編
114	181	赤生土層	栗 19 次	SH19060	TP2 上層		15.2	今中層 緑	緑	暗	1層部 1/5	ヨコハ ケ	ヨコナデ				新編 変付口
115	187	赤生土層	栗 19 次	SH19060	TP2 上層		16.0	葉	緑	浅黄緑	1層部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ				新編 変付口
116	180	赤生土層	栗 19 次	SH19060	TP2 上層		14.8	葉	緑	浅黄緑	1層部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ				新編
117	162	赤生土層	栗 19 次	SH19060	TP2 上層		4.0	今中層 緑	(P) 灰白 (N) 浅黄	体部 1/10				ヨコナデ			新編 小型 13 号底
118	177	赤生土層	栗 19 次	SH19060	TP2 上層		7.0	葉	緑	灰白	体部 1/2						新編 13 号底
119	182	赤生土層	栗 19 次	SH19060	TP2 上層		7.2	葉	緑	灰黄	体部 1/10			タテハツ	ヨコハ ケ		新編
120	185	赤生土層	栗 19 次	SH19060	TP2 上層		4.0	葉	緑	灰黄	体部 1/10				ナメハ ケ		新編 小型
121	245	赤生土層	栗 19 次	SH19060	TP2 上層		16.0	今中層 緑	緑	浅黄緑	1層部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ			ナメハ ケ	新編 小型
122	403	赤生土層	高坪 19 次	SH19060	TP2 床面直上			葉	緑	暗	体部一部					新編 13 号底	新編 13 号底
123	172	赤生土層	栗 19 次	SH19060	TP2 上層		13.7	葉	緑	浅黄緑	1層部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ				新編 変付口
124	186	赤生土層	栗 19 次	SH19060	TP3 下層		3.6	葉	緑	灰白	体部 3/5				タテハツ		新編 ミニチュア 1 号 藤子
125	228	赤生土層	高坪 19 次	SH19060	TP4 上層			葉	緑	暗	体部一部			タテハツ ミヅホ			13 号底 1 号底
126	194	赤生土層	栗 19 次	SH19060	TP4 床面直上		7.0	葉	緑	にぶい・黄緑	体部 1/8						13 号底
127	402	赤生土層	高坪 19 次	SH19060	TP4 床面直上			葉	緑	暗	体部 1/2						新編 13 号底 1
128	173	土層部	栗 19 次	SH19060	TP2 上層		13.7 10.0	3.0	葉	緑	1層部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ		コビロサ エ	ヨコナデ深い
129	314	赤生土層	高坪 19 次	P516				葉	緑	浅黄緑	体部一部			乾り			13 号底
130	347	赤生土層	栗 19 次	P259			17.6	葉	緑	浅黄緑	1層部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ				変付口
131	294	赤生土層	高坪 19 次	SX19002	サートレンチ北		11.8	葉	緑	暗	体部一部			ヨコハ ケ			新編 13 号底
132	178	赤生土層	高坪 19 次	SX19013			10.8	葉	緑	浅黄緑	体部 1/6			タテハツ ミヅホ			新編 内孔 3 体部内面
133	295	赤生土層	栗 19 次	SX19013	TP2 上層		4.4	葉	緑	浅黄緑	体部 1/3			ヨコハ ケ	ナメタ タキ ヨコタ タキ		小型
134	198	赤生土層	栗 19 次	SX19013	TP3 上層		9.4 4.4 9.9	葉	緑	浅黄緑	1層部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハツ	ナメハ ケ		小型
135	297	赤生土層	栗 19 次	SX19013	TP2 上層		9.0	葉	緑	にぶい・黄緑	1層部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハツ			小型 新編
136	202	赤生土層	高坪 19 次	SX19013	TP3 上層		24.8	葉	緑	暗	1層部 1/12	ヨコハ ケ	タテハツ ミヅホ				新編 5 号底
137	425	黄文土層	藤原 19 次	SX19013	TP3 上層			葉	緑	にぶい・黄緑	体部一部						新編 変付 口

報告番号	採種番号	種別	採種期	産地	産期	位置	法量 (kg)			製法	色調	発行年	1級法産物		2級法産物		文種	特記事項	
							1級	2級	3級				内容	外産	内容	外産			
138	584	赤生土部	産	22次	1K	SK2015	18.0			赤	に高い肉類	1級部 3/4	ヨコナテ ヨコナテ	ヨコナテ ヨコナテ	タテハツ ナメムハ	○赤文 赤文	山口産 赤文		
139	620	赤生土部	産	22次	1K	SK2015				赤	に高い肉類	1級部 後部一部	ヨコナテ ヨコナテ	ヨコナテ	タテハツ		赤文 くの字 小型 薄手		
140	635	赤生土部	産	22次	1K	SK2015	16.3			赤	に高い肉類	後部 3/5		ヨコナテ	タテハツ ヨコナテ ナメムハ		赤文 上げ底		
141	583	赤生土部	高野	22次	1K	P124	17.2			赤	硬	相成黄	1級部 1/12	ヨコナテ ヨコナテ	タテハツ ミガキ	タテハツ ミガキ	有様 金雲母		
142	634	赤生土部	産	22次	1K	P124	27.2			赤	硬	灰黄赤	1級部 1/2	ヨコナテ	ヨコナテ ヨコナテ	ヨコナテ ハツ	くの字 肉類充満		
143	363	赤生土部	高野	19次	SD19116	上層				赤	硬	黄赤	後部一部		乾り		○赤文 赤文	山口 1 厚手	
144	302	赤生土部	高野	19次	SD19116	下層				赤	硬	灰黄赤	後部一部		ヨコナテ 乾り	タテハツ ミガキ		赤文	山口 3
145	516	赤生土部	産	22次	2K	SD2002	TP1 上層	13.6		赤	硬	灰黄赤	1級部 1/10	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	○赤文	赤文 愛日1	
146	561	赤生土部	産	22次	2K	SD2002	TP1 下層	22.8		赤	硬	灰黄赤	後部 1/10	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	タテハツ		赤文
147	571	赤生土部	産	22次	2K	SD2002	TP1 下層	20.0		赤	硬	灰黄赤	1級部 1/16	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ	タテハツ	○赤文	愛日1
148	514	赤生土部	産	22次	2K	SD2002	TP2	12.2		赤	硬	灰黄赤	1級部 1/8					赤文 愛日1 小型	
149	528	赤生土部	産	22次	2K	SD2002	TP3	20.6		赤	硬	灰白	1級部 1/8					赤文	山口 1
150	539	赤生土部	産	22次	2K	SD2002	TP3	24.2		赤	硬	に高い肉類	1級部 1/10		タテハツ ミガキ			赤文	山口 1
151	590	赤生土部	産	22次	2K	SD2002	TP3	16.4		赤	硬	に高い肉類	後部 1/6					赤文	山口 1
152	570	赤生土部	産	22次	2K	SD2002	TP3	3.6		赤	硬	相	後部 1/4			ユビササ ミ		赤文 小型 複合直	
153	527	赤生土部	産	22次	2K	SD2002	TP3	7.0		赤	硬	相	右部 1/5			タテハツ		赤文	
154	511	赤生土部	産	22次	2K	SD2002	TP3	14.2		赤	硬	灰黄赤	1級部 1/6					○赤文 赤文	
155	526	赤生土部	産	22次	2K	SD2002	TP3	6.4		赤	硬	に高い肉類	後部 1/2			ハツ		赤文	山口 1 上げ底
156	510	赤生土部	高野	22次	2K	SD2002	TP3			赤	硬	相	後部一部	タテハツ ミガキ	タテハツ ミガキ		有様		
157	509	赤生土部	高野	22次	2K	SD2002	TP3			赤	硬	相	後部一部	タテハツ ミガキ	タテハツ ミガキ		有様		
158	505	赤生土部	高野	22次	2K	SD2002	TP3			赤	硬	相	後部一部				赤文 小型 ミシユア		
159	538	赤生土部	高野	22次	2K	SD2002	TP3			赤	硬	に高い肉類	後部一部		乾り	タテハツ ミガキ		赤文	山口 1
160	543	赤生土部	高野	22次	2K	SD2002	TP3			赤	硬	灰黄赤	後部一部		乾り			赤文	山口 1
161	544	赤生土部	高野	22次	2K	SD2002	TP3			赤	硬	灰黄赤	後部一部		乾り	タテハツ ミガキ		赤文	山口 3
162	576	土製品	土製	22次	2K	SD2002	TP3	1.0 (4.9)	1.0 (1.5)	1.6 (1.6)	赤	硬	に高い肉類	一部				赤文	山口 1 厚手
163	574	赤生土部	高野	22次	2K	SD2002	TP3 底面直上	17.3			赤	硬	黄赤	1級部 1/3	ヨコナテ	ヨコナテ	タテハツ ミガキ	タテハツ ミガキ	有様 厚手
164	457	焼文土部	採録	19次	SD19115					中々軟	赤	灰黄	後部一部			ケズリ	ケズリ	金雲母	
165	597	焼文土部	採録	22次	2K	SD2002	TP1 上層			赤	硬	に高い肉類	1級部一部	ナデ				○赤文 赤文	山口 1
166	605	焼文土部	採録	22次	2K	SD2002	TP1 上層			中々軟	赤	灰黄赤	1級部一部	ナデ	ナデ			○赤文	赤文
167	515	銅製品	洋	22次	2K	SD2002	TP1 上層	7.4			赤	硬	灰黄	後部 3/5		ロクロナ デ	ロクロナ デ	厚手高野 自然物	
168	601	焼文土部	採録	22次	2K	SD2002	TP3			赤	硬	に高い肉類	1級部一部	ナデ				○赤文	赤文
169	611	焼文土部	採録	22次	2K	SD2002	TP3			赤	硬	灰黄赤	1級部・ 後部一部	ケズリ	黄赤	ケズリ	黄赤	キザミ	
170	606	焼文土部	採録	22次	2K	SD2002	TP3			赤	硬	後部一部						○赤文	赤文
171	607	焼文土部	採録?	22次	2K	SD2002	TP3			中々軟	赤	灰黄赤	1級部?・ 一部					○赤文	赤文
172	512	赤生土部	高野	22次	2K	SD2002	TP3	9.0		赤	硬	に高い肉類	1級部 1/4	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ		○赤文	山口 1 厚手
173	545	赤生土部	高野	22次	2K	SD2002	TP3	20.4 (17.2)			赤	硬	灰黄赤	1級部 1/3	タテハツ ミガキ	タテハツ ミガキ	タテハツ ミガキ	有様 厚手	
174	602	焼文土部	採録	22次	2K	SD2002	TP4			赤	硬	灰黄赤	1級部一部	ナデ				○赤文	赤文
175	416	赤生土部	高野	19次	SD19004	サブレンジ南				赤	硬	相	後部一部					○赤文 赤文	山口 1 厚手
176	199	赤生土部	産	19次	SD19004	TP1 上層	13.2			赤	硬	に高い肉類	1級部 1/10	ヨコナテ	ヨコナテ			○赤文 赤文	山口 1
177	412	赤生土部	高野	19次	SD19004	TP2 下層				赤	硬	灰黄赤	後部一部			乾り		○赤文 赤文	山口 1 厚手
178	485	赤生土部	産	19次	SD19004	TP2 上層				赤	硬	に高い肉類	1級部一部	ヨコナテ	ヨコナテ			○赤文	山口 1
179	413	赤生土部	高野	19次	SD19004	TP3 上層				赤	硬	に高い肉類	後部一部		乾り			○赤文	山口 1
180	195	土製品	土製	19次	SD19004	上層	13.4	9.4		赤	硬	灰黄赤	1級部 1/6	ヨコナテ	ヨコナテ	ナデ			山口 1 厚手
181	256	黒色土部	採	19次	SD19004	TP2 上層	14.6			赤	硬	1級部 1/12	ミガキ	ミガキ				山口 1 厚手	

期次 番号	演題	講師	期日	地区	道県	位階	法量 (km)		富士	建造	色調	西行年	「編纂時期		執筆時期		文種	特記事項
							上段	下段					内期	外期	内期	外期		
182	200	栗原謙	春	19次	SD19004	TP3上層	1.21	8.2	密	密	黄灰	白編纂1/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
183	197	栗原謙	春	19次	SD19004	TP3上層	1.58	10.8	3.3	密	密	黄灰	白編纂 1/16	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	内蔵版 内蔵
184	196	十原節	春	19次	SD19004	TP3上層	1.22	8.4		密	密	浅黄緑	白編纂1/7	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ		
185	225	山田		19次	SD19004	TP4上層	8.6	5.0	2.4	密 組 組 多	密 灰白		白編纂3/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	底面「書上」上?
186	123	赤生土郎	春	19次	SK19066		11.0			密	密		白編纂1/6	タテハウ ミガキ	タテハウ ミガキ	タテハウ ミガキ	タテハウ ミガキ	小型 内蔵部内蔵
187	206	赤生土郎	高坪	19次	SK19041					中々組 組 多	組 浅黄緑	組部1/2				組		組 浅黄
188	122	赤生土郎	栗	19次	SK19062			6.0		密 組 多	密	組	組部1/2					組 浅黄
189	361	赤生土郎	高坪	19次	SK19063					密 組 多	密	組	組部1/2					組 浅黄
190	305	赤生土郎	高坪	19次	SD19070					密 組 多	密	組	組部1/2					組 浅黄
191	255	赤生土郎	高坪	19次	SK19109					密	密	浅黄	組部1/2					組 浅黄
192	401	赤生土郎	春	19次	P150		9.4	3.8	10.1	密	密	黄緑	白編纂1/5	ヨコナデ	ヨコナデ			組 浅黄
193	330	赤生土郎	栗	19次	P274			8.3		密 組 多	密	浅黄緑	組部1/2					組 浅黄
194	319	赤生土郎	栗	19次	P288			6.4		中々組 組 多	密	組	組部1/2					組 浅黄
195	472	赤生土郎	栗	19次	P308					密	密	黒	白編纂1/5	ヨコナデ	ヨコナデ			組 浅黄
196	322	赤生土郎	春	19次	P454		17.4			密 組 多	密	浅黄緑	白編纂1/7					組 浅黄
197	324	赤生土郎	高坪	19次	P550					密	密	浅黄緑	組部1/2					組 浅黄
198	556	赤生土郎	春	22次	11K P25			4.0		密 組 多	密	組	組部3/5					組 浅黄
199	551	赤生土郎	春	22次	21K P29			19.6		密 組 多	密	浅黄緑	白編纂1/8					組 浅黄
200	554	赤生土郎	栗	22次	21K P29			18.2		密	密	組	白編纂 1/14	ヨコナデ	ヨコナデ			組 浅黄
201	555	赤生土郎	栗	22次	21K P29			16.8		密 組 多	密	組	白編纂 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハウ ミガキ	組 浅黄
202	560	赤生土郎	高坪	22次	21K P101			20.8		密	密	組	組部1/12					組 浅黄
203	350	十原節	栗	19次	P100		23.4			密 組 多	密	組	白編纂 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ			組 浅黄
204	369	十原節	栗	19次	P100					密	密	組	白編纂1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	組 浅黄
205	333	栗田十郎	春	19次	P401		15.0	8.2	4.0	密	密	(内) 栗田 (外) 栗田	白編纂1/3	ミガキ	タテハウ ミガキ	タテハウ ミガキ		内蔵版 ミガキ
206	572	内蔵内蔵	春	22次	21K P40					密	密	(組) 灰白 (組) 灰白	白編纂1/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ			組 浅黄
207	552	十原節	栗	22次	21K P30		17.2			密	密	組	白編纂1/8	ヨコナデ	ヨコナデ			組 浅黄
208	553	十原節	栗	22次	21K P30		23.2			密	密	組	白編纂 1/16	ヨコナデ	ヨコナデ			組 浅黄
209	558	十原節	春	22次	21K P33		13.2	9.4	3.5	密 組 多	密	組	白編纂1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ		組 浅黄
210	623	十原節	栗	22次	11K SD22021					密	密	組	白編纂1/5	ヨコナデ	ヨコナデ			組 浅黄
211	500	栗原謙	春	22次	11K SD22005		16.0	11.6	3.6	密 組 多	密	組	白編纂1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	組 浅黄
212	435	十原節	栗	19次	SK19073					密 組 多	密	組	組部1/4			ヨコナデ	タテハウ ミガキ	組 浅黄
213	407	十原節	栗	19次	SK19073		19.0	19.6		密 組 多	密	浅黄緑	組部1/8			ヨコナデ	タテハウ ミガキ	組 浅黄
214	244	十原節	栗	19次	SK19073		14.3	7.3	15.2	密 組 多	密	組	組部1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハウ ミガキ	組 浅黄
215	243	十原節	栗	19次	SK19073		30.8			密 組 多	密	組	白編纂 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハウ ミガキ	組 浅黄
216	169	十原節	栗	19次	SK19073		15.6			密 組 多	密	組	白編纂4/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハウ ミガキ	組 浅黄
217	124	十原節	春	19次	SK19073	西平	12.0	8.4	3.8	中々組 組 多	密	組	白編纂1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	組 浅黄
218	208	十原節	栗	19次	SK19074		24.0			密 組 多	密	浅黄緑	白編纂1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハウ ミガキ	組 浅黄
219	247	十原節	栗	19次	SK19074		20.6			密 組 多	密	組	白編纂1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハウ ミガキ	組 浅黄
220	248	十原節	栗	19次	SK19074		25.2			密 組 多	密	浅黄	白編纂 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		組 浅黄
221	235	十原節	栗	19次	SK19074		11.0			密 組 多	密	組	組部1/3			ヨコナデ	タテハウ ミガキ	組 浅黄

報告 番号	記録 番号	種別	種目	期日	地区	種別	位置	法量 (kg)			力士	構成	色調	走行率	記録簿		検査簿		文庫	特記事項
								1冊	枚数	品目					内冊	枚数	内冊	枚数		
222	436	土俵部	書	19次		SK19017		26.2	16.2	書	紙	にぶい-黄緑	白線部 ほび文形	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ ヨコナデ	ヨコハラ タテハラ ナナメハ ケ ヨコハラ ケズリ		肥子 金雲母 ハケ書	
223	424	土俵部	書	19次		SK19017				紙	紙	紺	無部一書	ヨコハラ ケズリ	ヨコハラ ケズリ	ヨコハラ タテハラ ナナメハ ケ				
224	315	土俵部	書	19次		SK19017		22.0		紙	紙	浅黄緑	白線部 1/2	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハラ タテハラ ナナメハ ケ		ハケ籠がい		
225	431	土俵部	書	19次		SK19017				紙	紙	浅黄緑	無部一書			タテハラ		納紙 肥子 内筒状		
226	419	土俵部	書	19次		SK19017				紙	紙	紺灰	無部 1/5			ロクロナ デ	ロクロナ デ ヘラ写り			
227	316	土俵部	書	19次		SK19017		16.0		紙	紙	紺	白線部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハラ			納紙	
228	326	土俵部	書	19次		SK19017	上冊	6.4		紙	紙	純白	無部 1/3	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ ヘラ写り			内筒	
229	365	土俵部	書	19次		SK19017	上冊	7.2		紙	紙	浅黄緑	無部文形			ヨコハラ			納紙 丸底	
230	311	土俵部	書	19次		SK19017	下冊	17.0		紙	紙	浅黄緑	白線部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ					
231	266	土俵部	書	19次		SK19017	下冊	18.8		紙	紙	浅黄緑	白線部 1/7	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハラ			納紙	
232	420	土俵部	書	19次		SK19017	下冊	19.2	(重) 3.5	(重) 3.5	紙	紺灰	文形			ヨコハラ			内口貫通 読み	
233	313	土俵部	書	19次		SK19017	サブトレナ	19.2		紙	紙	紺	白線部 2/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハラ タテハラ				
234	444	土俵部	書	19次		SK19017	サブトレナ			紙	紙	紺灰	無部 1/8			ロクロナ デ	ロクロナ デ		目 無部球底	
235	203	土俵部	書	19次		SK19017	上冊	5.6		紙	紙	浅黄緑	無部 1/2						小型 1/3丸底	
236	304	土俵部	書	19次		SK19017	上冊			紙	紙	紺	無部一書			読み			○納紙 直取文	
237	310	土俵部	書	19次		SK19017	上冊	16.8		紙	紙	にぶい-黄緑	白線部 1/10			ヨコナデ			納紙 受け口	
238	473	土俵部	書	19次		SK19017	上冊			紙	紙	(内) 紺 (外) 紺灰	白線部一書	タテハラ ミガキ	タテハラ ミガキ				納紙 右端	
239	174	土俵部	書	19次		SK19035		11.0		紙	紙	紺	無部 1/5			ロクロナ デ	ロクロナ デ ヘラ写り		取付高台	
240	296	土俵部	書	19次		SK19035		15.6	8.6	15.8	紙	紙	にぶい-黄緑	白線部 2/3	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハラ ミガキ	タテハラ ミガキ		納紙 平成 無部球底
241	210	土俵部	書	19次		SK19035		12.8		紙	紙	にぶい-黄緑	白線部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハラ		納紙	
242	211	土俵部	書	19次		SK19035		12.0		紙	紙	にぶい-黄緑	白線部 1/7	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ			
243	236	土俵部	書	19次		SK19035		13.0		紙	紙	にぶい-黄緑	白線部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハラ			納紙	
244	240	土俵部	書	19次		SK19035		26.6		紙	紙	にぶい-黄緑	白線部 1/14	ヨコナデ	ヨコナデ					
245	406	土俵部	書	19次		SK19035		(重) 18.2		紙	紙	紺	無部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハラ タテハラ			ハケ籠い	
246	239	土俵部	書	19次		SK19035		15.0		紙	紙	(内) 黄緑 (外) 黄緑	白線部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハラ タテハラ	ヨコハラ タテハラ		内筒黒化	
247	249	土俵部	書	19次		SK19035		15.6	9.6	3.8	紙	紙	(内) 黄緑 (外) 紺	白線部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハラ タテハラ	ヨコハラ タテハラ		内筒黒化 黒高台 ミガキ書
248	254	土俵部	書	19次		SK19035				紙	紙	(内) 黒 (外) にぶい-黄緑	無部一書	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハラ タテハラ	ヨコハラ タテハラ		内筒黒化	
249	237	土俵部	書	19次		SK19035		12.2		紙	紙	紺	白線部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			
250	209	土俵部	書	19次		SK19035		19.0	14.4	2.4	中厚紙	紙	黄緑	白線部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			ヨコナデ無い
251	238	土俵部	書	19次		SK19035		16.2	14.6	1.8	紙	紙	紺	白線部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ			金雲母 工
252	417	土俵部	書	19次		P142				紙	紙	にぶい-黄緑	無部 ほび文形			ヨコハラ	タテハラ		丸底 ハケ書	
253	408	土俵部	書	19次		P142		(重) 16.6		紙	紙	にぶい-黄緑	無部 1/7	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハラ	タテハラ		ヨコハラ籠がい	
254	346	土俵部	書	19次		P142		26.4		紙	紙	浅黄緑	白線部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハラ	タテハラ			
255	352	土俵部	書	19次		P142		14.0		紙	紙	にぶい-黄緑	白線部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ				納紙	
256	344	土俵部	書	19次		P142		13.0	8.5	3.2	紙	紙	浅黄緑	白線部 2/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ			ヨコナデ ミガキ書 工
257	342	土俵部	書	19次		P142		23.0		紙	紙	紺	白線部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ					
258	271	土俵部	書	19次		P142		9.2	5.8	8.4	紙	紙	紺灰	白線部 1/3	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ ヘラ写り			小型 自然輪
259	241	土俵部	書	19次		P266		27.0		紙	紙	にぶい-黄緑	白線部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハラ	タテハラ		ハケ籠い	
260	351	土俵部	書	19次		P266		15.0		紙	紙	にぶい-黄緑	白線部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコハラ	タテハラ		納紙 ハケ籠い	
261	387	土俵部	書	19次		P266		(重) 22.2		紙	紙	にぶい-黄緑	無部 1/16			ヨコハラ	タテハラ		ヨコハラ無い ヨコハラ籠がい	

報告 番号	調査 種別	調査 地区	調査 時期	調査 地点	調査 内容	調査 結果	法量 (G)		土質	地層	色調	先行号	[調査箇所]			[調査箇所]			文庫	特記事項
							100g	試料 量					内面	外面	内面	外面				
262	340	土塚跡	遺	19次	P266		25.0		赤 硬	にぶい・黄緑	白線部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハツ				ハク製機	
263	329	土塚跡	坪	10次	P266		10.0	7.0	3.0	赤 硬	にぶい・黄	白線部 1/7	ヨコナデ	ヨコナデ					赤線	
264	360	銅板 跡	坪	10次	P266		10.4			赤 硬	にぶい・黄	底部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		ハク製機	
265	318	土塚跡	遺	19次	P342		12.7	5.6	10.0	赤 硬	にぶい・黄緑	白線部 4/5	ヨコナデ	ヨコナデ					赤線 中々志み 遺	
266	385	土塚跡	坪	19次	P342		13.0	8.4	3.0	赤 硬	浅黄緑	白線部 2/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ユビキサ エ			
267	378	土塚跡	坪	19次	P342		13.8	9.6	3.5	赤 硬	黄	白線部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ユビキサ エ			
268	331	土塚跡	坪	19次	P342		12.2	7.8	3.6	赤 硬	黄	白線部 1/2	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ユビキサ エ			
269	317	土塚跡	坪	19次	P342		12.4	8.7	3.1	赤 硬	黄	白線部 3/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ユビキサ エ			
270	332	土塚跡	坪	19次	P342		12.5	6.0	3.3	赤 硬	にぶい・黄緑	白線部 4/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ユビキサ エ			
271	386	土塚跡	坪	19次	P342		13.2	9.0	3.7	赤 硬	黄	法政形	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナデ	ユビキサ エ			
272	328	埴土土塚	堀	19次	P342		15.4			赤 硬	(内) 黒 (外) にぶい・黄	白線部 1/14	ミダ	白線部 ヨコナデ	ミダ	白線部 ヨコナデ	ミダ	白線部 ヨコナデ	内面黒化 ミダ赤線	
273	409	埴土土塚	堀	19次	P342		14.8	9.0	3.9	赤 硬	(内) 黒 (外) 黄	法政形	ミダ	白線部 ヨコナデ	ミダ	白線部 ヨコナデ	ミダ	白線部 ヨコナデ	内面黒化 ミダ赤線	
274	335	埴土土塚	堀	19次	P342		15.6			赤 硬	(内) 黒 (外) にぶい・黄	白線部 1/12	ミダ	白線部 ヨコナデ	ミダ	白線部 ヨコナデ	ミダ	白線部 ヨコナデ	内面黒化	
275	379	土塚跡	坪	19次	P342					赤 硬	黄	白線部一帯	ヨコナデ	ヨコナデ						
276	434	土塚跡	遺	19次	P461		28.4			赤 硬	浅黄緑	底部 1/9	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	タテハツ ナメハ ツ			大手 堀 ハク製機	
277	307	銅板 跡	坪	19次	P461		12.2	8.6	6.8	赤 硬	黄	白線部 1/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ			
278	370	銅板 跡	内面掘	19次	P315		17.0			赤 硬	黄	底部 1/14			ロクロナ デ	ロクロナ デ			小型 方孔 1 堀	
279	305	土塚跡	遺	19次	SD19122	上層	21.0			赤 硬	にぶい・黄緑	白線部 1/16	ヨコナデ	ヨコナデ						
280	364	土塚跡	土塚	19次	SD19122	下層	(重) 4.7	(幅) 1.6	(厚) 1.4	赤 硬	にぶい・黄緑	底部							神代 丹丸貫通 敷土跡	
281	548	埴土土塚	堀	22次	21K SK22010					赤 硬	(内) 黒 (外) にぶい・黄緑	底部一帯			ミダ	白線部 ヨコナデ			堀内赤化 内面黒化	
282	523	土塚跡	坪	22次	21K SD22001	上層	11.2	7.4	3.6	赤 硬	浅黄緑	白線部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ					赤線	
283	578	土塚跡	堀	22次	21K SD22001	上層				赤 硬	黄緑	白線部一帯	ヨコナデ	ヨコナデ						
284	519	土塚跡	遺	22次	21K SD22001	上層	26.2			赤 硬	にぶい・黄緑	白線部 1/16	ヨコナデ	ヨコナデ					赤線	
285	525	土塚跡	遺	22次	21K SD22001	上層	15.8			赤 硬	にぶい・黄緑	白線部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ						
286	524	土塚跡	遺	22次	21K SD22001	上層	20.4			赤 硬	にぶい・黄緑	白線部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ				
287	536	土塚跡	遺	22次	21K SD22001	上層	17.8			赤 硬	浅黄緑	白線部 1/9	ヨコナデ	ヨコナデ					赤線	
288	587	土塚跡	遺	22次	21K SD22001	上層	12.6			赤 硬	にぶい・黄緑	白線部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ				
289	521	土塚跡	遺	22次	21K SD22001	上層	17.8			赤 硬	にぶい・黄緑	白線部 1/16	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハツ		赤線	
290	577	土塚跡	遺	22次	21K SD22001	上層	20.0			赤 硬	黄緑	白線部 2/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハツ タテハツ			赤線	
291	582	土塚跡	遺	22次	21K SD22001	上層	20.2			赤 硬	黄	白線部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハツ ナメハ ツ			
292	579	土塚跡	遺	22次	21K SD22001	上層				赤 硬	黄緑	白線部一帯	ヨコナデ	ヨコナデ						
293	537	銅板 跡	高坪	22次	21K SD22001	上層				赤 硬	黄緑	底部一帯			ロクロナ デ	ロクロナ デ				
294	540	銅板 跡	高坪	22次	21K SD22001	上層				赤 硬	灰白	底部一帯			ロクロナ デ	ロクロナ デ				
295	563	銅板 跡	坪	22次	21K SD22001	上層				赤 硬	黄	白線部 1/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ			宝珠堀み 合入り	
296	564	銅板 跡	坪	22次	21K SD22001	上層	9.6			赤 硬	黄	白線部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ			堀み跡	
297	320	銅板 跡	坪	22次	21K SD22001	上層	10.2	6.2	3.4	赤 硬	黄緑	白線部 1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ			小型	
298	566	銅板 跡	坪	22次	21K SD22001	上層	10.4		(重) 3.6	赤 硬	黄	白線部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ				
299	533	土塚跡	遺	22次	21K SD22001	中層	11.0			赤 硬	にぶい・黄緑	白線部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハツ			ハク製機、 小型 銅板跡(赤線)、 赤下1 堀	
300	589	銅板 跡	遺	22次	21K SD22001	中層	22.0			赤 硬	黄緑	底部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ			
301	531	銅板 跡	坪	22次	21K SD22001	中層	12.0			赤 硬	黄	白線部 2/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ			堀み、合入り跡	
302	567	銅板 跡	坪	22次	21K SD22001	中層	11.0	6.6	3.9	赤 硬	黄	白線部一帯	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ				
303	580	銅板 跡	坪	22次	21K SD22001	中層	5.0			赤 硬	黄	天井部一帯			ロクロナ デ	ロクロナ デ				

報告 番号	国名	種別	調査 期日	地区	道程	位相	法量 (km)		船主	建造	色調	西行年	1編法調整		2編法調整		文種	特記事項	
							上程	下程					内面	外面	内面	外面			
304	317	真珠船	拜命	22次	2HK	SD2001	中程	11.0		密	密	真	白編部1/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		○沈没文	
305	530	真珠船	拜命	22次	2HK	SD2001	中程	11.2		密	密	真	白編部1/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	○沈没文	
306	633	真珠船	取戻	22次	2HK	SD2001	中程		(株) 26.2	密	密	真	真部一第			ナデ	ナデキ 白キメ	編部 白キメ	
307	501	土師器	真	22次	2HK	SD2001	下程			密 編部多	密	真	白編部一第	ヨコナデ	ヨコナデ				ヨコナデ
308	585	真珠船	密	22次	2HK	SD2001	下程	(株) 20.2	11.8	密	密	真	真部沈形			ロクロナ デ	ロクロナ デ	○沈没文	編部 自然編 沈没
309	306	赤土土師	高坪	19次		SD19127				密 編部多	密	真	真部一第			ナデ		○編部 取付書	編部 円孔3 取付書
310	593	帆文土師	探検	22次	1HK	SD2001			7.6	密 編部多	密	真	真部1/6					○沈没文	平成
311	596	赤土土師	密	22次	2HK	SD2001	上程	24.0		密 編部多	密	真	白編部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ			○沈没文	ナゲミ
312	586	赤土土師	密	22次	2HK	SD2001	上程	18.6		密 編部多	密	真	真部一第	ヨコナデ	ヨコナデ			○沈没文	
313	588	赤土土師	密	22次	2HK	SD2001	上程		6.2	密 編部多	密	真	真部沈形			ヨコナデ	ナメハ ケ		上付底
319	562	土師器	真	22次	2HK	F37		13.5	8.4	3.5	密 編部多	密	真部沈形	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナ デ	ヨコナ デ	
320	257	赤土土師	密	19次		SD19009			4.2	密 編部多	密	真	白編部					○編部 取付書	編部 上付底
321	336	土師器	真	19次		P353		13.4		密 編部多	密	真	白編部1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナ デ	ナメハ ケ		ハケ
322	421	土師器	真	19次		P353		16.4	11.2	14.8	密 編部多	密	白編部1/2	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナ デ	ナメハ ケ		ナメハ ケ
323	145	土師器	真	19次		SK19043		21.8		密 編部多	密	真	白編部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ	ナメハ ケ	ナメハ ケ		ハケ
324	126	土師器	真	19次		SK19069		20.0		密 編部多	密	真	白編部1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナ デ	ナメハ ケ		
325	481	土師器	真	19次		SK19072				密 編部多	密	真	真部1/4			ナメハ ケ	ナメハ ケ		編部
326	312	土師器	真	19次		SK19114		19.6		密 編部多	密	真	白編部 1/16	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナ デ	ナメハ ケ		編部 ハケ
327	458	穴輪内出	真	19次		P4				密	密	真	(真) 編部 (真) 取付書	白編部一第	ロクロナ デ	ロクロナ デ		編部 取付書	
328	359	黒土土師	真	19次		P12				密	密	真	(内) 真部 (外) 取付書	白編部一第	ミナ	真部取付 ナデ		内面黒化	
329	360	黒土土師	真	19次		P12		11.0		密	密	真	(内) 真部 (外) 取付書	白編部1/5		ミナ	真部取付 ナデ	内面黒化	
330	355	土師器	真	19次		P28		11.8		密 編部多	密	真	白編部1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナ デ		
331	357	土師器	真	19次		P81		15.8		密 編部多	密	真	白編部1/6	ヨコナデ	ヨコナデ				編部
332	256	土師器	真	19次		P91		11.2	5.6	2.0	密	密	白編部1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ヨコナ デ		
333	418	土師器	真	19次		P91		(株) 20.4		密 編部多	密	真	白編部一第	ヨコナデ	ヨコナデ				編部
334	368	黒土土師	真	19次		P94				密	密	真	(内) 真部 (外) 取付書	白編部一第	ミナ	真部取付 ナデ		内面黒化	
335	349	土師器	真	19次		P102		19.6		密	密	真	白編部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ				
336	445	黒土土師	真	19次		P103		14.0	13.6	5.5	密	密	白編部1/6			ヨコナ デ	ヨコナ デ		法部式
337	367	穴輪内出	真	19次		P109				密	密	真	(真) 取付 (真) 取付書	白編部一第	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	編部
338	345	土師器	真	19次		P132		23.0		密	密	真	白編部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ				
339	471	真珠船	真	19次		P140		8.2		密	密	真	真部1/6			ロクロナ デ	ロクロナ デ		
340	415	土師器	真	19次		P149		10.4		密 編部多	密	真	白編部1/4			ヨコナ デ			編部 平成 ハケ
341	354	土師器	真	19次		P192		18.2		密 編部多	密	真	白編部1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナ デ			編部
342	373	土師器	真	19次		P265				密	密	真	真部一第						編部
343	372	黒土土師	真	19次		P267				密	密	真	(内) 真部 (外) 取付書	白編部一第	ミナ	真部取付 ナデ			
344	474	土師器	真	19次		P280				密	密	真	白編部			ナメハ ケ	ナメハ ケ		編部 取付書
345	383	穴輪内出	真	19次		P352				密	密	真	(真) 取付 (真) 取付書	白編部一第	ロクロナ デ	ロクロナ デ			編部 取付書
346	334	土師器	真	19次		P443		13.4		密 編部多	密	真	白編部1/6	ヨコナデ	ヨコナデ				編部
347	276	穴輪内出	真	19次		P511				密	密	真	(真) 取付 (真) 取付書	真部一第			ロクロナ デ	ロクロナ デ	編部 取付書

報告 番号	国産 番号	標名	標形	標高	地区	道幅	位置	法量 (m)		樹高	樹形	樹種	色調	西行率	1階高樹冠		2階高樹冠		文庫	特記事項	
								上階	下階						内側	外側	内側	外側			
348	482	萩崎内田	栗	19.3		P546					栗	緑	灰白	西部 1/4		ロクロナ デ	ロクロナ デ			植物園	
349	325	土原	栗	19.3		P546	134				栗	浅黄緑	白緑部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ					煤	
350	375	萩崎内田	梅	19.3		P574					栗	緑	(主) 灰白 (主) オリーブ色	白緑部第一 階	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		植物園	
351	573	萩崎内田	梅	22.3	1K	P17					栗	緑	(主) 灰白 (主) 灰白	白緑部第一 階	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		植物園	
352	568	萩崎内田	梅	22.3	2K	P35	4.2				栗	緑	(主) 灰 (主) オリーブ色	西部第一 階	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台 植物園	
353	557	土原	珙	22.3	2K	P47	130	8.4	3.3		栗	緑		白緑部 1/2	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ	ユビオサ ユ	上げ底	
354	42	山菜橋		19.3		SD19007	上期	120	5.4	6.8	粗	緑	灰白		白緑部 1/2	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台 植物園
355	43	山菜橋		19.3		SD19007	上期	127	5.1	6.4	粗	緑	灰白		白緑部 1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台
356	54	山菜橋		19.3		SD19007	上期	134			粗	緑	灰白		白緑部 1/2	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然樹
357	45	山菜橋		19.3		SD19007	上期		8.2		粗	緑		西部 1/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		高台公園?
358	47	山菜橋		19.3		SD19007	上期		8.8		粗	緑	灰黄	西部 1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台
359	52	山菜橋		19.3		SD19007	上期		7.0		粗 細葉多	緑	灰白	西部 3/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		玉原 萩村高台 植物園
360	35	山菜橋		19.3		SD19007	上期		6.6		粗	緑	灰白	西部完形	ロクロナ デ	ロクロナ デ					萩村高台
361	38	山菜橋		19.3		SD19007	上期		7.6		粗 細葉多	緑	灰白	西部 1/3	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台 植物園 自然樹
362	48	山菜橋		19.3		SD19007	上期		8.8		粗	緑	灰白	西部完形	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台 植物園 自然樹
363	49	山菜橋		19.3		SD19007	上期		6.8		粗 細葉多	緑	灰白	西部 ほぼ完形	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台
364	51	山菜橋		19.3		SD19007	上期		6.4		粗	緑	灰白	西部 3/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩原集落「一」 高台公園
365	53	山菜橋	小梅	19.3		SD19007	上期		4.0		粗	緑	灰白	西部完形	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台 植物園
366	44	白根	梅	19.3		SD19007	上期		7.2		細	緑	灰白	西部 2/5	ヨコナデ	ヨコナデ					萩村高台 植物園 自然樹
367	140	青根	梅	19.3		SD19007	上期				細	緑	灰白	西部第一 階	ヨコナデ	ヨコナデ					萩村高台 植物園 自然樹
368	55	山菜橋	珙	19.3		SD19007	下層		22.8		栗	黄	黄灰	西部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ					自然樹 ロクロナに近い
369	40	赤生土原	栗	19.3		SD19007	上期	13.8			中々 樹	浅黄緑		白緑部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ		ナナメハ デ	○樹文	○樹文	赤生土原
370	50	赤生土原	栗	19.3		SD19007	上期	15.0			粗 細葉多	緑	に深い黄緑	白緑部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ				○樹文	赤生土原 5号 樹 種子 樹展
371	47	山菜橋		19.3		SD19008			8.2		粗	緑	灰白	西部 2/5		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台
372	84	山菜橋		19.3		SD19005	サブトレンチ		8.6		粗	緑	灰白	西部 3/5		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台
373	1	山菜橋		19.3		SD19005	上期	14.4	7.4	4.6	粗	緑	灰白		白緑部 2/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台 自然樹
374	7	山菜橋		19.3		SD19005	上期	14.0			粗	緑	灰黄	白緑部 1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台 植物園 自然樹
375	13	山菜橋		19.3		SD19005	上期	13.6	6.2	5.0	粗	緑	灰白		白緑部 1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台 植物園 自然樹
376	20	山菜橋		19.3		SD19005	上期	16.8			粗	緑	灰	白緑部 1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩原 集落
377	32	山菜橋		19.3		SD19005	上期	14.0			粗	緑	灰白		白緑部 1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然樹
378	4	山菜橋		19.3		SD19005	上期		8.0		粗	緑	灰黄	西部 1/2		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台 植物園
379	12	山菜橋		19.3		SD19005	上期		6.8		粗	緑	灰黄	西部 ほぼ完形	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台 植物園
380	18	山菜橋		19.3		SD19005	上期		6.8		粗	緑	灰白	西部 1/2		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台 植物園 自然樹
381	19	山菜橋		19.3		SD19005	上期		7.0		粗 細葉多	緑	灰黄	西部完形		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台 植物園 自然樹
382	20	山菜橋		19.3		SD19005	上期		7.1		粗 細葉多	緑	灰黄	西部完形		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台 植物園 自然樹
383	21	山菜橋		19.3		SD19005	上期		6.4		粗	緑	灰白	西部完形		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		萩村高台



報告 番号	国産 番号	種別	産地	産区	産期	産別	位置	法量 (kg)			産土	産成	色調	発行年	1級産物		2級産物		文庫	特記事項
								1級	2級	品高					内産	外産	内産	外産		
384	22	山菜類		19次	SD19005	上類		7.0			粗	硬	灰黄	産部 3/5			ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台
385	26	山菜類		19次	SD19005	上類		8.4			粗	硬	灰白	産部 1/2			ロクロナ デ	ロクロナ デ		高台銀付 精製塩
386	27	山菜類		19次	SD19005	上類		8.2			粗	硬	灰白	産部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		高台銀付 精製塩 自然塩
387	9	山菜類		19次	SD19005	上類	144	7.0	4.0		粗 細多	硬	灰白	1級産部 1/6	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台 精製塩 自然塩 産部産者「上上」
388	46	山菜類	群	19次	SD19005	上類		15.0			粗	硬	灰白	産部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台 自然塩 産
389	33	土俵類	皿	19次	SD19005	上類	9.6	5.6	2.5		硬	硬	浅黄橙	1級産部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		
390	30	青類	瓶	19次	SD19005	上類	14.0				硬	硬	(産) 灰白 (産) オリーブ灰	1級産部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		梅花 産物
391	17	山菜類		19次	SD19005	下類	14.8	6.6	5.0		粗	硬	灰白	1級産部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台 精製塩 自然塩
392	25	山菜類		19次	SD19005	下類	15.7	6.8	5.5		粗	硬	灰白	1級産部 2/3	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台 精製塩 自然塩
393	28	山菜類		19次	SD19005	下類	14.6	7.2	5.4		粗	硬	灰白	1級産部 1/2	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		高台銀付 精製塩
394	37	山菜類		19次	SD19005	下類	13.8				粗	硬	灰白	1級産部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然塩
395	2	山菜類		19次	SD19005	下類		7.0			粗	硬	灰黄	産部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台 精製塩
396	6	山菜類		19次	SD19005	下類		9.0			粗	硬	灰白	産部一部			ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台
397	10	山菜類		19次	SD19005	下類		8.2			粗 細多	硬	灰白	産部 1/3			ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台 精製塩 自然塩
398	14	山菜類		19次	SD19005	下類		9.4			粗	硬	灰白	産部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台
399	16	山菜類		19次	SD19005	下類		7.0			粗	硬	灰黄	産部完全			ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台 精製塩
400	8	山菜類	群	19次	SD19005	下類		12.2			粗 細多	硬	灰白	産部 1/4			ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台 産部産者 産
401	135	土俵類	土俵	19次	SD19005	下類	(産) 5.8	(産) 3.2	(産) 3.1		硬	硬	黄橙	完全			ロクロナ デ	ロクロナ デ		梅茶 丹波西通 物十粒産
402	23	山菜類		19次	SD19005	出A1下類		7.2			粗	硬	灰白	産部 2/5			ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台
403	36	山菜類	群	19次	SD19005	出A1下類		13.6			粗	硬	灰白	産部 1/8			ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台 自然塩
404	34	土俵類	皿	19次	SD19005	出A1下類	12.6	9.0	3.0		硬	硬	浅黄橙	1級産部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		ナデ
405	31	土俵類	皿	19次	SD19005	出A1下類	8.0	6.6	1.3		硬	硬	浅黄橙	1級産部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオサ エ		小箱 産
406	5	山菜類		19次	SD19005	～GトC上類	15.2	7.4	5.6		粗 細多	硬	灰白	1級産部 1/2	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台 精製塩
407	24	山菜類		19次	SD19005	～GトC上類	15.0	7.7	5.7		粗	硬	(内) 灰白 (外) 灰白	1級産部 1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台 自然塩 産
408	11	山菜		19次	SD19005	～GトC上類	8.4	4.4	2.3		粗	硬	灰白	産部完全	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		産部完全 摩手
409	15	山菜		19次	SD19005	～GトC上類	7.6	3.6	2.3		中粗 細多	硬	灰白	産部完全	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		産部完全 摩手
410	41	山菜		19次	SD19005	～GトC上類	8.4	4.6	2.4		粗	硬	灰白	1級産部 1/2	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		摩手
411	3	山菜類		19次	SD19005	～GトC下類	14.8	7.0	5.6		粗	硬	灰白	1級産部 3/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台 自然塩
412	29	漬物類	群	19次	SD19005	上類	11.2	8.4	4.0		硬	硬	灰	1級産部 1/3	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		無高台
413	478	瓦	平瓦	19次	SD19005	出A1上類					硬	硬	に高い黄橙	一部			各日産	クズリ 掛物ナ 9年		産部産者 産部産者「上上」
414	88	山菜類		19次	SD19006	下類		6.4			粗	硬	灰白	産部 1/2			ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台 精製塩
415	303	山菜類		19次	SD19009		13.2				粗	硬	灰白	1級産部 1/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
416	501	山菜類		22次 1K	SD22011		8.6				粗	硬	灰白	産部 1/6			ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台
417	534	山菜類		22次 1K	SD22011		8.6				粗	硬	灰白	産部 1/6			ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀付高台

報告 番号	試験 番号	種別	題名	地区	道県	位階	法量 (㎏)		力士	構成	色調	発行年	1編部構成		巻部構成		文種	特記事項		
							1冊 上巻	1冊 下巻					内題	外題	内題	外題				
418	302	山形編	22次	1K	SD2011	上冊		7.2	籠	襦	灰白	既部 1/4		ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切			銀付高台 自然巻		
419	307	山形編	22次	1K	SD2011	上冊			中中組	襦	にんい-黄	1編部-1巻	ヨコナデ	ヨコナデ				銀付巻系 新り直し		
420	303	山形編	22次	1K	SD2011	下冊		8.2	籠	襦	灰白	既部 1/3		ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切			銀付高台 既巻		
421	308	山形編	22次	1K	SD2011	下冊			籠	襦	にんい-黄	既部-1巻		ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切			銀付高台 既巻		
422	322	山形編	22次	1K	SD2011	下冊		7.2	籠	襦	灰黄	既部-1巻		ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切			銀付高台 自然巻		
423	335	山形編	22次	1K	SD2011	下冊		7.4	籠	襦	灰白	既部 1/4		ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切			銀付高台		
424	306	山形編	22次	1K	SD2011	下冊		14.0	中中組	襦	浅黄巻	1編部 1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			銀付巻系 新り直し 小型	
425	18	山形編	初巻	19次	SD19023			29.6	籠	襦	にんい-黄	1編部 1/16	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			エビセキ 巻		
426	19	山形編	初巻	19次	SD19023			29.2	籠	襦	にんい-黄	1編部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			ヨコナデ ナナメハ ケ ヨコナデ エビセキ エ		
427	52	山形編		19次	SD19024			16.8	7.4	5.5	籠	襦	旭灰	1編部 1/4	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切		銀付高台 既巻 自然巻	
428	68	山形編		19次	SD19024			16.0			籠	襦	旭灰	1編部 1/8	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切			薄手 自然巻	
429	58	山形編		19次	SD19024			16.6	8.4	5.2	籠	襦	灰白	1編部 3/4	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切		銀付高台 薄手 巻切 中中巻	
430	67	山形編		19次	SD19024			7.6			籠	襦	灰白	既部 3/5	ロクロナ デ 巻切			銀付高台 既巻		
431	56	山形編	小巻	19次	SD19024			8.1	3.7	2.7	籠	襦	灰白	ほつ形	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切		銀付高台 中中巻	
432	59	山形編	小巻	19次	SD19024			11.8			籠	襦	旭灰	既部 1/4	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切			銀付高台 既巻 既巻	
433	63	白編	巻	19次	SD19024			15.4	5.4	6.0	籠	襦	灰白	1編部 2/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ		銀付出し高台 巻土結 丁寧 巻
434	60	山形編	巻	19次	SD19024			20.4			中中組	襦	浅黄巻	1編部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ			巻	
435	139	山形編	巻	19次	SD19024			15.0			籠	襦	にんい-黄	1編部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ				
436	57	山形編	巻	19次	SD19024			14.8	8.6	3.5	籠	襦	にんい-黄	1編部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ		エビセキ エ	
437	66	山形編	巻	19次	SD19024			15.2	11.4	3.1	籠	襦	にんい-黄	1編部 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ		エビセキ エ	
438	71	山形編	巻	19次	SD19024			13.8	11.6	3.2	籠	襦	浅黄巻	1編部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ		エビセキ エ	
439	61	山形編	巻	19次	SD19024			8.8	7.4	1.4	籠	襦	浅黄巻	1編部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ		エビセキ エ	
440	76	山形編		19次	SE19025	上冊		6.2	籠	襦	灰白	既部完形		ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切			銀付高台 既巻		
441	119	山形編		19次	SE19025	上冊		8.0	籠	襦	灰白	既部完形		ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切			銀付高台 既巻		
442	70	山形		19次	SE19025	上冊		8.2	4.4	2.1	籠	襦	灰白	1編部 1/8	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切		自然巻 既部巻「天」ナ	
443	64	山形編	巻	19次	SE19025	上冊		23.4	籠	襦	にんい-黄	1編部 1/8	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			既文 巻		
444	138	青編	巻	19次	SE19025	上冊			籠	襦	灰白	1編部-1巻	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			既文 巻		
445	74	山形編	巻	19次	SE19025	中冊		8.5	7.8	1.4	籠	襦	にんい-黄	1編部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ		エビセキ エ	
446	69	山形編		19次	SE19025	下冊		13.2			籠	襦	旭灰	1編部 1/8	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切		薄手 自然巻	
447	78	山形編		19次	SE19025	下冊		15.0			籠	襦	灰白	1編部 1/8	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切		自然巻	
448	72	山形編		19次	SE19025	下冊		14.5	7.6	5.4	籠	襦	灰白	1編部 2/3	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切		銀付高台 既巻 中中巻	
449	73	山形編		19次	SE19025	下冊		7.1			籠	襦	灰白	既部完形	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切			銀付高台 既巻	
450	75	山形編		19次	SE19025	下冊		7.0			籠	襦	灰黄	既部完形	ロクロナ デ 巻切	ロクロナ デ 巻切			銀付高台	

報告 番号	国産 番号	種別	産地	産区	産期	位置	法量 (kg)		産土	産成	色調	発行年	1級産物		2級産物		文庫	特記事項		
							1級	2級					内容	内容						
451	79	山菜類	19次	SE19025	下期		7.6		粗	灰白	成部 1/2		ロクロナ デ	ロクロナ デ				銀川高付		
452	85	山菜	19次	SE19025	下期		7.4	4.4	1.8	粗	灰白		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ			福平 自然物	
453	77	土俵類	Ⅲ	SE19025	下期		8.2	6.0	1.0	粗	緑	成部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ				小畑 正平	
454	96	山菜類	19次	SE19112	上期		13.4	5.8	5.1	粗	灰黄	成部 1/10	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ			銀川高付	
455	97	山菜類	19次	SE19112	上期			5.8		粗	灰白	成部 3/4				ロクロナ デ			銀川高付 中々北み 実産	
456	301	山菜類	19次	SE19112	上期		14.0			粗 細部多	灰 灰灰	成部 1/12	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ				
457	120	土俵類	Ⅲ	SE19112	上期		8.2	5.8	1.0	粗 細部多	緑	成部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ				小畑 延平	
458	137	山菜類	19次	SE19112	下期		13.2			粗	灰白	成部 1/7	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ				
459	437	山菜類	19次	SE19112	下期		13.2			粗	灰白	成部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ				
460	484	土俵類	Ⅲ	SK19113						中々粗	緑 緑白-黄緑	成部 一帯	ヨコナデ	ヨコナデ					海伊勢系 新り直し 産	
461	400	土俵類	Ⅲ	SK19113						粗 細部多	灰 緑白-黄緑	成部 一帯				ヨコナデ			伊藤 全登母	
462	389	祝崎肉類	Ⅲ	SK19113						産 細部多	(産) 灰白 (産) 不明	成部 一帯	ロクロナ デ	ロクロナ デ					産物 産物産	
463	388	山菜類	19次	SK19029						粗	灰白	成部 一帯	ロクロナ デ	ロクロナ デ						
464	133	山菜類	19次	SK19030			9.8			粗	灰白	成部 1/3				ロクロナ デ			銀川高付 初級産 自然物	
465	392	山菜類	19次	SK19030			12.4			粗 細部多	灰白	成部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ			自然物	
466	143	山菜類	Ⅲ	SK19030			20.6			粗	灰 灰灰	成部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ			山口 自然物	
467	227	土俵類	Ⅲ	SK19030			17.0			粗	浅黄緑	成部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ					海伊勢系 小型 新り直し	
468	141	土俵類	Ⅲ	SK19030			8.0	6.8	1.7	産	灰 灰黄	成部 2/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ				小畑	
469	156	土俵類	Ⅲ	SK19030			4.0			産	灰白	成部 1/3			ヨコナデ	ヨコナデ			銀川高付 上げ産 産物	
470	280	山菜類	19次	SK19031						粗	灰 灰黄	成部 一帯	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ				ロクロナ産、
471	391	山菜類	19次	SK19031						粗 細部多	灰白	成部 一帯	ロクロナ デ	ロクロナ デ					自然物 産手	
472	125	山菜類	Ⅲ	SK19032	上期		25.8			粗 細部多	灰 灰黄	成部 1/7	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ				
473	155	山菜類	Ⅲ	SK19032	上期		29.0			粗	灰 灰灰	成部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ				
474	132	青龍	Ⅲ	SK19032	上期		6.2			産 細部多	(産) 緑白-黄 (産) 明りサーフ 産	成部 一帯 成部 成部				ヨコナデ	ヨコナデ		新り直し高付 産物	
475	128	山菜類	19次	SK19032	下期		14.2	6.6	5.0	粗 細部多	灰 灰灰	成部 1/14	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ				銀川高付 初級産 自然物
476	142	山菜類	19次	SK19032	下期		14.8	8.2	5.6	粗 細部多	灰白	成部 1/5	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ				高付高付 初級産
477	146	山菜類	19次	SK19032	下期		14.0	8.6	4.9	粗 細部多	灰 灰黄	成部 1/16	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ				銀川高付 初級産
478	134	山菜類	19次	SK19032	下期		6.8			粗	灰 灰黄	成部 4/5				ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀川高付 初級産	
479	479	瓦	平瓦	SK19032	上期					産	灰 灰黄	一帯				赤目編 産物産			一枚作り	
480	374	山菜類	19次	P244						粗	灰白	成部 一帯	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ				自然物
481	358	山菜類	19次	P20						粗	灰 灰	成部 一帯	ロクロナ デ	ロクロナ デ						
482	320	土俵類	Ⅲ	P201			8.2	6.4	1.4	産	緑 緑白-黄緑	成部 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ				小畑 延平	
483	212	山菜類	19次	SK19003	上期		14.0			粗	灰	成部 1/8	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ				自然物
484	230	山菜類	19次	SK19003	上期		11.8			粗	灰 灰灰	成部 1/10	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ				
485	426	青龍	Ⅲ	SK19003	上期					産	(産) 灰白 (産) 灰白サーフ	成部 一帯	ヨコナデ	ヨコナデ					産物	
486	226	土俵類	土俵	SK19003	上期		(産) 3.4	(産) 1.1	(産) 1.0	産	灰 灰黄緑	先形							伊藤 河見真通	
487	259	山菜類	19次	SK19003	TP1		9.2			粗	灰白	成部 1/4				ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀川高付 初級産	
488	252	山菜類	19次	SK19003	TP2		6.4			粗	灰白	成部 1/2				ロクロナ デ	ロクロナ デ		銀川高付 初級産 自然物	

報告 番号	試験 番号	種別	種別	地区	道県	位置	法量 (cm)			樹高	樹形	色調	西行率	1階高樹冠		2階高樹冠		文庫	特記事項		
							上階	下階	高さ					内径	外径	内径	外径				
480	275	山廻	19	山廻	山廻	TP2		8.2	4.0	2.3	観	既	灰白	1階高樹冠	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	自然樹		
490	422	青楓	楓	19	青楓	TP2					既	既	(葉) 灰 (樹) 明オリーブ 色	1階高樹冠	ヨコナデ	ヨコナデ			自然樹		
491	429	青楓	楓	19	青楓	TP2					既	既	(葉) 灰白 (樹) オリーブ色	1階高樹冠	ヨコナデ	ヨコナデ			自然樹	○	
492	260	山菜樹	19	山菜樹	山菜樹	TP3		7.4			観	既	灰白	既部 1/3		ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然樹	樹形高台	
493	262	山菜樹	19	山菜樹	山菜樹	TP3		11.2			観	既	既	既部 1/6		ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然樹	樹形高台	
494	208	十徳樹	19	十徳樹	十徳樹	TP3					観	既	既	既部 1階	ヨコナデ	ヨコナデ			自然樹	樹形高台 樹形高し	
495	427	青楓	楓	19	青楓	TP3					既	既	(葉) 灰白 (樹) オリーブ色	既部 1階	ヨコナデ	ヨコナデ			自然樹		
496	85	山菜樹	19	山菜樹	山菜樹	TP4		14.4			観	既	既	灰白	1階高樹冠	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	自然樹	樹形高台
497	213	山菜樹	19	山菜樹	山菜樹	TP4		15.0			観	既	既	灰白	1階高樹冠	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	自然樹	樹形高台
498	296	山菜樹	19	山菜樹	山菜樹	TP4		15.4			観	既	既	灰白	1階高樹冠	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	自然樹	樹形高台
499	215	山菜樹	19	山菜樹	山菜樹	TP4		6.4			観	既	既	既部 1/3		ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然樹	樹形高台	
500	223	山菜樹	19	山菜樹	山菜樹	TP4		8.6			観	既	既	既部 1/3		ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然樹	樹形高台	
501	220	山菜樹	19	山菜樹	山菜樹	TP4		7.8			観	既	既	既部 1/5		ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然樹	樹形高台	
502	222	山菜樹	19	山菜樹	山菜樹	TP4		6.4			観	既	既	既部 1/4		ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然樹	樹形高台 樹形高	
503	232	山菜樹	19	山菜樹	山菜樹	TP4		6.5			観	既	既	既部 3/4		ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然樹	樹形高台 樹形高	
504	264	山菜樹	19	山菜樹	山菜樹	TP4		7.4			観	既	既	灰白	既部 1/3		ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然樹	樹形高台
505	263	山廻	19	山廻	山廻	TP4		7.8	4.4	2.1	観	既	既	灰白	1階高樹冠	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	自然樹	
506	276	山廻	19	山廻	山廻	TP4		7.8	4.4	2.1	観	既	既	灰白	1階高樹冠	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	自然樹	
507	191	土銀樹	19	土銀樹	土銀樹	TP4		25.6			観	既	既	既部 1階	ヨコナデ	ヨコナデ			自然樹	樹形高台 樹形高し	
508	194	土銀樹	19	土銀樹	土銀樹	TP4		15.0	11.2	2.6	観	既	既	既部 1階	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ	自然樹	樹形高台 樹形高し	
509	272	土銀樹	19	土銀樹	土銀樹	TP4		14.6	10.2	2.8	観	既	既	既部 1階	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ	自然樹	樹形高台 樹形高し	
510	190	土銀樹	19	土銀樹	土銀樹	TP4		12.0	8.2	2.5	観	既	既	既部 1階	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ	自然樹	樹形高台 樹形高し	
511	217	土銀樹	19	土銀樹	土銀樹	TP4		8.0	4.6	1.8	観	既	既	既部 4/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ	自然樹	樹形高台 樹形高し	
512	266	土銀樹	19	土銀樹	土銀樹	TP4		8.2	5.4	1.4	観	既	既	既部 1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ	自然樹	樹形高台 樹形高し	
513	278	土銀樹	19	土銀樹	土銀樹	TP4		8.2	6.6	1.5	観	既	既	既部 1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ	自然樹	樹形高台 樹形高し	
514	241	土銀樹	19	土銀樹	土銀樹	TP4		8.8	7.4	1.2	観	既	既	既部 1階	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ナデ	自然樹	樹形高台 樹形高し	
515	287	青楓	楓	19	青楓	TP4		15.0			既	既	(葉) 灰白 (樹) 明オリーブ 色	1階高樹冠	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	自然樹		
516	273	青楓	楓	19	青楓	TP4		15.8			既	既	(葉) 灰白 (樹) オリーブ色	1階高樹冠	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	自然樹	○	
517	285	青楓	楓	19	青楓	TP4		6.2			既	既	(葉) 灰白 (樹) オリーブ色	既部 1/4		ヨコナデ	ヨコナデ		自然樹	樹形高台 樹形高し	
518	89	青楓	楓	19	青楓	TP4		5.6			既	既	(葉) 灰白 (樹) 底オリーブ 色	既部 2/3		ヨコナデ	ヨコナデ		自然樹	樹形高台 樹形高し	
519	428	青楓	楓	19	青楓	TP4					既	既	(葉) 灰白 (樹) 明オリーブ 色	1階高樹冠	ヨコナデ	ヨコナデ			自然樹		
520	430	青楓	楓	19	青楓	TP4					既	既	(葉) 灰白 (樹) オリーブ色	1階高樹冠	ヨコナデ	ヨコナデ			自然樹	○	
521	432	青楓	楓	19	青楓	TP4					既	既	(葉) 灰白 (樹) オリーブ色	既部 1階	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	自然樹	○	
522	433	青楓	楓	19	青楓	TP4					既	既	(葉) 灰白 (樹) オリーブ色	既部 1階		ヨコナデ	ヨコナデ		自然樹		
523	423	白楓	楓?	19	白楓	TP4					既	既	(葉) 灰白 (樹) 灰白	1階高樹冠	ヨコナデ	ヨコナデ			自然樹	樹形高台 樹形高し	
524	476	栗樹	栗	19	栗樹	TP4					既	既	既	既部 1/3		ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然樹		

報告 番号	記録 番号	標名	標高	地区	道幅	位置	法量 (m)		樹高	樹種	樹形	色調	西行率	1級保護樹		2級保護樹		文庫	特記事項	
							上径	枝径						内径	外径	内径	外径			
																				内径
525	214	山茶樹	19次		SKI9003	TP5	15.2		粗	硬	灰白		1級保護1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ			
526	80	山茶樹	19次		SKI9003	TP5	8.2		粗 細葉多	葉	暗灰		保護1/3		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		樹付高台	
527	216	山茶樹	19次		SKI9003	TP5	8.2		粗	硬	灰白		保護1/3		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		樹付高台	
528	261	山茶樹	19次		SKI9003	TP5	8.6		粗	硬	灰白		保護1/4		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		樹付高台	
529	267	山茶樹	19次		SKI9003	TP5	7.0		粗	硬	灰白		保護1/4		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		樹付高台	
530	268	山茶樹	19次		SKI9003	TP5	8.4		粗	硬	灰白		保護1/3		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		樹付高台	
531	277	山茶樹	19次		SKI9003	TP5	7.4		粗	硬	灰白		保護1/3		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		樹付高台 樹陰直	
532	229	土桐樹	Ⅲ	19次	SKI9003	TP5	8.8	6.4	1.2	密	硬	に深い暗		1級保護1/2	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビモヤ エ	小瓶 扁平	
533	265	土桐樹	Ⅲ	19次	SKI9003	TP5	13.8			密	硬	に深い暗		1級保護1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビモヤ エ		
534	95	土桐樹	Ⅲ	19次	SKI9003	TP5	14.4	10.4	3.5	密	硬			1級保護1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビモヤ エ	ナデ2 ヨコナデ濃い	
535	86	山茶樹	19次		SKI9003	TP6	12.5	(樹) 5.7	6.1	粗 細葉多	硬	灰白		1級保護2/3						
536	92	山茶樹	19次		SKI9003	TP6	13.8			粗	硬	暗灰		1級保護1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
537	233	山茶樹	19次		SKI9003	TP6	15.2	7.6	5.0	粗	硬	灰白		1級保護2/3	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		樹付高台 樹陰直 自然植
538	218	山茶樹	19次		SKI9003	TP6	16.8			粗	硬	灰白		1級保護1/3	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然植
539	221	山茶樹	19次		SKI9003	TP6	15.0			粗	硬	灰白		1級保護1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然植
540	280	山茶樹	19次		SKI9003	TP6	15.2			粗 細葉多	硬	暗灰		1級保護1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		自然植
541	282	山茶樹	19次		SKI9003	TP6	15.6			粗	硬	灰白		1級保護1/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
542	253	山茶樹	19次		SKI9003	TP6	6.3			粗 細葉多	硬	灰		保護一部		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		保護集書「上上」 樹付高台
543	81	山茶樹	19次		SKI9003	TP6	8.8			粗	硬	灰白		保護1/6		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		樹付高台 樹陰直
544	93	山茶樹	19次		SKI9003	TP6	9.0			粗	硬	灰白		保護2/5		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		樹付高台 樹陰直
545	224	山茶樹	19次		SKI9003	TP6	7.2			粗	硬	灰		保護1/4		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		樹付高台 樹陰直
546	269	山茶樹	19次		SKI9003	TP6	6.5			粗	硬	灰白		保護 ほぼ完形		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		樹付高台 樹陰直 自然植
547	271	山桐	19次		SKI9003	TP6	7.6	3.9	2.3	粗	硬	灰白		完形	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		保護突出
548	279	山桐	19次		SKI9003	TP6	7.8	5.4	2.0	粗 細葉多	硬	灰白		完形	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
549	288	山桐	19次		SKI9003	TP6	8.2	3.8	2.5	粗 細葉多	硬	灰		1級保護3/4	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		保護突出
550	190	土桐樹	Ⅲ	19次	SKI9003	TP6	9.4	8.2	1.6	密	硬	に深い暗		1級保護1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビモヤ エ	小瓶 ヨコナデ濃い	
551	219	土桐樹	Ⅲ	19次	SKI9003	TP6	9.2	7.8	2.0	密	硬	浅黄		1級保護1/3	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビモヤ エ	小瓶 ヨコナデ濃い	
552	250	土桐樹	Ⅲ	19次	SKI9003	TP6	8.0	7.4	1.8	密	葉	浅黄		1級保護1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビモヤ エ		
553	281	土桐樹	Ⅲ	19次	SKI9003	TP6	8.6	7.0	1.6	密	硬	に深い暗		ほぼ完形	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビモヤ エ	小瓶	
554	284	土桐樹	Ⅲ	19次	SKI9003	TP6	8.2	6.3	1.6	密	硬	に深い暗		1級保護3/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビモヤ エ	小瓶	
555	270	土桐樹	Ⅲ	19次	SKI9003	TP6	10.0	8.2	1.4	密	硬	に深い暗		1級保護1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビモヤ エ	扁平	
556	283	土桐樹	Ⅲ	19次	SKI9003	TP6	26.4			粗	硬	に深い暗		1級保護1/4	ヨコナデ	ヨコナデ	ナメハ ナメハ ナメハ		高伊勢系 節り返し 中堅 扁平	
557	251	土桐樹	Ⅲ	19次	SKI9003	TP1	9.6			粗 細葉多	硬	黄灰		保護1/3		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		樹付高台
558	321	山茶樹	19次		PS5		5.2			粗	硬	灰白		保護1/2		ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		樹付高台 樹陰直

報告 番号	採種 番号	種名	樹形	調査 地区	遺構	位置	法量 (cm)		樹高	樹形	色調	西行率	1/4部調査		1/2部調査		文種	特記事項
							1/4部	1/2部					内部	外部	内部	外部		
539	337	山菜類	19次	P121			15.6		粗	硬	灰白	1/4部調査	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ		
540	338	山菜類	19次	P121			6.8		粗	硬	灰白	1/4部			ロクロナ デ	ロクロナ デ	柳付高台 柳付庭	
561	343	土類部	III 19次	P121			8.8	0.3	1.9	粗	浅黄褐色	ほぼ完全	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオヤ エ		小嵐
562	353	山菜類	19次	P174			15.8			粗	硬	灰白	1/4部 1/12	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	
563	339	山菜類	III 19次	P196			20.4			粗	硬	灰白	1/4部 1/14	ロクロナ デ	ロクロナ デ			
564	348	土類部	III 19次	P247			13.2	10.0	3.0	粗	浅黄褐色	1/4部	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ユビオヤ エ		ヨコナデ類
565	384	土類部	III 19次	P262					1.5	粗	に濃い黄褐色	1/4部	ヨコナデ	ヨコナデ		ユビオヤ エ		扁平
566	323	山菜	19次	P547			9.4	6.2	1.7	粗	硬	灰白	1/4部 1/12	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	扁平 自然輪
567	549	山菜類	22次 1区	P131			15.8			粗	硬	灰白	1/4部 1/12	ロクロナ デ	ロクロナ デ			自然輪
568	559	山菜類	22次 1区	P136			5.8			粗	硬	灰白	1/4部 ほぼ完全			ロクロナ デ	ロクロナ デ	柳付高台 柳付庭 塚子
569	130	赤生土類	III 19次	表土			31.2			粗	硬	浅黄褐色	1/4部	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハク	ヨコナデ ナメハク	くの字 ハク難い 新減
570	469	赤生土類	III 19次	表土						粗 細砂多	硬	に濃い黄褐色	1/4部 1/12	ヨコナデ	ヨコナデ			新減 赤(白)
571	107	赤生土類	III 19次	表土			12.8			粗 細砂多	硬	淡黄	1/4部 1/16				タテハク タテハク ミガキ	新減
572	129	赤生土類	III 19次	表土			26.8			粗 細砂多	硬	に濃い黄褐色	1/4部 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ
573	127	赤生土類	III 19次	表土			7.3			粗	硬	(内) 粗 (外) 浅黄褐色	1/4部			ヨコナデ ナメハク	タテハク	丸底 1/4部突出 新減
574	103	赤生土類	高坪 19次	表土			22.6	(丸) 16.2		粗 細砂多	硬	に濃い黄褐色	1/4部	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハク	タテハク	新減 丸底
575	414	土類部	III 19次	表土			22.0			中砂 細砂多	硬	粗	1/4部	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハク	新減 ハク難い
576	475	土類部	III 19次	表土						粗	硬	に濃い黄褐色	1/4部	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハク	1/4部存在
577	106	柳部	III 19次	表土			7.6			粗	硬	灰白	1/4部			ロクロナ デ	ロクロナ デ	柳付高台
578	108	柳部	III 19次	表土			32.8			粗	硬	(内) 灰白 (外) 黄褐色	1/4部 1/12	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	丸型 自然輪
579	82	灰輪肉田	III 19次	表土			8.4			粗	硬	(丸) 灰白 (輪) 灰オリーブ	1/4部			ロクロナ デ	ロクロナ デ	柳付高台 柳部方形 輪
580	101	灰輪肉田	III 19次	表土			8.2			粗	硬	(丸) 灰白 (輪) 灰オリーブ	1/4部			ロクロナ デ	ロクロナ デ	柳付高台 柳部方形 輪
581	111	灰輪肉田	III 19次	表土			5.8			粗	硬	(丸) 灰白 (輪) 灰オリーブ	1/4部			ロクロナ デ	ロクロナ デ	柳付高台
582	117	灰輪肉田	III 19次	表土			6.4			粗	硬	(丸) 灰白 (輪) 灰オリーブ	1/4部			ロクロナ デ	ロクロナ デ	柳付高台 輪
583	477	瓦	平瓦 19次	表土						粗 細砂多	硬	に濃い黄褐色	1/4部					輪付作り 布織じ合わせ目 ケズリ丁寧
584	480	瓦	平瓦 19次	表土						粗 細砂多	硬	灰黄	1/4部					一枚作り 塚子
585	104	山菜類	19次	表土			16.2			粗	硬	灰	1/4部	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	
586	112	山菜類	19次	表土			14.0	5.2	4.4	粗 細砂多	硬	灰白	1/4部	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	柳付高台 自然輪
587	118	山菜類	19次	表土			13.6	5.8	5.5	粗	硬	浅黄	1/4部	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	柳付高台 柳付庭
588	100	山菜類	19次	表土			7.8			粗	硬	灰白	1/4部			ロクロナ デ	ロクロナ デ	柳付高台 柳付庭
589	113	山菜類	19次	表土			6.0			粗 細砂多	硬	浅黄	1/4部			ロクロナ デ	ロクロナ デ	高台柳部 丸底
590	109	山菜	19次	表土			8.6	4.0	2.5	粗	硬	灰	1/4部	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	1/4部突出
591	110	山菜	19次	表土			8.4	3.9	2.0	粗	硬	灰白	1/4部	ほぼ完全			ロクロナ デ	自然輪 ロクロナ
592	115	山菜	19次	表土			8.6	4.4	1.9	粗	硬	灰白	1/4部	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	1/4部突出 自然輪
593	102	山菜類	III 19次	表土			30.8			粗	硬	灰	1/4部	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	ロクロナ デ	自然輪

報告 番号	実測 番号	種別	調査 期	調査 地区	遺構	位置	法量 (cm)		石土	構成	色調	残存率	1層法測		断面測		文様	特記事項
							1層 法量	断面 法量					内面	外面	内面	外面		
594	118	山形櫓	基	19次	表土			12.8	粗 砂	灰表	底層 1/6		ロクロ ナデ	ロクロ ナデ			榎材高台	
595	470	赤生土塼	裏	19次	表土	活本岡建物北側			粗 砂	灰に灰-黄緑	1層・ 裏面一部	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ			5字横目製	
596	105	赤生土塼	面	19次	表土	活本岡建物北側	4.2		粗 砂	灰	底層 2/6	ヨコナデ			タテハナ		榎 材 1層法	
597	65	赤生土塼	面	19次	表土	活本岡建物北側	14.4		粗 砂	灰に灰-黄緑	1層 1/6	ヨコナデ	ヨコナデ				榎 材	
598	114	赤生土塼	面	19次	表土	活本岡建物北側	6.3	4.4	14.0	粗 砂	灰	底層 1/6	タテハナ ミガキ	タテハナ ミガキ			小型 榎 材 1層法内側	
599	547	山形櫓		22次	3尺	表土		7.4	粗 砂	灰白	底層 2/6		ロクロ ナデ	ロクロ ナデ			榎材高台 榎材 自然櫓	
600	121	山形櫓		19次	焼出	H7		7.4	粗 砂	灰白	底層 2/6		ロクロ ナデ	ロクロ ナデ			榎材高台 自然櫓	
601	300	築地塼	弁	19次	焼出	AF18		6.7	粗 砂	灰白	底層 2/6		ロクロ ナデ	ロクロ ナデ			自然櫓	
602	532	築地塼	転用櫓	22次	1尺	包含層		11.2	粗 砂	灰	底層 3/4		ロクロ ナデ	ロクロ ナデ			榎材高台 榎	
603	569	築地塼	面	22次	1尺	包含層		9.6	粗 砂	灰	底層 1/3		ロクロ ナデ	ロクロ ナデ			榎材高台 厚手 自然櫓	
604	541	赤生土塼	裏	22次	1尺	包含層	TP1	12.8	粗 砂	灰に灰-黄緑	1層 1/5	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	タテハナ		○削取 遺構	
605	546	赤生土塼	裏	22次	1尺	包含層	TP2	19.4	粗 砂	灰に灰-黄緑	1層 1/4	ヨコナデ			タテハナ		榎 材 削取	
606	595	赤生土塼	面	22次	1尺	包含層	TP2	24.6	粗 砂	灰に灰-黄緑	1層 1/2						削取 キザミ	
607	529	赤生土塼	高坪	22次	1尺	包含層	TP2		粗 砂	灰	裏面一部						榎 材	
608	542	赤生土塼	高坪	22次	1尺	包含層	TP2		粗 砂	灰	裏面 3/4				タテハナ ミガキ		内丸 3 小型 遺櫓	
609	600	焼文土塼	探検	22次	1尺	包含層	TP4		今中 粗砂	灰に灰-黄緑	1層 1/5	ナデ	ナデ				○削取 キザミ	
610	631	焼文土塼	探検	22次	2尺	包含層			今中 粗砂	灰に灰-黄緑	1層 1/5	ナデ	ナデ				○削取 金當目	
611	594	赤生土塼	面	22次	2尺	包含層		27.6	粗 砂	灰に灰-黄緑	1層 1/10	ヨコナデ	ヨコナデ				○削取 削取 キザミ	
612	598	焼文土塼	探検	22次	1尺	SG2018			粗 砂	灰	1層 1/5	ナデ	ナデ				○削取 キザミ	
613	592	焼文土塼	探検	22次	1尺	SG2018		4.2	今中 粗砂	灰に灰-黄緑	底層 1/3				ナデ		平 底 金當目	
614	504	山形櫓		22次	1尺	SG2018		14.5	6.8	5.0	粗 砂	灰白	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ		榎材高台 榎材 自然櫓	
615	609	焼文土塼	探検	22次	1尺	SG2019			粗 砂	灰表裏	1層 1/5	ナデ	ナデ				キザミ	
616	382	土塼	土塼	19次	P046			(長) (2.8)	(幅) (1.5)	(厚) (1.4)	粗 砂	灰に灰-黄緑	一部					榎 材 内丸
617	575	土塼	土塼	22次	1尺	P130		(長) (3.4)	(幅) (1.6)	(厚) (1.7)	粗 砂	灰白	一部					内丸

Tab.4 遺物一覧 (2)

報告 番号	実測 番号	種別	調査 期	調査 地区	遺構	位置	法量 (cm)			石土	特記事項	
							長さ	幅	厚			
19	1006	石塼	石塼	22次	2尺	P04	2.51	1.99	0.38	サヌカイト	赤山産	
20	1008	石塼	石塼	22次	2尺	P04	(2.37)	(2.37)	(0.42)	榎材高台		
42	1003	石塼	石塼	22次	2尺	P100	(2.16)	1.99	0.38	サヌカイト	赤山産	
45	1011	石塼	石塼	22次	1尺	P175	(1.96)	(3.07)	(0.62)	サヌカイト	赤山産	
49	1010	石塼	石塼	22次	1尺	P179	(2.21)	(0.65)	(0.46)	サヌカイト	赤山産	
50	1009	石塼	石塼	22次	3尺	P182	1.87	(1.28)	0.39	サヌカイト	赤山産	
314	1001	石塼	ビスエスエキーユ	22次	2尺	S D 22001	2.48	1.44	1.06	サヌカイト	赤山産	
315	1007	石塼	ビスエスエキーユ	22次	2尺	S D 22001	1.81	(2.63)	(1.76)	0.53	サヌカイト	赤山産
316	1002	石塼	石塼	22次	2尺	S D 22001	1.85	(1.63)	0.20	サヌカイト	赤山産	
317	1004	石塼	石塼	22次	2尺	S D 22001	1.81	2.41	2.02	0.39	サヌカイト	赤山産
318	1005	石塼	石塼	22次	2尺	S D 22001	1.96	1.77	0.43	サヌカイト	赤山産	

## VI 結語

平田送水場の前身は鈴鹿海軍工廠の水道施設として供されていた経緯がある。詳細な資料が残されていないため多くは不明であるが、第22次調査において送水場建物下面の調査を行う中で、明らかに当該建物以前の基礎が埋設され、それによって攪乱されている状況を確認した。過去の構造物は軍に関連するものと推測され、昭和18年以降に建てられ、昭和37～38年の平田送水場の増補改良工事によって壊された可能性が高いものと考えられる。第19・22次調査区においても、軍関係の何らかの事業によるものか一定の高さまで面的に切り土され、上部が削平されていることが判明した。そのため、多くの遺構の掘り込みは比較的浅く検出されているが、本来はより濃密に遺構が遺存していたと考えられる。遺構密度もさることながら、竪穴住居及び方形周溝墓、道路遺構、屋敷地等、各時代の重要遺構がより深く残存し、多くの遺物が得られる結果となればと想像すると、非常に残念である。鈴鹿市の歴史を考えるための情報がより濃密に詰まっていたことは間違いない。

今回の調査の結果に基づき、以下に考察を行う。なお、本章で取り上げた鈴鹿市内の遺跡については、Fig.2にその位置図を載せているため、参照されたい。

### 1 縄文時代晩期前半の建物について

今回の調査の結果からは、縄文時代晩期前半の遊賀里2～3式の段階を中心とし、晩期後半の凸帯末期に至る遺構及び遺物の確認に至った。縄文時代晩期の土器は、該当期の遺構の他にも表土や後世の遺構によく混入して

おり、その保有量は集落が機能していたことを想起させるものである。過去の調査結果においては、古代～中世の成果が主となり、縄文時代晩期の土器が少量混入する程度で、明確な遺構は確認されておらず、この時期の生業は舌状台地の先端部を中心とするものと考えられる。

三重県内においては、縄文時代の住居跡は竪穴住居の検出例が圧倒的であり、それ以外の住居跡は数例に留まるのみである。平田遺跡では「V遺構と遺物」で述べた通り、SX22014を平地式住居、SB19086・90・94・22033を掘立柱建物の候補とし、縄文時代晩期前半の集落が存在したものと考えている（Fig.14・18・20・23・30）。しかし、この内、SB19090・22033は全形の把握には至っておらず、それぞれ構成するピット1基から縄文土器片が出土した程度である。また、SB19094は構成するピットからは破片資料のみに留まり、該当期の遺物は柱筋上に存在する土坑からの出土であるため、その帰属時期を積極的に示すものではない。これら3棟は縄文時代晩期前半の掘立柱建物としての可能性を指摘するものであるが、その根拠としてはやや弱いものがある。そのため、確実に建物跡と言えるものはSX22014及びSB19086に限られることになる。

いなべ市に所在する宮山遺跡は、平地式住居を考察する上で非常に重要な遺跡である。宮山遺跡は員弁川右岸の段丘上にあり、縄文時代の埋蔵文化財包蔵地として周知されているが、平地式住居の可能性のある柱穴群が合計22棟検出されている。住居間には重複も認められ、その認定には慎重にならざるを得ない部分もあるが、ある程度まとまって存在することは間違いないだろう。ビ

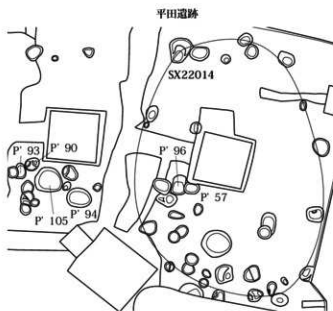
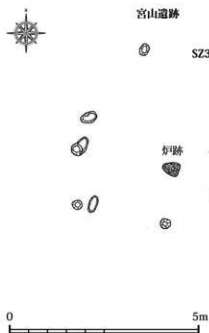
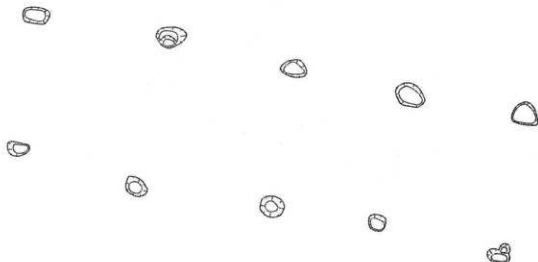


Fig.209 平地式住居 (S=1/100)



王子広遺跡



平田遺跡

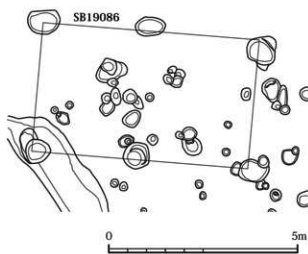


Fig.210 掘立柱建物 (S=1/100)

ット群はほぼ円弧状の配列を基調とする。これらのピットは円形状を呈し、直径0.2～0.3 mの小振りなものが多数を占める。その規模は直径5～8.0 mを測り、正円形状に整然とまとまるものもある。中でも、宮山遺跡SZ36では住居の中心に近い箇所に炉跡と見られる焼土が確認されており、非常に興味深い (Fig.209)。直径は5.0 mと小型の住居である。1棟のみの検出に留まるが、住居の内部に火処を付帯することから、平地式住居の可能性を積極的に示す資料となろう。ピットで構成される遺構という性格上、出土遺物の例は限られるが、住居群が立地するB区の包含層からは、縄文時代晩期後半～末頃の遺物がまとめて出土しており、関連性が高いものと判断される。

対して、平田遺跡SX22014は、やや楕円形状にまと

まる。その規模は長軸6.7 m、短軸5.0 mと概ね同等であるが、構成するピットは、直径が0.65 mに達するものもあり、やや大振りの傾向がある。これらが概ね等間隔で環状に配され、縄文土器を含むため、有意な事象であるものと判断される。縄文時代晩期前半の所産であり、宮山遺跡を遡る。住居の内部や付近には、同時期に該当するピットが多数分布している点も特徴的である。平地式住居となれば、県内では遺跡としては2例目となる。

また、掘立柱建物を考察すると、松阪市の王子広遺跡において、県内で唯一となる事例が確認されている。王子広遺跡は柳田川中流域の左岸にあり、舌状台地の先端部という平田遺跡と近い立地条件にある。縄文時代後期初頃の掘立柱建物が単独で1棟検出されている (Fig.210)。1間×4間で、梁間3.5 m、桁行12.5 m程度の規模である。平田遺跡SB19086も長方形の平面形をなすが、王子広遺跡の例は東西方向に非常に細長い点に差異が認められる。また、構成するピットは共にやや不整な円形状であるところは同様だが、王子広遺跡が直径0.4～0.6 mを測り、直径0.65～0.8 m、深さ0.4～0.55 mの平田遺跡SB19086よりも明らかに小振りである。時期や形状は異なるが、県内で2例目の事例となり、大きな成果である。

縄文時代の集落については、小規模なものが点在する傾向が見られ、特に県内では長期間に変遷するものが少ない様相である。縄文時代の全期にわたって竪穴住居が盛行するが、平田遺跡では未検出である。その中で掘立柱建物及び平地式住居の検出に至った点は、非常に画期的である。竪穴住居及び掘立柱建物、平地式住居、それぞれ用途が異なるのか、その構造や変遷についても大いに興味深い。現状においては圧倒的に検討材料が乏し

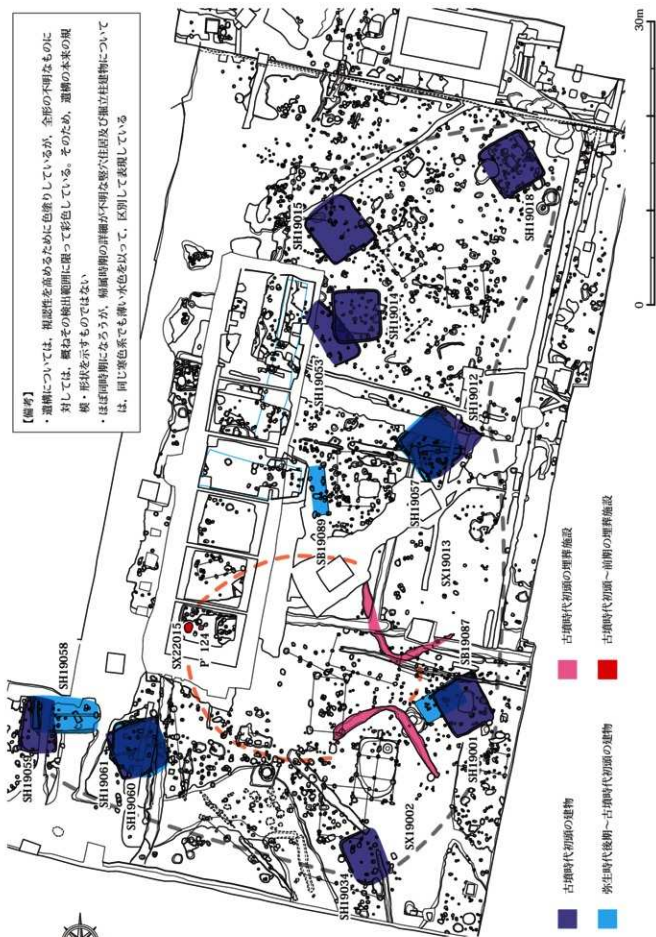


Fig.211 弥生・古墳時代の集落と墓域 (S-1/400)

い。類例の増加を待ちたいが、今回の調査結果は、県内でも数少ない縄文時代晩期の良好な資料として、今後の研究に繋がるものとなる。

## 2 弥生時代後期～古墳時代初頭の集落と墓域について

縄文時代晩期と同様、舌状台地の先端部を中心として古墳時代初頭には集落が経営される。弥生時代後期後半の山中式の段階に遡る可能性があるものも一部存在するが、古墳時代初頭の廻間1式期の資料が中心となる。当該集落は長期間に及ぶものではないが、竪穴住居の建て替えも行われている。併せて検出した掘立柱建物は、倉庫であろうか。眼下には広範に谷底平野が広がり、今でも鈴鹿川の伏流水を活用した水田が営まれているが、当時においても同様の土地利用を行っていたのであろうか。

古墳時代初頭頃の本調査区を俯瞰すると、竪穴住居がやや間を空けながら造られる (Fig.211)。特にSH19001・15・18・34・53・57・60の7棟は、同一、ないしは類似した主軸方向を示し、同時に存続していたものと考えられる。そしてこれらと同時期に相当するものが、方形周溝墓のSX19002・13と土器棺墓の可能性が

あるP124である。特にSH19001はSX19002・13の双方と、SH19034はSX19002と近接して存在する。SX19002の全体の規模が不明であるため、SH19034と重複する可能性があるが、少なくともSH19001はこれら埋葬施設の近隣に建つということになる。

この時期における集落域と墓域が近接する事例は、南山遺跡に見ることができる (Fig.212)。南山遺跡は鈴鹿川左岸の台地の先端部にあり、小規模な調査の蓄積によって、弥生時代後期の集落域が検出されている。平成7年に実施された第2次調査で、調査区の制約にも関わらず、同時期と考えられる竪穴住居ST01と方形周溝墓SX02を確認している。出土遺物からは、山中式の段階に属するものと考えられる。これらの距離は約11mを測り、間の空閑地には環濠や区画溝は存在しない。

平田遺跡においては、SH19001とSX19002が3.4m、SX19013が3.7mと非常に近い。SX19002・13が共に2辺の検出に留まるため、正確な数値は測定不可能であるが、SH19060とSX19002間は18.0mを計測し、SH19057とSX19013の距離は10.0mを下回る。SH19034とSX19002は更に近づく可能性がある。また、SH19060もP124と約10.0mと近い。集落域と

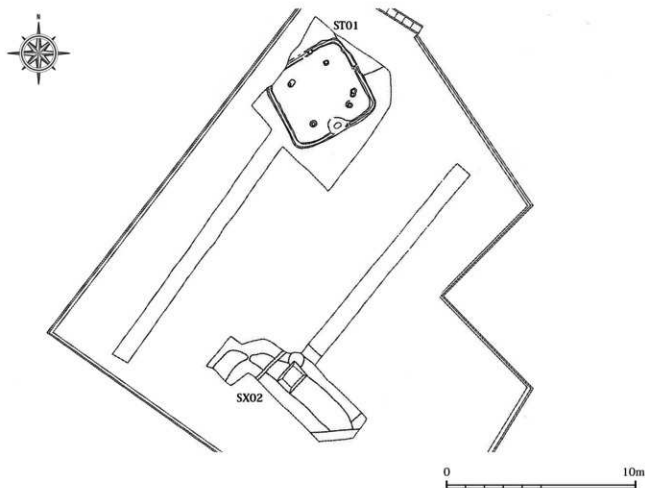


Fig.212 南山遺跡第2次調査区 (S=1/200)

近接する墓域の間には、南山遺跡と同じく、これらを区分する遮断施設としての溝は未検出である。そして、SH19001を中心とする7棟の竪穴住居群とSX19002・13の主軸がほぼ同方向を向く点からも、関係性が深いものと考えたい。

南山遺跡の例は、竪穴住居1棟と方形周溝墓1基による断片的な情報であるため、全体像は不明であるが、平田遺跡では第19次調査区を中心に、集落における土地利用の様相の一端を確認することができた。竪穴住居を帯状に結ぶ集落域の内部において、その一角を墓域が占める。溝によって区分けをすることなく、墓域が生活圏内に組み込まれていたことが分かる。また、乳幼児の埋葬施設と見られるP124は方形周溝墓とは別に、これの北側へ16m隔絶して配される。周囲の集落が廃絶した後、やや時期を降り、古墳時代初頭～前期にはSX22015が造られるが、これも乳幼児の埋葬に関わる施設であると思われる。この廻間Ⅱ～Ⅲ式期の生業が付近では未確認であるため、集落は移動したものと考えられる。しかし、墓域としての意識は残っており、継続して機能していた可能性が考えられる。乳幼児の埋葬箇所

も定められていたのであろうか。

### 3 古代の道路遺構について

調査当時、第19次調査区西部が過去の調査で認識されていた古代の道路遺構の延長線上に位置するため、その検出と存続時期の特定に繋がる重要な成果を得られることが大いに期待され、非常に注目された。当初の想定通り、直線的に走行する道路遺構を検出し、その側溝の北東続きの確認に至った。更に、並行する両側側溝を同時且つ明瞭に確認した点も大きい。SD19009とSD19021・22の同時存続により道路の存在を確固とし、その直線性を継承することから、官道である可能性も高まったものと言える。

しかし、従来の見解を大きく補完するものではない。遺物の出土量が僅少であり、その遺存状態も不良であったため、道路の存続時期を直接的に明らかにすることは叶わず、やや残念な結果となった。過去の調査結果からも分かるが、側溝の掘り込み自体が浅く、また大部分が中世の屋敷地内にあるために整地され、加えて後世の切り土によって上部を破壊されていることが大きな要因で

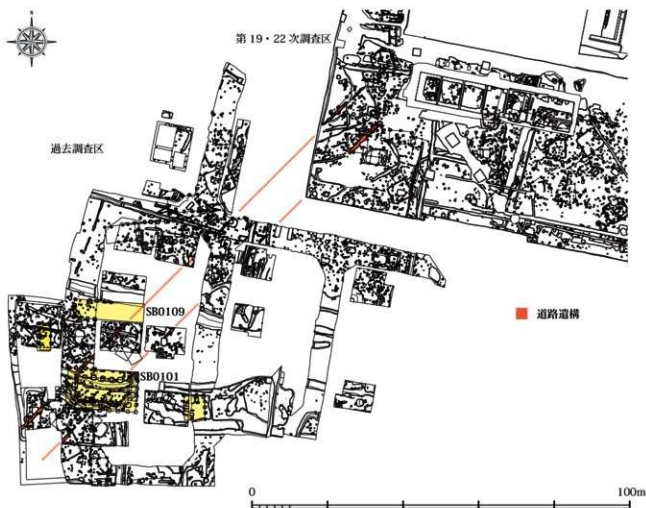


Fig.213 平田遺跡道路遺構 (S=1/1,000)

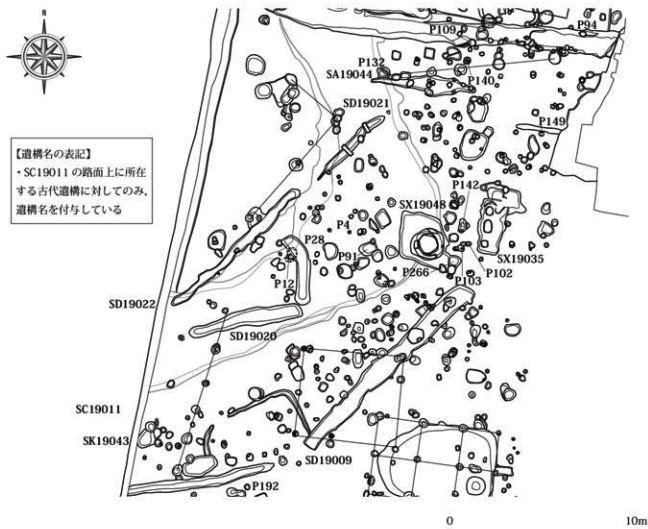


Fig.214 SC19011と路面上の古代遺構 (S=1/200)

あろう。過去の調査結果で得られた図面と合成すると、道路の総検出距離は130mに達し、平田遺跡内をほぼ縦貫する (Fig.213)。その走行方向はE-45°-Nであり、路面幅は約9m (側溝の内法間距離測定) を測る。側溝となる素掘りの溝を2条残すのみで、路面の痕跡は留めない。

道路の帰属時期については、別の角度から考察したい。遺構の重複関係である。SD19009・21・22と直接重複する遺構からは、時期の絞り込みに繋がる有意な遺物の出土はなかったが、SC19011の路面上には複数の古代の遺構が存在する (Fig.214)。直接の切り合い関係があるわけではないので、状況証拠にはならないが、参考資料として挙げたい。この内、所属時期が確実なものは、SA19044・SX19035、P4・109・142・266である。SA19044は9世紀、SX19035・P4・109・142は9世紀前半、P266は8世紀後半～9世紀の産物である。SA19044・P266については、時期に幅があるために除外するが、SX19035・P4・109・142は9世紀前半に

位置付けられ、猿投竊塚年のNN268～K14窯期の産物である。この時期には道路は既に廃絶し、居住地となる等、別の土地利用が行われていたと言える。特に、路面上を中心として古代の遺構が密に分布する点が特徴的である。路面上には具体的な建物は見当たらないが、良好な遺物が出土したP142・266等、多数のピットが存在し、土坑墓SX19035や櫛列SA19044等が比較的速やかに、そして積極的に造られたように窺われる。

過去の調査においては、第1次調査の四面廂付掘立柱建物SB0101と重複し、これに切られる。SB0101からは出土遺物に乏しいため、時期決定は困難であるが、概ね9世紀前半頃の年代観が想定されている。加えて、路面上に飛鳥時代～奈良時代初頭の堅穴住居が重なることから、奈良時代を中心とする8世紀代の存続が想定されており、その可能性は高いものと考えられる。

更に注目すべきは、道路の走行方向である。古代においては、鈴鹿市西部に鈴鹿郡、東部に河曲郡、南部に奄芸郡が配置され、平田遺跡は河曲郡との境界付近となる

鈴鹿郡枚田郷に位置する。『倭名類聚抄』によると、北は鈴鹿川を挟んで鈴鹿郡高宮郷、東は河曲郡神戸郷、南は奄芸郡奄芸郷が置かれていたとされる。鈴鹿郡には伊勢国府、河曲郡には伊勢国分寺・尼寺が設置されており、伊勢国の中心であったものと考えられている。道路遺構は直線の形状を示すが、これを延長すると、北東方向は国分町に繋がり、伊勢国分寺跡及び狐塚遺跡（河曲郡家推定地）、国分遺跡（伊勢国分尼寺推定地）が存在し、南西方向は国府の推定地とされる国府町へと至る（Fig.2 15）。更に平田遺跡は両者のほぼ中間地点に立地する。

平田遺跡から北西へ3.8km 離れ、鈴鹿川を挟んだ左岸には長者屋敷遺跡が存在する。鈴鹿市広瀬町から亀山市能楽野町に分布する長者屋敷遺跡では政庁が確認され、近江国庁との類似点から、伊勢国府跡として国の史跡に指定されている。8世紀中葉に造営されたが、8世紀末には廃絶し、長期にわたって維持されなかったものと考えられている。また、長者屋敷遺跡及びそのごく近辺には、官衙に関連する遺物の出土がなく、生活臭に乏しい状況が確認されている。

対して、道路遺構の延長線上に当たる国府町は、「国府（こう）」という地名等から移転国府の推定地とされ、過去の調査からも、卓絶した結果が得られている。伊勢国総社の有力候補地とされている三宅神社を中心に方八町が国府域と推定されているが、三宅神社を含む三宅神社遺跡では、過去に8世紀末～12世紀の掘立柱建物及び井戸等を多数検出している。大規模な掘立柱建物や計画性の高い建物の配置状況が見られると共に、灰軸陶器及び緑軸陶器、円面硯、転用硯（朱墨付）、斎串、横櫛に加え、長者屋敷遺跡と同じ「小」が押印された文字瓦が確認される等、官衙的要素が非常に濃密である。三宅神社遺跡の南東に接する天王山西遺跡でも、8・10～12世紀の成果があり、灰軸陶器及び緑軸陶器、円面硯等が出土している。三宅神社遺跡から北東約800mの梅田遺跡においても、8世紀後半～9世紀の規格性の高い掘立柱建物等が検出されると共に、灰軸陶器や墨書須恵器等が出ており、国府関連遺跡と考えられている。国府町ではそれ以外に、三宅神社遺跡から北東へ約1kmの富士遺跡で、緑軸陶器及び転用硯、黒色土器、志摩式製塩土器、古代瓦等、富士遺跡の北側に隣接する平野遺跡で転用硯が出土している。富士遺跡では黒色土器が比較的良好とまり、全体の出土量に対してその割合は少なくない。三宅神社遺跡からやや離れたこれらの遺跡においても、官衙に直接繋がる遺構は検出されていないもの、平安時代前期頃の国府や識字層にかかる公的性質を有する期間との関連を想定することができる。これらの遺跡は、道路の直線的経路の沿線に分布する点も特

徴的である。しかしながら、長者屋敷遺跡とは対照的に、国府地方においては国庁が未確認であるため、現状では確実に国府とする根拠に乏しいのも事実である。また、鈴鹿川左岸には、長者屋敷遺跡からやや離れ、伊勢国分寺方向に向けて川原井瓦窯跡群と津賀平遺跡が分布する。川原井瓦窯跡は、伊勢国分尼寺に対する生産遺跡で、伊勢国分寺とは異なる文様の瓦を供給している。津賀平遺跡では、特に8世紀後半～9世紀、平安時代後期の土器がそれぞれ一括して出土している点に特徴がある。灰軸陶器及び緑軸陶器、志摩式製塩土器に加えて石鈿や八條鏡の出土も見られ、国府関連遺跡の一つと見られる。鈴鹿川左岸における貴重な事例である。

なお、長者屋敷遺跡と三宅神社遺跡は共に鈴鹿郡にあり、鈴鹿川を挟んで約3.5km 隔絶する位置関係にある。国府の移転については、この鈴鹿川を挟んだ長者屋敷遺跡→三宅神社遺跡、若しくは三宅神社遺跡→長者屋敷遺跡→三宅神社遺跡の説が論じられているが、現状では8世紀中葉～後半代という限られた期間において、長者屋敷遺跡に国庁が置かれたことのみが明白である。それ以外の時期の国庁の所在は不明であり、また国府の運営に関わる多数の人間が居住する場所も必要となる。ここで、平田遺跡の道路遺構の走行方向が重要な意味を示唆する可能性がある。直線的に造られた8世紀代の官道が伊勢国分寺・尼寺や河曲郡衙から、律令期の遺構及び遺物を豊富に含む国府町方面へと繋がる。国府町が重要な地点であったことの証左となるか。また、当時の最重要施設を接続することのとなれば、官宮の計画道路であることは勿論、駅路としての性格を有することになる。例えば、8世紀代の東海道である。

現状においては仮定レベルの話でしかないが、まずは平田遺跡以外の延長地点における道路遺構の確認が重要である。恐らく遺構としては側溝の検出が中心となるが、側溝の掘り込みが浅いために、充分に意識して取り組む必要がある。道路遺構の更なる延伸に加え、文字資料による裏付け、更には国府町における官衙建物の確認等、課題は山積であるが、これらの解明は「伊勢国府」や「駅路」、そして「東海道」の姿を明らかにする上で必須となる。道路の造営には多大なる労力・技術・費用を要したものとされるが、平田遺跡における道路遺構の成果は、この地方の嘗ての政治構造を究明する上で傑出した知見となる可能性があり、今後の調査の進展や積み重ねによって、後に重要な成果へと繋がることを切望する。

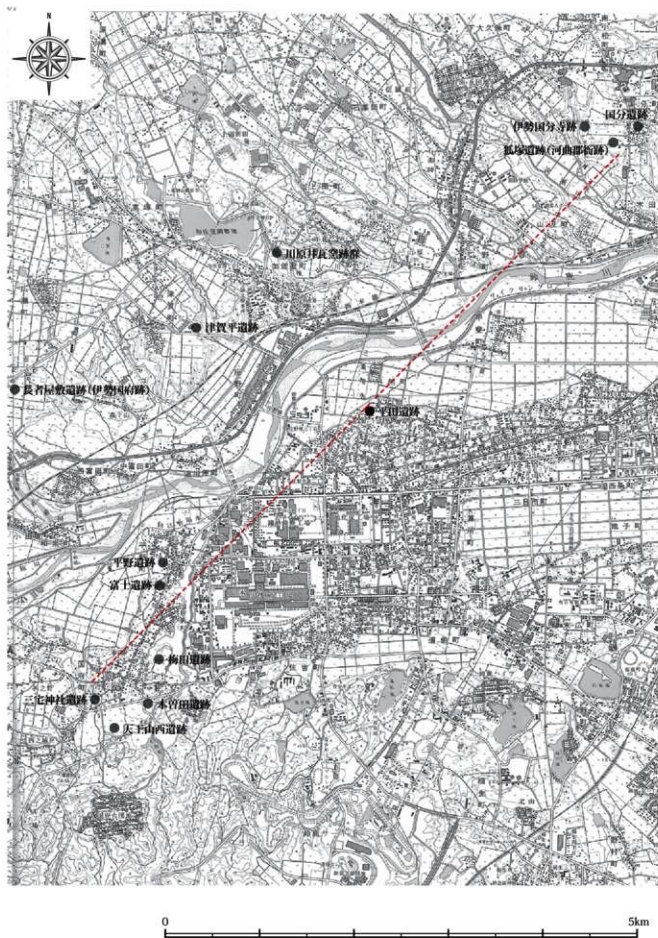


Fig.215 平田遺跡道路遺構の走行方向 (S=1/40,000) ©国土地理院 25,000分の一地形図利用

## 5 中世の屋敷地について

中世前期となる12世紀後半～13世紀初頭を中心に屋敷地が造られる。敷地は二重の溝によってその周囲を区画されるが、今回の調査によって初めて区画の明瞭なコーナーの検出に至った。区画の北限及び東限が確定となり、その平面形は長方形のプランが志向されていることが分かる。南部の広がりにやや疑義が残るものの、全体の規模は東西45.0m、南北72.0m程度（区画外溝の外法間距離測定）に達するものと考えられ、主軸方向はN-12°-W方向を向く（Fig.216）。

各区画内溝の内法間の距離を測定した屋敷地の敷地規模は2,200㎡を超過する広範なものであるが、その内部構造には不明点が多い。屋敷地内の北から46.0m程度とやや南寄りの位置に掘立柱建物SB0129が存在す

る。東西方向はほぼ中央部に相当するが、この3間×4間の総柱掘立柱建物は主屋であろう。構成するピットからは礎盤と考えられる礎が出土している。主屋の東～南東側には近似した主軸方向を示す建物が2棟建ち、東側が2間×2間の側柱建物で、南東方向の建物が2間×3間の側柱建物であると見られる。居住域の中心はこの南部であると判断されるが、該当時期に帰属する可能性があるものも含めると、中央部やや東寄りの第19次調査区に2間×3間の側柱建物SB19088、やや北部に総柱建物SB19104、SB19104にやや先行する側柱建物SB19084が配される（Fig.217）。

掘立柱建物以外の施設としては、北部のほぼ中央に井戸SE19025が単独で存在する。また、土坑として扱っているが、SK19029～31は土坑墓の可能性が高く、そ



Fig.217 屋敷地と内部施設 (S=1/300)



れぞれSK19029・30とSK19031・32がセット関係をなすものと見られる。SK19029・31という規模の比較的小さい遺構を北側へ配置し、近接し、南北に並べて造られている点に特徴がある。特にSK19032からは青磁碗が出土している。SK19029・30は北部の区画内溝であるSD19008に非常に近接し、またSK19031・32は中央部のやや西寄りに存する。これらは約30mの距離をもつ。やや位置を離して小規模な墓域を形成し、屋敷墓であると考えられる。規模を異にする土坑墓を隣接して配しており、秩序なく造られたものではないものと考えられる。

その他、特徴的な施設に、総柱掘立柱建物SB19104に付帯する大型土坑状遺構SX19003が存在する(Fig.218)。SX19003は当初、SB19104に付帯するいわゆる南東隅土坑であると考えた。南東隅土坑は掘立柱建物の南東隅に造られることが多く、厩的な性格を想定されることもある施設であるが、近隣でも鈴鹿市梅田遺跡及び天王山西遺跡、中尾遺跡等で検出されており、同様の施設になる可能性を考えた。しかし、多くの場合に

付帯する排水溝のような溝状遺構が付帯せず、そもそもSB19104の南東隅に位置付けられるものではないため、別の性格が考えられる。慎重に検出し、検討を重ねたものの、SB19104の建物範囲が広がる可能性は低く、SX19003はSB19104のほぼ全域と重なり、その下面に掘削された遺構ということになる。埋土には焼土及び炭化物を含むものではないため、焼成坑でもない。削平された影響によるものか、掘り込みは浅いものの、出土遺物は当該調査区において検出した遺構の中で屈指の多さであり、主に北～北東部にまとまる。青磁が比較的多量に出土している他、白磁も出ている。このような点から、地下室をもつ倉庫的な性格を考慮したい。但し、擾乱を受けているとしても、破片資料が多数を占め、完形品の出土は僅かである。

SB19104及びSX19003のすぐ近辺には、「V遺構と遺物」において記述した出入口が所在する。南北方向の区画外溝SD19005が内溝SD19006とほぼ同じ深さになるように底面レベルを上げられ、この箇所にはSD19006に少なくとも1間×2間の横状遺構SX19100

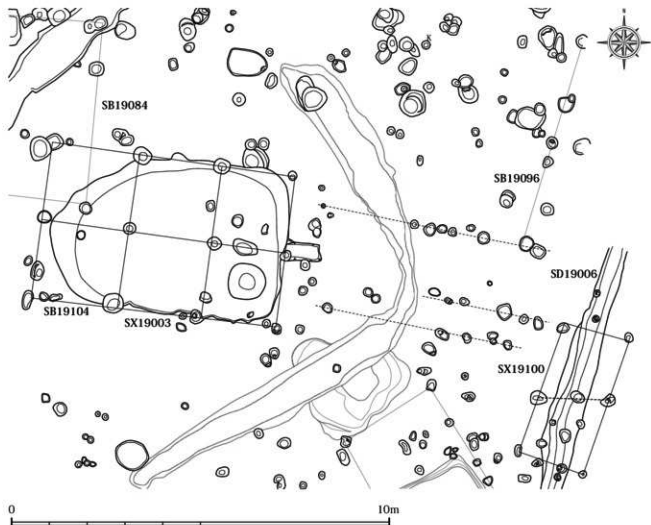


Fig.218 SX19003・100・SB19104 (S=1/100)

がかけられる。その築造段階から企画性が必要となる。屋敷地の敷地全体における北から1/3程度とやや北寄りに配置される。なお、出入口からSB19104とSX19003方面に向かって柵列状にピットが並ぶ可能性があり、道路的必要要素も含むが、やや整合性に欠けるために確認は得ない。

屋敷地の外周を圍繞する二重の溝の間には、塀や土塀のような遮蔽施設が存在が想定できるが、土層断面の観察からはSD19005のベルトC・Fにおいて、地山ブロックを多量に包含する9層が内側から崩落するように流れ込んでおり、その痕跡であると言えるのかもしれない(Fig.153)。同様の事例は過去調査における区画溝にも見られたとすることで、当該屋敷地は遮蔽・防壁施設を伴う閉鎖的な空間を有していたものと考えられる。また、立地条件としても、鈴鹿川を望む舌状台地の先端部にあり、見晴らしに優れると共に、北側の平野部は4～5m程度低い位置に広がるため、閉塞性も高いものと判断される。

比較的近隣における同時期の類型を見ると、亀山市の靴屋垣内遺跡がある。靴屋垣内遺跡は鈴鹿川左岸の開析谷によって形成された台地上に位置し、平成元～2年に調査が行われている。8世紀後半～14世紀中葉に連続的に営まれた集落遺跡であり、平田遺跡の屋敷地とほぼ同時期となる12世紀後半～13世紀前半には、溝によって画された区画と共に、掘立柱建物が37棟と濃密に検出されている(Fig.219)。主屋と見られる大規模な中核的建物の他に、溝を付帯する副的性格が想定される建物や総柱建物に付帯する南東隅土坑、井戸等が確認されている。非常にバリエーションに富んだ内容を内包するが、やや蛇行する溝によって区画され、屋敷地を形成していたものと見られる。区画の内部についても、比較的小規模の溝によって細分されている特徴を有している。平田遺跡と同様、「上」の墨書が施された山茶椀が出土しているが、貿易陶磁器の包含量はやや乏しい。

また、雲出川北岸における自然堤防上に形成された雲出島貫遺跡においても、同様の施設が確認されている(Fig.220)。11世紀後半から本格的に屋敷地(報告上、区画を伴う居住空間について「居館」との概念で捉えられている)が営まれるが、二条の溝が敷地の外部を区画し、内部には複数の掘立柱建物群が建てられる。この時期には、土師器の消費量が突出する。12世紀前半に入ると、敷地の内部の区画によって、居住域と墓域とが区分される様子が認められるようになる。居住域内も区画によって細分される。出土品には、鋳型片や貿易陶磁器品が多種・多量に見られ、商工業に関わる遺跡であったと想定されている。屋敷地は13世紀中葉までには洪水

等によって埋没し、以降は廃絶したものと見られ、その廃絶時期は平田遺跡の例と近い。靴屋垣内遺跡と雲出島貫遺跡の事例、平田遺跡とほぼ同時期には、大きな区画の範囲内を小区画で区分している。平田遺跡第19・22次調査区の屋敷地では、その外周を区画する敷地の内部にやや時期を遡るSD19024を断片的に確認したのみで、細分化された可能性は低いものと見られる。居住域や墓域を区画溝によって分化するような志向は見受けられず、雲出島貫遺跡における11世紀後半～12世紀初頭の段階で留まっている様相が窺われる。

それ以外にも、平田遺跡から南西に約3.5km離れた国府町に所在する梅田遺跡において、8世紀後半～9世紀に盛行し、10～11世紀の空白期間を隔てた後、12世紀頃には大規模な掘立柱建物を含めて11棟の建物が建てられる。これらは幅1.4m、深さ1.0m程度の溝によって圍繞されたものと考えられる。「上」や「皇?」の文字や「モミジ」の絵が描画された墨書山茶椀の他、青磁四耳壺や白磁等の貿易陶磁器が多数出土しており、鈴鹿市におけるこの時期の成果としては卓逸している。しかしながら、本報告がなされていないため、遺跡の評価はこれを経た後に行うことが妥当であろう。

第19・22次調査区においてその主体を検出した屋敷地は1つの区画を形成するものでしかない。過去の調査では、宅地造成にかかる道路部分や個人住宅部分が対象であったため、面的に確認した場所は少ないが、同様の区画溝が当該調査区の西～南方に広がるものと考えられる。特に西側に隣接する区画は、ほぼ同規模なもので見られ、主屋の可能性が高い4間×5間の総柱掘立柱建物と小型の総柱建物が並ぶ。これらの建物の主軸方向は同一である。東側の区画の境には2条の溝が掘削され、第19・22次調査区の屋敷地と共用されていたものと見られる。この区画の南側にも区画溝と建物が存在し、更に区画範囲は広がり、同じような遺構が広がる可能性が高い。対して、第19・22次調査区の以東は極端に遺構及び遺物の密度が減るため、当該調査区が屋敷地範囲の北東限になろう。

これらの施設が廃絶した13世紀後半以降の生業は殆ど確認することができず、その後は文献を中心として平田氏の動向が伝わる程度である。「鈴鹿市史」及び「三重の中世城館」によると、応仁元年(1467年)に平田直隣が天下の乱を見て、亀山市の海善城から牧田郷平田に城を移したとある。鈴鹿川から用水を引いて民力を養ったが、後に買元のときに武田信玄と結んで織田信長に対抗するも、1568年に信長の伊勢平定に伴って攻撃されて落城し、自害したとされる。買元の子である元綱は1580年に再興を図るも成らず、桓武平氏の子孫と

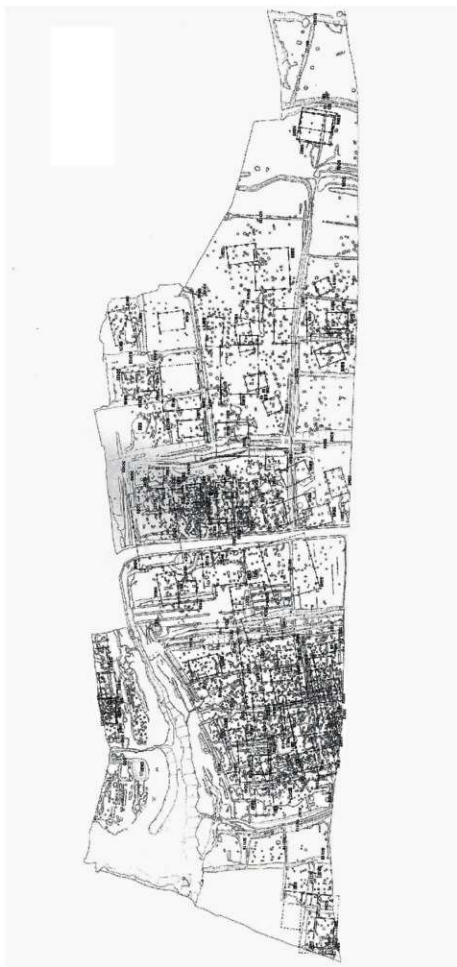


Fig.219 龍岡町内遺跡屋敷地 (S-1/600)

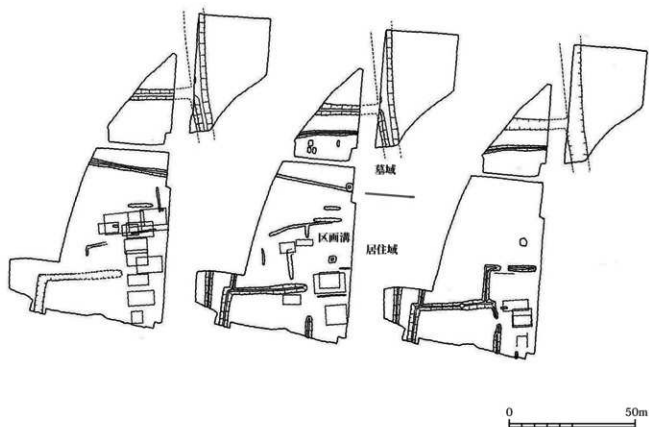


Fig.220 雲出島貫遺跡居館 (S=1/1,500)

伝わる平田氏は滅亡したと伝わる。約100年余の間、当地において隆盛していたとされるが、現在では土塁及び堀の痕跡によって確認されるだけである。周辺地及び過去の調査においても、その存在を積極的に示す成果は得られず、この時期の出土遺物は極端に僅少である。発掘調査の結果からは、平田氏の動向は不明であると言わざるを得ず、更に中世前期における屋敷地の存在と平田氏も結び付かない。屋敷地の形成主体は特定できないが、区画溝やその内部からは貿易陶磁器が比較的多く、墨書山茶碗や朱墨が付着した山茶碗の出土から、在地有力者層の居住が想定される。

## 【参考文献】

- 仲見秀雄 1980 『鈴鹿市史 第1巻』 鈴鹿市  
三重県教育委員会 1977 『三重の中世城館』 三重県泉書出版会  
吉田真由美 2005 『平田遺跡 (第1次発掘調査概要報告)』 鈴鹿市考古博物館  
吉田真由美 2005 『平田遺跡 (2次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第7号』 鈴鹿市考古博物館  
水橋公恵・林 和範 2006 『平田遺跡 (3次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第7号』 鈴鹿市考古博物館  
林 和範 2006 『平田遺跡 (4次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第7号』 鈴鹿市考古博物館  
林 和範 2006 『平田遺跡 (5次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第7号』 鈴鹿市考古博物館  
吉田真由美 2007 『平田遺跡 (6～8・10次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第8号』 鈴鹿市考古博物館  
吉田真由美 2007 『平田遺跡 (9次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第8号』 鈴鹿市考古博物館  
吉田真由美 2008 『平田遺跡 (第12・14次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第9号』 鈴鹿市考古博物館  
吉田真由美 2008 『平田遺跡 (第11・13・15～17次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第9号』 鈴鹿市考古博物館  
吉田真由美 2009 『平田遺跡 (第18次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第10号』 鈴鹿市考古博物館  
吉田真由美 2012 『平田遺跡 (第20次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第13号』 鈴鹿市考古博物館  
吉田真由美 2012 『平田遺跡 (第21次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第13号』 鈴鹿市考古博物館  
吉田隆史 2013 『平田遺跡 (第23次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第14号』 鈴鹿市考古博物館  
新田 剛 2013 『平田遺跡 (第24次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第14号』 鈴鹿市考古博物館  
藤原秀樹 1996 『中尾遺跡発掘調査概要』 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報 IV』 鈴鹿市教育委員会  
藤原秀樹 2007 『竹野一丁目遺跡』 鈴鹿市考古博物館  
藤原秀樹 1996 『竹野一丁目遺跡 (第2次)』 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報 IV』 鈴鹿市教育委員会  
藤原秀樹 2006 『竹野一丁目遺跡 (第3次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第7号』 鈴鹿市考古博物館  
新田 剛・吉田隆史 2009 『竹野一丁目遺跡 (第4次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第10号』 鈴鹿市考古博物館  
岡田雅幸 1996 『岡太神社遺跡発掘調査報告』 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報 IV』 鈴鹿市教育委員会  
杉立正徳 1997 『岡太神社遺跡発掘調査報告 (2次)』 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報 V』 鈴鹿市教育委員会  
新田 剛 2009 『岡太神社遺跡 (第3次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第10号』 鈴鹿市考古博物館  
吉田真由美 2011 『岡太神社遺跡 (第4次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第12号』 鈴鹿市考古博物館  
吉田隆史 2013 『岡太神社遺跡 (第5次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第14号』 鈴鹿市考古博物館  
吉田真由美 2013 『岡太神社遺跡 (第6次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第14号』 鈴鹿市考古博物館  
杉立正徳 2000 『岡田南遺跡』 『鈴鹿市考古博物館年報 第1号』 鈴鹿市考古博物館  
吉田隆史 2011 『岸岡山Ⅲ遺跡 (第2次)』 鈴鹿市考古博物館  
新田 剛 2010 『八重垣神社遺跡 (第6次)』 鈴鹿市考古博物館  
伊藤 洋 2010 『十宮古里遺跡発掘調査報告』 鈴鹿市考古博物館  
新田 剛 1993 『上箕田遺跡』 鈴鹿市教育委員会  
田部剛士 2010 『保子里遺跡発掘調査報告書』 鈴鹿市考古博物館  
新田 剛 2010 『津賀平遺跡 (第2次発掘調査報告書)』 鈴鹿市考古博物館  
新田 剛ほか 1996 『富士遺跡発掘調査報告』 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報 IV』 鈴鹿市教育委員会  
田部剛士 2008 『富士遺跡 (第2次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第9号』 鈴鹿市考古博物館  
吉田隆史 2010 『富士遺跡 (第3次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第11号』 鈴鹿市考古博物館  
伊藤 淳 2005 『平野遺跡』 『鈴鹿市考古博物館年報 第6号』 鈴鹿市考古博物館  
新田 剛 1996 『一反遺跡発掘調査報告』 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報 IV』 鈴鹿市教育委員会  
岡田雅幸 2004 『一反遺跡 (第4次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第4号』 鈴鹿市考古博物館  
森川常厚 1994 『磐城山遺跡発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター  
杉立正徳 1997 『磐城山遺跡発掘調査概要』 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報 V』 鈴鹿市教育委員会  
田部剛士 2012 『磐城山遺跡 (第3次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第13号』 鈴鹿市考古博物館  
新田 剛 1991 『南山遺跡・南山6号墳』 鈴鹿市教育委員会  
新田 剛 1995 『南山遺跡発掘調査報告』 『鈴鹿市埋蔵文化財調査年報 III』 鈴鹿市教育委員会  
伊藤淳ほか 2007 『南山遺跡 (第3次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第8号』 鈴鹿市考古博物館  
藤原秀樹 2008 『南山遺跡 (第4次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第9号』 鈴鹿市考古博物館  
岡田雅幸・林 和範ほか 2001 『天王山西遺跡・三宅神社遺跡・梅田遺跡』 鈴鹿市教育委員会  
吉田真由美 2009 『萱町遺跡 (第2次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第10号』 鈴鹿市考古博物館  
林 和範 2006 『天王遺跡 (第13次)』 『鈴鹿市考古博物館年報 第7号』 鈴鹿市考古博物館  
北条正剛・林 和範 2003 『天王遺跡 8次』 『鈴鹿市考古博物館年報 第4号』 鈴鹿市考古博物館

- 新田 剛・豊田祥三 2002 『天王遺跡（第5次調査）発掘調査報告書』 鈴鹿市教育委員会
- 仲見秀雄 1961 『上賀田』 三重県立神戸高等学校郷土史研究クラブ
- 真田幸成・大場範久 1970 『上賀田・弥生式遺跡第二次調査報告』 鈴鹿市教育委員会
- 上村安生 2002 『伊勢・伊賀地域』『弥生土器の様式と編年 東海編』 木耳社
- 上村安生 2005 『弥生土器編年概観』『三重県史 資料編 考古1』 三重県教育委員会
- 田中秀和 2005 『古墳時代須恵器編年概観』『三重県史 資料編 考古1』 三重県教育委員会
- 赤塚次郎 1990 『廻間遺跡』 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1992 『山中遺跡』 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1994 『松河戸遺跡』 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 2001 『松河戸・宇田様式の再編』 財団法人 愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1997 『西上免遺跡』 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- 宮腰健司 1994 『朝日遺跡V（土器編・総集編）』 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 2001 『八王子遺跡』 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- 清水政宏 2003 『山奥遺跡Ⅰ』 四日市市教育委員会
- 清水政宏 2004 『山奥遺跡Ⅱ』 四日市市教育委員会
- 伊藤裕偉 2004 『河曲の遺跡 河田宮ノ北遺跡・宮ノ前遺跡・八重垣神社遺跡(第1～3次)発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター
- 田辺昭三 1966 『陶器古窯址群Ⅰ』 平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』 角川書店
- 東海土器研究会編 2000 『須恵器生産の出現から消滅』
- 竹内英昭 1999 『宮山遺跡』 三重県埋蔵文化財センター
- 松阪市教育委員会 1990 『王子広遺跡発掘調査報告書』
- 小山憲一・川崎志乃ほか 2008 『大原塚遺跡発掘調査報告（第2・3次調査）』 三重県埋蔵文化財センター
- 三重県教育委員会 2001 『富宮跡発掘調査報告Ⅰ』 富宮歴史博物館
- 永井幸幸 1996 『清郷型陶器Ⅱ』『年報 平成7年度』 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- 城ヶ谷和広 1991 『古代尾張の土師器 ～6世紀後半から11世紀の様相～』『年報 平成2年度』 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕偉 2000 『鶴貫Ⅱ』 三重県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕偉・川崎志乃 2001 『鶴貫Ⅲ』 三重県埋蔵文化財センター
- 亀山 隆 1994 『碓原垣内遺跡』 三重県埋蔵文化財センター・亀山市教育委員会
- 中世土器研究会編 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真岡社
- 藤澤良祐 2007 『愛知歴史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』 愛知県
- 藤澤良祐 1982 『瀬戸古窯跡群Ⅰ』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1994 『山茶碗研究の現状と課題』『研究紀要 第3号』 三重県埋蔵文化財センター
- 尾野善裕 1997 『中世食器の地域性 東海・濃飛』『国立歴史民族博物館研究報告 第71集』 国立歴史民族博物館
- 中野晴久 1987 『知多古窯址群の山茶碗』『マージナル No.7《特集》山茶碗窯』 愛知考古学談話会
- 中野晴久 1994 『生産地における編年について』『中世常滑焼をおって』 日本福祉大学知多半島総合研究所
- 伊藤裕偉 1993 『中世前期における伊勢の土師器皿について』『関西大学考古学研究室開設四拾周年記念考古学論叢』 関西大学文学部考古学研究室
- 伊藤裕偉 1999 『中世後期の中北勢系土師器群に関する覚書』『研究紀要 第8号』 三重県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕偉 1992 『南伊勢系土師器の展開と中世土器工人』『研究紀要 第1号』 三重県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕偉 1990 『中世南伊勢系の土師器に関する一般試論』『Mie History』 三重歴史文化研究会
- 寺沢知子 1992 『カマドへの祭祀的行為とカマド神の成立』『同志社大学考古学シリーズV 考古学と生活文化』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 角正淳子 2004 『辻子遺跡出土の古代末から中世の土器について』『辻子遺跡』 三重県教育委員会
- 穂積裕昌 2002 『遺構・遺物のまとめと考察』『六A遺跡』 三重県教育委員会
- 川崎志乃 2002 『墨書土器について』『里前遺跡』 三重県教育委員会
- 上村安生・竹田憲治ほか 1995 『北野遺跡（第2・3・4次）発掘調査報告』 三重県埋蔵文化財センター
- 竹田憲治 1996 『北野遺跡（第5次）発掘調査概観』 三重県埋蔵文化財センター
- 竹田憲治 1998 『県内における土師器焼成坑の調査』『研究紀要 第7号』 三重県埋蔵文化財センター
- 竹田憲治 2001 『土師器焼成坑の立地と形態について』『研究紀要 第10号』 三重県埋蔵文化財センター
- 上村安生 1998 『三重県内の土師器焼成坑について』『研究紀要 第7号』 三重県埋蔵文化財センター
- 花井圭一・浅尾 悟ほか 2002 『鈴鹿市のおゆみ（軍部から平和都市へ）』 鈴鹿市

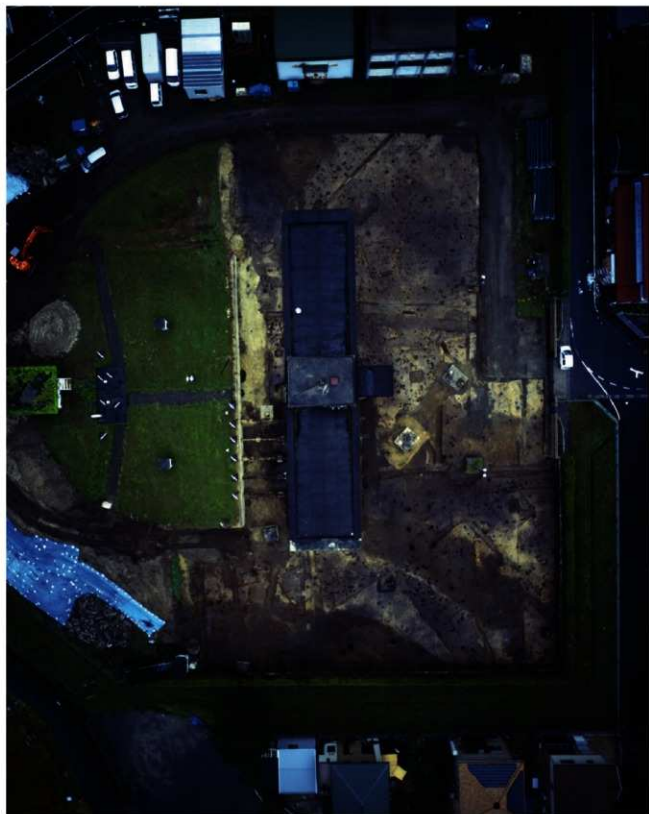
鈴鹿市水道局 2011 『鈴鹿市水道事業年報 平成 22 年度』  
鈴鹿市水道局 2010 『鈴鹿市水道事業年報 平成 21 年度』  
鈴鹿市水道局 2000 『鈴鹿市水道事業年報 平成 11 年度』  
水谷芳春・宇佐美亜紀ほか 2008 『諸戸水道調査報告書』 桑名市教育委員会





# 写 真 图 版

遺 構



19次調査区全景 真上から



22次調査区全景 真上から



19次調査区全景 西から



19次調査区遠景 北から



22次調査区全景 西から



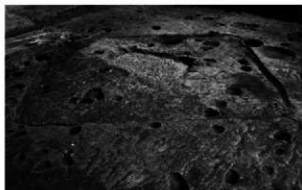
22次調査1区全景 真上から



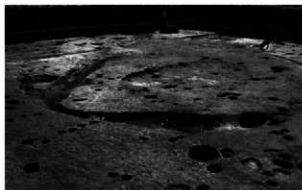
22次調査2区全景 真上から



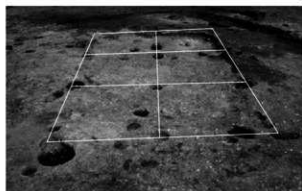
22次調査3区全景 真上から



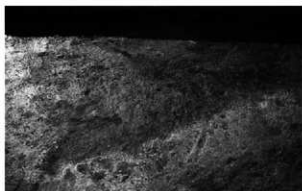
SH19001 完掘 北西から



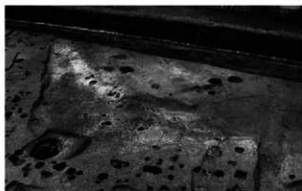
SX19002 完掘 北東から



SX19003・SB19104 完掘 西から



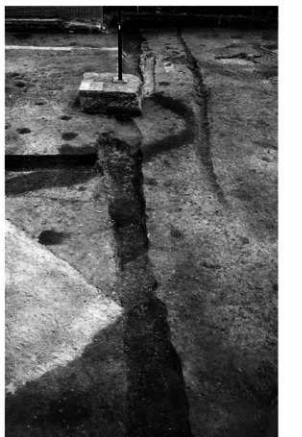
SD19004 検出 北東から



SD19004 完掘 北東から



SD19005 東西完掘 北から



SD19005・6 完掘 北から





SD19007・8 完掘 東から



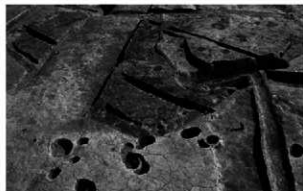
SD19009 検出 北東から



SR19011 完掘 北東から



SD19010 完掘 北東から



SH19012 検出・57 完掘 北東から



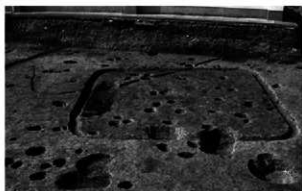
SH19012・57・SD19023 完掘 北西から



SX19013 完掘 北西から



SH19014 完掘・53 検出 南西から



SH19014・53 完掘 南から



SH19014 土坑遺物 南から



SH19053 土坑遺物 北から



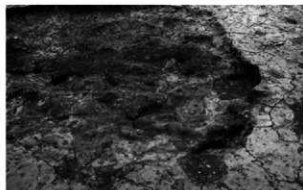
SH19015 完掘 南から



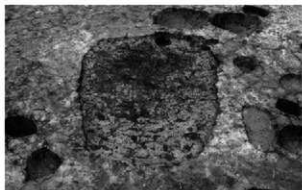
SH19015 遺物 東から



SF19016 検出 南東から



SF19016 焼土・炭化物検出 北西から



SF19016 完掘 南東から



SX19017・SH19018 完掘 北西から



SX19017 遺物 北東から



SX19017 下層遺物 北東から



SD19020・24 完掘 北東から



SD19024 遺物 南から



SE19025 全景 北から



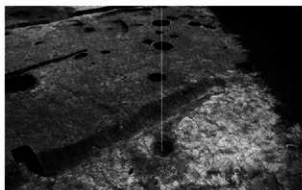
SH19034 完掘 北から



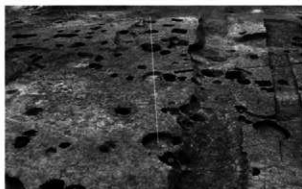
SX19035 遺物 南から



SB19036 完掘 北から



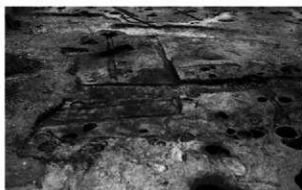
SA19037 完掘 北から



SA19044 完掘 東から



SH19058 検出・59 完掘 東から



SH19058・59 完掘 北から



SH19060 完掘・61 検出 東から



SH19060・61 完掘 東から



SH19060 遺物 北から



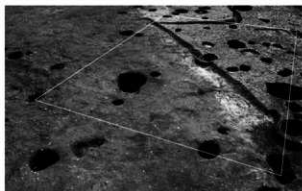
SK19073 遺物 北から



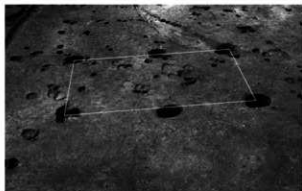
SX19074 遺物検出 北から



SX19074 遺物 北から



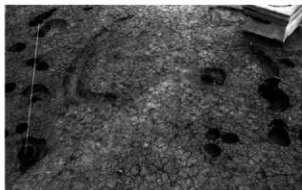
SB19084 完掘 北東から



SB19086 完掘 北から



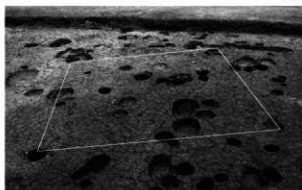
SB19090 完掘 南から



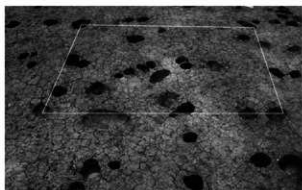
SA19091 完掘 北西から



SA19099 完掘 北西から



SB19093 完掘 北から



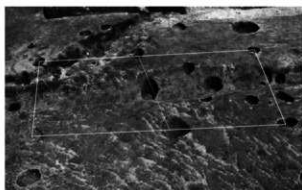
SB19094 完掘 南東から



SB19095 完掘 南から



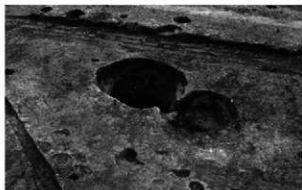
SA19098 完掘 北東から



SX19100 完掘 西から



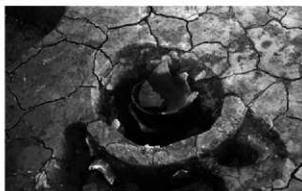
SB19106 完掘 北から



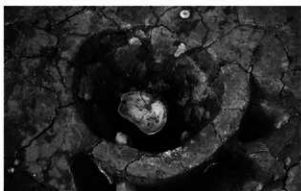
SE19112・SK19113 完掘 北から



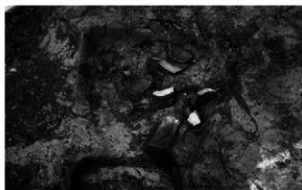
SD19115・116 完掘 北西から



P142 遺物 南から



P142 下層遺物 南から



P266 遺物 南から



P342 遺物 南から



P461 遺物 南から



SD22001 完掘 西から



SD22001 土層 南西から



SD22002 完掘 北から



SD22002 遺物 東から



SD22011・12 完掘 南から



SX22014 完掘 北から



SX22015 完掘 西から



SX22015 遺物 西から



SB22032 完掘 西から





P'37 遺物 西から



P'57 遺物 東から



P'124 遺物 南から



SX22031 全景 東から



SX22031 全景 北東から



SX22031 全景 南西から



19 次調査区通路部分南～南東部全景 西から



19 次調査区通路部分北～東部全景 北から



19次調査区試掘トレンチ全景 西から



22次調査1区全景 西から



22次調査1区全景 東から



22次調査1区TP1全景 北から



22次調査1区TP2全景 北から



22次調査1区TP3全景 北から



22次調査1区TP4全景 北から



22次調査1区TP5全景 北から



22次調査1区トレンチ1南部全景 南東から



22次調査1区トレンチ1北部全景 北から



22次調査1区トレンチ2西部全景 南西から



22次調査1区トレンチ2東部全景 北西から



22次調査2区全景 北から



22次調査3区全景 南から



19次調査区作業風景 (西から)



SX19003TP4 掘削 南から



SF19016 掘削 南西から



19次調査区現地説明会風景 南東から



19次調査区現地説明会風景 東から



19次調査区調査前 西から



19次調査区調査前 東から

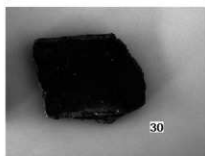
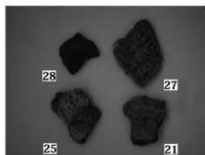
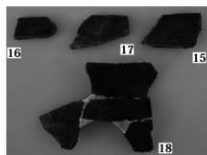
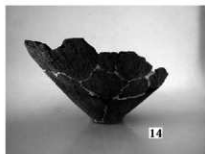
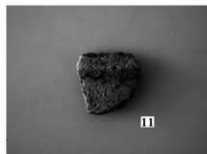
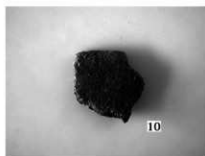
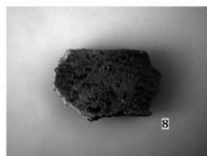
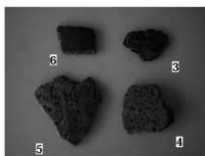


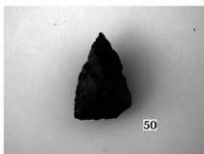
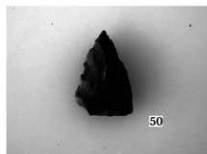
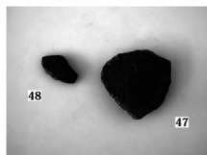
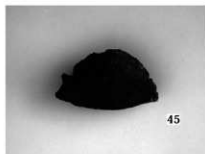
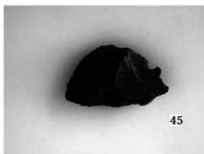
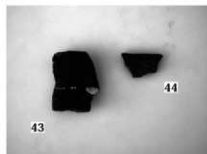
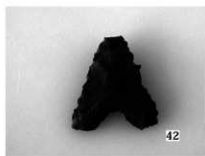
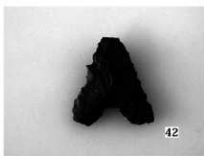
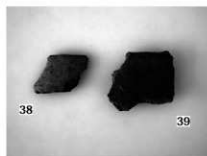
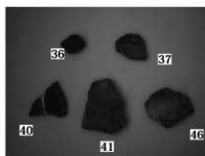
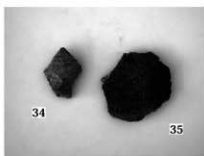
22次調査1区調査前 北東から

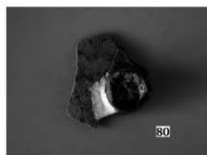
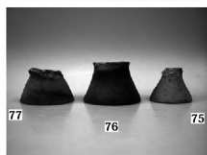
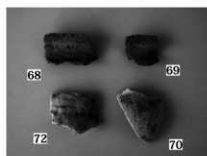
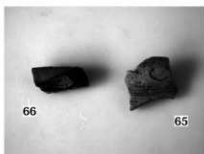


22次調査2区調査前 南西から

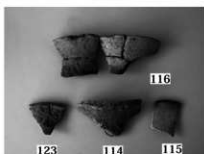
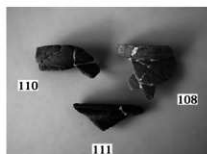
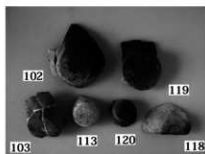
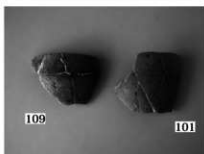
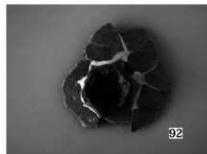
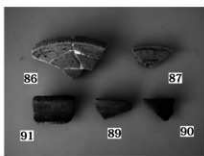
## 遺 物



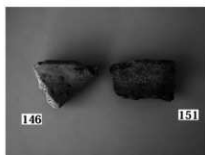
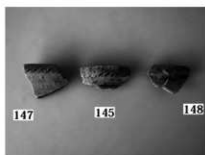


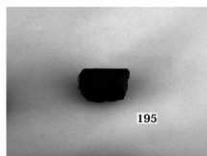
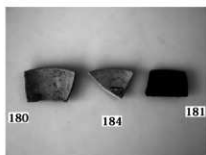
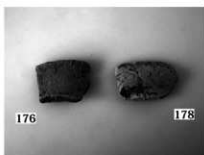


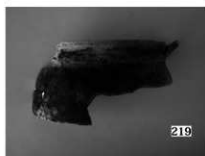
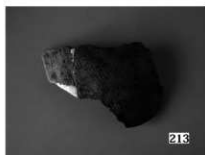
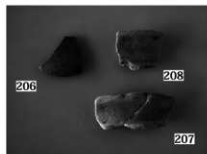
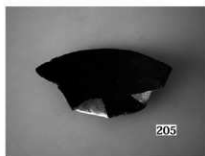
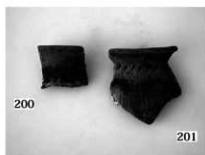




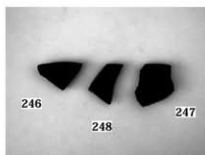
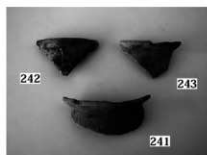


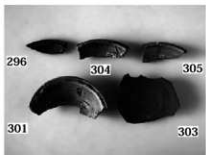
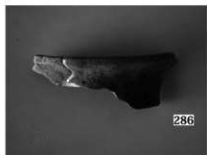
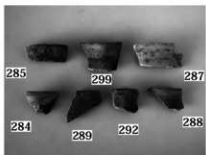
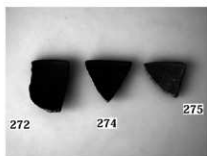




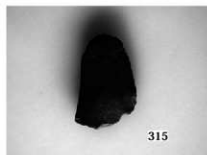
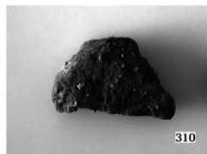
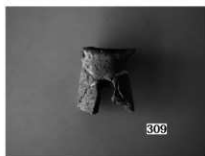
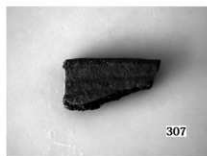
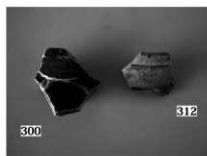


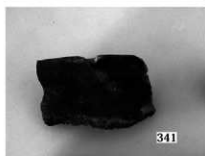
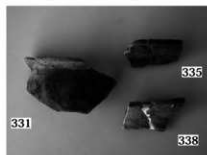
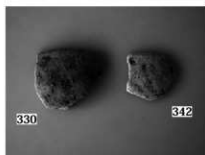
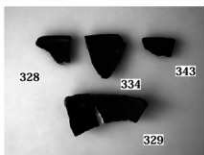
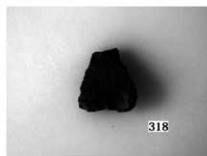


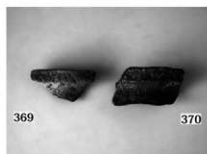
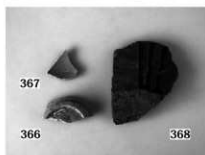
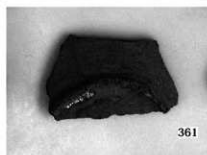
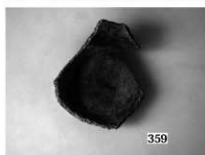
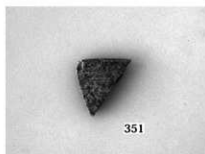
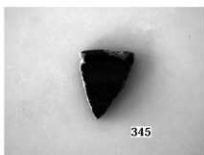
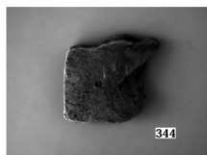


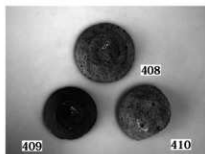
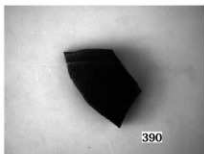
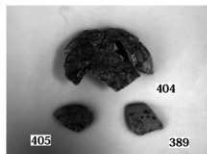
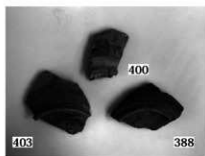
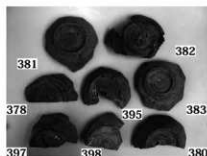
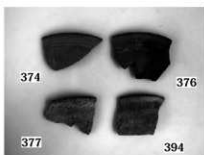


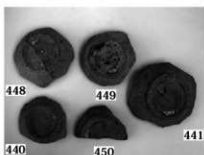
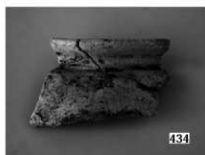
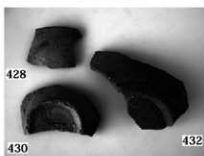
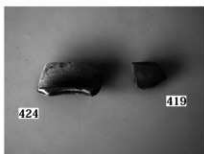


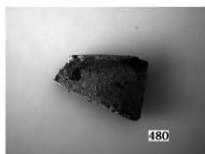
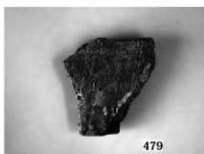
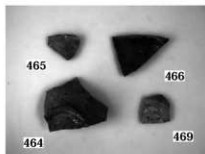
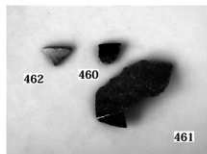
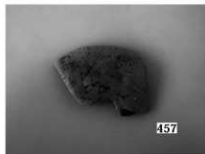


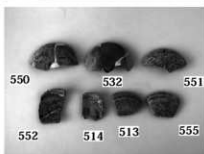
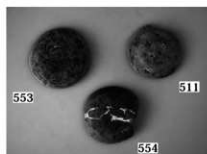
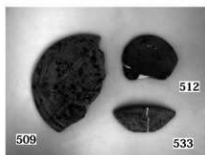
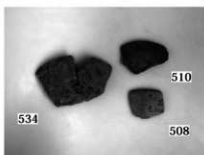
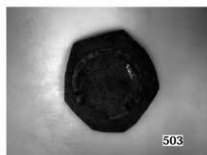
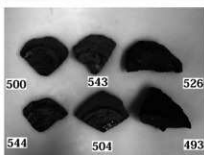
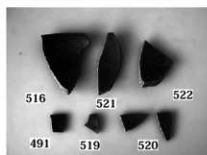
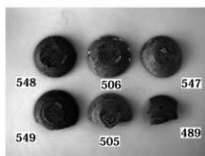
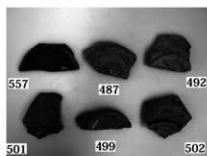
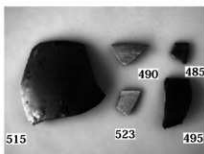
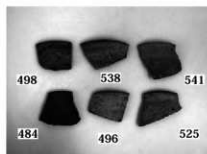
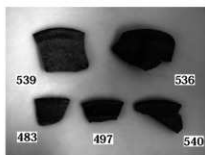


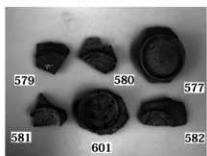
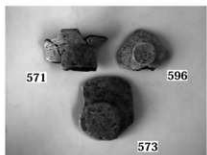
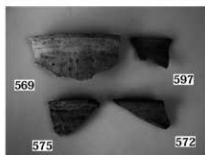
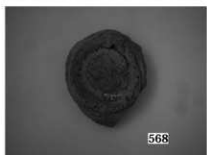
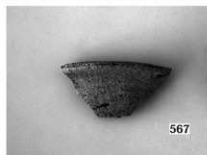
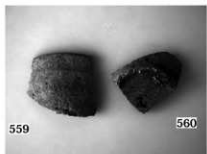
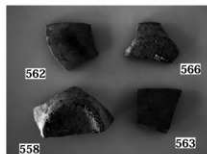




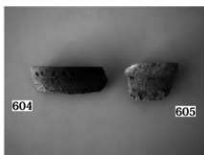
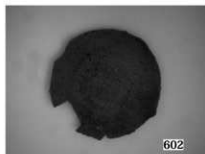
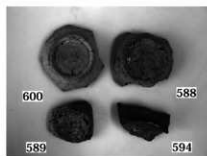
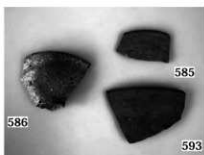
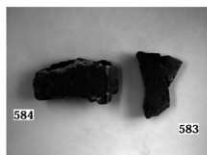


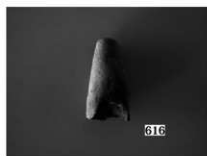












Tab.4 報告書抄録

ふりがな	ひらたいせき (だい19・22 じ)							
書名	平田遺跡 (第19・22次)							
副書名	平田送水場改築に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	吉田 隆史							
編集機関	鈴鹿市文化振興部 考古博物館							
所在地	〒513-0013 三重県鈴鹿市国分町 224 番地 TEL 059 (374) 1994							
発行年月日	2013年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	調査面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
平田遺跡 (第19次)	三重県鈴鹿市 平田本町一丁目	24207	386	34° 52′ 57″	136° 32′ 20″	2010年2月2日～ 2010年7月7日	3,660㎡	送水場改築工事
平田遺跡 (第22次)						2010年11月18日～ 2011年2月25日		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
平田遺跡 (第19次)	集落	縄文時代 ～中世	竪穴住居	縄文土器・弥生土器・土師器			古代の道路遺構の北東向きを確認し、過去の調査結果と合わせた総検出距離は130mに達する。	
			掘立柱建物 方形周溝墓 道路	須恵器・灰軸陶器・緑軸陶器 黒色土器・瓦・山茶碗・山皿 青磁・白磁				
平田遺跡 (第22次)	集落	縄文時代 ～近代	平地式住居	石器・縄文土器・弥生土器			縄文時代晩期前半の平地式住居を確認する。第19次調査の掘立柱建物を含め、県内では希少な事例である。	
			掘立柱建物 溝 貯水槽	土師器・須恵器・灰軸陶器 緑軸陶器・黒色土器・山茶碗				
要 約	鈴鹿川右岸における標高約22mの舌状台地の先端部において、縄文時代晩期～鎌倉時代を中心とする成果が得られた。縄文時代晩期前半には、掘立柱建物及び平地式住居による小規模な集落が存在し、該当期の土器がまとまる。弥生時代後期～古墳時代初頭には、竪穴住居を中心とする集落域と方形周溝墓及び土器棺墓の墓域が近接する。特に古墳時代初頭の生業が中心となる。古代には8世紀代の所産と考えられる直線的な官営計画道路が造られ、遺跡内を縦貫する様相を確認できる。古代の遺構は8世紀後半～9世紀代が中心となり、出土遺物からは有力豪族の川俣氏に関連の深い集落であったものと推測される。中世前期の12世紀後半～13世紀初頭には屋敷地が広範に広がり、敷地の周囲は二重の溝によって圍繞される。内部には掘立柱建物及び井戸、屋敷墓等を検出した。貿易陶磁器が比較的まとまり、在地有力者層の存在が想起される。また、戦前の鈴鹿海軍工廠に伴う貯水槽を確認している。							

## 平田遺跡 (第19・22次)

～ 平田送水場改築に伴う発掘調査報告書 ～

発行日 2013年3月31日

編集・発行 鈴鹿市考古博物館

〒513-0013

三重県鈴鹿市国分町 224 番地

TEL 059 (374) 1994

FAX 059 (374) 0986

E-mail : kokohakubutsukan @ city.suzuka.lg.jp

URL : http : //www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/index.html

印刷

株式会社三ツ星

